

特別な友情

ロジェ・ペルフィット

2018.1.5 初版公開

2019.12.31 最終改訂

★本作は、2019年12月、新訳が新潮文庫で上梓された（ただし、小説全体の七分の一ほどの抄訳）。自分の訳文を見直すよい機会であるので、新訳と比較対照し、原文を確認検討して、こちらのミスであることが明らかになった箇所については訂正することにした。逆に、新訳に同意できない箇所もあったが、それらはもちろん改訂には反映させていない。今後も折あらば検討したいと思っている。

目次

特別な友情

ロジェ・ペルフィット……………

特別な友情

(一)

初めての別れの儀式だった。今のジョルジュには、それを立派に終わらせる自信はもはやなかった。胸が締め付けられた彼は、両親を運んでいくことになる車のドアにもたれかかっていた。涙が込み上げてくるのが感じられた。

「さあさあ」父が言った。「一人前の人間だぞ、十四歳にもなれば。小学生のボナパルトは、おまえの年齢ですらなかったが、ブリエンヌの教師が、一体君は自分を何だと思っているのかと尋ねたとき、こう答えたものだ。」

『一人前の人間です！』

小学生のボナパルトが一人前の人間気取りだったということなんかどうでもいい！車が道路の曲がり角に消えていくのを見て、彼は自分がこの地上にたった一人で捨てられたような気分になった。ところが、そのとき新しい仲間たちの叫び声が聞こえてくると、彼の悲嘆は魔法のように鎮まった。この潑刺はうちとした少年たちに、臆病者だと思われてもいいのか？ 彼は一人前の人間であることなどほとんど気にしなかったが、少年であることについては大いに気にしていたのである。

付き添いのために付けられた修道女と一緒に、彼は学校に戻った。あらゆる場所を支配する活気が、完全に彼の気を紛らせた。二階で、廊下の壁を飾った生徒の集団写真をもう一度見た。だが、何たることか、その善良なるシスターは、彼を医務室に導くではないか！ ああ！ 彼女は彼を自分の部屋に連れて行くとうとしているのだ。彼女が開いたドアの上の、両親を面白がらせた掲示を、彼はもう一度読んだ。「医務室のシスターは…在室。不在。取り込み中。礼拝堂。リネン室。調理場」。指針は「不在」を示していた。

「最初の動揺を落ち着かせることね」その修道女は言った。「この部屋で私をお待ちなさい。私はこの手であなたの支度一式を整理してきますから。だから、分かるわね、指した単語が『リネン室』なのよ」

ジョルジュは、彼女が小さな子供に話すようにしていることに苦笑した。「もしこの人が僕を写真に撮ったら」彼は思った。「撮りますよ！こっちは向いて小鳥が飛びますよーって言いかねないな」このすべてが、彼に自信を完全に取り戻させた。彼は本来の自分に返った。

開いた窓に肘をつき、彼は中庭を眺めた。左には祝典ホールと自習室の入り口が、その向こうには普通教室が、その上には共同寝室がある。右には年少者棟。正面には花綱はなづなに飾られた十字架がそびえる礼拝堂の二つのドアがある。ひさし庇の下には鎖が揺れる

大きな鐘。医務室の下は食堂が場所を占め、そこから上層に至る大階段の前に出る。

この中庭は、疑いなくある庭に似ることを望んでいる。木と、小道と、最近短く刈られた芝生と、ロカイユで作った池と、その中央には幼子イエスの像が立っている。

最も目立つ木はライラックとイトスギ、花は貧弱なダリアとエゾギク。ツゲの木はかなり歪んで剪定されていた。休日に神父の誰かが頑張ったものだ。塑像を取り囲む噴水はとても質素な水量だった。神父たちが圧力を調整したのだ。ジョルジュは、自宅の広大な庭と、その噴水、テルミヌスの像、植え込み、花壇、その奥の温室、庭のあらゆる芳香を思い浮かべた。自習室から見渡せるその学校の庭は、ランスロの『ギリシャ語の語根』のそのようだった。それは、「無意味な色彩」をよそに委ね、「学問の精神」を取り戻すためにのみ用意されたものなのだ。

精神！ ジョルジュがここにいるということが、本当に彼のそのの益になった。父親は、寄宿学校によって、自分が精神の育成と呼んでいたものを全うすることを息子に望んでいた。父は、彼が家であまりに甘やかされていること、リセであまりに易々と好成绩を収めたことで、彼を非難した。そのうえ彼は、もう家庭教師という時代ではないのだから、善き家庭の少年は神父たちの手を経るべきだ、と考えていた。それで、寄宿生しか受け入れない、山地にぽつんと建っている聖クロードは、体にも良さ

そうだし、理想的な学校のように思われたわけである。

通路で見かける先生方は、微笑を浮かべたり会釈をしたりして、怖そうには見えなかった。ジョルジュは、両親と一緒にしたばかりの、学長や会計係や学監への訪問を思い出した。ジョルジュと同様、「ド」の付く名前を有するその学長は、節度ある身のこなし、仰々しい話し方、そして遠くを見るようなまなざしを持っていた。彼は、質問するときはその高い身長を傾けた。彼はジョルジュに、自分の新しい生徒の出身地であるM……の、どの教会で初聖体をしたのかを尋ねていた。それが、幸運にも彼が最初の頃のミサの一つをあげた大聖堂であったことで、彼は喜んだ。古典の記憶がさらにその町と彼を結び付けていた。「大学へ行くか、さもないければリセに行くか、だったのですよ」彼は微笑みながら言った。文学士号を取る準備をしたのがそこだった——彼は自分が学士であることをそれとなく知らせていたのである。

会計係は、印象に残らない人間ではなかった。その身長と黒い顎ひげのせいである。彼は大砲のような音を立てて涙^{はな}を^{はな}か^{はな}でいた。彼のハンカチはタオルのように大きく、折り目の上に正確に折り畳まれていた。彼は逆に傾けたペンを握りながら、四半期の領収証に署名していた。彼は間違いなくリューマチを病んでいた。

学監については、彼は学長や会計係よりもさらに大きかった。おそらく全員をよく

監督するためである。彼は建物を上から下まで見学させた。ジョルジュに自習室と共同寝室の彼の間所を教えた。修道女たちに彼を紹介し、個人的な世話をさせるために医務室のシスターにジョルジュを任せたのであった。シャワー室の中で——土曜日ごとのシャワーだ——、彼は個室の一つの鎖を引いてみた。ちゃんと動くかを見るためである。袖が濡れた。ジョルジュの両親の去り際に、学監はこう言っていた。「私たちの家を、あなた方の息子さんは自分の家のように思うことでしょう」そして規則書を一部、彼に手渡したのだった。

ジョルジュはその小冊子をポケットから取り出して、最初のページを読んだ。

一般的な規則…完全なるキリスト教の教育と、精神と心の堅固な修養とが、我々が到達を目指す二重の目標である。常習的な怠慢、頑強な不服従、信仰や良俗によって非難されるべき会話、文書、読書、行為は、退学処分となる。

入り口からして、平和あるいは戦争を差し出している伝令官の扮装をした良き神父たちがいるではないか。彼らは実際はこんなにも好戦的だったのか？

ジョルジュは、成績評価、席次、通知表、通信、面会室、外出に関する項目にざっと目を通した。《修道会規則》を無視して、《学則》を調べる。彼は修道会員になることなど考えたこともなかったが、作家やアカデミー・フランセーズのメンバーになる

ことは時々夢に見た。リセにはアカデミーはなかったし、聖クロードのそれは自分の修練を可能にする。立候補を届け出るためには、フランス語の五つの課題で並外れた成績を取めなければならない。M……では、ジョルジュはフランス語の首席だった。ここの神父たちの生徒はどれくらいできるのだろうか？ 自分のように、彼らもアナートル・フランスの全作品をひそかに読んだりしたのだろうか？ 全作品？ 本当のことを言うと、半分だけだ。あの作家の作品はたくさんあるし、中には退屈なタイトルもあるのだ。

次のページは《日常規則》を含んでいた。それらは平日の早朝で始まっていた！

《五時三十分…起床》。そんなに早い時間にどうすれば起きられると？

《六時…自習室で瞑想》。ジョルジュは事前に想像した。不動で、両手を頭に、瞑想に従事している自分を——何のための瞑想なのか？

《六時二十分…ミサ》。何とたくさんのミサが予想されることか！ ジョルジュはそんなにたくさんは聞いていられないだろう。

《七時…自習》。

《七時三十分…朝食。休憩》。

《八時…授業……》。休憩。自習。昼食。休憩。自習。授業。休憩。授業。おやつ。自習。

宗教書読解。夕食。就寝。何という連続！でも、夕食直後に寝るということは、要するに鶏の鳴き声で起きることへの埋め合わせになるというわけだ。自宅では、ジョルジュは七時になってやっと起きたものだが、夜十時や十一時前に寝ることもなかった。結局は同じことか。

これが《平日》。《木曜日と日曜日の規則》というのもある。それは季節に応じて変化があり、二つに単純化されている。《a冬、b夏》。

その先には、特定の日の固有のスケジュールが見える。

《一学期。十月…》。

《三日、月曜日——新学期開始の日…十九時、聖体降福式》。ジョルジュは自分の腕時計を見た。その式まで二十分ある。

《四日、火曜日——授業開始…修辞学級から六年生までフランス語作文……。年度開始の静修》。年度は、フランス語作文とともにさい先よく始まるようだ。それは、自分がどういふ人間かをすぐに見せつける機会となるだろう。それにしても、独自の規則があつて四日間を占めるこの静修とは、一体何なのだろう？ 教育、ロザリオ、講話に礼拝？

十一月は、このような記載で始まっていた。《墓地訪問。八日間、亡き後援者の魂

の安息のためのミサ》、それから…

《三日、木曜日——月例外出日》。ジョルジュはその日まで両親に再会することはないということだ。学習と瞑想に適した雰囲気の中にできる限り子供たちを置いておく必要がある、と学長は言っていた。

ジョルジュは暦の小冊子を閉じた。たくさんの規律も彼をたじろがせることはできなかった。彼が見てきた男子たちも皆、彼と同じようにそれに服従しなければならないわけだし、そのせいで不安があるようには見えなかった。彼らは間違いなく、庭を通り抜けるのと同じくらい無造作に、規律を通り抜けて動き回る方法を知っているのだ。親たちが去り、先生も誰もそこにいなくなった今初めて、生徒たちの何人かは規則に反抗してやろうといった様子を見せている。喫煙者たちが一本の木のそばに集まって、枝々の内側にタバコの煙を吐き出していた。一人の男子が花を摘むと、もつと背の高い仲間の子がそれを取り上げようとして、ツゲの中に彼を転倒させた。彼らは楽しそうに笑っていた。彼らの顔は、一人がもう一人のそれにぴったりと押し付けられ、彼らはそこに好意を生じさせているように思われた。

一人の神父の到着がお楽しみを妨げた。喫煙者たちは手のひらの中にタバコを隠し、その間に取っ組み合いを好んだ者たちが彼を出迎えに静かに去って行った。ジョル

ジュは、二人の随行者の明るい髪の間で、神父の白い剃髪が窓の真下を通っていくのを見ていた。彼は、自分が上手に狙いを定めたということと、新入生としての勇氣に欠けていないということを示すために、そのど真ん中に何かを投げつけてやりたかった。

彼はこのコレージュにすっかり征服されていた。だが、次は彼がそれを征服することになるのだろうか？ 彼は自分の優位点を思い返してみた。まず、頭がいい。それは議論の余地のないポイントである。記憶力は素晴らしい。どんな話題でも話せると思っているし、彼くらいの年齢の男子があれこれ自問しそうな謎なら、みんな解明したと思っている。第二に、ゲームや喧嘩はあまり好まないものの、ほかの子と同じくらい敏捷でたくましい。最後に、美男を自負している。美男を自負する男子とは！ ガラスに映る自分の像を見て、彼はいとこの女の子たちが《内緒の手帳》の中に書いていた、冗談半分の人物描写を思い出した。

ジョルジュ・ド・サル。全体的な容姿…よく均整が取れている。顔…卵形、控えめ。髪…濃い栗色、常にラベンダーの香りがする。顔色…くすんだ感じ、失敗して顔色が変わることはめったにない。目…栗色、時に温かく、時に冷たい。口…感傷的。鼻…鼻筋が通っている……。そして、侯爵家出身である。

ガラスの中で、ジョルジュも同じように自分の身なりを点検してみた。それは彼に、

彼の出生よりもより確実に価値を保証した。暗青色あんせいしよくのシャツの上に赤い絹のネクタイ

を締めている。いとこたちによると、この色は愛の色だそうだ。そのことを思い出し

て、彼は微笑した。特別な革で作った新しい靴と、赤と青の菱形模様の靴下を見るため、

彼は足を伸ばした。制服については、案内書の支度一式の章にある漠然とした指示に

可能な限りエレガントに応じていた。《正装用のように、マリンブルーのチェビオッ

トによるごく伝統的な服（半ズボンまたはスラックス）》。ジョルジュは半ズボンにし

たかったのだが、母親はスラックスの方を好んだ。彼女は、三年生の生徒にはその方

がふさわしいと言っていた。結局のところ、スラックスも似合わないわけではない。

不格好な、かなりの大男が、毅然として中庭を横切った。彼は式の時刻を知らせる

鐘を鳴らそうとしていた。新しい生活の最初の合図で、ジョルジュは意に反して再び

胸が締め付けられるのを感じた。今や完全に遂行されたこの新学期は、以前の学年と

は異なるものだった。鐘の音が過去を一掃した。最後ののろまな者たちも中庭から立

ち去った。すべての叫び声がやんだ。ジョルジュは自分の学級にたどり着けるかどう

かを訝ったが、動き回らない方が簡単だと判断した。彼が医務室のシスターの代理で

あるかのようにだった。患者を奥のベッドに寝かせる準備を、自分がしておかねばなら

ない。だが、絶望の発作を起こした者は、生徒たちにも親たちにも先生方の中にも誰もいなかった。にもかかわらず、ジョルジュは最後までそこにとどまった。新学期が平穩無事に始まったことを証明するためである。

右の方に年少組の修道女たちが、左の方に年長組の修道女たちが到着した。どちらも違うドアから礼拝堂に入った。今日の午後と同じ顔はもうなかった。彼女たちはすでに仮面を付けていた。神父たちは急いでいた。ハーモニウムの音が大きくなった。

こうして、ジョルジュはコレージュの全員が通り過ぎるのを見ていた。あの男の子たちの中に、自分の友人になる者がいるのだ。彼は、仲間を提供してくれなかったこととでリセを非難しており、この寄宿学校が友情の王国となることを疑わなかった。この閉ざされた世界の中には、自分が今日まで経験してきたことと似ているものが何もないのは確かだ。これ以上離れたままであることを、彼は残念に思った。もうほかの連中の真ん中に入って行きたかった。

あのシスターは自分を忘れてしまったのだろうか？ 荷物ケースにはまり込んでしまったのか？ 式に出ているとか？ しかし、その考えが伝わったものか、すぐに彼女は再び姿を見せた。彼女は電灯をつけ、ナプキンとコップと食卓用具一式をジョルジュに渡した。それから彼女は椅子に腰を下ろした。

「ああ！」彼女は言った。「時間を無駄にしていたわけではないの、本当ですよ。でも、あなたの所持品の整理を何度も邪魔されてしまったね。ところで、あなたは私のせいで式に出損なったり、気付いたら私もあなたのせいで出損なっていました。お互いに短いお祈りを言いましょう。」

あなたの支度一式を布類整理室に置いた後、私は共同寝室の洋服ダンスの中にあなたのスーツを入れておきました。あなたの番号が付いた整理棚のね。本は自習室には運んでいません。あなたの場所がどこなのか分からないので。それはまだあなたのナイトテーブルのそばにあります。これから教わる戸棚の中に、おやつ用の食品を入れる箱が見つかるでしょう。それにも衣装箱にも、いつでも鍵をかけておきなさい。泥棒はいないけれども、無遠慮な子がいますのでね」

彼女は頭を振ることで、それぞれの文に句点を打った。

「最後に」彼女は言い足した。「あなたのトランクとスーツケースは屋根裏部屋に上げてあります。名札が結ばれていないわけじゃないの。あらゆることを考える必要があるからなのよ、分かるわね。もちろん、ベッドメイクは私がしました。でも、ここではメイドなしでやっていくのだということは、あなたも分かっていますよね。すぐに覚えますよ、これ以上ないくらい簡単なことだし。最初の何日かは点検しますから

ね。悪い癖が少々多すぎるかどうかを見るために」

礼拝堂のドアが開き、式は終わった。生徒たちは食堂へ行くためにもう一度庭を横断した。外へ出ながら、シスターは掲示上の「調理場」という単語に指針を動かした。ジョルジュは果てしなく続くような通路を、彼女の後に付いて行った。

「聖クロードでよかったわね」彼女は彼に言った。「みんなここが好きになるの。今年の夏、大司教様がここで一週間お過ごしになったのよ。あなたのお仲間は優秀な子たちだし、あなたの先生は学識ある聖人のような方々ですよ。あなたは十分に良識を弁え、しっかりと勉強するしかないわけです。ご両親や神様に喜んでいただくためにもね」

ジョルジュは階段を降りた。食堂のこだまが大きくなるのが聞こえた。彼が全員の目の前に現れる瞬間が近づいた——こんなに騒がしい日に、誰が彼に注意を払うというのだろうか？ 彼はもはや傍観者ではなかった。舞台に登場しようとしているのだ。彼は素早くネクタイの結び目を直した。髪を整えてみたが、まったく動かない。朝、セツトローションをたっぷり塗りつけておいたのだ。

この食堂は、今日の午後ちらっと見ていたのだが、それを満たす若い頭と、それぞれの端にいる、壇上に載せられた先生方の威厳ある会食同席者集団とで、すっかり様変わりしていた。ジョルジュは視線に怯んで一瞬立ち止まった。それから、ホールの

奥に立っているのが見えた背の高い学監に向かって歩いて行った。入り口近くの十字架の下で采配を振るっている学長は、彼を識別できたのだろうか？ 少なくとも、学監は彼を忘れてはおらず、愛想よくこう言った。

「ようやく遅刻者が現れましたね！」

彼はジョルジュを自分の所に連れて来て仲間たちに紹介し、その者たちが自己紹介するのに任せた。ジョルジュは座った。テーブルクロスが見えないことに驚きつつ、大理石の上に銀の食事道具をそっと置いた。手を差し伸べてくれる者はなく、彼もまたそれをしなかった。皿は縁が欠けていた。ワイン・ピッチャー、水差し、パン籠、湯気を立てているスूप鉢などがテーブルに備わっていた。ジョルジュは考え込んでいたが、左隣の者にその状態から現実呼び戻された。彼は、よく聞き取れなかった名前を繰り返すよう頼んできた。自分の名はマルク・ド・ブラジャンだと言った。

二人とも、かなり詳しくお互いを知ることになった。マルクはS……の出身で、そこはジョルジュが住んでいた町の隣だった。おそらくそのために、あるいはむしろ「ド」のために、彼らはひとまとめにされたのだらう。だがジョルジュは、ブラジャンが侯爵の子息でないことを願った。もしそうだとしたら、彼は爵位の価値を下げてしまいたいのだ。曲がった鼻と薄いまばらな髪をして、至極平凡な眼鏡を掛けている。彼

の健康状態はあまり良好そうには見えず、痩せて青白かった。休暇はほとんど彼の役に立っていなかった。彼はもう薬を飲んでいた——彼の引き出しの中には薬瓶と薬包の箱が入っていた。右隣の者と完全に対照的で、ジョルジュは彼を識別したばかりだった。花を摘み、ツゲの木の中ではしゃいでいた元気な若者だ。こちらは活気と力強さを発散していた。ジョルジュは、彼の笑い顔、青い目、黒い髪、その顔が持つ褐色の染みの薄い散らばりが好きだった。彼が自己紹介したように、それがリュシアン・ルヴェールであった。

デザートの後、学長の鈴の一振りが沈黙を強要した。中央に位置する説教壇で、ある生徒が立って『キリストのまねび』の最初の章を読んだ。

……目に見えるものへの愛からあなたの心を切り離すよう努めよ。己の情欲の誘惑に従う者は、魂を穢し^{けが}、神の恵みを失うからである。

それからみんな立ち上がって学長の方を向き、学長は感謝の祈りを唱えた。ジョルジュはルヴェールの後ろにいた。彼はルヴェールの涼やかなうなじを見ていた。それはローションの香りがした。

共同寢室も、食堂同様、昼間とはまったく違う様相を呈していた。しかし、こちらは沈黙が支配的で、この男子集団に聖職者的な性質を与えていた。ジョルジュは、どこであっても同じ隣人が保たれることを知った。おそらく監視を容易にするために定められた習慣に従ったものなのだろう。彼のベッドは終端から二番目で——終端はルヴェールのそれである——、右奥で、壁にくっついて、整理棚のそばだった。彼はその二十五番に衣類を見に行った。シスターはほこりを防ぐために小さなカーテンを掛けてくれていた。彼女はけちけちしていなかった。彼女は、受け取っていた気前のよい寄付への感謝の心を知っていたわけだ。本は、ナイトテーブルとして使われているかなり低い金庫のようなもののそばに、注意深く積み上げられていた。ところが、マルクが言うところによれば、ジョルジュがすでに買った三年生用の教科書は何の役にも立たないとのことである。ここでのカリキュラムは違うのだ。やれやれ、素晴らしきかな、宗教学校！ それはいつでもほかと違ってはいけけないのだ。

ルヴェールのように、新学期の学校への復帰に冷静さを減じられない生徒もいて、彼らは、洗面所に歯を磨きに行くことで共同寢室の中にわずかな活気をもたらしていた。蛇口の水の音が金属の流しで響いていた。ジョルジュは服を脱ぎ始めた。ほかの者が同じようにするのを見ながら。彼は剥き出しの背中や胸や腕を見た。ある者は金

色、ある者は白かった。彼はパジャマを着た。何人かはシンプルなネグリジェを身に着けていた。二つの流派があるのだ。ジョルジュはシャツの中に潜り込んだ。彼はこんなに多くの人間の間で寝たことはなかった。ルヴェールは洗面所から戻り、服を脱いだ。横を向くことなく、それどころか彼は無邪気にジョルジュの方を向いていた。

彼はパジャマのズボンを穿き、腰紐の二つの先端をうまく揃えることができないでいた。最終的に、彼はすでにシャツを捲ってあったベッドに飛び込んだ。愛想よく頭を下げ、彼は自分の爪を噛んだ。ジョルジュは、かねがね言われるのを聞いていたように、それが子供の悪癖であることを残念に思った。舎監が大きな声で祈禱きとうを唱える間、全員が羽布団の上にひざまずいた。祈禱の最初の言葉は「眠りは死の似姿である」であった。

今灯っている灯りは終夜灯のそれだけだった。神父がしばらく無言で巡回し、それから姿を消した。彼の部屋は隣にあって、入り口は共同寝室に面した広大な連絡通路に通じていた。彼は洗面所の上に作られた内側の窓のカーテンを引いた。その窓は眠っている者たちを監視下に置くことができた。彼が姿を消したことが、ひそひそ話の合図となった。会話が始まった。

ジョルジュとその隣人たちは何と良い場所にいたことか！ 敵意ある耳から離れて

いたのだから。マルクは、さらなる有利さを彼に認めさせた。舎監は、彼らの声を聞きつけるのと同様、彼らを不意に捕まえることも不可能なのだ。彼らには、舎監がやって来るのが見えるからである——舎監の部屋のドアは、ほぼ全員から見えないのだが、彼らのベッドまでの対角線上の端にあった。ブラジャンは、共同寝室の幾何学図形を空中に描いた。その後で、彼は尋ねた。

「君は、けっこう博識なのかな？」

「去年優等賞を取ったよ」ジョルジュは答えた。

「僕らを隣どうしにしてくれるなんて、学監は親切だよ」彼はうれしそうに言った。「聖クロードの第四位受賞者は、僕なんだ。そう、神父様たちは万事心得ている——あの人たちは席次を念入りに検討している。僕らはお互いに写したりしないし、さらに言えば、ライバル意識以上のものは持っていない。君らリセ組はすごく優秀に違いない、アグレジェの先生方ともどもね。ここで君はアカデミーに入るべきだ。修道会員になるよりはマシだよ。僕はね、一年前からアカデミーに所属しているんだ。君がよければ、僕が後押しするよ。でも、僕は宗教上の掟はよく守るけれども、修道会に入るのはごめんだね。あれは、目を付けられたくない理由がある連中みんなの隠れ場所なのさ。そんなのはうんざりだよ」

ジョルジュは、ブラジャンが話を終えてくれてうれしかった。彼はルヴェールがまだ起きているかどうかを見たくてうずうずしていたのだ。端にいるのその男子は、おしゃべり相手になるのが彼しかなかった。終夜灯の光が目を開いた彼の顔に落ちていたが、まるでジョルジュの視線を感じたかのように、彼は再び目を開いた。彼は微笑みながら「おやすみ」と言い、手を差し伸べた。それから向こうを向いて、頭を半分ほどシーツの中に埋めた。

ジョルジュはこんなに早く寝ることには慣れていなかった。寝つけるものじゃない。彼はこの新学期と、二人の隣人のことを考えた。ブラジャンは、以前自分のものだった世界にいて、受賞者だ。彼は、ルヴェールについては、学監の選択にいつそう満足した。こちらは、学友全員の中で、彼が握手をした最初の人間であった。運命の前兆がその選択に対応している。リュシアンには爪を噛まないよう言ってやろう。虫垂炎を引き起こしかねないから。

次に彼はほかのことについても考えた。ゆうべは母が自分のベッドにキスしに来た。彼女はこう言っていた。「明日、私のかわいいジョルジュは遠くへ行ってしまうのね」そのとおり、何て遠くにいるんだらう！ 休暇の日々やりせや家が、ジョルジュにはさらに遠く離れたように思われた。

それでも、彼は自分の大きな部屋や、そこに敷かれていたその上で体操をした厚いカーペットや、ペルシャ猫が無関心さしかない目で彼の運動を見守っていた肘掛け椅子や、自分の本棚——夜読む本は父親の書棚からのものだったが——などを思い出した。二枚のイギリスの複製画『青い少年』と『赤い少年』、これは彼のベッドに置かれていた。繊細な掛け時計。その鐘の音は、以前、彼がもはや小学生ではなく、応接間にある肖像画の、あのサール家の小さな騎士のような王家の小姓になったであろう時代を思わせた。

コレージュが、その全部からこんなにも早く自分を引き離すことになるなんて、以前の自分に想像できただろうか？ 今夜から、快適な生活や贅沢を懐かしむことはするまい。明日、自転車を懐かしまないようにするのと同様に。学監によれば、自分の家はここなのだ。

彼は夢を見た。鐘の夢である。それはM……の大聖堂の鐘か、あるいは休暇を過ごした村の教会の鐘か、それとも食事の時刻の城の鐘か、はたまた目覚まし時計でしかないのか。突然、ジョルジュは肩を揺さぶられているのを感じた。そして、何が起こったのか理解できないまま、自分の顔の上にある神父の顔が彼の目に入った。それから

こう言っているのが聞こえた。「さあさあ、起きなさい！」

まだすっかり呆氣にとられたまま、彼は祈禱を聞くためにひざまずいた。「主よ、私が日の光を再び見るのは、あなたの慈悲のおかげです……」ブラジャンは彼に友好的な身振りをした。ジョルジュはリュシアンをちらっと見た。彼は微笑みかけた。彼はベッドから飛び降り、室内履きを履き、青いスーツのポケットを空にし、それに素早くブラシをかけた——彼には行動様式があるのだ——そしてそれを整理棚の中に入れた。彼はゴルフ・ウェアを選んで洗面所へ行った。

その場所はすべて占拠されていたため、彼は待った。学友たちはそれぞれ自分なりの身繕いのやり方を持っていた。こちらではほとんど濡らすことをせず、あちらでは蛇口の下で頭を石鹸で洗っている。泡ですっかり覆われて、デコレーションケーキにそっくりだ。ある者は、皮を剥きたがっているみたいに顔をこすっている。また別の者は、それとは逆に自分の顔を慎重に造形しているかのようだった。

ジョルジュは最後に終えた。彼は自分のタオルをベッドの横棒に広げ、髪をローションで湿らせた後で、とかすために鏡を羽布団に立てかけて置いた。

彼はリュシアン・ルヴェールをちらりと見た。服を脱いだのと同じように、彼は礼

儀作法へのこの上ない侮辱をもって服を着ていた。ジョルジュはどこに舎監がいるのかを見た。ルヴェールは明らかに、舎監がかなり遠い場所にいることにちゃんと気付いていた。結局のところ、彼がこの隣人に注意を払わないのはごく自然なことではないか？ 彼らは男子なのだ。明日になれば、ジョルジュもまた注意を払わなくなるだろう。

自習室では、彼は自分の勉強机を見つけるのにブラジャンに付いて行くだけだった。それは自習室の中央の辺りで、ルヴェールは彼の左側、またもや列の端にいた。上級生たちの校舎で、この《瞑想》を指導するのは学長自身だった。普通はその日の聖人に捧げられるものである。今朝、彼は、おなじみの小さな訓示しか話さなかった。聴いている者たちへの歓迎の挨拶の後、彼は、神や自分自身や先生方や両親や学友たちに対し、彼らがどんな義務を果たさなければならぬかを思い出させた。彼は、彼があげるミサに熱意をもって参加するよう促した。今年度最初のもので、聖霊のミサである。彼は、その晩の最初の静修はドミニコ会の高德の神父によって指導されることを告げ、そこから全員それぞれが望ましい成果を得ることを期待すると述べた。彼は静修ノートのことを話した。それは教師に提出されねばならないものである、と。

ジョルジュは自分の前にいる学友たちを眺め回した。おそらく四学年の生徒たちだ

——この一団はその学年で始まっていた——最上級生を後ろにしながら。後ろから見ると、彼らの頭は面白かった。数字を嫌っていた彼だが、数え始めた。楕円形、円形、小さいもの、中くらいのもの、大きいものを数え上げた。彼は色でそれらを分類した。右分けが何人、左分けが何人、あるいは彼のようにオールバックにしている者は。彼らの一人は褐色髪で、白い逆毛が一筋ある。別の者は栗毛で、ブロンドの毛の房を得意げに見せている。リセの学友の中では、ジョルジュはこうしたものすべてに気付いたことがなかった。

彼は、この宗教的な沈黙の中で、彼らを自分と同じくらい無関心なままにしているに違いなく、また彼らの共通の関心をより高く評価させているに違いない言葉を聴いているこの男子たちを見てみると、彼らがより近しく感じられてくるのだった。

礼拝堂では、交差廊の中で、上級生たちが聖歌隊の右側を占め、下級生学級と向き合った。ジョルジュは六列目の位置にいた。彼は赤いカズラを着た学長の貫禄ある様子に感心した。主祭壇だけは鈴とクラケットの特権を有し、侍者たちのための法衣もそこにあった。それより小さな諸祭壇では、ある者は特別席の中に、別の者は後陣に位置し、先生方はそれぞれが一人の生徒に仕えられつつ、ミサをあげていた。至る所に何と多くの赤いミサがあるのか！ コレージュは愛の色に囲まれて始まるのだ。

身廊^{しんろう}への入場時に、ハーモニウムの周りに集められた聖歌隊の男子たちが歌おうとしていた。突然、指揮をする神父が厳かに拍子を取り始めた。聖歌隊全体が声を出すかと思われたが、快い声で歌い出したのはソロだった。その歌詞はこんなに奇妙なものだった。

来たれ、愛の聖霊よ、

今日は我が魂へと降り給え。

来たれ、愛の聖霊よ、

来たれ、そは永遠に汝のものなり。

聖歌隊が繰り返し、それから全員がどうにか引き継いだ。その間、聖歌隊指揮者は、あるときは身廊の方の、あるときは交差廊の方の拍子を取りつつ、懸命に体を動かしていた。

多くの聖体拝領者がいた。ジョルジュはほぼ一人だけベンチに取り残されていた。彼は青い石の美しいロザリオをひけらかすようにした。たとえ聖体拝領をしなくても、少なくとも祈ってはいることを示したかったのだ。ルヴェールが聖体拝領台に近づき、

ブラジャンも一緒だった。彼らもほかの者も間違いなく、今朝から聖体拝領ができるよう新学期前に告解をしていたのだ。だが、ブラジャンが注意深く係の者に従ったのに対し、ルヴェールはほとんど注意せず返事もせず、ハミングさえ歌いながら付いて行った。彼の宗教心は陽気なのだ。いずれにせよ、ひざまずくときのつらさを軽減するためにリュシアンが持っていたのと同じようにしようと、ジョルジュは小さな敷物を自分に送ってもらうことにした。

今日、ミサの後にある通常授業はカットされた。皆朝食のために食堂に直接行った。カフェ・オ・レがアルミニウムのボウルにすでに注がれていた。ジョルジュは少し憂鬱な気持ちで、家での目覚めのココアのことを思った。それはとろりとして、泡立てられ、バニラの香りが付けられ、軽い陶器のカップの中でとても重そうだったのだ。バターを塗ったトーストの記憶に対し、柔らかいパンは同じようになり味気なく感じられた。しかし、これら直近の哀惜の念は、ゆうべのそれよりも長続きしなかった。休憩時間に遊ぶことを義務づけた規則は、今朝は休止となった。マルクは各所を案内してジョルジュに礼を尽くした。

中庭のあの辺りは高学年の生徒用だ。向こうの方にコレージュの農場があって、近くに急流の音が聞こえる。春にはその桑が、葉っぱから歴史の老先生の蚕に栄養を

取らせる。その先生は実験用マウスを飼っていることでも有名だ。それと、飲料水の蛇口、バス・ペロタ用の壁、球技グラウンド。あの窓はローゾン神父の部屋のだ。修道会長で数学の先生である。そのほかは共同寢室のだ。あの急な坂は、中庭から温室のテラスに続いている。その下には、洞穴の中に聖クロードの彫像が置かれている。リュシアン・ルヴェールと、さっき彼とじゃれていた背の高い男の子が、寄り添って歩き回っていた。

その後は教室である。ジョルジュは自分の領地を一巡し終えていた。先生——フランス語とラテン語とギリシャ語担当——は、痩せて、禿げていて、アルマジロというあだ名を付けられていた。彼は生徒たちに愛想のよい言葉をかけたが、一、三の落第生に対するわずかな皮肉もないわけではなかった。それから、新しい顔を観察しつつ、名簿に従って全部で二十人の出席を取った。彼はジョルジュに対してかなり自尊心をくすぐることを言い、キリスト教の教育環境に参入したことへの祝意を述べた。

最後に彼は、会計課で受け取るべき古典の本のリストを伝え、夜のラテン語翻訳のページと番号を指示した。その後、彼はフランス語作文のテーマを読んだ。《フランソワ一世時代の馬上槍試合》。これ以上のものはない。これが、ジョルジュ・ド・サルとマルク・ド・ブラジャンとの間に、騎士道に則った戦いを可能にするだろう。

「フランソワ一世は好きじゃない」マルクが言った。「僕が好きなのはルイ十四世だけだ」

ジョルジュは、やる前から試合の勝利者になるような気がした。

十時の短い休憩時間に続く自習の間、生徒たちは追加分の伝票と聴罪証明書を書いた。聴罪証明書とは？ ルイ十五世統治下、ウニゲニトゥス教書の時代の、「この非常に名高い証明書により、死者はそれとともに冥府へと運ばれる」というものである。ジョルジュはまず追加分に取り組んだ。彼はこう書いた。「夜に肉。ピアノのレッスン」ルヴェールもまったく同じものを頼んでいた。ブラジャンは——ジョルジュはすでに知っていたのだが——方針なのか節約なのか、どんな追加も取らず、ちょっとした料理や音楽を必要とする優雅な連中を嘲った。彼は薬しか買わなかった。

その後ジョルジュは、マルクがもう一枚の用紙に誰の名前を書き込んでいるかに注目した。それはローゾン神父の名前だった。彼が、あの神父様は自分と同じS……出身なんだ、と言っていたのを思い出した。マルクの立場から考えると、彼を選んだのはそれが理由ではない。彼は言わなかったが、修道会長であることと、それ以上に数学の先生だということだ。一つには、自分は科学は得意ではないと、もう一つには、自分の先生方の一人を聴罪担当者とするのは気詰まりだと、彼には思われた。仕方が

ないので、彼は会計係様として彼に我が身を委ねようとしたとき、ルヴェールが書いていた名前が目に入った。何と！ ルヴェールはブラジャンと同じ先生にしていたのだ！ ジョルジュは次のような定型文を直ちに書き込んだ。「G・ド・サールはローゾン神父の告解者となることを希望します」その用紙を見せたブラジャンは、きっと自分がその選択を引き出したのだと想像したことだろう。

教室の生徒は四人ずつ、それぞれ会計課に行った。ある者たちは、帰って来ると机の上に積み重ねられた本をひどく恐れた様子で見っていた。別の者は、本の背を折らないように敬意をこめてぱらぱらとめくり、それから遊び紙の上の方に自分の名前をきれいに書いた。

宿題がなかったのも、舎監は親宛てにちょっとした手紙を書く許可を出した。これは例外的なことだった。書簡は日曜日にしか許されていなかったからである。書き上げたリュシアンは、手帳にたくさんのかっこいいことをメモしていた。辞書の後ろにすっかり隠れて、それらの言葉に微笑んでいた。彼は舎監を常時警戒する術^{すべ}を心得ていた。

ジョルジュは今日、コレージュの主要な食事がどんなふうに始まるのかを見ることができた。食前の祈りの後、学長がこんな言葉を言う。「神への感謝」これが会話の合図であった——言葉によって神に感謝するのである。説教壇にいた生徒が降りて来

た。読誦文どくしやうぶんがないからである。学長のそばに、知らされていた説教師がいた。白い法衣とよく似合う顎ひげが多くおほくの注目を浴びていた。だが、ベルの音おとがその好奇心に終止符を打った。

ジョルジュは、ブラジャンがテーブル長であることを知らなかった。ゆうべは儀式ばってはいなかった。今は生真面目なまごころになっている。ブラジャンはやや尊大な感じでオムレツを分けていた。

ルヴェールは自分の休暇のことを話していた。山でキャンプして、湖で泳ぎ、テニステニスが上手になったという。

デザートは二種類だった。リンゴとアーモンド。これは、少し前の散歩とともに、新学期初日のもてなしである。その後、同じ生徒が再登壇し、正午の慣習に従って殉教者伝を読み上げた。

「十月四日。ウンブリアのアッシジにて、証聖者しやうせいしやにしてフランチェスコ会の創立者、聖ボナベントゥラにより聖なる行いと奇跡に満ちた生涯の伝記が書かれた聖フランチェスコの、天上での誕生……。

エジプトにて、聖なる殉教者マルクスとマルキアヌスの兄弟、および老若男女のほとんど数え切れないほど多くのほかの殉教者たちは、ある者は鞭打ちやその他の恐ろ

しい拷問に耐えた後に焼き殺され、別の者は海に投げ込まれた。また首を切られた者、飢え死にさせられた者、磔^{たづけ}刑台に釘づけにされた者もいた。ある者は頭を下に、足を上にして空中に吊るされた……。

アレクサンドリアにて、聖者たちと助祭たち、カイウス、ファウストゥス、エウセビウス、シェレモン、ルキウス、その仲間の人々……。

ボローニャにて、司教と聴罪司祭の聖ペトロニウス……」

ぞっとするような細部と、朗読者を口ごもらせる風変わりな名前が、多くの男子たちの心中にかすかな微笑を生じさせた。この記録の中で、ジョルジュは少なくとも二人の隣人に再会していた。マルクスとルキウスである。リュシアンは、ルキウスとして彼に気に入られた。リュシアン・ルヴェール！ ルキウス・ウェルス！ 皇帝だ。貴族としての威厳を失うことなく、少しは取り入ることができるかもしれない。マルクスは『クオ・ヴァデイス』の英雄を思い出させたのか？ その日のリストには、聖ペトロニウスもあった。薔薇の冠を被せられ、自殺で死んだ小説のペトロニウスではない。聖ペトロニウスは違う死に方をしたはずだ。

散歩中のこと。コレージュに隣接した小さな村を通り抜けた後、一団は山に向かっ

て進んで行った。栗の木の森を通り過ぎるとき、生徒たちは道に散らばる少し開いた
いかに向かって身を屈めたが、まず第一に刺さらないようにする必要がある、第二に
素早く行動しなければならなかった。舎監が他人の土地を尊重させたからである。

平坦な場所に着くと、さまざまな球技の試合が組織された。そうした運動があまり
好きではないジョルジュとマルクは、観客役で満足だった。ここでさえ、規則は依然
として強制力を持たなかった。

リュシアンは、クラスのチーム内で手柄を挙げていた。相手チームのゴールキーパー
が、まさにこのリュシアンにとっても興味を示していたあの少年だった。ジョルジュは
自分の所へブラジャンを連れて来た。

彼は何歳？ あっちのあの男子。十六歳くらいかな。彼はがっちりした体格をして、
大胆で、顔つきは陽気そうで、目の中には炎のようなものがあつた。

彼はプレイが上手だった。素晴らしいディフェンスで、地面に完全に身を倒しなが
らボールを阻んだところだった。「ブラヴォー、フェロン！ ブラヴォー、アンドレ！」
仲間からの声援が飛んだ。

彼は肘を擦りむいていた。

「こんなときに限って」彼は言った。「ハンカチは上着に入れたままで」

ジョルジュはポケットから自分のそれを引っ張り出して、彼に差し出すために進み出した。

「おお！ メルシー！」アンドレが言った。「結んでくれるかい？」

それから彼は付け足した。

「君は三年生だね？ ルヴェールの隣にいたよね」

競技者たちが集まって来た。ジョルジュはブラジャンの所へ戻った。

「感じがいいね、あのフェロンは」彼は言った。

「彼らはみんな感じがいいのさ」いわくありげな表情で、マルクが答えた。

ジョルジュは、彼がほのめかしていることについて尋ねた。

「つまりね」つかの間考えてからマルクが答えた。「いろんな場所と同じように、聖クロードにも二種類の仲間がいるってことさ。でも、多いのが悪い仲間であることは確かだ。君も一方か別の方か、どちらかを選ばなければならなくなるだろう」

「悪い仲間ってのはどんな？」

「そりゃあもちろん、目隠し鬼でズルをする奴のことじゃない。僕は、穢れなき者を善人、不純な者を悪人と呼んでいる」

「フェロンは二番目のカテゴリーに属するってことでいいのかな」

「そういうこと。僕は長いこと知っているんだ、あの気のいいフェロンのことを。彼が下級生学級にいた頃から活動していたのを、僕はすでに見ていた。そこで彼は、何かかなり熱心な誘いをかけていたものさ。去年から、彼は確かに少し落ち着いたように見える。彼に公認のお気に入りがあることを、僕はもう知らないからね。たぶん彼が憤み深くなったってことだろう」

マルクがわずかに嘲笑気味に打ち明けたこの内緒話は、ジョルジュを苦々しさでいっぱいにした。リュシアンは、もう彼が期待した友人にはなり得ない。その場所ですでに塞がっているのだ——ジョルジュは、どんな友人によってそこが塞がれたのかを知った。

「僕はたびたび疑問に思うことがある」マルクが言った。「それはね、そういう不純な男子連中が、学業を修めるためにはどうしても必要となる健康をどうやって得られたのかってことだ。でも、いつかそのうち、連中は突然だめになるに違いないね」

コレージュへと戻る間、ジョルジュはポケットの中で、フェロンが返したしわくちやになったハンカチに触れた。彼は、あの擦り傷が作った凝血の上に指先を置いた。彼はその血を嫌った。明日はハンカチを変えることになるだろう。

リュシアンは彼の二列前にいた。その足取りの何と軽やかなことか！ つま先で歩

いているみたいだ。だめになりそうな人間には見えないし、ボールを遮るためにさえそんな失敗はしなさそうだ。そしてこの、すでに疲れたと愚痴をこぼし、息切れしている哀れなマルク！ アンドレについての彼の話は正當なのだろうか？ 健康な少年たちに対するジェラシーのためにあんな話をしたのではなからうか。彼は健康がある所に不浄を想像した。あり得ないことではないのでは？ おそらく、ジョルジュの疑惑もまた正しくないのだろう。きつとリュシアンはまだアンドレの支配下にはないのだ。自分が魅了された相手をこんなに早く諦めることはない。今日はまだ新学期の二日目ではないのだから。

夜の自習室で、ジョルジュは、勉強に取りかかる前に、フェロンがどこに座っているかを見ようと後ろを向いた。ライバルは遠くにいた。ここで生徒たちは安らかに勉強することができた。アルマジロによって指示されたラテン語の翻訳練習をこなさなければならぬ。「時間は祖国を忘れさせることはできない」

ジョルジュは、清書しつつ、マルクが午後に言っていたことを思い出した。左側のいちばん上に《J・M・J》（イエス、マリア、ヨゼフ）のイニシャル、真ん中には小さな十字を書かなければならないということを。彼は自分の作文にそんなものを書いてはいなかった。もしそれが点数を落とさせるとしたら、自分の草稿を読んだ後で

マルクが謙虚に降参を表明してただけに、ちょっとひどすぎる話だ。

最初の鐘の音で、それぞれのクラスの生徒が一人、学友たちが書いたものを集め、それらを舎監に提出するために立ち上がった。ジョルジュは、ずいぶん高慢な様子の資格保持者たちの、そのささやかな役目を面白がった。彼はすでに確認していたその全員を検討した。自習の最初に用紙を集める者、テーブル長である者、食堂で朗読する者、おやつのパンを配る者、鐘を鳴らす者、机のインク壺を満たす者、図書室で働く者、集団の先頭になって歩く者。たぶん、こうした特権は争って得られたのだろう。アンシャン・レジーム下における潮の検査官や、灰の役員や、まぐさの計測人のように。静修は、年少組の自習室で始まる。その者たちは、年長者と入れ替わるため、前の席に集められていた。後ろを向いている者もいたが、彼らの学監は指を鳴らして注意を促していた。

説教壇に立ち、両手を胸で交差させ、目は天を見上げているドミニカ会修道士は、恍惚としているように見えた。

壇の近くの椅子は、学長とそれぞれの学級の学監のために予約されていた。先生方は部屋の長さのシートを占有した。年長者が落ち着いた場所には多少の無秩序さがあった。祈りの後、最終的に全員が着席した。ジョルジュは、正規の二人の隣人を見

失うことはなかったが、アンドレがリュシアンに向こう側にいることに気付いた。説教者は、悲しげな調子の詩句を引用することから始めた。

金髪の幼子たちよ

魂が香炉である者たちよ……

彼はそれを聴いている子供たちに、《キリスト教徒の詩人》のその言葉をよく覚えておいてほしいと言った。金髪の者と同様、おそらく褐色の髪の者に対しても適用できる言葉なのだろう。

「このコレージュは」彼は大声で言った。「一年中、何と大きな香炉に似ていることでしょう！ あなたたちの顔に振りまかれたつかの間の恵みに、値するようでありなさい。心の中に振りまかれた神の恵みには、いっそうふさわしくありなさい。さらに言えば、宗教の歴史によってあなたたちの青春期に与えられる大いなる模範にも、値するようでありなさい。たいへん大きな徳性が現れるのは、多くは子供時代なのです。十四歳で隠者となったパオラの聖フランチェスコが示すように。ほかに多くの例があります、それぞれの講話であなたたちに話す機会もあるでしょう。とはいえ、私

は早速今夜からでも、あなたたちの自習室のペディメントに、あらゆる子供たちの中で最も栄光ある者たちの名前を刻みたいのです。あなたたちと同じくらいの年齢で、血を捧げることが神に拒まれることのなかった者たちの名前を。九歳で信仰のために死んだ、オセールの聖ユストゥス。カイサリアの聖シリルは十歳。カッパドキアの聖マメスは十二歳で最初に迫害されました。アルカラの聖ユスト、それに聖ヴィトゥスは十三歳。聖パンクラティウスは十四歳。聖アガピと聖ブナンは十五歳。聖ドナティアンと聖ロガティアンは青春真っ盛りで。あなたたちの場合、苦勞することは何もないでしょう。この心地よい家で、ただクリスチャンの子供でいるという勇気があればいいのですからね。

私はまず最高のものを示しましたので、今度は最低のものをお教えねばなりません。子供たちはこの世の装いですが、ああ！ 罪の醜さを知る可能性もあるのです。光の子らがいれば、墮落の子らもまたいるのです。その墮落した子らの、顔には光が少ないわけではないのですが、魂の方は暗闇の中に沈んでいます。大聖グレゴリウスがローマの市場を横切ったある日、幼い子供たちの中にうっとりするほど美しい者がいることに気付きました。奴隷として売りに出されて並べられていたのですが、それは六世紀には奴隷制度が廃止されていなかったからです。彼は、その者たちがどこか

ら来たのかを尋ねました。聞けば、彼らはアングレから来たそうで、それはつまりイギリス国のことで、そこはまだ信仰を受け入れてはいませんでした。『むしろ天使と呼びなさい』彼は答えました。『もし彼らが悪魔の支配下にいなかったのなら、私の子らは、決して忘れないでください。悪魔は時に天使の顔を装うことがあります、それでも彼らは堕天使以外の何だというのでしょうか？』

あなたたちのように純粋なままでいるか、あるいは不幸にもすでにそうではなくなってしまうか。一度そうなるためには、自らを人の子と呼んだお方の掟に従い、見張り、祈らねばなりません。祈ってください、それは救いの祈りです。見張ってください、敵があなたを狙っているからです。友情を見張ってください、それは敵かもしれません。特別な友情にならぬようにしなさい、それはただ感受性を養うだけです。ブルダールが言うように、感受性は容易に好色へと変化するものなのです。公の友情、また魂の友情でありなさい。そうすれば、あなたたちは聖ベネディクトが『生命の学校』と呼んだ、そのスピアーコの学校で、自分のそばに置いた信心深い子供のようになるでしょう。その全員の中で、貴族の家の出で、友情によって結ばれていた二人の子供が、彼のお気に入りになりました。彼らはマウルスとプラシドという名で、教会によって聖者として位置づけられています。プラシドが十五歳くらいだった当時、スピアーコ

の湖水を汲んでいたときに、彼はバランスを崩してそこに落ちて、湖岸から遠くに風で流されてしまいました。個室にいた聖ベネディクトは、内なる声によってそのことを知ったのです。『急いで駆けつけよ』彼はマウルスに言いました。『あの子が水に落ちたところだ』マウルスは奇跡を信じる心とともに水に飛び込みました。水は彼を支え、彼は友人を救ったのです。

明日、十月五日は、聖プラシドの祝日です。その聖人の恵みのもとに、学年を始めてください。あなたたちを危険から救う神聖な友情を、彼にお願いしてください。とりわけ、彼のように、最高の友、天上であなたに永遠に報いるだろう友、聖体の秘跡によって神と結ばれる言葉に『まことに汝は我が愛する者にして……』というのがあります、この『まねび』の言葉をこの世で言えるような友に、ふさわしくいられるようお願いしてください」

ジョルジュはこの語りを聞いていた。それは彼の冷徹な記憶の中に刻まれたが、彼の思考はそこで止まらなかった。紙切れに若い聖者の名前を年齢と一緒に書いていたブラジャンによって気をそらされることもなかった。彼は、リュシアンのおぼで特別な友情への非難を静かに聞いていたアンドレ・フェロンのことを考えていた。

生徒たちは聖体降福式に行った。昨日この典礼が行われている間、ジョルジュはま

だコレージュの規則しか知らなかった。そして今日は、規則の外にあるものについて、彼はすでに知りすぎていくらいになっていた。

学長は自分の聖職者席で、ほかの者たちよりも半小節先んじて歌っていた。聖歌隊指揮者は前よりいっそう奮闘していた。ブラジャンは本を両手で持っていた。リュシアンのはそれは肘掛けの上に上下逆さに置かれていた。

食堂で、ジョルジュは、フェロンが自分たちのと向き合ったテーブルにいることに気付いた。そこなら時々リュシアンの方に視線を投げるのが可能なのだ。ブラジャンは、こうしたすべての小細工になぜ気付かなかったのだろう？ それは明らかに、彼がアンドレが用心深いということをあまりに重視しすぎたことと、リュシアンにはまったく興味を持たなかったことが理由であった。

このほかにジョルジュに不足しているのは、共同寝室でのライバルの場所を見つけることだけだった。そこは少なくとも自習室よりもずっと静かだと思われる——その少年は、ちょうどもう一方の列の最後尾にいた。

舎監が姿を消したとき、ジョルジュは枕元に何かが落ちたのを感じた。それは右隣の者が彼に投げたばかりのチョコレートだった。彼はリュシアンにお礼を言い、彼の方を向きながらその小さな立方体をそっと齧り始めた。それはヘーゼルナッツ入り

だった。

「すごくおいしいね」彼は言った。

「僕にはそいつの備蓄がある。僕らは毎晩そいつを食べるのさ」

その「毎晩」という言葉は、ジョルジュにとってはヘーゼルナッツ入り立方体よりもずっと甘美だった。リュシアンがすでに、自分が彼に要求する権利を認めてくれているように思われたのだ。

「君、何月生まれ？」後者が尋ねた。

「七月。七月十六日生まれだよ。君は？」

「十一月六日。四か月と十日前なら同じことさ」

ジョルジュは笑い出した。

「星占いや出生ホロスコープ作りをしたことがないな？　どれくらい優等生かが分かるんだ」リュシアンは言葉を継いだ。

「うん。それについては君ほどは知らないな」

「僕には、占星術に熱心なおじさんがいるんだ。彼は僕に出生を教えてくれた。太陽が蠍座にあって、金星がかなり剥き出しで、月が十室にある。ジャンヌ・ダルクみたいにね」

「それはよかったね。それが意味するものを言うのはまた今度でこと。とにかく、君があんなに上手に球技をするなんて驚いたよ。君の星は今日の午後には素晴らしい働きをしたってわけだね」

「すごく楽しかったよ」

「上級生のチームの中にも、同じように上手なプレイヤーがいるね。特にフェロン」
「そう、そのとおり」

「昨日の中庭と、今朝の休憩時間と、今夜の講話の間、君は彼のそばにいなかった？」
「何と！ 君は警官になれば出世できそうだ」

「僕は観察はするけれど、告発したりはしないよ」

「そりゃあラッキーだ！ 聖クロードじゃ告げ口屋は好かれない」

「君がフェロンと一緒にいることに気付かれると、何か悪いことでもあるのかい？」
「何もないさ。でも目立たない方がいいんだ」

「驚いたな、まったく。ここじゃ友情を隠さなきゃいけないのかい？ いずれにしても、この質問についてもほかのことでも、僕は我々が実直なる説教師殿と同じ考えは持っていない。それに、君は僕の口が堅いってことに気付くことだろう」

ブラジャンが悪い仲間のことを話す前にしていたように、リュシアンはつかの間考

え込んでいるように見えた。それから彼は、もっと近くで話すために身を傾けた。

「聞いてくれ！」彼は言った。「君なら信用してもいいように思える。だから僕は、君を昨日からしか知らないのに、何もかも話す気になった。君は、僕がそれを話す唯一の人間になるだろう。でももう決めた、いいよね？　僕らの間に秘密はなしで、僕ら以外には秘密だ」

前夜よりもさらにもったいぶって、彼は手を差し伸べた。彼らの契約は密封された。彼はさらに低い声で再開した。

「何を隠そう、アンドレ・フェロンは僕の友達なんだ。僕らは去年、血を混ぜ合わせた。腕に小さな傷を付けて、それからそれぞれがもう一人の腕の上に流れ出た何滴かを飲む。その後は、一つに結ばれるんだ。生きるときも死ぬときも。」

アンドレのベッドは僕のと向かい合っていた。中央の列の、今じゃあの馬鹿がいるあの場所だ。夜、彼は僕とおしゃべりをするようになった。すてきな時間だったよ。場所替えがあった今じゃ、彼は四つん這いになってこの共同寝室をずっと横切って来なきゃならない。そんなのは不可能だ。休憩時間、一緒にいるのを見られるのを、僕らは注意深く避けている。昨日と今日は例外だったんだ。僕らには、効力のある通行券がもう何もない。僕らは修道会にいるわけで、毎朝の聖体拝領やら何やらをやっ

いるわけだしね。

僕らの勝利は休暇中にやって来た。アンドレは、僕が親と一緒に八月を過ごしていたリゾートを自分の親に選ばせるため、うまく手はずを整えた。僕らは偶然再会したように見なされたよ。僕らの家族は知り合いになり、僕らはもう離れないように説き勧められたってわけさ。ってことはつまり、コレージュの学友どうし、マリアの子供たちでいろってことだ！ アンドレは僕に個人教授をしてくれた。僕らは休暇中の僕の課題を、手っ取り早く一週間で片付けた——ギリシャ語、ラテン語……。彼は僕にテニスのやり方を教えてくれた。僕らは素晴らしい遠出をした——最高だったのは、満天の星の下で山中を過ごした夜だった。

アンドレは詩人で、僕に詩を献呈してくれた。そのうち君に読んで聞かせてやるよ。手帳に書き写してあるんだ。そこには休暇の思い出や感想や決意も書き留めてある。

それこそが、僕の本当の静修ノートなんだ」

リュシアンはジョルジュに対し、出し惜しむということは一切なかった。新しい友の心の中に、自分の溢れる思いを見事に注ぎ込んでみせた。ところがジョルジュはいえ、アンドレをいっそう憎み、リュシアンのため一人の友となることをいっそう望んだだけだった。

瞑想において、学長は聖霊のミサで目立った聖体拝領者の数の多さを喜んでいた。

「私にはよく見えましたが」彼は言った。「その名に真にふさわしく、あなたたちのうちの大多数が良い休暇を過ごし、宗教的義務の習慣を失わずにいたことの、力づけられる証拠が。私はほかの人が、自分自身のためにも彼らを手本とするのに乗り遅れないことを期待します。聖体の秘跡は、あなたたち若い魂の日々の露であるべきです」

この上さらに赤い衣のミサか。ジョルジュは、マルクが会計課で彼に買わせた分厚いミサ典書をぱらぱらとめくった。全部で——聖書用紙で二〇〇〇ページ近くもある。《典礼暦、聖人共通典礼文》。(何という用語ですか、主よ!) それぞれの祝日についての歴史的概要。各種聖人たちのための共通式文。あらゆる場合のための番号付き祈禱。宗教的な装飾、ガリラヤの地図、聖パウロが旅したときのそれ……。

聖体拝領のとき、ジョルジュは、今回は完全に独りぼっちで取り残されたことに恥ずかしさを感じた。少なくとも前から六番目までのベンチではそうなのだ。聖体拝領台に上級生たちと一緒にに行っている下級生たちの間では、前者が大勢聖体拝領をしているのに反して、かなりの数の棄権者がいた。ジョルジュには、奇抜さで悪目立ちしているという感覚があった。舎監が自分を疑り深い目で注視しているような気がした。それは長く続いてよいものではない。その家のしきたりには従うべきなのだ。

告解は原則として土曜日に固定されているのだが、ジョルジュは今日聴罪担当者に面会に行くことにした。昨日の朝の棄権者たちは、夜の自習時間中に行って自らの罪を清めたに違いない。たぶんそれが、学長殿の激励にこれほど素早く応えることを彼らに可能ならしめたことなのだ。

おそらくジョルジュは昨夜の会話を思い出していたのだが、この少年全員の中にリュシアンみたいなことをしている者を見つけるのは困難だった。彼は、リュシアンが自分自身について誇張して話したのだという考えに傾きさえした。ブラジャンがほかの者についてそうしたのと同じように。彼は、共同寢室の薄明かりの下や、散歩中のひそひそ話の中の二人の話を信じていた。しかし、祭壇を目前にしている今は、それをもう信じてはいなかった。自分については、その生ぬるい信心にもかかわらず、秘跡を嘲笑して行うのに十分なほど厚かましいとは思わなかった。

授業は、静修の間は短縮だった。今朝は、学年別に分かれて行われる長い宗教教育がそれらに取って代わった。上級生たちの所では、学長が、神への愛を説いたボシエのテキストを読んだり説明したりするのに、その時間を使っていた。聖クロードでは、重要なのは愛だけなのだった。

続く自習時間は、もっぱら静修ノートに割り当てられるのが常だった。ジョルジュ

は、自分がこれから書こうとしているものを熟考しつつ、説教師がやや矛盾したことを言ったこと、子供たちが天使なのか悪魔なのかは誰にも分からないことに思い至った。それは彼に、ラルース大百科の中で読んだことのある、《コレージュ》と《コレージュアン》に割り当てられた項目を思い出させた。《コレージュ》の項には、素朴で純粹な友人が、「コレージュの清らかな友人」を扱うテキストから引用されていた。《コレージュアン》の項には、「危険」と「悪徳」についての文が見られ、「コレージュンであった者は、我々が言うところを理解できる」という簡単なコメントが付いていた。マルク・ド・ブラジャンは、自分のノートの最初のページに、講話の引用を大文字で書いていた。「見張ってください、そして祈ってください！」

ジョルジュは反発を覚え、そのテーマの天使的な面だけを展開することを自分に課した。「金髪の幼子たち」には満足せずに、詩の『選集』に書かれているその種の詩を典拠とした。「幼子よ、そなたたちは夜明け……」「清らかな頭の幼子よ……」「ああ！ 私が小さく愛しい幼子であったなら……」

午後の歴史の授業。先生はしなびて小さくなった老人だった。その顔は青白くやつれているように見えた。若干の白い毛が眉の代わりになっていた。鼻翼の上方に鼻眼鏡を載せていて、それが鼻にかかったような声を作り出している。彼はやや急いでひ

げを剃ったのだ。というのは、耳に石鹼がたくさん付いていたからである。『現代史』の概要を伝えると、彼は最初の章《フランスのアンシャン・レジーム》の分析的かつ概略的な表の要点を書かせた。回し見をさせようと、完璧に書き写した表の見本を一人の生徒に託した。先生は入念に作業するように、と勧告した。

その表は二枚で、開いてみるとパレットのような印象を与えた。色とりどりのインクと各色のクレヨンが使われている。王と王宮に関する注釈は青インク、聖職者には黒インク、貴族には緑インク、法廷には赤インク、第三身分には黄インク。太い線の下線が引かれた名前があり、そのほかは細い線で、中括弧は印刷されたように見事に書かれていた。すべての下位区分は対をなしていたが、さまざまに表現されていた。I・II、1°・2°、A・B、a・b……。学則において、季節を二つに減らしたのは彼であるに違いない。

その後は、また別の啓蒙の時間が来る。再びボシュエと、神への愛——つまりは犠牲的精神だ。学長はボシュエと、概してルイ十四世の時代に夢中なのだ。マルク・ド・ブラジャンが言うところによれば、この人物が統括しているアカデミーでは、ボシュエが我が物顔で権勢を振るっているのだそうだ。マルクはそのときの偉大な王が好きなので、そこではくつろいだ気分でいられるという。ジョルジュは、自分自身、はた

して好きな偉人を見つけられるのだろうか、と自問した。それはアレクサンドロス大王とグレゴリウス一世の中から選ぶことになるだろう。彼はすでに前者を崇拜しており、説教師は後者を語っていた。

おやつるとき、リュシアンがジョルジュの所に来た。ザクロを食べている彼を見るのは快かった。果汁で染みが付くといけないので、身をかがめている。彼はその四分の一をジョルジュにくれた。ジョルジュは自分のヌガーを提供した。

「僕はこれを」彼は言った。「犠牲的精神の涵養と呼ぶことにしよう」

「それよりはむしろ」リュシアンが答えた。「コレージュ精神の涵養だな。ここで学ぶ技能はみんな、物事の描き方を知ることなんだ。」

去年の冬の間、僕はベッドから起きるとすぐに自分を襲う気分の悪さをでっち上げた。別のクラスの仲間の一人が（彼はそう言いながら、ジョルジュをからかうように見つめた）、偶然でもあるかのように同じ体の不調を感じた。僕らはそれぞれ別に顔を洗ってから医務室に行った。安静にして体を暖めるためだけれど、薬は、わずかな量の服用もきつぱりと断った。聖体拝領ができるようにするためです、って言ったんだ。僕らはちょうどいい頃合いに大急ぎで礼拝堂に降りて——僕らはそれを計算できた——、それから自習室から逃れるために医務室にもう一度上がり、元氣潑刺と朝

食に行くまで戻らなかった。つまりだ！ 聖体拝領のでっち上げがなければ、僕らはすぐに仮病だと思なされただろうな。けれどもそういうわけで、僕らは一週間、とても楽しい朝を過ごしたってわけさ」

自習中、ジョルジュはローゾン神父の名前を書いた用紙に、括弧付きで《告解》と付け足しながら提出した。彼は、土曜日の告解同様、神父が礼拝堂でそれを受けるという着想を思いついてほしかった。告解は時には部屋ですることもあると聞いており、祈禱台よりも告解室のひっそりとした暗がりの方が恥ずかしさは少ないと思ったのである。

ギリシャ語翻訳練習帳からクセノポンの《戦争と農業》の翻訳を清書し終えると——彼は退出許可書待ちながら、本を取り出そうと机を開いた。彼は自宅に置き忘れないように細心の注意を払っていた『古代史』を選んだ。六年生の頃から大切に持ち続けている本である。これこそが、彼の精神を最高の旅に連れ出してくれるものなのだ。

彼は、今日この自習室の中で慣れ親しんだ絵に再会したことで、奇妙な思いにとらわれた。学校の子供たち、俳優、アレクサンドロス……。彼は次の文を読み直した。《ピリップスの息子アレクサンドロスは、その美しさで有名であった》。本の挿絵は、そ

れほど素晴らしい美しさについての考えをほとんど与えてはくれなかった。ジョルジュは、自宅のメダル陳列箱の中にあった、この英雄の肖像を持つ古代の金貨のことを思った。実際、そのアレクサンドロスは美しかった。それでなら、彼が美しさで有名だったというのも理解できるというものだ。

ローゾン神父は、自らジョルジュを迎えに來た。彼は自分の部屋に向かった。ジョルジュは階段を昇りつつ、結局のところ、これは礼拝堂よりも親密なものになるのだろう、と心に思った。告解者と聴罪担当者をいっそう強く結び付けることになるだろう。それに、この聴罪担当者の選択は、リュシアンやマルクとは関係なく、悪いものではなかった。この神父が数学の教師である以上、彼はそれに対して甘くしてくれる傾向が生じるかもしれない。この告解者の、まさに弱点である科目なのだ。ジョルジュはこの考えを恥だと感じた。彼はまことに素早く、コレージュの精神を確かに涵養していたのであった。

彼はまだ聴罪担当者や神父の部屋に入ったことがなかった。本が積まれたテーブルの上には、彩色された石膏の聖処女の小像と、ピンを使って新聞で笠を補完したランプが置かれていた。一方の隅には屏風の背後に半分隠されたベッドと洗面台が、別の隅にはサープリスとストラが置かれた祈禱台があった。

神父はとても愛想がよかった。言葉はエレガントだった。滑らかな身のこなし、青い目、わずかにカールした髪、血色のよい頬などが彼に無邪気な雰囲気を与えていて、それが修道会長の地位によく合っていた。

彼はすでにジョルジュの情報を得ていて、ジョルジュのことを今年最初の告解者と呼んだ。とりとめのないおしゃべりのために、今回は彼をここに迎えたかったのだ。学習の領域同様、信仰の領域においても、彼はいつでもジョルジュの導き手として自由に利用できることになる。

ジョルジュは、数学ではいつも自分の努力に報いる結果が出ないのだが、聖クロードでは、もっと幸福になるとは言わないまでも、少なくともいっそう勤勉でいるつもりである、ということを言うのに時間を費やした。その後で、彼は祈禱台の方に進んだ。神父はサープリスと紫のストラを身に着け、椅子の端に座った。ジョルジュはひざまずいた。もしリユシアンが聖体拝領について言ったことがまさしく本当なら、彼の告解はどうあるべきなのだろう？ ジョルジュは彼と同じようにしようとしているのか？ 嘘でこの学年を始めることになるのだろうか？ 恐れていたような気詰まりな思いをすることもなく、この改悛への裁きの単純さに、彼は感動した。

立ち上がるとき、彼は十字架のそばの壁に鉋で留められた複製画に気付いた。《子

羊の礼拝。そういうわけで、神父はその説き勧めの中で、子羊の純粹さを話した。

その夜の講話では、いっそうの規律が支配していた。下級生たちは上級生たちの入場を振り返って見ることもなく、上級生たちはそれぞれの列に秩序をもって着席した。アンドレはリュシアンリュシアンの近くまですり抜けて行くことができなかった。

ドミニコ会修道士は、純粹さについて話すつもりであると告げた。流行の話題というわけか。まず始めに、語源についての話が少しだけあった。彼は、《ピュア》という語は、「子供」を意味するラテン語の *puer* から来ており、サンスクリット語においても同じ語源を持っているのだ、と明言した。

それから、前日同様、彼はある統計を伝えた。子供時代に貞潔の誓いをした、神の僕たちしもべのそれである。六歳、福者ピエール・ド・リュクサンブール、十五歳で枢機卿すうきけいとなり、その後間もなく亡くなった。九歳、聖アロイシウス・ゴンザーガ、たいへん慎重深かったため、下男に自分の裸足のつま先を決して見せなかった——さらに、聖スタニスラス・コストカとともに、教会から青年の守護聖人と呼ばれるに値する人であった。コストカの方は、まさに子供そのもので、ほんのわずかな不品行な言葉にも気を失ったと言われている——。十歳で聖母マリアに身を捧げた人は聖ジャン・ド・マタ、そして十三歳、将来皇帝となる聖ハインリヒに、その若い宗教的献身が十二世

紀の終わりを照らした聖エドマンド。今日の逸話は、聖エドマンドに敬意を表するものである。

「小学生の頃、学友たちと散歩をしていたとき、彼らのよこしまな会話を耳に入れたなくて、彼は離れて行きました。そのとき、完璧な美しさの子供が彼の前に姿を見せ、気品をもってこう言ったのです。『こんにちは、最愛の人よ』エドマンドがすっかり呆氣にとられていたため、その子はさらに言い足しました。『僕が分からないの？』『いや、君は人違いをしているに違いない』エドマンドは答えました。『何だって！ 君が学校にいるとき、いつも君のそばにいたのが僕なんだよ。君がどこへ行こうと一緒にだ。僕の名はイエスさ』」

何と興味深いのだろう、説教者の話は！ いつだってギリシャ史同様、美の問題があるのだから。

机の上で腕を交差していたジョルジュは、不意に、自分の右手がリュシアンの手に隣接していることに気付いた。肘に隠して、彼はわずかにそれを差し出し、友人に触れた。その瞬間、彼はかなり大きな事を成し遂げたような気がした。まるで自分で自分の行く末を決定したかのように。彼には午後の告解も、説教師の声と同じくらい作り物のように思われた。非現実的で、型にはまったもののよう。

今彼は、手をリュシアンのにすっかり押し付けていた。リュシアンも手を引つ込めることはなかった。彼はその者が微笑んでいるかどうかを見る勇氣がなかった。おそらく彼の行為は、純粹さについての講話に対する子供っぽいいたずらや、無邪気な虚勢としか思われなかっただろう。

会場から出るとき、リュシアンは、舎監に一言言ってから抜け出した。数分後、礼拝堂でジョルジュは、彼がアンドレと一緒に赤い法服とサープリスを身に着けて祭壇の下にやって来たのを見て呆氣にとられた。

香炉を持つのはリュシアンだった。彼はすっかり詩的な雰囲氣をまとうていた。彼はアンドレの詩や、香炉の魂を持つ子供たちの詩を書いたキリスト教徒の詩人のそれのことを、繰り返し話したりしていただろうか？ 昨日模範として聖マウルスとの友情を話していたあの聖プラシドに敬意を表し、赤い長袍ちようぼうの祭服に身を包んだ司式者の説教師は、これについてどう思ったのだろうか？

ジョルジュは出席者をざっと見た。誰も、ブラジャンでさえも、アンドレやリュシアンにほんのわずかでも注意を払っている者はいないようだった。その全体的な無意識ぶりが彼をいらだたせた。アンドレへの彼の嫉妬は耐えがたいものになった。彼は腹を立てつつも、講話のときの小さな勝利を思い出した。彼は、勝ち誇ったライバル

と自分とを隔てる距離の全体を見積もった。アンドレには、自分にとっての確立された序列があり、巧みに開拓されたコレージュの可能性のすべてがあった。

リュシアンは食堂に遅れてやって来た。アンドレはそのすぐ後だった。「少年聖歌隊員でいるのはうんざりだよ」リュシアンは言った。「馬鹿馬鹿しいたらない。もう僕はしばらくはそれに雇われるつもりはないね」彼は膝でジョルジュを押し、その言葉が反対の意味だということ、そしてそれにはひそかなうれしさが隠されているということを分からせようとした。

彼は浮かれていた。つまらないことに笑い、鼻歌を歌っていた。彼は食欲のないジョルジュをたしなめた。彼の皿に力づくでたくさん盛りつけた。向こうのアンドレも幸福そうな雰囲気醸していた。

共同寝室で、ジョルジュはリュシアンが言うつもりだったことを知りたくて、舎監が出て行くのが待ち切れなかった。だがリュシアンは眠ってしまった。ジョルジュは、自分が二番目の友人でしかないことを忘れていたのだろうか？ 内輪の親密な喜びを彼なしで済ませるだけでなく、それを説明されるべき可能性も永遠に失われた。会話の相手はもうブラジャンしかなかった。

この気のいいマルクは、今度は自分に秘密の一部をジョルジュに言う番が来てうれ

しがつた。それもまた休暇についてのことである。この共同寝室の中では、秘密は速く通り過ぎる。ブラジャンはいとこの一人に情熱を捧げていた。彼は彼女と一緒に田舎で夏を過ごしたという。借りを作らないために、ジョルジュは同じ時期に彼の家に来ていた二人のいとこの女の子のことを話した——もっとも彼は、彼女たちのいづれにも熱中したわけではなかった。マルクはよりかわいい方の名前を要求し、それがリリアヌであるを知って満足した。その後彼は髪の色をはっきりさせたが、ジョルジュは目の正確な色がどうなのかを付け加えることができなかった。マルクは彼に對し、自分のアイドルの描写を完成し、明日にでもすぐにミサの本の中に挟んである写真を見せると約束した。なるほど、そのいとこは、彼の想いと同じように、彼の祈りの対象でもあるのだ。彼が講話の間にノートを取りつつ、素晴らしい静修をしていたのは、彼女にふさわしくあるためなのだ。

眠りに落ちる前、ジョルジュは、アンドレとリュシアンが仕えていた今夜の聖体降福式のことをもう一度思い浮かべた。このコレージュを包んでいる情熱と策略は、彼をいらつかせた。彼は、自分は愚鈍な人間だと感じた。愛の思い出も友情の希望もないなんて。

ミサの間、彼は瞑想するよう、またこの後すぐの聖体拝領の心構えをするよう努めた。この日まで、彼はほとんど聖体拝領をしたことがなく、この行為は事前にある種の崇敬の念を彼にかき立てていた。彼は、リュシアンの手に触れた少しばかり熱烈な喜びに、かなり手ひどい、またかなり素早い報いを受けたため、自分はその罪を免れたと思った。

彼は、ゆうべ言っていた写真をそれとなく見せてくれた後、自分の近くで祈っているマルクのことを考えた。さて、それじゃ！ 自分も祈るとしよう。リュシアンのために。アンドレが彼と絆を結んだのよりも、たぶん自分の方がより強く彼との絆を結べるだろう。自分は宗教や美德において有利になるだろう。自分は、説教師が称賛していたあの聖なる子供たちにも値することになるだろう。自分の敬虔な友情は、あの咎められるべき友情に勝っているだろう。だが、彼は聖ブルーノの祝日に注意力を継続することができなかった。彼はリュシアンのためにうわのそらにならずにはいられなかった。リュシアンは、交差した手の中のきれいな小鏡で自分の顔を見ていた。

ジョルジュは、ぱらぱら見たときに気付いたある祈禱を採すために、《高位聖職者でない説教者の共通式文》は放置した。それは自分の布類のように二十五番の番号が付いたもので、《邪悪な思念を払うための祈り》であった。彼はそれを読み、読み返

した。彼はマルクとリュシアンの間で聖体拝領をした。

三年生の生徒たちは、今朝は数学の授業だったが、最初の時間は自習で、どんな自習課題も出なかった。ジョルジュは学友たちのまねをした。彼は直近の講話を要約するために静修のノートを取り出した。マルクが、十五歳以下で貞潔の誓いを立てた聖者の一覧表を貸してくれた。ジョルジュは、自分のためのあらゆる誓いをした。情熱をもってしないというわけでもなく、それをすぐに終えた。実際のところは、聖体拝領の良好な結果が強調されることはなかった。

「君のノートを貸してくれ」リュシアンが言った。「僕の純粋さは、できることを全部やるのさ」

まさか、彼はゆうべの講話に参加しなかったとも言うつもりか？ 彼はそこで言われていたことも行われていたことも忘れてしまっている。彼はあの説教者と同じくらいジョルジュから遠く離れていた。彼はもう間違いなく、聖体降福式の口実のおかげで、この後に続くはずの会合を夢見ている。彼はアンドレしか眼中にないのだ。

アンドレ、いつもアンドレ！ 今この時間、この場所にさえ、彼は依然として存在している。リュシアンは、自分のきれいなノートをジョルジュのそばに押しやり、最初のページにはこんなタイトルが記されていた。《休暇中の課題の下書き》。ジョルジュ

は、リュシアンがかなり巧みに描写してくれていた休暇の映像が、そこから影のように立ち上ってくるのを見た。そこにはアンドレによってなされた課題があった。彼はそれを一目見てみたいという欲求に抵抗できなかった。彼はそのノートをそっと取り上げた。引き裂いてしまったかった。

二つのページの間に、正方形の紙があるのが目に入った。その上に署名のある詩が書かれている。アンドレ・フェロン。そこにはこんな簡単な献辞があった。《君に、一九××年八月十七日》。

友よ、君はあの輝くような黄昏^{たそがれ}を覚えているかい？

庭の花が陰りの中で星のようにきらめいていたあの黄昏を。

僕らは数え切れないくらいテニスのゲームをしたね、

白い軽やかなウェアを身に着けて。

太陽は衰え、薄い霧がかかっていた、

僕らは僕らの中の欲望の囁きを聞いた、

そして以前交わしたキス、その熱い記憶が

祈る僕らの心を芳香で満たした。

僕らは薄暗い小道を二人きりで戻ったね……。

恋人よ、あの薄暗い小道を覚えているかい？

自分自身驚くような冷静さで、ジョルジュはその紙片を折り畳み、ポケットの中に滑り込ませた。

目を通すふりをしているノートを前に、彼は今自分がしたばかりのことを考えた。最初にこのノートを開いたのと同様、このテキストを奪うよう駆り立てたのは、一種の本能だ。だが、彼はそこに問題の根源をとっさに見抜いたというわけではなく、その後少しづつ実情が明らかになってきたのだが、この詩が、規則書の文面と精神に従って、アンドレを追い出すことを可能にするものだということを直感したのである。彼はその考えを恥じた。にもかかわらず、それはひどく馬鹿げたものだとは思われなかった。それは正当化され得るはずである。

そのことをさらに考えるよりも前に、彼はこのこそ泥行為が気付かれなかったことを確信したかった。この詩はきつと、リュシアンが自分に読ませてくれるつもりでいたものの一編なのだ。たぶん彼自身、それを自分の意志で、完全に故意にそこに置いたのだ。それなのに、彼はそれがもたらす感銘をこっそり観察しているようには見え

なかった。たまたま彼は、興味深い内容を含んでいる休暇の草稿しか、もはや覚えていなかったということだろうか？ これらの仮説を確かめるために、ジョルジュは氣取った仕草でノートを再び閉じ、それを彼に返した。リュシアンは無関心な様子でちらりと見ただけだった。

ジョルジュは、誰かが彼を意のままにしているのを感じて動揺した。嫌悪感にもかかわらず、彼はアンドレに対する一種の称賛を覚えた。彼にこのような詩が作れることが信じられなかったし、自分自身はそれと同じことはできないと認めたのだ。しかし、彼がそこに見た見えすいたほめかしは、すぐに憎悪を復活させた。この予想外の武器のおかげで、運命が自分に届けたばかりの敵対者を、最終的には排除することになるだろう。何もやましいところはない。歴史のどんな時代にも、そのような方法の多くの実例が見られるのだ。ペリクレスは競争相手のキモンを陶片追放で追放させた。ブルータスはシーザーを殺した。教皇は、どんな運命がコッラディノに定められているかを尋ねるシャルル・ダンジュに答えた。「*Vita Corradini, mors Caroli...*」（コッラディノは生き、シャルルは死ぬ……）」結局のところ、ジョルジュは、武装したときの騎士に与えられた法、「諸刃の剣で敵を打て」を適用しようとしているのではないか？ 彼は振るえる刃を振るうだろう。そのうえ、彼は道德の名において、コレー

ジュの名において、学友の名において、打つだろう。リュシアンの名においてさえ打つのだ。アンドレの影響力よりもっと幸福な影響力を、自分が彼に及ぼすことを疑わないがために。

この理屈にもかかわらず、歴史書において、騎士にとって裏切りとか不忠とか呼ばれることを自分が犯そうとしていることも、彼にはよく分かっていた。よそでこのような行動を考えることは不可能だと思われたけれども、ここの、あらゆる種類の実に多くの不誠実さの中でなら、それはほとんど自然なことに思えるのだった。

数学の授業で、ジョルジュはローゾン神父に再会した。彼が自分の罪を話した人間、教師の権限においてそれを受けた人間を面前に見ることに、彼は多少の決まり悪さを覚えた。次の告解が最初のものより不完全であることは、すでに明らかだった。彼は新参者であるために、あまりに純朴だった。が、今の彼は、自分の告解者たちに多少の誠実さを期待しているという点で、聖クロードの教師たちの方がずっと純朴だと評価していたのである。彼らは、聖週間の告解のために勤務表を作成しようと決心しつつ、次のような日程で聴くことを説教壇で発表した、あの田舎の善良な神父を連想させた。月曜日は嘘つき、火曜日は泥棒、水曜日は淫蕩者^{いんとうもの}……。そして、誰も現れなかったことに彼は驚いたのであった。

コレージュの告解には全員が来るが、よく事情が分かっている。《聞き分けがよいと得をする》、この諺には別の意味が与えられているのだ。

ジョルジュは今、学友たちにとって秘跡が何の実践なのかを理解していた。信仰と共に、でないとすれば、少なくとも先生方と共に、安らかに生きる手段である。彼もこれからは、リュシアンやアンドレやほかの者たちと同じようにするだろう。

英語の授業は、先生方の最後の一人を彼に知らせた。その人は、大いなる威信を二十年間のイギリス滞在に負っていた。彼の顔は、イギリス人のものと見なされているような赤レンガ色であった。彼はある種のトランス状態になりつつ、目を閉じて話した。そのアクセントは、たぶんすぐれたものなのだろうけれども、噛み殺した笑いの衝動を引き起こした。音節でうがいをするような印象なのだ。《イエス》の言い方の中にさえ、彼のイギリス流が詰め込まれていた。

その週の木曜日には散歩がなく、ジョルジュはうれしかった（新学期の翌日のそのため埋め合わせとしてそうだったのである）。彼はレクリエーションの時間さえなしで済ませるような一日が欲しかった。彼は夜の自習時間が待ち切れないのだ。おやつとき、彼はリュシアンをおいしいもので満たした。

彼がこう書くことができる時間がとうとうやって来た。《G・ド・サールは学長殿

との面会を希望します」。

列の最後尾にいて、回収係にその用紙を渡したのはリュシアンだった。彼はその過程でそれを読んだ。「おめでとう！」彼は言った。ジョルジュは、何日か過ごしたらその儀礼的面会をするよう両親が勧めたのだと答えた——マルクにはすでに話したところである。計画は立てられた——コレージュのレターヘッド入りの平凡な封筒に例の原稿を封緘し、ドアの前でそれを見つけたところですよと言いながら、校長に渡すのだ。彼は自分が不遜だと思った。今や、最強は彼だった。彼は操り紐を操っていた。彼はアンドレ同様、校長も手玉に取っていたのである。

数学の下書きを彼にそつと渡してくれた、律儀なリュシアン！ 実際、まさに今日、彼は課題を交換する条約を結ばせていたのだ。その中では、数学が彼の唯一の貢献となる。もしジョルジュが輝けない唯一の場所で自分が輝いているとしても、それは自分の責任じゃない、と彼は言った。

「いずれにせよ」彼は表明していた。「僕らは補完し合ってるってことさ」

「君は補完方法を身に付けている」ジョルジュは言った。「君は正式な調理法に従うヒバリのパテの良い作り手になりそうだ」

「君が馬で、僕がヒバリだって言ってるようなもんだな」

それでジョルジュはこんな鼻歌を歌って言い返したのである。

ヒバリさん、

かわいいヒバリさん、

羽をむしりましょう。

実際は、彼は学業においてリュシアンより優位に立っていることがうれしかった。それはすでにアンドレから移譲された相続権のようなものだった。とにかく、自分には今夜すべきことがある。運がいい！ それでも、彼は落ち着いてその課題を書き写した。自分が毅然とした人間であることを証明するために。

六時を少し過ぎてから、舎監が彼を呼び、彼に自分が連署した通知状を渡した。勉強机から離れつつ、ジョルジュは自分の企ての深刻さを不意に意識した。自分が抱いていた考えへの後悔が込み上げる。リュシアンのことを考えようとしても無駄で、今や彼は自分の意に反して自分を引っ立てて行くその通知状を恨んでいた。もし学友たちがこれを見抜いたとしたら、彼らはどんなに自分を軽蔑することだろう！ ジョルジュが危機に陥らせているのはアンドレのみならず、共同体全体なのだ。一人の生

徒の秘密と同時に、皆それぞれの秘密も多少は暴露されてしまうだろう。少なくとも、アンドレがそこにおらず、自分が出て行くのを見られなかったことで、彼は気持ちが楽になった。アンドレは少し前に自習室を離れていたのである。

ジョルジュは祝典ホールを、それから中庭を横切り、大階段にたどり着いた。恐るべき最終段階に近づくにつれて、自分の責任のみならず、この進め方の困難さも見えてきた。自分は、その場面の展開をよくよく考えてみただろうか？ この奇妙なメッセージを読んでいるとき、学長はどんな顔をするだろうか？ 彼はそれを伝達した者の心中に何らかの不誠実さを疑ったりはしないだろうか？ 彼は貴族なわけだし、彼が信義の持ち主ならば、自分の歓迎にこんな返礼をするこの侯爵家の息子のことをどう思うだろう？ この放蕩な詩に呼び起こされた嫌悪感、密告者にはね返って来たりはしないだろうか？ この作戦は危険すぎる。この方法は諦め、当座のところは事そのままの状態にしておくべきだ。リュシアンの特占的な友情なら、好機が来れば勝ち取れるだろう。たぶん誰にもダメージを与えることなく。

ジョルジュの前で控え室が開かれた。彼は大理石のテーブル、肘掛け椅子、緑色のベルベットの長椅子を認識した。書斎のドアが少し開いていた。話し声がする。誰かが出て来ようとしているのは間違いない。ジョルジュはマントルピースを飾る彫刻を

見るために暖炉に近づいた。それは寝そべった少年を描いたもので、法衣を着て、やつれた顔をし、打たれて穴の空いた胸にオスチャを抱き締めていた。下にこんな名前が彫られている。《タルチシオ》。

そのときジョルジュは、学長に返答した声に聞き覚えがあるような気がした。それでドアまで戻ると、机の前に立ったアンドレ・フェロンがちらりと見えた——最後にもう一度、わざわざ彼に立ちまはだかりに来たかのようなアンドレ、彼にこんなことを言っているかのようなアンドレが。「いつでもどこでも、僕は君の前にいる。いつでもどこでも先行者なのさ。君は僕が学長先生とどんなにうまくやっているかを見ているね！ 時間を無駄にしないことだ。そんなことよりも詩を作ることに時間を使いたまえ。リュシアンを称える以外のね——例えば、タルチシオを称える詩だ」

ジョルジュはポケットの中で、あの詩が入った封筒をつかんだ。彼は、かつてアンドレがリュシアンと混ぜ合わせた、その血の染みが残ったハンカチのことを考えた。彼は、自分の血を神への愛のために流した若い殉教者の彫刻を見つめた。アンドレからリュシアンへの文学的な愛情を献呈する相手は、このお方だ。台座の下にその紙を滑り込ませるのだ。中国の神々への祈りの巻物のように。疑いなく、あれほど繁栄しているように見える以上、例の二人の友情は天意にかなうものだ。聖タルチシオは、

それをおかなりしっかりと保護することだろう。しかしながら、用心のためでなく激怒のために、ジョルジュはあの贖罪しよくざいの文書をずたずたに切り裂いてしまいそうになった。アンドレが姿を見せ、彼に微笑みかけながら通り過ぎたとき、彼はその最初の動作をしようとしていた。動揺しつつ、ジョルジュは書斎の方へ進み、来たことを知らせるためにノックをした。ドアを閉めるとき、彼はあの封筒をもう手にしていないことに気付いた。落としてしまったに違いないのだが、それはテーブルの陰に隠れたのだろう。そのうえ、控え室は照明が悪く、また自分がここにいる間、たぶん誰もそちらに来ることはなさそうだ。

学長は大量の手紙の山に目を通していた。

「ちょうどよい時に来ましたね」彼は面会客に言った。「あなたの学友の一人が、会計係の先生の所から今夜の郵便物を持って来てくれたところです。あなた宛の手紙があります——間違いなくご両親からのものでしょう。これです。私は読んでいませんからね」

彼はジョルジュを、本棚の前に、自分と差し向かいに座らせた。ジョルジュは、自分のことを思い出してもらおうという名誉以外には、これといった理由もなしに学長を

煩わせたことの厚かましさを詫びた。彼は目を伏せたままだったが、それは内気さからではなく、最初の意図がまだ心に残っていたからである。

学長は、彼のフランス語作文はたいへん見事であったと言った。

「分かっていてと思いますが、私はあなたに関心を持っています」彼は微笑みながら言い足した。「あなたが私に関心を持っているのと同じくらいにね。週ごとの試験の結果は日曜日の昼食時間にしか公表されませんから、あなたの席次を言うことはできません。しかし、私が『三学年』を発表するとき、あなたは自分の名前を聞くのにそれほど時間はかからないでしょう」

彼はジョルジュに、もう友達を作ったかと尋ねた。アンドレに対するある種の補償のように、ジョルジュは、リュシアンと自分との良い関係を並べ立てた。

「あなたの感覚は、悪くない席次を占めていますよ」学長は言った。「ルヴェールは素晴らしい気質を持っています。完璧な誠実さを持った子です。学監先生も、それ以上の隣人をあなたに与えることはできませんでした。しかし、私の思い違いでなければ、あなたには別の隣人としてマルク・ド・ブラジャンがいますよね。私は、あなたが彼のことを尊重するようになるかと確信しています。彼は我々の輝かしい生徒であり、彼の方も同様にあなたのことを評価するでしょう」

その後、彼はジョルジュの家族の話をし、管区の紋章集を見るために立ち上がった。「あなたは素晴らしい紋章を持っていますね」彼は言った。「私はあなたがその面目を保つことを期待しています。そこには燃える枝が見えますね。『真理のための炎、虚偽に対する氷』であってください」

会話はとうとう静修へと及んだ。学長はジョルジュがコレージュに入学したその折に、彼がすぐれた説教師の話を聞いていることを喜んだ。

「いつでも巡ってくる機会というわけではないのですよ」彼は言った。「説教師の選択も、友人のそれと同じくらい難しいものです」

ジョルジュは、注意してあの講演者の話を聴いていたということを見せつけるチャンスが訪れたと思った。彼は、あのタルチシオとはどんな人なのかと尋ねた。この人は、自分のリストの中にまだ存在していない、と。学長は喜んだようだった。

「ああ！ たいへん結構ですね！」彼は言った。「あなたは私のタルチシオに気付いたのですね。あれは複製です。彫刻家ファルギーエールによるこの聖者の、大理石彫刻のね。オリジナルはパリのリュクサンブール美術館にあります。あの見事な作品には一つだけ欠点があつて、それはこの光輝ある殉教者を若く描きすぎていることです。実際のところは、ローマのアップピア街道で、運んでいたオスチャを異教徒に引き渡す

ことを拒んだために石で打ち殺されたとき、タルチシオは二十歳から二十五歳くらいだったはずです。

告白すれば、彼の年齢についてのこの正確な情報は、私もつい最近まで知らなかったのです。それを知ったのは、尊敬すべきドミニカ会の神父のおかげです。私は、子供の殉教者の中に聖タルチシオの名前を挙げるのを彼から聞かなかったことに驚きました。今、あなたが私の言うことにそうなったのと同じようにね。彼の言うところでは、かなり普遍的になってしまっている誤謬を広げないために、わざとそれを省いたのだそうです——お分かりのように、私たちは毎日謙虚さを学んでいます。しかし、その同じ晩、彼は聖体の話をするつもりでしたし、殉教者と呼ばれるに値する人に敬意を表し損なうつもりはありませんでした。その年齢について私を誤らせたものは、彫刻だけでなく、殉教者名簿もそうだったのです。そこでは、タルチシオは侍者と呼ばれています。私はその職務が、最初の頃は助祭のそれとほとんど同じであったことには考えが及びませんでした。今の侍者の職務は、簡単すぎるくらいなものです——あなたは間違いなく、すでにその条件を満たしているか、ここで満たすことになるでしょう。そういうわけでしたから、子供にそれを任せるのに問題などなさそうだったのです。

聖タルチシオの像があなたを魅了した以上、将来、我がコレージュの思い出として、

あなたをコレジウム・タルシアンに参加させなければならぬでしょう。キリスト教団の中心地に今世紀初頭に設立された、若者の敬虔な会です。そのすぐれたローマ人たちは、初期キリスト教の典礼を復活させたのです。彼らの礼拝堂はカタコンベを思い起こさせます。司式者は丸みを帯びたカズラを着て、背中を向ける代わりに列席者と向き合い、聖なる言葉の大部分を大きな声で話します。参加者は一斉に答唱します。彼らは侍者タルチシオの服、純白のヴェステイス・タラリスを着て、ご存じのようにキリストの神秘的な名前であるイクトウスという題の小さな手引きをしています。私たちの礼拝堂でその絢爛さを模倣できないのは、残念なことですよ！　そういうわけで！　私はあなたの知的好奇心に報いたいし、ルヴェールとの間に芽生えた友情も祝福したいのです——私たちにその聖タルチシオの像をくださったのは、何を隠そう彼の母上なのです。あなた方を明日の朝から、二人とも私の侍者といたしましょう。私の代わりに彼に伝えてくださいね」

ジョルジュは当惑したような顔で、その申し出へのお礼といとまごいを述べた。彼は部屋を出た。上級生たちの学監が控え室にいて、待ち切れなくてかなりいらついているようだった。彼はアンドレのように微笑むこともなく、書斎に入って行った。

不安な気持ちで、ジョルジュはあの封筒を目で探した。それはテーブルの下にも肘

掛け椅子の後ろにもなかった。学監が手に紙を持っていたことを突然思い出し、彼はそっと書斎のドアまで戻ってそこに耳を当てた。

「哀れな背徳者よ！」学長が言っている。「彼はここにいました。まだ三十分も経っていません。本性を現してしまったのは部屋を出るときでしょう」

階段を降りながら、ジョルジュは気が遠くなるような気がした。彼は手すりにつかまった。望んだことは実現した。そして彼は、自分がそれを望まなければよかったと思った。自分の意に反してそれを実現してしまったようなもので、まさにそのことのために、予測したよりもずっと深刻な事態になるのではないかと思われた。より正確に言えば、彼は何も予測などしていなかったのだ。あんなに自分を賢いと思っていた彼なのに。アンドレが破滅するのみならず、リュシアンも引きずり込まれるのは明白ではないか？ それに、この事件でのジョルジュの役割は、簡単に明るみに出てしまいいそうではないか？ あの詩がああノートの中にあつたことをアンドレが覚えていたとしたら、ジョルジュにあのノートを貸していたことをリュシアンが忘れてしまうことはあり得ないだろう。自分の学長への訪問が、事を明らかにしてしまう。ジョルジュ自身も、二人の友人と共に破滅することになる。彼らには、退学させられる前に、今度は逆に自分のことを告発する時間がある。だが、それは生徒たちに向かって、だ。

自分は、自分もまた、学友たちから追い立てられ、コレージュを去ることを強要されるだろう。自分は陶片追放の別の形を知ることになるのだ。

彼は自習室に戻る勇気が出ず、運動場の方へ行った。彼は田舎へ逃げることを考えた。自宅に帰るために列車に乗ることも。切符なしで旅行するということだ。自分は寄宿舎には耐えられなかったと、両親に説明することになる。馬鹿な、幼稚すぎる！父が言っていたように、自分は一人前の人間ではないのか？父の祖父は革命下でギロチンにかけられた。タルチシオや、説教者の言う若い殉教者たちは、違った責め苦を体験した。誰も自分を殺したりはしない。自分は人生を恐れないようにするべきだ。自分が望んだ人生を。彼は、アンドレの視線の中で、リュシアンの隣の自分の席に着いて、冷静に事件を待つことにした。彼はコレージュ校舎に戻った。祝典ホールのフロアスタンドの下で、ポケット鏡で自分の顔を見た。少し青ざめているように思われ、彼は両方の頬をつねった。

ドアが荒々しく開いて学監が入って来たとき、彼はやっと自分の机に戻ったところだった。意に反して、ジョルジュは苦悶で息が詰まるかと思った。間もなく彼は、事態を知っている唯一の人間ではもはやなくなるだろう。学監は舎監の耳に何語かを言い、それから無愛想な声で裁き手ぶった顔でフェロンを呼んだ。アンドレの足音が、

呼吸が止まったかのような自習室を横切つて響いて行つた。

ジョルジュは、無関心を装うために視線を固定した——ひどく強固に固定したのである——自分の目の前の紙に。が、結局最後には視線を上げ、学監がアンドレの腕をつかんで自習室の外に引つ立てて行くのを見た。自分の魂のありつただけの誠実さをもつてすれば、自分の寿命の十歳分でこんなに恐ろしい結末を精算できたかもしれない。まるで連れ去られるのを恐れるように、彼は机にしがみついていた。そしてリュシアンは、保護を求めて彼の手を取つた。彼らの手は二つとも湿っぽかった。

生徒たちは愕然として、この予期せぬ出来事を訝しみ尋ね合っていたが、学監が定規で自分の机を二度大きな音で叩くと、秩序が戻つた。ジョルジュには、血がこめかみで脈打っているのが分かつた。リュシアンは打ちひしがれていた。ついに、やや遅れて講話の時間を告げる鐘が鳴つた。皆、下級生たちと合流するために立ち上がった。すべての紙が片付けられた自習室では、アンドレの席で開かれたままのノートに白い染みが一つ付いていた。学監は、通り過ぎるとき、見下したような身振りでそれを閉じて机の中に投げ込んだ。

学監はそこにはいなかった。ドミニコ会修道士の声が響き渡っていたが、ジョルジュにとって彼の言葉はセンスが不足しているように感じられた。前日同様、彼がリュシ

アンに触れるためには、気付かれないほどのかすかな動作をするしかない。だがそれは、深淵が彼らを隔てていることを表していたのだらう。彼がゆうべここでした動作と、リュシアンが自習室でしたばかりのそれとの共通点は、何もなかった。

学長が入って来た。十字を切る身振りをしてから腰を下ろす。彼は深刻そうに見えた。ジョルジュは姿を見られないように隠れた。彼は自分がした面会の記憶を嫌悪し、学長にそれを思い出してほしくなかった。

間もなく彼は、やっと耳を働かせることができたようになった。ドミニコ会修道士はあの事件を知らされているに違いなかった。聖タルチシオの殉教よりも、この状況によりふさわしい主題を扱っていたからである。その話では、聖体の秘跡は試練と懲罰として描かれるばかりだった。冒瀆的な唇に対しては炎を上げたり血だらけになったりするオスチャのことが語られていた。よこしまな聖体拝領の後で突然死んだケースも付け加えられた。獣の階級に落とされた罪人、暗闇の中で冷笑する不浄な霊たち、泣いて天国へと再昇天する守護天使などに関する話があった。気持ちのよい逸話、輝くような美しい子供たちは、今日のためにはなかった。この新しい演目の主人公はバルメ家の男だった。彼は恐怖政治下で受難の彫像と共に踊ってからのというもの、二十四年もの間絶え間なくくると回り続けてきた。この悪魔に取り憑かれたよう

な舞踏病の間、人は彼の口に食物を投げ込むことで彼に食料を供給した。彼が最後の秘跡を懇願したとき、赦免と聖体を授けに来た神父は、彼と一緒にくるくる回る回らなければならなかった。

その演説者は、悔悟を呼びかける、慰めになる引用で締めくくった。「たとえあなた方の罪が深紅のように赤かったとしても、それらは雪のように白くなるでしょう」聖体降福式の間、ジョルジュもリュシアンも祈禱に答唱しなかった。だが、リュシアンはもうぼんやりしてはいなかった。彼は祭壇を見つめていた。昨日、彼が友人のそばに、あれほど厚かましく、あれほど偽善的にそこにいた、その囲いの中もじっと見ていた。

それは「神への感謝」がない初めての夕食だった。説教壇にいた生徒が、学長に指示された本を取りに行った。鈴の音で、彼は朗読を始めた。「デカローニュの高潔な生涯、パリ大学の元学生」バルメ家の男の後で、高潔なデカローニュにはほっとさせるものがあった。

ジョルジュは、こんなに沈鬱な食事など想像したこともなかった。彼の目は、たびたびアンドレの抜けた場所に向けられた。あそこは、あの少年が昨日座っていた場所だ。聖体降福式の後、ともうれしそうに、たぶんリュシアンのように皮肉を込めて

こう言いながら。「少年聖歌隊員でいるのはうんざりだよ。もう僕はしばらくはそれに雇われるつもりはないね」そのとおり、彼がそれに雇われることは当分ないだろう。ジョルジュは前日と同じくらい食欲がなかったが、そのときのリュシアンは彼よりもさらにそうだった。

上級生が共同寢室に上がろうとしたとき、舎監が彼らを自習室に導いた。そこには学長がいた。

「皆さん」悲しげな声が言った。「私は、今夜すぐに、すでに科されたつらい懲罰の話をあなたたちにおきたいのです。あなたたちの学友の一人は、もうこの家にそのまま残れる状態にはありません。彼は明日、両親の許に送られることになるでしょう。彼の罪は、おそらく誰の目にも小さなものですが、私たちの共同体では互いに容認できないものに属します。精神の放埒ほうちというものは、たとえ遊びでしかないとしても、また習慣ではないとしても、それは勤勉な学習とも善きキリスト教徒の良心とも相容れるものではありません。私たちが関わっているその者は、幸いにも、あなた方の中の誰に対してもまだ自分の秘密を共有させていないことを私に誓いました。しかし、私は彼を引き離すことであなたたちを保護しました。彼は、自分はあなたたちの中にいるのはふさわしくないと認めることを、私に隠しました。

心から彼のことを思ってください。元同級生であるあなたたち全員を思っている彼のことを。彼は医務室に隔離されています。軽蔑すべき者が群れから引き離されるように。これは悪い休暇のせいです——悪い仲間のせいではないとすれば、つまり悪い読書のせいであるということ——彼自身の告白によれば、その休暇が、それまで敬虔で規律正しいままだった一人の生徒を、このような状態に至らせたということですから、あなたたちはこの教訓を、神の摂理が年度初めの静修を運命づけたということをし、理解することができるようになる。そして、私たちに不幸にもそれを提供した者への祈りを、拒むことのないように」

マルクは勝ち誇っていた。

「僕の言ったことが間違いかどうか、君にも分かっただろうか？」共同寝室に上がる間、彼はジョルジュに言った。「不純な連中つてのは、いつだって失敗して終わるのさ」

ベッドの中で、ジョルジュは自分の犠牲者のことを考えた。彼はあの医務室のことを思い出した。つい最近、彼自身がコレージュ初日の終わりの方を過ごした場所。そしてあの少年が最後の晩を過ごしている場所。

再び、彼はアンドレに感心していた。今のそれは詩が比較的よくできていたことに對してではない。あれはたぶん剽窃にすぎない。詩人であるか否かはともかく、アン

ドレは大した人間だった。ある意味、彼は自分を放校させるあの学長に打ち勝ったのだ。彼は学長の気持ちとを和らげるために打ちひしがれて見せた。彼は欺くために誓った。実に巧妙だ。彼はリュシアンを守ったのだ。自分の詩に靈感を与えた者を、休暇の暗部に覆い隠しつつ。彼はほかの者たちも全員守ったのである。彼らの美德の虚構を維持することによって。共犯者がいなかったとしても、そんなケースは途方もない例外だ。さらに彼は機転が利いた。リュシアンが放校になっていたら、彼らの関係も万事休すだった。それぞれの家族が当然疑惑を抱いただろうから。彼らにとって、勝負はまだ終わってはいないのだ。

アンドレはほとんど眠れないだろう。今彼は何を考えているのだろうか？ 自宅で受けることになるだろう応対のことか？ たぶん彼は事態を切り抜けるだろう。あるいは学長の言葉のとおり、学友たちのことを考えているのだろうか？ 共同寝室に入りつつ、自習室や食堂や礼拝堂と同じように、かつて彼がいて、もう彼を見られない場所を見ていた全員のことを。

彼が考えるに違いないのはリュシアンだ。きっとクリスマスマス休暇に再会しようと思っ
思っているだろう。そして、彼はおそらく、あの控え室で邂逅したジョルジュのこと
もまた考えているだろう。あの詩がそこで見つかったことを彼が知っていたとした

ら、彼はそれがそんな場所に行ったことをどのように理解したのだろうか？　だが彼は、どんな告訴簡条によってリュシアンを告発することができるといふのか？　散歩の間にあんなに親切に自分のハンカチを貸してくれた少年を？　せいぜい軽率な奴だと思なす程度だろう。そして、もし彼が自分の詩が発見された場所を知らなければ、彼がそれをなくした廉で責めるのは、その持ち主であつたリュシアン本人である。

寝る前に歯を磨く者はいなかった。舎監が出て行つてから長いこと、囁き声を立てる者もいなかった。ジョルジュは不意に耳をそばだてた。リュシアンがひそかに、声を殺して泣いているのが聞こえたのだ。その悲しみが彼を動揺させた。自分のもう一人の犠牲者となつた者を、自分は慰めるべきではないのか？　自らの名誉と正義のためにも、何もかも白状するべきでは？　ところがリュシアンは、床の上へと滑り降り、ベッドサイドのマットの上にひざまずいたのだ。彼は泣くのをやめていた。彼は祈つた。掛け布団に額を押し付けて。彼のパジャマは乱れていた。彼の心を動かせるものはもう何もないかのように、彼はゆっくりと、彼のそばに身を置いたばかりのジョルジュの方に顔を向けた。彼らはしばらくの間、動かないままだった。

ジョルジュは友の肩に手を置いた。彼は、自分には告白する勇氣がないと感じ、こう言っただけだった。

「学長が、君に伝えるよう僕に言っていたよ。明日の朝のミサで学長に仕えるようになって。それは僕が学長に、君のことと、控え室にあった聖タルチシオのことを話したからなんだ。学長は、君のお母さんがその像をくれたと言っていた。そのために、学長は僕らの友情を祝福したがつっていたよ」

ジョルジュは、自分もまた、アンドレとリュシアンとの友情を同じ聖者の保護下に置きたがつていたことを思い出した。今の彼の言葉は、彼がかつて意図していたのと同じくらい、嘆かわしいほど皮肉っぽいと思われた。

リュシアンは熟考した。それから、髪の毛を立て直しながら言った。

「君は」彼は言った。「僕が考えていたことをはつきりと確認させてくれた。僕は奇跡的にアンドレの災難から救われたんだよな。背後には神様がいらっしゃるってことだ」

彼は腕時計を終夜灯の光の方に向けて時刻を見ようと試みたが、その光量は不十分だった。

彼は暗がりでは夜光文字盤を識別するために、手を円錐型にした。

「それじゃ！」彼は言った。「今、十月六日の十時三十五分から、僕は回心する」

聖クロード、一九三一年十月九日、日曜日の夜

親愛なるパパとママへ

手紙をありがとう。すごうれしかった。学長先生が、僕が儀礼上の訪問をしている間にそれを渡してくれました。先生は親切にも、僕の登場に満足していると言ってくれたのです。僕は最善を尽くしています。フランス語作文では首席を取りました。次の日曜日の手紙に同封する二週間分の通知票で、別の科目もご覧になることでしよう。

僕に関わるある事件がここで、僕の間近で起こったところです。僕はすでに、申し分のない学友を作りました。それは僕の隣人のうちの一人です。マルク・ド・ブラジャン、聖クロードの昨年度の第四位受賞者です。ところが、彼はまれに見る不運のため、おととい病気になってしまつて——いきなり倒れたのです——、両親が迎えに来なければならぬことから、その病状がかなり深刻であることは明らかです。彼は体が弱いので、僕らはすぐには全快した彼を見ることはないのでないかと懸念しています。でも、彼があまり退屈しないで済むように、僕らは定期的に全員からの手紙を送ることにしました。彼になら、僕は喜んで作文の地位を譲ったでしょう。彼は二位で

したから。それでも、僕にはもう一人の学友——もう一人の隣人——リュシアン・ルヴェールがいます。彼の方は素晴らしく健康で、頭もとてみいのです。

静修は今夜で終わりです。僕らの説教師はドミニコ会の神父様で、かなり雄弁なところを見せてくださいました。僕らは特別なノートに要約しながら、皆それぞれが素晴らしい決意をしました。

親愛なるママにお願いします。すぐにチョコレートのを蓄えを新しくしてほしいのです。マルメロのゼリーとザクロをそこに混ぜてください。小さな数物も欲しいのです。礼拝堂で膝の下に敷くためのものです。

親愛なるパパ、ママ。僕の手紙は長くなりすぎたようですね。それに、言うことはもう何も無いと思います。最高のキスを受け取ってください。あなたの息子、

ジョルジュ

M……、一九〇一年十月十一日

愛しい息子へ

先日の日付に続くあなたの手紙は、私たちをととても喜ばせました。今度は私の番で、少し長い手紙を書きますね。

あなたがすでに聖クロードに自分を順応させたことに、私たちはとても喜んでいます。あなたの輝かしい成功には、心からおめでとうと言わsekください。私たちは幸いにも、あなたが優等生でい続けているのを目撃しています。いつもそうだったようにね。私は、あなたが受けたばかりの静修から大きな利益を得ることを確信しています。それに、多くの場合若者の人格を成熟させるコレージュでのその生活も。

病気になったあなたのお友だちには同情します。その子が一刻も早く回復することをお願いしています。あなたのパパは、以前ブラジャン家の一人と知り合いだったのです。軍隊にいた人です。いずれにしても、あなたが残った隣人ともっと仲良くできることを祈っています。

出発前に取り替えたロザリオの十字架は、祝福してもらいましたか？ ベッドは寒くないですか？ もっとも、善きシスターたちがあなたに何の不足も生じさせないということは分かっているのです。彼女たちの思いやりには愛情のこもった敬意で応えるようになさい。

あなたは、ご注文の品の入った小包を受け取ることになるでしょう。私は薔薇の花びらを手紙に加えています——緑の園亭の薔薇の木に残っていた最後のものからです。それはあなたに、私があなたの部屋に置いていた花を思い出させることでしょう。パパからのキスとともに、ママからのキスを。

アンドレの放校以来、リュシアンは首に三枚のスカプラリオを提げていた。彼はパジャマの上着を少し開いて、ジョルジュにそれらを見せた。そこには青、赤、そして栗色のそれがあった。それらを彼に渡したのはローゾン神父だった。だが、彼の漠然とした告解をあらかじめ受けていたのはドミニコ会修道士だったのである。修道士は、彼の回心を完全なものにするための助言を与えていた。それは啓発的かつ浄化的でなければならぬ。修道士は、悔悛かいしゅんと同時に信心の印として、彼にその記章の所持を強く勧めていたのである。

数日後、バッジがスカプラリオと一緒に付けられるようになった。リュシアンは四個のそれを、セーターにピンで留めていた。極めて珍しい隠修道士の聖母のもので、舎監からの贈り物であった。彼もまたベルトに一つ、ノートルダム・ド・ラ・サンチュールノートルダム・ド・ラ・サンチュールのそれを引っかけていて、それはその名前の聖母が存在した町出身の学友から彼に

譲られた物だった。彼はその外からの援助を喜んでゐるようで、もう彼のために祈ること以外何も思いつかないジョルジュが皮肉を言つても、まるで無関心なままだった。「これを付けていると」彼は言つた。「君が好むと好まざるとにかかわらず、僕は着飾つたような感じがするのさ」

「君を祝福するよ」ジョルジュは答えた。「でも、土曜日のシャワーの間、スカプラリオもバッジも離さないでいてごらんよ。それは重大な結果を招くだろうね」

結局、彼はそのためにリュシアンのがいっそう好きになった。彼は、リュシアン自身も知らないままの、この変化の秘密を握っている唯一の人間だと考えるのが好きだった。心ならずも、彼はこの少年を変化させ、かの高潔なる十戒の足跡を彼にたどらせようとしていた。こんな結果は、やはり期待外れでしかないのだ。それでも、それが持続する可能性はあるのだろうか？ ジョルジュはそれをつかの間の気休めとしか受け入れられなかった。その宗教的感情は、時の翼の上でたちまちのうちに消えてしまうことだろう——悲しみはすでに消え去っていた。リュシアンはあのアン Dre のことをすぐに忘れるだろう。ジョルジュが思い出させないように用心し、またもはや誰も話さなくなっていた彼のことを。

スカプラリオとバッジの後、彼は宗教画に夢中になった。彼はそれを集める決心をし、

ジョルジュの初めての聖体拝領のそれから始めた。次いでほかの学友たちにそれを求め、最後には先生方にさえも頼んだ。彼のミサ典書と賛美歌集にはそれらが詰め込まれた。もうスペースがなくなったとき、彼は机の中の箱をそれで満たした。あるものはレースで縁取られ、あるものは十字架の形に切り取られた。またあるものは羊皮紙の上で彩色された。それらは宗教画、花、祭具を再現していた。数ある中には、リュシアンが決して知ることのなかった人々の霊に捧げる哀悼の絵さえあった。その一枚は、微笑を浮かべた少年の写真だった。それは次のような銘句で強調されていた。《彼はユリのように過ぎ去り、香りしか残さなかった》。

リュシアン的心にとつて最も大切な複製画は、幼きイエスと聖なる顔の聖テレーズのそれのようであった。それにはこのような自筆の文字が付いていた。《私は愛に飢えています》。そして《そのキリストの下婢^{かひ}に触れた布の切れ端》を伴っていた。それは彼の聖遺物だった。ほかのものよりもさらに長い間、あの箱の中に置かれた後、ついには手帳の中に入れられた。そういうわけで、彼はかなり頻繁にそれを見つめることが可能になり、ジョルジュが見ていないと思うときにはそれにキスをするのだった。

バッジと絵の多くは、教皇の免償の様相をもたらししていた。それらを前にして適切

な祈りを唱えることで得られるものである。それは彼を免償への献身へと導いた。

彼は自習時間に自分のミサ典書運び込み、免償の祈りのリストを作成した。小さな手帳の中にその説明を書き留めた。すでに書かれたページは、読み返すことさえせずに破り取った——かつては微笑みながら別のことを書いたページを、である。彼はそれを噛んで細かく引きちぎった。ノートに散りばめられ、彼がそれを追い求めた何編かの詩も同様に。彼は、自分の聖なる食欲に一つ足りないものがあったことに気が付きもしなかった。

ジョルジュは、不穩当箇所削除済みのその手帳をリュシアンが貸してくれたとき、表紙の下に、なくなったページの残った切れ端がいくつもあるのに気付いた。彼はそれらを一瞬凝視した。共感のようなものによって、まるで初めての秘密が透明なインクで記されているかのように。

この敬虔なる記録簿は、このような書き込みで始まっていた。「あらゆるミサの想像上の結合。二十四時間ごとに三十五万回、一秒ごとに四回の奉挙」それから免償の序列によって分類された祈禱、自省録、愛、聖体降福式、帰順、祈願、招請、礼拝、歓呼、切望、謝罪、大祈願、瞑想が来る——全免償、三十年と三十回の四十日間祈禱、七年と七回の四十日間祈禱、七年、三百日等々——時に特別な価値をそれらに与える

詳細とともに。状況、場所、意図、態度（ひざまずくか立つか）である。一方では気の向くままに独白し、他方ではたった一日に一度、あるいはきちんと決められたある日に一度。

手帳のあるページには非常に高度な一連の免償が含まれていたが、むしろ将来のために奨励される見出しを示したものだ。そこには特に、アレクサンデル六世によって与えられた三万年分のもの、ボニファティウス八世によって考案されベネディクトゥス十一世によって追認された八万年分のものなどがあった。だが、ああ！ 後者はヴェネツィアで、前者はパドヴァで受けなければならない。リュシアンは、親切なシスターから借りた本の中に見つけたこの数字を前にして、時々夢想に耽った。彼が内心パドヴァやヴェネツィアの住民を羨み、一度にそんなに大きな免償を手に入られるのは不公平だと感じたのは疑いない。聖アントニオスの故国に連なる者なら、アウグスティノ修道会の家の聖母の祭壇前で歌われる『アヴェ・マリア』だけで満たされることになるからだ。が、リュシアンは、将来その旅をどうにか実現することを自分なりに表明することで、自分を慰めるのだった。

神のお慈悲で、そんなに遠くまで行くことなく、非常に重要な免償をすぐに獲得することも可能ではあったが、それはもはや単なる祈りだけではないのだった。その方

法は、修道会、大兄弟会、あるいはどんな団体でも、とにかく特権的な免償を分配するような慈善団体に加入することにあつた。リュシアンは、聖守護天使修道会のメンバーで、三つのアヴェ・マリア普及団と田舎の信者団の熱烈な信者であり、また聖櫃団および良き死の団の団員で、聖なる子供協会の階級長で、生きたロザリオ協会の約十五人の班長でもあつた。

例えば、生きたロザリオでは、ロザリオのそれぞれの珠につき免償百日分を得ることが可能で、すでにリュシアンは、本来のいわゆるロザリオ信心会に加入することを狙っていた。そこでは珠ごとに二〇二五日分の免償が交付されるのだ。

イエスの聖心への愛と償い協会は、もっと複雑だった。ある定型句が、まず十字架上で、次に最初の三つの珠の上で、その後は大きな珠の上あるいは小さな珠の上で唱えられたかどうかに応じて、会員の免償が異なるのだ。我らの主イエス・キリストの聖痕団、別名慈悲の団でも同じであつた。

ほかの修道会や大兄弟会は、永続的な多数のミサへの参加を特典として与えた。その団体とは、イエスの聖なる御名^み、モンリジョンの聖母、マリアのこの上なく神聖な聖心、とりなしの祈りの聖母、ルルドの聖母、勝利の聖母、カンボカヴァッロの七つの苦悩の聖処女、聖体の秘跡、カストロ・プレトリーリオのイエスの聖心、瀕死の心、

聖血、モンマルトルの悔悛、オーレーの聖アン、聖ミカエル、天使の軍団、聖ヨセフの永遠の崇拜、等々。間もなくリュシアンは、少し混乱してわけが分からなくなっていることを告白し、イエスの聖なる御名の修道会に主たる努力を集中した。最初に加えた団体だったからである。

これらのいくつかの団体の会報に加えて、彼は宣伝用パンフレットを回し読ませた。そのタイトルは、《イエスのためのすべて》《彼の許へ行け》《マリアとは誰か?》《ヨセフの許へ至れ》《天は開く》等々。彼は聖エクスペディトゥスにまで信仰を広げた。学生の守護聖人の異名を持ち、紹介文にはこの聖人が《彼らの義務を速やかに処理する》のを助けると述べてあったからである。

彼は均等に、慈悲深いいくつかの慈善団体の勧誘員になった。とりわけ、《穢れなき神学生の丸パン》では、以下のように寄付の値段が決められていた。

「丸パン一個、すなわち十フランの寄付、聖アントニオス、あるいは幼きイエスの聖テレーズに敬意を表して」

「丸パン三個、すなわち三十フランの寄付、聖家族（イエス・マリア・ヨセフ）に敬意を表して」

「丸パン十二個、すなわち百フランの寄付、十二使徒に敬意を表して」

結局リュシアンは、念珠の注文を取った。彼が《子供の念珠》と言われる修道会の代理販売人だったからである。《普通の鎖の念珠》や《強力な鎖の念珠》などがあり、《ココナッツ的》や《ほぼココナッツ》や《本物のココナッツ》といった各種の珠があった。

ジョルジュの多少毒舌な冗談も、リュシアンを武装解除させるには至らなかった。その布教活動は、何よりもまずは彼に行使されたのである。加入を拒む方法があるだろうか？ 加入してやれば促進者に免償の追加をもたらすというのに？ そのうえ、手数料はそれほど高価ではなかった。一フラン、一フラン五十サンチーム、それに一スーのもののさえある。最も多額な費用がかかるのは《丸パン》だった。ジョルジュは聖家族のために会計課に三十フランを前貸してもらった。

彼は、多少遠い団体には譲歩した。そこにはあるイメージがあった。それらは《海運と植民地連盟》を思い起こさせたのだ。長い航程を航海する意図も、植民地で生きる意図もまったくくないのに、リセでの彼はそれに加わるままになっていた。彼は船酔いしやすく、また毒蛇を恐れたからである。彼が約束を取り付けられた加盟は、あくまでも観念的なものだった。しかし彼は、コレージュにも存在する団体にはそれほど早くは捕まらないつもりだった。修道会には。

ローゾン神父は、マリアの子供であることの名誉に心が動かないかどうかを、告解の後で彼に尋ねていた。だが彼は、自分の目には、それには長い宗教的信仰の心構えが何よりも要求されそうに見えます、と答えた。

同じようにこの問題を彼に説得していたリュシアンに対しては、彼はさらに率直に、マルク・ド・ブラジャンの意見を伝えた。実際のところは、それで彼の行動を妨げられたことと、彼と気持ちの上で余裕のある状態を保てるようになったことに満足した。ある日彼は、道徳的危機を経験していると言った。極めて重大な宗教上の疑問を抱いていて、間違いなくそれは、彼がリュシアンとあまり話してこなかったアナートル・フランスの作品のせいである、と。こういうものは皆、自分の中で熟し切っていたのであり、いつ表面に浮かび上がったもおかしくはなかった——静修の効果は、時ととも減少した。

疑問を解くことを口実に、散歩の間、疑いの理由をできるだけよく説明しつつ、彼はリュシアンの信仰を試した。リュシアンは静かにそれを聞き、こう結論づけるにとどめた。

「君は馬鹿だ」

ジョルジュは、最も知的な論証を空しく組み上げた。リュシアンは耳を塞いだ。そ

の晩、彼はジョルジュに自分の手帳を見せた。そこにはこんな文字が書かれたばかりだった。「ジョルジュの回心のためにたくさんの祈りを」

あきれたものだ。確かに回心してもおかしくはないのだが。まあ結局のところ、それはそれほどまずいことではなさそうだ。ジョルジュは、リュシアンがアンドレのために、しかし免償でのように、異なる意図をもって回心したのと同じように、リュシアンのために回心することにした。

彼らは、ベッドサイドのマットの上で一緒に嘆いた。彼らはパジャマを着て、並んで祈りを唱えた。

彼らはマウルスとブラシドにふさわしい聖なる友情の一つを確立した。彼らはミニチュアの小コレギウム・タルチオを設立し、たびたび学長のミサに仕えた。リュシアンはこの好結果に満足した。このために今度は彼の方が、いっそうジョルジュしか愛さなくなるだろう。それに、これには発展の可能性がありそうだ。徳行に守られて、たくさんのことが起こるかもしれない。しかし、結局ジョルジュは、偽善者役を演じること嫌気がさした。リュシアンをだますのは一度で十分だった。別の方法で彼の心に近づく必要があった。

十一月の外出日の晩、ジョルジュは彼に言った。

「母が今日、僕のいとこの一人のことを知らせてくれたよ。とてもかわいくて、すごくきれいなブロンドで、リリアーヌって名前前で、クリスマスの祝日に僕の家を訪ねることになっているんだ。君は完全に彼女のタイプだよ。君に夢中になると思う。君も僕の家に来ないか？ 君が来てもまったく迷惑なことはない。友達用の部屋ならいくつもあるんだ」

「どうもありがとう、親愛なるジョルジュ君」リュシアンは答えた。「君は本当に親切だ。でも僕は、今年のクリスマスは家族と厳粛に過ごしたいと思っている」

それから彼は、微笑みながら付け加えた。

「ま、そういうことで諦めてくれ」

三日後、彼は机の中に赤い革カバーと金の縁取りページのきれいな手帳を見つけた。最初のページには、十一月六日の日付とともにこんな書き込みがあった。「リュシアンへ、誕生日のために。ジョルジュ」

リュシアンは隣人に微笑み、お礼を言って、テーブルの下で彼の手を握り締めた。

彼はその手帳を再び手に取って、次のページのこんな詩節を読んだ。

我が最愛の君よ、私は夜明けからあなたを探していました
見つけれず、見つけたのは夜になってからです、
それでも何て幸運なのでしょう！ まだ真っ暗にはなっていません。

私の目は再び

あなたを見ることができるようです。

あなたの名は主だったあらゆる香油を撒いたよう、
あなたの呼吸は重要なあらゆる香水を合わせたよう、
あなたの些細な言葉はあらゆる蜂蜜で組み上げられたよう

そしてあなたの青白い目は

あらゆる空が詰め込まれたようです。

私の心は皮のない柔らかな果物のように溶けています。
おお！ 我が最愛の君よ！ あなたを探したこの心の上に、
とまりに来てください、サシェのような優しさとともに

それから刻印のような

力強さとともに。

ジョルジュは先日以来この詩を知っていた。母親が持って来た雑誌にあったのだ。確かに彼は、リュシアンのために買った手帳にそれを写しつつ、この手の作品がアンドレにもたらした不幸を思い出しはしたけれど、裏切られて密告されることなどあり得ないことも知っていた。それでもやはり、彼はこの詩にあえて署名せず、リュシアンがそれを彼のものだと思えることを期待した。この名品によって、アンドレが友人の目の前で獲得した知的な名声を失墜できれば重畳だと思った。フランス語のトップともなれば、時に詩人になることだってあり得るものだ。

リュシアンは尋ねた。

「これは誰の？」

彼はエドモン・ロスタンの名を自白せざるを得なかった。

「語っているのは間違いなく女性だよ」リュシアンは付け加えた。

「サマリヤの女だっさいいさ」悔しがりながらジョルジュは答えた。『まねび』のものであることを君が望まないのならね」

何の効果もなかった。その詩はいとこと同じように影響を及ぼさなかった。リュシ

アンは、新しいジャンルのこの最愛の君に対して、彼の信心に対してのジョルジュの皮肉をあからさまに使った。しかし、ジョルジュは落胆させられるままにはならず、彼もまたそうだった。

彼は共同寝室での会話の中にその詩の何節かを引用することから始めて、隣人にそれをもう一度繰り返し言うよう頼んだ。後者は嘲笑的な口調でそれを言ったが、頼みは聞いてくれた。ジョルジュはリュシアンによって発せられたその言葉を聞くのが好きだった。彼とこの言語活動を保つために、冗談の源泉をそこに作ることを甘受さえた。そして、ある種の甘美さをさらにそこに見いだしていたのである。リュシアンの本、ノート、メモ、おやつ、デザート、ベッドは、最愛の君のそれだった。「刻印」と「サシエ」はパスワードになった。

ジョルジュの最も楽しい時間の一つは、今やピアノのレッスンだった。彼は毎週レッスンをしてくれる老嬢に、リュシアンと四手連弾をすることを提案していた。二人は技量が同じくらいだったからである。

「僕の母は」彼はリュシアンに言った。「ショパンのあれがすごく好きなんだ。『ロンド・ファボリ』《私はスカプラリオを売る》による華麗なる変奏曲」ってタイトルの曲。もしそんなに難しくなければ、僕らは全部教わることになる。君が僕に売るのは免償

でしかないにしても」

「僕が『華麗なる変奏曲』について思うのは、君は転売できるほどやり込んでいるけれど、僕は買い手にはなれないことを覚えておいてくれってことだ」

彼らは午後合奏を稽古する特別許可を得た。時々、ドアのガラス越しに学監の影が見られた。だが、知ったことじゃない！ それでもなお、ジョルジュはリュシアンと二人きりなのだ。二人が楽譜の方に身を傾けると、頬が軽く触れた。二人の足がペダルを同時に踏み込むとき、膝がぶつかった。温め直すのを口実に、ジョルジュは時に自分の手の中にリュシアンの手を取った。

十二月初旬、リュシアンは霜焼けになっていた。それが睡眠妨害を引き起こしたため、タンニンの煎じ汁に指を浸すべく、彼は夕食後に医務室に行くことを許可された。そういうわけで、ある晩、すでに就寝していたジョルジュは、彼がその処置からつま先歩きで戻って来るのを見た。彼が服を脱ぐのも目撃したが、今ではすっかり慎重に深くなっていた。

翌朝、ジョルジュは中庭の蛇口で両手を濡らし、注意して乾かないようにした。その日の夜には霜焼けになっていた。それから何日か、彼はそれを憂慮すべきであると見なされる状態に維持した。

この症状になっている者は、おやつ休憩の間じゅう治療を受けに行くことができた。だがジョルジュは、リュシアンと同じ優遇を得る期待において間違っていないかった。看護のシスターはピアノ教師と同じくらい寛大だった。

その晩、看護室への共同での初訪問が行われた。例の掲示はこう指し示していた。《医务室のシスターは…在室》。

水は、二つの洗面器のそばのこんろの上で沸いていた。その修道女はリュシアンに約束していたメモを渡した。聖ブリギットの免償に関するものである。彼女はジョルジュに両親の近況を尋ねた。

「あなたはクリスマス前より良くなっているわね」彼女は言った。「こんなに腫れた醜い手で自宅に姿を見せてはだめよ。聖クロードの生徒は、より信心深く、より学識深くなるだけでなく、指先までより健康な状態で休暇に出なければいけないの」

ジョルジュは、あの新学期の夕暮れに、アンドレがリュシアンと遊んでいたのを見かけた窓の前に自分がいることに気付いた。アンドレが去る前日、この部屋のベッドの一つがアンドレのそれであったことを思った。この記憶が彼を当惑させた。彼はこの小さな集いからより多くの喜びが得られることを期待した。

二人の友人は、人けのない通路を黙々と戻った。

「何を考えている？」とうとうジョルジュは尋ねた。

リュシアンは答えなかった。しかし、二人が共同寢室のドアまで来たとき、彼はそれを開けながら言った。

「アンドレのことを考えている」

ジョルジュは、十月六日の忘れられない夜以来、その名がリュシアンの唇から出るのを聞かなかった。今日、姿を消していたその亡霊は、彼らそれぞれに対して生命を取り戻した。だが、どれくらいの招魂がリュシアンの心の中で連続して起こったのだろうか？ ジョルジュのかつての敵はたぶん、怨恨もなく、思いがけない補佐役になるうとしていた。

横になり、会話が再開できるようになるとすぐ、ジョルジュはリュシアンに言った。「アンドレは、君の浄化プログラムから追放されているように思えるんだけどね。」

君が思い出とあの詩に、焦がれているとは言わないまでも、それをつらい思いで反芻しているのは分かったよ。君は偽善者でしかないんじゃないのか？」

「僕はアンドレのことを考えるのをやめたことはない」リュシアンは答えた。「彼のために祈ることもだ。君がよく知っている誰かさんのためにするのと同じくらい」

「大いに感謝するよ」ジョルジュは言った。

リュシアンはこう付け加えた。

「僕らが知り合ったのは医務室なんだ。彼と僕。ちょうど霜焼けのためだった」

アンドレは、依然として遠くからの支配者だった。ジョルジュのすべての策略は、すでに尽くされた。しかし、アンドレを愛しながら神をも愛するなどという芸当が、リュシアンにはできるのだろうか？ もし彼がこの矛盾を黙認するならば、もし彼の中では過去と現在がきちんと繋がっているのならば、ジョルジュには争いを放棄する道しか残っていない。

「君が甘い語らいをそんなに頻繁に考えるのは、苦行のせいなのか、感謝のせいなのか？」

「君は、彼が僕にとってどういう人間なのかが分かっていない」

「それじゃ君が僕に彼のことを話してくれなかったみたいじゃないか！」

「いや。でも僕はこう思う。僕が忘れたまさにそのことを君は覚えていて。で、僕が彼のことをまだ考えることができるのは、僕がそれを忘れたためだ、ってね」

「いいから、君がいつも気も狂わんばかりに彼を愛しているってことを、素直に認めなよ。彼のカンニングノートと作品を夢見てることさ。絵もスカプラリオももうたくさんだ」

「君が怒るようなことは何もない。彼と僕の間には血の盟約があるってことを、君はよく知っているだろう。さらには、おじさんに作ってもらった彼のホロスコープによれば、彼は僕と同じように、友人のハウスと呼ばれる所に三つの惑星が入っている。

さらには、僕らは二人とも風のサインの生まれだ——四つのサインがあるのさ。風、火、地、そして水——で、それはアンドレと僕が理解し合うようになったことの証明になる」

「君は少々占星術を信じすぎだね。僕に何て言ってほしいんだ？　僕は君の回心を評価しちゃいけない。君はまだ古き男からも古き自分からも脱皮していかないよね、我が古き友リュシアン。ギリシャ語では、アンドレは『男』って意味なんだよ。

けれど、僕のいとこに勝るものはないよ。彼女はどちらかと言えば出生が火のサインであると思われるのに、彼女と君が互いに運命づけられているのは確かだと思う。風は火をかき立てるんだから、君らは補完し合うべきだ」

「僕の火はすっかり消えちまってるよ」

「君がジャンヌ・ダルクみたいに十室の月を持っていてことを忘れてたよ」

「君はこういった用語を馬鹿にするし、そっちの方には精通してない。十室の月、それは人気のサインだ」

「ああ！　僕は処女性性のサインかと思っていたよ」

「君のいとこのそれを監督することで我慢するんだね」最後の努力において、ジョルジュは急にやり方を変えた。

「じゃあさ！」彼は言った。「僕らはあの親愛なるいとこのために祈ろうよ。僕は彼女に二枚の写真を求めよう。で、僕らはそれをミサ典書の中に入れるんだ。ブラジャンがしたのと同じように」

リュシアンは不機嫌になったようだった。

「おいおい、ジョルジュー」彼は言った。「そんな思いつきを僕に持ちかけないでくれ。無原罪の御宿^{おん}りの祝日なんだぞ」

ジョルジュがリュシアンに抱く関心は、学業を一切妨げなかった。それどころか、自分の愛情の失望を慰めるために、彼はできる限りクラスのトップにいるようにした。十月と十一月、彼はその月の最優秀成績者で、学長によって教室で名を読み上げられていた。彼は、休暇前、この数日のうちに成績が公表されることになる十二月に、もう一度それを取るだろう。毎回、彼は成績優秀賞の小さな厚紙を授かり、そこにはこの評価が書いてあった。《優秀》。とても優秀だと言われていたが、ほとんどその能力を測られなかったマルクのリタイアは、アンドレのそれ以上に彼には有利に働いた。

こうして、ジョルジュは異論の余地なくフランス語、英語、歴史、ギリシャ語、ラテン語で君臨した。それ以外は学友たちに委ねた。

数学において、彼はリュシアンの援助を受けたが、自尊心から、この不正行為を自分自身の目から糊塗したかった。リュシアンは解答あるいは正しい解法を供給したが、彼は何とか自分のやり方、用紙に次のような注意を書き込まれるようなやり方で、解法を見つけようとした。《凝りすぎ》《ねじ曲げられている》《強引なこじつけ》《わざわざ難しく考えている》。

それに対し、日曜日の朝の宗教教育のクラスで輝くためには、彼はリュシアンの宗教的情熱を必要としなかった。それは賭のようなものだった。彼は、本に従って全部答えながら、その質問に対する別の解答が浮かんだのに気付いて満足を覚えたが、こちらの方は胸に秘めておいた。彼は三か月にわたってその試験で首席を取り続けたが、自分がそうなるのにどれほど値しなからうが首席を取ってみせると、リュシアンに断言していたのである。

とりわけ宗教教育の授業では、彼は記憶されることだろう。いつものように、聖心の祈りでそれは始まった——その授業も担当しているあの年配の歴史教師が、その特別な庇護の下にそれらを位置づけた。それから、主題が十字架であったため、その神

父は話を善悪を知る木に持っていた。エデンの園でその予示はあった、と彼は言った。誘惑がそこから来て、贖罪がほかから来たのであるから。

「それがまさに君の娘が咄^おになった理由だ」ジョルジュはリュシアンに言った。

神父が何を話そうとも、また彼が何を尋ねられようとも、笑ってはいけないう決まりだった。

ある生徒が、どんな種類の木が善悪を知る木であったのか分かっているのか、と尋ねた。

善良なる神父は、鼻眼鏡を取り、目をこすって、静かに答えた。

「その興味深いポイントは、地上の楽園に関する授業で顧みられてきませんでした。その問題に立ち戻ることができて、私はうれしい。その問題は、こんな状況です。

多くの人間が、善悪を知る木はりんごだったと考えています。あなたたちには読むことが許されていない雅歌の中で、そう言われているからです。《りんごの木の下で、私はあなたを呼び覚ました》。イチジクの木だと考える人もいます。禁断の果実を食べた直後に、アダムとイヴがイチジクの葉を身に着けたからです。さらには、オレングジャブドウを選ぶ人もいます。

マデイラ島の人々によれば、我らが最初の祖先の墮落を引き起こした木はバナナで

あるか、少なくともその主要な種のうちの一つで、一般に《大きな実のバナナ》と言われているものだそうです。

この特異に見える見解が、植物学者にこの種に対する別の名称の着想を与えました。彼らはバナナをこう呼びます。《楽園のバナナ》、《アダムの木》、そしてラテン語の《ムーサ・パラディシアカ》——バナナはバシヨウ科です。

しかも、ある人々によると、その同じ木の実はキリストの教えのサインを秘めていると言います。なるほど、その断面には十字架のようなものがあることに気付くでしょう。スペインやポルトガルでは、バナナを切るのにナイフを使うなら、それは冒瀆的行為だと考えている人が多いとも言われています」

間もなくジョルジュは、彼の学年の書架を使い尽くした。そこにあった小説の大部分は、その著者の名前ともども、口にするのもうんざりだった。関心が持てる唯一のものは、『索引の手引き』であった。それは彼に、ほかのタイトルを収集することを可能ならしめた。そのうえ、多くの生徒が同じ目的でそれを使い、休暇の直前には最も求められる本であった。

書架の退屈な説教本で馬鹿になるよりは、ジョルジュは先生方から真面目な著作物

を借りることを好んだ——古典や芸術などである。全巻揃ったある『神話』は、とりわけ彼を夢中にさせた。学長は、彼にその本を貸すことに同意した。そして、その良使用法を説明しないわけにはいかなかった。

「この神話は勉強のために読むべきです。楽しむためではなく、ね」彼は言っていた。「あなたがある特定のお話とイラストを通過することになるのは、確実だと思います。あなたは常に守護天使の監視下にあることを忘れないでくださいね」

ジョルジュは、自分が聖守護天使修道会のメンバーであることを思い出した。それから、警告されたイラストや物語を見つけるたびに、同じ修道会の指導下にあったリュシアンにそれらを急いで見せた。

『神話』は、別の影響をもたらした。それは学長がいつそう推測できないことだった。ジョルジュは古代の神への崇拜を誓い、自分の本の最初のページにそれらの中のいくつかの名前を書き込んだ。彼は、学校の用紙の上部にそれらを書けないことを残念に思った。《イエス—マリア—ヨゼフ》と書く代わりに。彼は自分への加護をそれらに祈って楽しんだ。何が起こるか見るためである。何も起こらない場合には、彼はそれらに学校での好成績の効果があるのだと思った。

修道会の勧誘には抵抗していたが、彼はアカデミーには常に強く心惹かれていた。

彼は、五つのフランス語の課題で、それぞれの候補者を支援するのに必要とされる二十点中十六点以上の評価を得るのはたやすいと思っていた。かのアルマジロは厳しく、そのうえジョルジュは彼の同僚がそれ以上であることも知った。実際、アカデミーは自由にメンバーを決定できるため、先生方は野心家には厳しい評価を下すのだ。アカデミーによって訂正される危険を冒さないためである。学長は、自分が統御する団体の威光を確実にすることを喜んでいたのは確かで、好きなようにさせていた。アカデミー・フランセーズの選抜における国王のように、彼には拒否権しかないのだった。今日、ジョルジュは自分の三か月分の答案を検討した。

次の題が付けられた主題において、彼が最も悪い点数を付けられたのは、彼の隣人のせいだった。《友の肖像》。彼はモデルとしてリュシアンを選ぶことを望み、どう見ても過剰な情熱で彼を描いたのだ。その肖像は、こんな言葉で終わっていた。「それが私の心の友なのだ!」。それについて、先生はこう書いていた。「あなたの心は求められていません」評価——二十点中八点——には、このようなコメントが書き添えられていた。「趣味が悪い。理想化はやめること。あなたならもっと良い発想ができたはずです」仕上げは、ジョルジュがその答案を見せたときのリュシアンの批評だった。「君は僕を馬鹿にしたかったのか?」幸いにも、アルマジロはその主人公を識別でき

なかった。失敗した課題のために彼が時々そうしたように、その素描画でクラスを喜ばせてやることもなかった。もしそうしていれば、聴衆はもっと鋭い眼力を持っていただろうに。

これも幸いだったが、もっと良いことがあった。凡庸な答案を取り除いてから、ジョルジュは今、たぶん間もなくアカデミー会員の称号を彼にもたらすであろうそれらを見直していた。彼はまず、その年の最初の作文に目を通した。マルク・ド・ブラジャンをあれほど素早く落馬させた《フランソワ一世時代の馬上槍試合》である。先頭には、採点者が、忘れられた《J・M・J》と小さな十字架を付け加えていた。さらに、こんな批評が記載されていた。「素晴らしい出来。文勢、色彩、巧妙な表現力がある（二箇所の日付の誤り）」その二箇所の日付ミスは、特別観覧席の記述の中に紛れ込んでいた。それはジョルジュが《エナン》をかぶった女性を書いた箇所（先生は《遅すぎ》と書き入れていた）と、国王の周囲に、道化だけでなく《ミニヨン》までも書いた箇所であった（こちらは《早すぎ》）。

二番目の答案のテーマは《森の嘆き》だった——森を懐かしむ一本の薪。それにもジョルジュは最高点を取っていた。唯一の批判は《大きな櫓からの木陰を囁きながら散策する、喜びに満ちた若いカップルたち》を思わせる一節に対して書かれた。（「あなた

のペンにしてはやや露骨」、アルマジロはこう書いていた)。第三の課題はこんなタイトルだった。《我が国の紋章》(「あなたはニワトリのことは上手に書いても、ヒバリについては別でしたね」《かわいいヒバリさん……》がまた顔を出していた)。最後は、ヴォーヴナルグの思想《我々の最も信頼できる庇護者は我々の才能である》についての解釈であった。ジョルジュは、《才能》に《金銭》の意味を与えて楽しんだ。(「大胆なパラドックス、知性をもって処理できている」)。

結構！　だがこれでは、高名な支配者たちに対し、見苦しくない四つの答案の務めを果たしたにすぎない。彼は新学期にちよつとした努力をする必要があった。

ジョルジュは聖クロードのアカデミー会員になることを希望していたが、アカデミー・フランセーズを見失つてはいなかった。最初のものが二番目のものに誰も運んだことがないという事実が、彼の自尊心を駆り立てた。当コレージュは、フランス学士院に名を知られた二人のメンバーを送っていたことをかなり誇っていた。一人は政治経済学で、もう一人は博物学である。しかし、それに一人の司祭、一人の司教、それに三人の修道会総長を加えれば、ここの偉人たちはそれで全部であった。ジョルジュは、欠けた名声をこの受賞者名簿に加えることを企てていた。偉大な作家となつて、アカデミー・フランセーズのメンバーとして数えられる唯一の人間となることを。

高揚している間、彼はアカデミー・フランセーズ内で、自分が好敵手となることを夢見た作家、アナトール・フランスの座を自分が占拠している様子を想像した。

そのうえ、彼はその秘密を大事に守った。彼が選ぶことを望んだ仕事についても、この特別な目標についても、それは同様であった。

農園主になりたいリュシアンが、就きたい仕事を彼に尋ねたとき、彼はあっさりとこう答えた。「侯爵さ、できることならね」

彼がいささかの思い上がりをもって、作家になる計画を打ち明けたリセの同級生の一人は、彼に文法書ではなく推理小説を書くよう助言した。ジョルジュはその日、成年に達する前にはもう誰にもそれを話さないことを心に誓った。

学校での課題を除けば、彼の現在までの唯一の著作は目録だった。自分のと同じイニシャルを持つ名前を持つ作家のそれである。それはソフォクレスから始まって、特にスエトニウス、シェイクスピア、シラー、ユジエヌ・シュールなどが並んだ。さらに、ジョルジュ・ド・スキュデリーは、ジョルジュ・ド・サールと同一の名前および「ド」とともに、アカデミー会員の肩書き、セギュールの侯爵と、すべて同一の肩書きを示していた。

休暇に出発する前日、聖体降福式において伝統的な儀式があった。子羊の祝福である。

合唱団の子供の一人が奉納物のように腕に子羊を抱いていたため、全員の注目の的だった。生徒たちの名において奉納される子羊で、先生方が翌日に食べるのだと言われていた。

その動物が少し後ろ足を蹴ってもがく間、聖歌隊員は賛美歌を歌い、全員がそのリフレインを繰り返した——典礼装飾の赤色（使徒・聖トマスの日）は、子羊に良い予兆を決して伝えていなかったのだ。

おおイエスよ、我が優しき救い主よ、

我が心をあなたに与えましょう、

この子羊のような、

かくも白く、かくも美しい

この子羊のような。

同夜、聖歌隊指揮者は、声が新学期によくまとまるように、上級生隊の席を入れ替えさせていた。それはジョルジュに、リュシアンともども、今後はアルトとして前列のベンチに座る状況をもたらした。

まるでもつとよく見るためにその場所を占有したようだった。彼は子羊を周囲に見せている者をじっと見つめた。

それは十三歳くらいのも、並外れて美しい少年だった。金髪が、その均整の取れた顔立ちを巻き毛の幻想で彩っている。顔には微笑みが浮かんでいるが、それは奇跡のような輝かしさを放っている。ローゾン神父の部屋にある版画の神秘的な子羊のように、彼自身が崇拜されることを申し出ているようだった。赤く短い法衣から剥き出しの脚が覗いていた。

もちろんジョルジュはだいぶ前から、聖歌隊の向かい側、下級生の最前列に座る彼に気付いていた。彼は新学期になってからほんの数日で、リュシアンのおぼでミサの従者を務めている間にその子を見つけていたのだった——リュシアンとの友情を聖タルチシオに保護してもらったのミサである。聖体拝領を与える学長の近くで、ジョルジュは聖体皿を捧げ持ち、その黄金の鏡面の反射に照らされるすべての顔の中で、彼はあの顔に強く心打たれていたのだった。しかしその後は、礼拝堂や食堂で遠くから見かけるだけだった。彼はいつでもその子を称賛していたが、近寄りがたい存在として、彼のことは考えなかった。リュシアンに心を奪われていたということもあった。今では、その子と自分は知り合う運命にあり、すでに隠れた絆で自分たちが結び付け

られたように思われた。その晩のそうした状況の中、彼らの距離が近づいたという事実、そして、これからは二人は差し向かいになるはずだという事実が、彼には良い予兆のように思われた。

彼はその子が誰なのかをリュシアンに尋ねた。彼はその名前さえ知らなかったのだ。その子は彼らの学友モーリス・モティエの弟で、五年生とのことだった。

ジョルジュは、その翌日ほどミサに行くのが楽しみだったことはなかった。聖クロードでの自分の日々をすっかり装飾してくれそうな者と顔を合わせることになる。一日のすべてが彼で始まるのだから。秘密は、事をいっそう魅力的なものにするだろう。実際ジョルジュは、リュシアンにはそのことを決して言わないと心に決めた。そもそも、聖なる少年時代であることを鑑みても、またアンドレとの友情を鑑みても、リュシアンに、情熱的であると同時にプラトニックな崇拜などというものが理解できるだろうか？

今日のジョルジュは、ベンチからベンチへと、下級生と上級生と一緒に聖体拝領をさせるコレージュの習慣に感謝した。そのような共通の崇拜のようなものによって彼らを結び付けるための習慣である。彼はかなりどきどきして立ち上がった。あの子は

出迎えようとしているように見えた。二人はリュシアンによって分離させられるほかはなかった。

午後、ジョルジュは駅で、あの子が乗りそうな車両をリュシアンが選ぶよう仕向けるために戦略を駆使したのだったが、コンパートメントの中に座席を得ることはできなかった。その後はもう、彼は思い切って通路に一人で行くことができなかった。彼は三か月間の優等生名簿をポケットに入れていたのだが、三等車両で旅行すること同様、あのほっそりした下級生に怖じ気づいていたのだ。最初は彼を探し、今は彼を恐れていたのである。こんなに彼の近くにいて、また自由に振る舞えると考えたと、彼の果敢さは失われてしまうのだった。それでも、モーリスが住んでいると聞いていたS……に着いたとき、彼は列車の扉に注目した。あの子はモーリスとローゾン神父の間で、楽しそうに離れていった。

(二)

ジョルジュは、自宅に戻って思いのほか幸福感を覚えた。彼は、遠くにいてなじみの感覚が薄れていたこの環境を再び手中にし、もう一度その家の子息であることの喜びを吸い込んだのである。彼はもう《サーコファージ（＝石棺）》でも《サーディン（＝イワシ）》でもなかった。それらは、コレージュで彼が時々呼ばれていたあだ名である。彼はジョルジュ・ド・サルであった。彼は新しい使用人たちに《伯爵様》とさえ呼ばれるようになった。彼はまだその身分を与えられてはいなかった。これは間違いない、彼が成長したためである。

夕食前、彼は家を一巡りした。ホッキョクギツネの尾を持つ、巨大な飾り房のような白いペルシャ猫を腕に抱いた。猫殿は、彼を認識あそぼすとウインクしてくださった。彼は子羊を抱いていたあの子を思い出した。

彼は再び自分の部屋を見て満足した。要するに、部屋は持ち主自身なのだ！ 彼は共同寝室を惜しむ気持ちがないことを自分に許した。

ピアノで音階練習をする。小さな王のための小さなピアノ。そこには、リュシアン

と連弾するには不十分なスペースしかなかった。

書斎には大切な書棚が収容されていた。一列目の半分はメノキウス版聖書で占められていた。赤いモロッコ革の十五巻本で、その堅固な土台の上に、辞書や詩集や小説や歴史書がはめ込まれていた。その傍らには、紋章で飾られたアンティーク本のガラスケース。誰も開かないものである。ジョルジュは革張りの肘掛け椅子に沈み込んだ。それはともかくも快適で、恐れることなく転ぶに任せることができる。遠くには、サロンのそれのような、敬意をもって近づかねばならない座席。

この部屋の中では、カーテンを通過してくる光がジョルジュに優しく当たっていた。こうしたものすべてが、彼にとっては大きな魅力をもって姿を見せていた。絹のタペストリーの小さな人間たちが、彼を歓迎するためにフルートを奏でている。愉快な肖像画。子供の聖ジャン・バティストが指を挙げて発言を求め、こんなことを言っているようだった。「いちばん立派なのは僕だ」上流階級の老婦人が自分の猿と一緒にしなを作っていた。小姓はもうかなり一人前になった様子をしている。メダル陳列箱のコレクションは、くすんだ模様を彼ら自身のためにもう一度輝かそうとしてた。

聖クロードの厳格さによって純化された彼の目は、今日、ペルシャ絨毯の壮麗さを再発見した。彼は、その小さな模様の多様さ、その色の戯れ、そのウールの緻密さに

感心した。一つの花束が散らばったかのようなその上に、彼は猫を置いた。猫が自分の故国の花々を横切っていくのを見るためである。

食堂で、彼はここでの自由な立場を発揮し、二本の銀の燭台に点火した。籠の中にはグレープフルーツがあつた。その味は忘れられないものである。コレージュで、その果物を貯蔵箱の中に入れておけないのは遺憾なことだった。あまりに多くの舞台装置が要求されるのだ——粉砂糖、キルシュ、砕いた氷。ジョルジュは、こうしたもの全部を忘れていたと思つていたが、それらを取り戻すことに不快さはなかった。

彼は調理場を訪問した。そこで彼は、自分のために今夜はスフレが出されることを知った。

彼はテラスを何度か行き来して、それから庭に降りて温室を訪れた。

ガレージでは、彼の自転車がT字型支柱に引っかけられていた。彼は両親の自動車よりもその方が好きだった。それを下ろすと、タイヤに空気を入れ、ベルを鳴らした。彼がもう一つの素晴らしいもの、自由を取り戻した合図として。彼ははるか遠くまでそれで行くことを想像した。風の中を、たった一人で。それでもやはり、自分の能力を考えると、S……はあまりに遠すぎる。そのことを彼は残念に思った。そんな方法で、彼はそこに行きたかったのだが。

それに続く日々の間、彼はあちこちでリセの旧友たちに出くわした。その者たちには以前より興味が引かれないうに感じられた。ある者は映画への熱愛、またある者は色事、あるスポーツマンはスポーツの魅力の理解法を話していた。そのうえ、彼の方では、自分がどんなふうに自転車の魅力を理解しているかを伝えるチャンスにほとんど恵まれなかった。季節の悪天候が自転車に乗ることを不可能にしたのである。

彼はリュシアンに長い手紙を書いた。例のリリアヌは来ていないことを伝えた。だからリュシアンは来ても大丈夫。徳操の危機に陥ることはない。それに対し、ジョルジュはもう自分の人生を保証できなかった。素晴らしいフルーレを贈り物にもらい、初めてフェンシングのレッスンを受けたため、それでも彼はあらゆる種類の手合わせをリュシアンに申し込んだのだ。剣先のボタンを外しての真剣勝負さえも。彼は『タイス』と『雅歌』を読んでいることも書き、最後に霜焼けは治ったかどうかと尋ねた。間もなく彼は、リュシアンからのこんな手紙を受け取った。

…一九三二年十二月二七日

先に手紙を書いてくれて、また心のこもった招待を繰り返ししてくれて、本当にありがとう。残念だが、僕らの休暇は、僕が君に会いに行くにはあまりにも短い。僕にはやっと返信を書くだけの時間しかない。僕は少しせき立てられている。教会の馬槽うまぶねを連続で訪ねているからだ（それが免償の足しになるんだ）。僕らが行った真夜中のミサは素晴らしかったよ。一人の女の子が歌ってね。その子はたぶん君のいとこと同じくらいかわいいと思う。

君がフェンシングの用具一式をクリスマスにもらったなら（自分の片目を潰さないよう注意！）、僕の方は緑の自転車をもらったんだよ。貴君のもののように大手メーカー謹製ではないけれど、悪くはない。変速機、ニッケルめっきの荷台、二音のベル——（チャリン・チャリン）……。

君が読書のことを話してくれたので、僕が読んでいるものも言っておこう。『愛すべきイエス、スペイン語からの翻訳』これが実に面白い。

君に送る絵を見つけたよ。君はそこに《そこにいない子供の守護天使への》祈禱文を見るだろう。目下、君のために暗唱しているものだ——僕はそれを暗記しているのさ。僕のためにもそれを暗唱してくれ。大いに努力はしているんだが、僕は君が考え

る以上にそれを必要としている。

実はこういうことなんだ。占星術をやる僕の叔父が、僕のホロスコープには、彼が神秘主義と呼んでいるもののサインは一切見つかからないって言うんだ。叔父ははっきりと、そこでは天王星と火星が合であると言った。全然違うことを示しているんだけど、叔父はそれをちゃんと説明してくれない。こういう考えにはいらつくし、君にしか打ち明けられない。それは君の考えでもあるからだ。何もかもを信じようとするのは、愚かなことだって……。

彼は、《海運と植民地連盟》に加入したという追伸を書き加えていた。それによって農場主の経歴の準備をするためである。二人の友人たちがその登録用紙の記入に屈したわけである。

リュシアンが送ってきた絵には、薔薇色の子供のそばに天使が描かれており、裏にはこんな祈禱文が読み取れた。

我が心が名を呼ぶ者の守護天使よ。その者をさらに注意して見守ってください。その安楽な道のりと実り多き仕事をお返しください。もし涙を流すならば、その涙を拭っ

てください。もし喜んでいるならば、その喜びを神聖なものにしてください。もし弱気を感じたならば、その勇気を奮い立たせてください。もし悲嘆に暮れているならば希望を、具合が悪いようならば健康を、道に迷っているならば正しい道を、もし誘惑に屈しているならば悔悟の心を、取り戻させてください。(四十日間の免償)

ジョルジュはリュシアンの友人のままだったが、日ごとに少しずつ別の友人になっていくように思われた。自分がよく知らない、そして自分のことも同じようによく知らないような友人に。彼にもまた《そこにいない子供》がいて、その者は彼の天使であると同時に祈りの対象でもあるのだった。彼はしばしばモティエ弟のことを考えた。まるでそれが彼に対して自己の存在を示したように、彼もあの子の周囲の人々に対して、またあの子がよく知っている場所場所で、自己の存在を示したいと思った。

彼は、まだS……に在るブラジャンにも手紙を書いた。モリスとローゾン神父の正確な住所を彼に尋ねるためである。彼は、コレージュでの二人の初めての会話に、その町の名前が出てきたことを思い出すのが好きだった。

マルクは、彼に情報を与えつつ、彼が覚えていてくれたことに感謝した。親展の手紙は、クラス全員の手紙とは完全に別物で、そちらには全員によって連署された二行

の文言しかなかったのだ。マルクは、ジョルジュの意図にだまされる運命なのだった。以前も同じように、彼は聴罪担当者としてローゾン神父を選ぶことを吹き込んだと信じ込んだが、その選択はリュシアンによって吹き込まれたにすぎなかったのである。

ジョルジュは、神父とモーリスに新年の祈りを急いで送った。彼は初めてモティエの名前を書いた。モーリスは、間違いなくこの手紙を受け取って驚くことだろう。それほど近い関係ではないのだから。すぐ新学期が始まるので、神父も同様だろう。そしてジョルジュは、日程的に遅くなり、モーリスが返信する余裕もないことを残念に思った。その手紙はジョルジュの関心を引いただろうに。きっとあの子もそれを読んだだろうに。あの子はたぶんジョルジュが書いた手紙を読んでいるだろうが、それと同じように。

元日、ジョルジュは、文房具屋のショーウィンドウに宗教的な絵が展示されているのを見かけた。彼は立ち止まり、リュシアンの贈り物の返礼となりそうなものがそこにあると思った。それはあまり容易なことではなかった。リュシアンはたくさん持っているのだ。本や箱の中に、あらゆる天使や聖者を持っている。そこに見えるものは、多少異なるように見えても、彼がすでに持っているものと同じだった。それはオリジナルなものでなければならなかった。高踏派の詩人たちが引用するような珍しい天使

とか、つい最近の福者とか、殉教者名簿以外にはまったく現れない無名の聖者たちの一人とか。

博物館的な写真は教訓的な絵に押しやられ、ショーウィンドウの隅の場所を占めていた。それらの一つは、若い神の胸像が写されたもので、ジョルジュの注意を引いた。深いまなざしを持つ魅力的な頭が片方の肩の上に軽く傾けられていて、もう片方には髪、長い巻き毛が落ちてゐる。彼は入店し、それを買った。裏にはこのような説明が記されていた。《テスピアのアムール、ヴァチカン宮殿》。その言葉の結び付きが、ジョルジュを象徴しているように思われた。輝くような友情が、聖クロードで彼を待っている。キリストの代理者と同じ邸の中で異教徒を擁護する、この上昇するキューピッドのように。彼は自分のためのその絵を保管することに決め、それを財布の中に入れた。それは始まる年の庇護者となってくれるだろう。記念に、彼はそれを守護天使のそれに加えるつもりだった。

一月三日木曜日、新学期。雪のため、車でコレージュに行くのは楽ではなさそうだった。そこで、ジョルジュは列車を選択した。今日は、去るのが彼で、残るのが両親だった。もっと遠くから乗ったリュシアンは、彼に席を取っておいた。彼の顔は輝いていた。

彼はジョルジュを早く通路に連れ出たくて仕方なかった。ニュースを彼に知らせたかったからである。アンドレが手紙を書き、その手紙が昨日届いたのだという。

「信じられない」彼は言った。「ぎりぎり最後の日だ！一瞬にして僕は変えられた。僕の《反回心》は、回心と同じくらい急激だったね。奇妙だったよ。読むにつれ、僕はバッシとスカプリオが僕の脚に沿って落ちていくのを感じたような気がしたよ。免償、念珠、守護天使、『愛すべきイエス』、これ全部、精算さ。僕のおじさんと君、君たちは正しかった」

「気を付けて！今度は僕が君を回心させることになるから」

「大きな影響力があるとは思えないね、僕らのどちらにも、回心に関してはね」

リュシアンは、ジョルジュに件の手紙を見せる喜びにこれ以上抵抗できなかった。彼はそれを携行していた。

「君はアンドレの詩は知らないけれど、君の散文の方のヒントになるだろう」

我が親愛なるリュシアン

新年の挨拶とともに、やっと僕を受け取ることになれば、君は喜んでくれる

のではないかと思います。僕がひどい風邪を引いて休暇に入ったのは、もう読んだと思います。元気になるまでは君に手紙を書きたくなかったのです。僕らの友情は美しさと楽しさだけを知るようでなければなりません。僕は言います、『僕らの友情』と。馬鹿げた別離はそれを少しも変えることはなかったと確信しているからです。それに、星々の下で何を変えることができるでしょう？ それらに永久に縛られているというのに？

最初に僕を追放させたことについて、次に僕に手紙を書いてくれなかったことについて、君を叱らせてください。僕は、君の軽率さよりも、君の沈黙の方を責めているのですよ。僕の不幸を引き起こしたあの詩をなくしたことを、もちろん君はわざとしたわけではないからです。

君はあの詩を覚えていますか？ 僕が君のために写した——そして、少々改訂した——今世紀の初めの、フェルサンという名の、あの悪名高い作者の。おそらく、それらが僕にとってどれほど重要なものかさえ、実際君には分かっていたのでしよう。僕はうかつにも、あの詩の下に自分の名前を書いてしまいました。幸い、君の名前を献辞の中には入れませんでしたし、それが君を救うことになりました。

君は、フェルサン男爵についての僕と学長との議論を笑ったことでしょう。そこで

は、僕の主張に反して、彼は詩人の存在を否定しました。あの詩が僕のものだということは何とか自白させようとしながら。僕をやり込めようと、彼は自分の辞書を参照することさえしました。そこには残念ながら、創造におけるフェルサンの業績が全部載っていたのです。例の作品以外は、ですが。

そもそも、作者であろうが模倣者であろうが、僕はもうおしまいだったのです。僕には、悔悛の古典的な場面を演じる以外の何も残されてはいませんでした。不完全痛悔から痛悔までの段階的な文句を言いながら、おまけに悔悛の涙まで流しながら。

実際のところは、僕はあまり両親の面汚しにならないことと、言うなれば、首尾よくシナゴーグに埋葬されることに関心がありました。そうして、僕はすんなりリセに受け入れられたというわけです……寄宿生として。善き神父たちの家で誰かを愛するのは、こんなふうに高くつくのです。先生方は嫉妬深いと思います。例の《尻尾を切られた狐》のお話です。

僕は次の休暇のことをよく夢に見ます。君の一家が、もう一度来てくれることをとても期待しているのです……自分の家族のように、ね。去年の夏のことともよく思い出します。あの素晴らしい夏を。それはまだ君から遠く離れた僕を元気づけてくれます。それは、僕らが二人のエンデュミオンのように、月と共に眠ったあの山の夜に、生き

続けているように思えます。本当のことを言うと、眠っていたのは君で、僕は眠る君を見ていたのですけれどね。その光景は、ド・フェルサン氏に靈感を与えるような類いのものでした。

でも、そこから詩を作るよりは、この記憶はすべて、せいぜい僕らの心の奥底に保っておくにとどめましょう。そこなら、誰も奪うことができません。アンドレがリュシアンのおそばに居続けることも、誰も妨げることができません。以前のようにキスすることも……。

この文章はジョルジュを魅了した。彼は、あの詩の事件に、アンドレが自分をまったく巻き込んでいないことを確認して満足した。学長はあの詩が見つかった場所を言わなかった。痕跡は消えている。実に素晴らしい。だいたい、アンドレは変わらず彼を愛しているのだから、リュシアンはジョルジュに対してそれほど文句はないはずだ。それに、ジョルジュはもう嫉妬深くする必要はなかった。今度は彼の方に愛する者がいたからである。この手紙が彼をこれほど喜ばせたのは、主としてそれが原因だった。手紙は、彼が自分の中に感じていた愛の言語を語っていたのだ。彼自身の今の状態と一致していたのである。

列車はS……駅を離れたところだった。あの子が乗ったはずである。ジョルジュは見たかったのだが、自分の席から離れなかった。自分を襲う異様な動揺によって、彼はその存在を確信していた。彼はリュシアンの考察をほとんど聞いていなかった。彼は、保存したことを思い出せず、なくしてもいない詩のことや、慈善事業の奉仕を厄介払いして、これこれの学友に譲る意図などに触れていた。

少しずつ、ジョルジュにあった柔らかな感じは、別のものに入れ替わっていった。彼は自分の中のそんな情熱に気づき、たじろいだ。アンドレとリュシアンのそれは、自分のに比べると大したものとは思えなかった。彼はもうあの子に怖じ気づくことはなかったが、己自身には怖じ気づいたのである。彼は、あの少年が列車の中に実際にはいないことと、聖クロードに戻らないことを願った。その考えは、彼には嫌なものに思われ、同時に道理にかなったものにも思われた。彼はその友情に自分の希望のすべてをかけ、またそれが決して実現しないことも望んでいた。まるでそれが、リュシアンとアンドレが苦しんだのよりもずっと深刻なめ事を起こすに違いない、とでもいうように。

聖クロードの方へと再び登っていく間、モリスがジョルジュに手紙の礼を言いに来た。遠くでは、あのメッセージの真の受取人が走り回っていた。彼が、雪玉を投げ、

土手をよじ登り、凍った溝を滑り、そのコレージュに遊びながら戻って行くのが見えた。思いもしない苦難が彼を待ち構えているかもしれない場所へ。

規則書の指示どおり、《学長先生と先生方に新年の祝詞を言うために》、共同体は下級生の教室に集まった。

哲学クラスの生徒の一人が祝詞を読んだ。それに対し、学長はベネディクト会のモットー「祈れ働け」の注解によって答えた。ジョルジュは中庭に近い四列目の端で、自分の心を虜にしたあの子を識別できた。背中しか見ることができず、時々横顔が見えるだけだった。それでも彼は魅了された。

「祈りは、決して仕事の妨げにはなりません」学長が言った。「それが、私たちがあなた方にできるだけお祈りをさせる理由です。神に捧げる時間は、決して無駄にはなりません。まだただの羊飼いだった聖ライムンド・ノンナートが祈っているとき、一人の天使が羊の群れの寝ずの番をして、狼たちを追いついてくれたのです」

皆、聖体降福式に赴いた。ジョルジュは、下級生たちの所では座席の変更があったのではないかと考えただけで不安になった。あの子が前と同じ場所にひざまずいたとき、彼は天に感謝した。

祭服は白かったが、その年の最初の聖体降福式は、十月の最初のミサと似たり寄っ

たりの愛の色だった。いつものような、祭壇の赤いランプだけではなかった。休暇の間に、身廊に馬槽が作られており、それを照らすランプはすべて赤色だった。それらはジョルジュに、自分の手帳に書き留めた『雅歌』の一節を思い起こさせた。《愛は死のように強く、熱情は地獄のように頑なで、そのきらめきは火と炎のきらめきです》。愛と友情、それは同じものではないのか？ フェルサンの詩もこう言っていた。《友……、愛……》。聖歌隊が歌っていたクリスマス・キャロルは、愛しか歌っていなかった。聖霊は、以前の新学期の歌の中では《愛の聖霊》だった。愛に言及しない講話と静修の訓示など、ほとんどなかった。当時、ジョルジュはその言葉に苦笑したが、今なら理解できる。それは空しく浪費されることはなかったというわけだ。

そう、この瞬間、歌と明かりと香の中で、彼はその最後の不安を消滅させたのである。彼は、運命が自分の目の前に置いた者を、命ある美の挑戦を、勝ち取ることを心に誓った。

翌朝、彼は、敬意を表して特に身だしなみに気を付けたその相手が、ベンチに見えないことに驚いた。正面の特別席に、ローゾン神父のミサに仕えている彼が見えた。それは、休暇前の何週間かの間、モーリスがその神父と一緒にいて、同じ役割を果た

していたのを思い起こさせた。だが、そんな長い間の奉仕は異例のことだった。その子のそれは、おそらく一日か、あるいはせいぜい一週間くらいのものだろう。

少なくとも、ミサは赤かった（聖インノケンティウスの八日間）。昨夜のきざしは追認された。しかし、その一方で、聖インノケンティウスのこの祝日にはどんな前兆があるというのか？ ローゾン神父の年少の従者は、リュシアンが聖ブラシドの聖体降福式に姿を見せたように、運命の皮肉によって現れただけではないのか？ 彼はおそらくまだ純真無垢なのだろうが、聖者であるにはあまりにも美しすぎた。

聖体拝領が長引く公的なミサの前に私的なミサが終わったため、ジョルジュは特別席を見守った。彼はあの子がすぐ降りてくることを望み、ローゾン神父に耐えがたい冗漫さを感じた。やがて神父が終了したとき、ジョルジュは、あの子があまり急いで蠟燭を消したり祭壇に覆いをかぶせたりしないのを残念に思った。神父が法衣を取り、再び祈りに耽り始める間、小さな頭が手すりの後ろを、これを最後にもう一度通り過ぎた。特別席のドアが開き、それから交差廊のそれも開いて、あの子が忍び足で学友たちに合流しに来た。彼は、参加したばかりのミサによって、自分が学長のミサへの参加を免除されることを考えもしないのだ。彼は注意深く最後の祈りを読んでいた。その少し後で、クラケットが鳴り響いた——退場である。

同じ場面は翌日も繰り返され、特別席の劇も続いた。その次の日も、土曜日もまた同じ場面であった。ただ、その前日の夜には若干の補償がもたらされた。月の最初の金曜日ということで、慣例に従って聖体の秘跡の聖体降福式があったのだ。ジョルジュは、自分の欲望を満たすための、たっぷり二十分の時間を過ごすことができた。

それに、彼は安心した。あの子はたぶん一週間でお役御免だ。この日曜日、公現祭の読誦ミサが、あの子があの上で参加する最後になるだろう。すでに幸運の予兆として、その大ミサの間じゅう、彼は自分の席にいたのである。テキストには《Ecce advent……彼は来ている！》とあった。しかし、ジョルジュが黄金と乳香と没薬もつやくを振りまいても無駄である。彼は博士のあらゆる贈り物も、視線の恩寵も得られなかった。彼は本を落とすことで、また咳の発作が起こったふりをすることで注目されようとしたが、無駄だった。彼は、あの子がいろいろな面を見せてくれることで満足しなければならなかった。きれいな体の線、上品な姿勢、優雅な身のこなし、祈りを口にする唇の動き。

彼は、天の事柄に対するそれほどの情熱を、少し悔しがった。だがそんなことはどうでもかまわない。古代の英雄のように、彼は自分が神々にさえ戦いを挑む用意があることを感じた。

彼はギリシャ語翻訳で首席になった。だが彼にとっては、自分のクラスの結果は五年生のそれよりもはるかに重要性が乏しいのだった。彼は待っていた。食堂を心地よい甘美さで包むことになる、ある名前を。モティエ弟は二十二人中七位だった。いづれにしても、悪くはなかった。

晩課では不首尾に終わったが、ジョルジュは信じたままだった。（友情は天才のようなものだ）彼は独り言を言った。（長い忍耐なんだから）

今日の盛儀の間は、助祭たちや侍者たちが絶えず間に入り、彼の磁力を阻んでいた。平日の読誦ミサでは、彼を妨げるものはなかった。ジョルジュは日曜日が早く終わってほしくて仕方なかった。彼は、あの子の微笑みを得るために一週間を過ごし、日付を確かめるためにカレンダーを注視した。

哀れなりュシアン！ 危ないところだった。ジョルジュは記念日に彼の幸福を祈ることを忘れそうになったのだ。今日、一月八日は、公現祭のみならず、聖ルキアヌスの日でもあった。その朝の黙想では、学長は東方の三博士のことしか話さなかった。

翌日は、刑場に赴きつつ、自分の迫害者の若い息子を回心させた、アンティオキアの聖ユリアヌスに関することであった。その少年は、その光景を見物するために学校を出て、突然本を放り出して自分のチュニクを剥ぎ取り、殉教者を追って彼とともに

に死んだのだった。

こうしてこれが、教徒たちのまったただ中で、間もなく誘惑の企てが始まることへの支援となった。

うわ、何だっていうんだ！ 賭けはまだ長引いていた。あの子が、永遠なる者ローゾン神父が永遠なる赤い祭服を着るのをまた手伝っているのだ。ジョルジュは失望し、怒り狂っただけではない。彼は不安になり始めた。これほどの精勤は、彼が司祭職を志すことを示しているのではないか？ 彼は、リュシアンを対象にして、初めの四半期に彼に起こったことの繰り返しを、この運命の嘲弄の中に見た。彼は悲しい思いでいっぱいになった。非常に熱烈に願う幸福というものは、捕まえられないもののように思われた。いや、違う。そのような不公平は許されない！

最初の休憩時間で、彼は次の数学の授業の情報をモーリスに尋ねた。そして、まるでそれが先生の話題であると思わせるように、彼はこう付け加えた。

「親愛なる神父様に、君はもう仕えないのかい？」

「もうごめんだね」モーリスは答えた。「かわいい弟に譲ったよ」

「交替でやるわけ？」

「もうたくさん！ 僕は僕の月にやって、彼は彼の月にやっているわけさ。それを望

んだのは母親なんだ。母は元々とても信心深くてね、自分の二人の子供がミサに仕えるのが好きなんだよ。一人は一月、もう一人は十二月。それが、ローゼン神父にアーメンを言いつつ、僕らが年を始めて閉じる理由さ——彼は僕らの両親の親友なんだよ」

「素晴らしい！　僕が君なら、彼のことは信用しないな。それと気付く前に、君らは剃髪式をやる羽目になるだろう。メロヴィング王家の息子たちみたいに」

「安心してくれ」モーリスが楽しそうに言った。「僕らは王の息子じゃなくて医者の子息だし、ちゃんとした判断力だってある。それにしても、僕らの運命に関心を持ってくれるなんて、君はずいぶん親切なんだな。お礼に、リシュパンの詩を貸してあげるよ」

ジョルジュはすでに話を聞いていたが、その詩は詩集からの抜粋だった。『愛撫』という詩集である。聞いたところでは、それらは特定のメンバーの間で回されており、彼らのミサ典書の余白に書き写されているという。ミサの間に暗記するためである——十七世紀にはふさわしくない自由度だ。続く世紀の方がよほど不自由なのである。今まで、ジョルジュはその詩にほとんど興味を示さなかった。彼はロスタンとフェルサンの段階にとどまっていた。それにもかかわらず、彼はモーリスの自尊心に配慮することを望み、好意にお礼を言った。

「教室で」彼は付け加えた。「君にこっそり勉強を教えてあげるよ」

毎朝のミサの間、それ以来彼はもう不安になるような関心を抱くことなく、特別席を見つめた。あの子がひざまずくと手すりを彼を隠したが、ジョルジュには、彼が立って見えるようになるまでどれくらい時間がかかるかが分かった。《グローリア》、福音書朗読、奉献文唱、再び聖体拝領の後、等々。

このささやかな日々の楽しみが彼をじっと我慢させ、それ以降礼拝堂は彼の生活の特別席となった。彼は第三金曜日の十字架の道行きの儀式を報酬のように待ち焦がれ、静修の時間が毎晩あるように、聖体降福式が毎晩あればいいのと思った。今では、日曜日の儀式よりも心地よいと思えるものは何もなかった。大ミサにしても晩課にしても、以前はひどくうんざりするものだと感じたものだが、望みどおり、ひどく短く感じるようになっていたのである。

食堂でも同様に、彼の願いは変化していた。彼は、リュシアンとのおしゃべりが可能になるというのに、「神への感謝」をあまり好まなくなつた。むしろ、最も退屈な朗読の静謐さを好んだ。そのときは、会話の喧噪の中にいるよりも、あの子の近くにいたような気がしたのである。それで、彼はできるだけ頻繁に、彼のテーブルの方へ

と顔を向けた。そこでも、日曜日の昼食の前に、彼はほかのすべてが報われるような読み上げを聞いた。その週の作文課題リストの中の、あるシンプルな姓のそれである。それはかつて神々のそれのように、彼が時々繰り返し口にした姓であった。その二つの音節が兄を指すとき、それらは彼には平凡なものに思われ、関心を引かないままだった。年少者の方を指すときには、それは鼓動を速くさせ、またこの上なく魅力的なものに思われた。それでも彼は、この状況下で、名が姓とともに言われないことを残念に思った。彼はあの子のそれも噛みしめて味わいたかったのだが、モーリスに尋ねる勇気は出なかった。彼は時に、その名がジュールジュであることを想像して楽しんだ。

その年少者の位置は、作文においては常に称賛すべきものだったのだが、ジュールジュは彼の前に来る者が我慢できなかった。彼は、自分のと比べればその者たちの優位などくだらないと評価した。その代わり、彼はかつてないほど自分が一位になることに執着した。そのようにして、あの子の記憶に自分自身の名前が刻み込まれることを、またそれが彼に好ましさを感じさせることをさえ期待したのである。成功を捧げる相手を知ってからというものの、彼は新たな熱意で勉強した。まったく反対に、数学においての彼は不要な努力を放棄し、依然としてずっと優秀な成績を収めているということで、リュシアンが書いたものをかなり忠実に書き写した。

フランス語小論文の課題は、次のようなものだった。《あなたは外国旅行の機会を与えられている。どの国を選ぶか？ その理由は？》ジョルジュはギリシャを選んだ。書きながら、彼は神話や古代彫刻やアレクサンドロスの硬貨のことを思い、その英雄のイメージさえ呼び起こした。だが、彼はとりわけ、ギリシャ人たちが崇拜していた美しさが今日人の形を取っているようなあの子を思い浮かべた。

その点数は素晴らしく、アルマジロはこんな評価を付けた。「生き生きとして、面白い。あなたの情熱は熟慮抑制されていますね。これからも常に理性をもって、分別を弁えるようにしましょう」結局のところ、《友の肖像》のモデルとしてリュシアンを選択したことを批判した後で、彼は新しい《情熱》を是認したというわけである。

これは、ジョルジュがアカデミーへの立候補のために必要とされる五つの課題を、学長に提出することが可能となったということでもあった。支障がなければ、その威厳ある学会は二月の初めに彼に門戸を開くことになるだろう。選抜結果はその月の第一日曜日に食堂で発表される——ジョルジュはここに来てから、その儀式を一度しか見たことがなかった。栄光以外の何ものでもない。選ばれた者はコレージュの全員から拍手を浴び、立ち上がってアカデミー新入会員の謝辞として頭を下げるのである。二月は素晴らしいことでいっぱいな予感がした。あの子は特別席から降りるだろ

う。ジョルジュがアカデミー会員になることは、正規の方法で彼の前に姿を見せるためなのだ。聖クロードのアカデミーは、もはやアカデミー・フランセーズの前段階としてではなく、一人の子供の注意を引くために設立されているものにほかならないのであった。

学長の所から戻るとき、ジョルジュは廊下を進まずに中庭を通った。彼は年少組の自習室に近づいた。窓々が夜の中に明るい染みを作っている。

ストーブの湯気が窓ガラスを曇らせていたが、少なくともいちばん近くの顔は識別させてくれていた。これなら見られることなく見ることができる。二番目の窓のそばで、モリスの弟が何かを書いていた。何て姿勢が良いのだろう！ 画家の前でポーズを取っていると言われそうだ。同時にまったくの自然体でもある。輝くような片脚が机の外側の通路の方に外れていた。彼は作業を中断し、ペン軸を軽く噛んで、熟考するために頭を上げた。ひらめきは来なかった。彼はゆっくりと窓の方を向いた。その目は、そうとは知らずにジョルジュのそれに注がれた。

自習室に戻ると、ジョルジュは自分の歓びを文学的に表現しなくなった。靈感をくれたのは彼だった。彼は《友の肖像》のことを思い浮かべた。不首尾に終わったあの肖像である。この機会は、あれをやり直すのによい。今度は《心の友》のことを本当

に書けるだろう。彼はリュシアンに対する遠慮から、彼が下書きを走り書きするときの省略文字を活用した。それは彼以外の誰にも判読できない。仕上がりには不満はなかった。その《友の肖像》は、レスピアのアムールの肖像そのものとなった。これならアカデミーの榮譽に値する唯一の課題となっただろうに。

こうしたもののすべてが本当でも、何を達成したというのか？ 学年が障壁を築いて

division

いるのだ。《分離》という語も、今のジョルジュにはよく理解できた。たとえあの子と自分とが礼拝堂で向き合って永遠の時を過ごしたとしても、二人が知り合うという事態には決してなるまい。ジョルジュは、上級生の場所で二人が一緒になる来年のことを考えて慰めを得ようとしたのだが、それが起こるのはかなり先の話である。だいたい、二人のどちらもが聖クロードに戻るかどうかなど、分からないではないか？（何らかの理由でそれが妨げられる可能性がある——一月の新学期、学友の何人かは姿を見せなかったのだ）。そして二人が一緒にいる今、何とわずかな言葉を交わすことにも成功していいのだ！ 自習室の窓ガラスや内陣の敷石以上の障害は何もないのに、二人はそれを乗り越えられない。あの子は神父になりたいんじゃないかと思ったあの朝同様、ジョルジュは再び疑い始めた。彼はリュシアンに打ち明けようかとも思ったが、それは諦めた。彼の苦悩は誰かと分かち合うようなものではないし、そのうえ、一人

で救済手段を見つける以上のメリットはないのではなからうか？

彼は、試せることをすべて試したかった。幸運な遭遇があり得ると想像したため、彼は自習時間の間じゅう、先生方を順番に訪ね始めた。彼は読んでいない本を借りに行き、彼にとってどうでもいいような解説を求めた。蚕の飼育を習得したいと言って、歴史と宗教教育の老先生のマニア心を満足させた。それについて、その神父が好んで引用したド・カトルファージュ氏の説を聞き、実験用マウスへの情熱までも装った。

だが何よりも彼は、良心の咎めをでっち上げることにした。ローゾン神父に自由に面会できるからである——モティエ弟が親しく神父の所に行っているのは疑いない。その訪問の後でさえ、ジョルジュは二階の廊下で待った。壁面の、日付が記載され、額縁を付けられた集合写真に感心するふりをしながら。いちばん最近の日付は三年前で、その写真にあの子は見えなかった。

医務室でいろいろな治療が受けられる休憩時間の間、彼はいろいろな口実のもとにそこに行ける機会を逃さなかった。彼はリュシアンと一緒に治療した霜焼けのことを思った。その病気でそこに行く機会を使い尽くしてしまったことで、ほとんど彼を恨みそうになった。

ついに、あの子が礼拝堂の下の席にそのまま留まる日が来た。ジョルジュの歓喜は

大きく、あらゆる悩みを忘れるほどだった。二月一日。聖イグナティオスの日。この導入部においては、聖イグナティオスが聖ユリアヌスの代理を務めたわけだ。ジョルジュは、ある古い歌のリフレインを思い出した。《ファリエール大統領の娘の結婚式》。いとこが見つけた歌で、その結婚式の招待客と見なされる名前を面白がる内容である。その中にこんな部分がある。

祖父はイグナス。

いとこはパンクラス

おじはセレスタン

「二世代も経てば」ジョルジュはリリアーナに言った。「君の名前もきつと滑稽になるだろうね」

当然、聖イグナティオスは赤い服を着ていた。

あの子は相変わらず真剣に、祈りを唱え、祭壇を凝視していた。絶えず自分を見つめている者を決して見るまいと決意しているかのように。クリスマスの、出発の日の朝のように、聖体拝領のとき、彼らの間にはリュシアンしかいなかった。だが今もま

た、その障害を跳び越える手段は何もなかった。当のリュシアンに助言を請うことを控えてから、ジョルジュは彼の好意を願い出ることを拒んでいた。それは今なお、自尊心によるのと同じくらいに秘密への嗜好のためなのであった。

翌日の木曜日、学長は、子息がアカデミー会員に選ばれたことを、その月の外出のためにやって来たサール夫妻に知らせた。ジョルジュはうれしかった。あの子は礼拝堂では頑として自分を見てはくれないけれども、アカデミー会員が発表されるときには、彼も食堂で自分を見ることを余儀なくされるはずだ。

日曜日。公現祭に続く日曜日ごとの宗教装飾は緑色であったが、その色が偽りとなることはなさそうだった。希望がこの日、実現し始めたのだ。

名前が響きわたったばかりのジョルジュは挨拶のために立ち上がった。彼は学長の方を向いた。しかし同時に、彼は自分の勝利を献呈する者をじっと見つめた。そして、この記念すべき日の晩、初めてのアカデミーの会合に新しい仲間とともに赴きつつ、彼が考えていたのは依然としてあの子のことだった。彼はあらゆる栄光よりもさらに上にあの子を置いていたけれども、その栄光を彼に見て知ってもらえればと思っていた。彼は、マルクがそれに無関心なままではいられなかったことを納得した。

アカデミー会員たちは中庭を堂々と横断し、大階段も堂々と昇った。だがそれは控

え室のドアの所では雑踏となった。この諸氏は肘掛け椅子を占領したかったのだ。八つの椅子に対して、彼らは十五人いる。そして、その椅子はとても固いのだが、優位を示しており、それら以外にはベンチしかないのであった。

離れた所では、三人の哲学科の学生が、その競争を軽蔑したように見つめていた。全員が椅子にありついたとき、彼らが学長殿のドアを叩き、自分たちの家のように静かに入って行った。彼らは書斎の中の、空いている三つの肘掛け椅子の特権を有していたのだ。それはスプリング付きである。彼らの仲間たちが後に続き、ある者は自分の肘掛け椅子を運び、別の者はベンチを運んだ。

皆、ひざまずいてロザリオを十回唱え、それから立ち上がると、学長は選ばれし者たちの中にジョルジュを確認し、免状を手渡した。それは、ルイ十四世時代の偉人たちを描いたメダイオンで飾られた、ブリストル紙の証書であった。太陽王の紋章がアカデミー会員の名前の上で輝いている。学長は歓迎の長広舌の代わりに数語を発しただけだった。彼は、コレージュの誇りとなった二人の昔の生徒の名を挙げることを忘れたかった。彼らは、フランス学士院に入る前は、聖クロードのアカデミー会員だったのだ。

皆、座った。ジョルジュはベンチで、あまりくつろげなかった。彼は、パレ・マザ

ランにおいて、アナトール・フランスの肘掛け椅子がもっと快適であることを願った。学長は自作のソネットを読んだ。《農婦》。その発表のとき、何人かのアカデミー会員がいたずらっぽい微笑を浮かべながら顔を見合わせた。ジョルジュはすでに、学長が休暇の間にソネットを作っていることを知っていた。アカデミーの会合中にそれらを次々と読み上げることも。《農婦》はこのように終わっていた。

君が、夜、畑や家畜小屋から帰ると、

君の徳の香りが家に満ちる。

次に、あるアカデミー会員が、モントシエ侯爵夫人のことを話した。家畜小屋から、一飛びでランブイエ館へと移ったのだ。それからボッシュエに言及し、この会合の後半はその対象だけで構成された。

誰かが《コレージュ・ド・ナヴァールの偉大な指導者、ニコラス・コルネの追悼の辞》の音読を始めた。学長は、そのテキストが本物ではないという説に反対していた。彼はそれにユニークな美しさを見いだしており、名誉を回復すべきだというのである。おそらく彼は、コレージュの学長が、偉大な指導者という肩書きで品格を与えられ、

モーの驚の雄弁術を鼓舞したことを喜んでいても、それがコレージュの生徒も同じように感動させると思っていたのである。

彼は自分の肘掛け椅子にどっかり腰を下ろしたが、用心深い視線をほかの者たちに巡らせた。脚を組み、厚い靴下を見せつけた。その手は砲弾の破片から彫った銅のペーパーナイフを弄び、そこにはこう彫られていた。《神とフランス》。時々、肘掛け椅子の肘掛けを叩いて音読を中止させた。彼はある語句を強調し、意図を解説し、それぞれの回をこのフレーズで締めくくった。「ですよね、皆さん？」全員が同意のしるしに頭を縦に振った。

その追悼の辞に対する反発から、ジョルジュは『愛撫』の詩を思った。モーリスが読ませてくれ、あまり趣味が良いとは思えなかった詩集である。

私に必要な愛、私を燃やす愛……

それでも、リシュパンはボシユエと同じくアカデミー・フランセーズ会員だったのだ。研究熱心な青春時代、彼らは聖クロードのアカデミーのような所に所属していたのだろうか？

翌日のミサで、あの子がちらっと見てくれた。彼はもちろん、前日の英雄を識別したのである。アカデミー会員の発表で何も省略されなかった以上、彼はジョルジュの姓も名も知っている。そして、もし幸運にも、彼がジョルジョという名であった場合は、たぶん彼も二人の名を結び付けることだろう。だが、あの子と向かい合って、ジョルジュはまったく別のことを考えていた。間もなくある聖体拝領で、より関心のある結び付きをしようというのだ。身体のものである。リュシアンは慈善行為を放り出しており、その代償として、暫定的に多少の熱意を見せる必要があった。彼は一週間ずっとミサの答唱をしたいと言い、今日その奉仕を始めたばかりであった。彼の不在のおかげで、聖体拝領台での彼の二人の隣人は、じかに接する隣人どうしとなるだろう。ジョルジュは、自分を満たすこの予想の魅力に心を委ねた。彼は、最後には確実な優位性を手に入れるつもりだった。どんな手段によるかはまだ分からなかったが、この唯一の機会を逃すつもりがないことは分かっていた。二人の運命は、ここ数朝の間のごく短い時間に起こることに支配されるのだ。

今回は不意のことで、ジョルジュは何の準備もなく聖体拝領に赴いた。そのうえあの子は、新しい変化があるということに気付くには、おそらくあまりにも深く内省し

ているようだった。

翌日ジョルジュは、ラベンダー香水を髪にたっぷりかけることで彼の注意を引くことを期待したが、ラベンダー香水が、誠心誠意心から聖体拝領をしているあの子に對してどんな効果があるというのか？ 正しいのはあの子の方である。いかがわしい目的のため、人がこのような場所とこのような時間をあえて利用しようとするなど、想像もできないのだから。ジョルジュ自身、その良心の呵責に無感覚になるにはいささかの苦勞を感じていた。「でも」彼は思った。「目的は手段を正当化する」自分のせいじゃない。この方法しかないのだ。にもかかわらず、彼は、あの子が自分と同じように考えてくれるかどうかを疑い、口説き落とす代わりに眉をひそめさせてしまうことを恐れた。今や彼は、毎回の聖体拝領を不安とともに待っていた。望んだ喜びは再び不安に変わっていたのである。

水曜日。ジョルジュは聖体拝領布を持ち上げるときにあの子の肘に触れた。そして翌日は、もっととはっきりしたやり方で繰り返した。彼は、自分の存在が無視され続けていることに、傷ついたように感じた。

金曜日——それは二月十日で、彼はその日を書き留めた——彼は非常な厳肅さに打ち勝つ決心をしていた。この種の抵抗は、彼をいらだたせた。彼は、最終的に誰が勝

利するのを見届けようと決めていた。闘争が、守護天使とテスピアのアムールとの間で始まった。

聖体拝領の前に、彼は皮肉っぽい愛情をもって、聖処女スコラスティカのミサの音節を聞き漏らすことなく、もぐもぐと唱える祈りに没頭するその子を凝視した。ああ！ からかわれようとしている、穢れなき小学生よ！ 彼はいつでも子羊を抱いているように見えるから、人にそれを一発撃たせる原因となってしまうのだ。

彼の近くにひざまずこうとしたあの子を、ジョルジュは力を入れて腕で押した。彼は自分が完全に平静であることを自覚し、それからあまり混乱を招くことはない想像していたこの動作を、強いてやってしまったことが怖くなった。これまでの朝のモーションなど、ほんの些細なものだった。強調された今朝のモーションは、ほとんど冒瀆の判決を彼に下した。ジョルジュは、敬意を表す作法に従って両手で顔を覆うため、早くベンチに戻りたかった。そして指の間から見るのだ。あの子はたぶん混乱で赤くなっているだろう。

うえ、何てことだ！ まだ祈っているじゃないか！ 何という純粋な魂！ 人は生身の肉体を持つ存在しか揺さぶることができない。冒瀆は不発に終わっていた。しかし、ジョルジュがこの出来事についてさらに多くのことを考えるより前に、彼はあの子

が目をぱっと見開き、自分を見つめるのを見た。その視線には驚きの色があつた——好意の见えない驚きである。今夜のデモンストレーションは明らかに誤解されていた。ド・サール氏はかなりの不良生徒であると判断されたのだ。ジョルジュは失望したが、その反応がさほど深刻なものではなかったことを喜んだ。それが彼を解放した。

土曜日。二日以内にリュシアンが復帰していれば、この幸福な聖体拝領を終わらせてしまっていたところである。すべての曖昧さを一掃するために浪費できる時間はもうなかった。ジョルジュは腕で何度かあの子を素早く小突いた。あの子はそれに、またもやしつけがなっていないという特徴を見て取るだけに終わるだろうか？ 彼がベンチに戻ったとき、さらに黙想する前にさえ、彼は氣になつてゐるような様子でジョルジュを眺め回した。おそらく彼は、このからかいが何らかの意味を持つと氣付き始めてゐるのだ。

締めくくりのために、ジョルジュは違つた意思表示を思い描いていた。可能な限り疑念を残さないようなやり方である。

彼が聖体拝領台にとどまつてゐる間じゅう、彼は膝をあの子のそれに向かつてゆっくり揺り動かした。彼はベッドから降りるとすぐにこの姿勢を試していたのであつた。完璧に成功だつた。自分の場所に戻るとすぐ、あの子は正面にゐる奇妙な人間をじつ

と見つめた。終了までの間、彼らの視線は一度ならず合った。ジョルジュは微笑みかけることも考えたが、微笑み返してもらえないことが怖かった。もし自分の意図がまったく理解されていなければ、微笑みは先の振る舞いの言い訳にはならない。まずは言う必要がある。それでこそ、微笑みはあの子の唇にもひとりでに浮かぶことだろう。

大ミサは、最終的には彼らを対決させた。ジョルジュは時々、七旬節の主日の祈りを何行か、平静を装って読んでいた。事実、学長が言うように、《七旬節の時期》に入っていたのだ。それまでの日曜日の緑の祭服は、悔悛を表す紫の祭服に取って代わられた。だがそれどころか、希望は、ジョルジュの心にかつてないほど強く取り憑いていた。その日のテキストに『深き淵より』が記載されていたことは、彼のためではなかった。彼はむしろ歌ったかもしれない。アレルヤ！ おお、パイアン！ エヴォエ、バッカス！

しかし、あの子は、神聖なものをあんなにも尊重しない少年のことをどう思っただろうか？ 彼にとつては無礼なだけの——奇妙な無礼さしかない少年を？ どう思うが、彼はそのアカデミー会員について、今では先週の日曜日よりもよく知るようになっていたのである。

ジョルジュは作文でまた一位になった。彼はそれを喜んだ。あの子は、いつも変わ

らず輝いている生徒で、兄のクラスの首席で、きれいな名前の保持者である者に関心を抱かせたのだから、それをたいへんな誇りとするほかはないだろう。あの子の方はどうかというと、自分の陣営で二位になっていた。その席次は大きな進歩を見せていて、ジョルジュはそれがフランス語作文であったことを考えて楽しんだ。彼はそれを新しい有利な徴候と見た。まるでミューズが彼らの交流を取り仕切る運命であるかのように。

一時間の休憩の間、彼はそれでもなお不安に苛まれていた。規則が日曜日ごとに与えてくれる許可に従い、弟に会いに行ったモーリスが戻るのを、彼は見張っていた。今までジョルジュは、こうした訪問が好きだった。彼がそこからあの子の何かしらを持ち帰って来るように思われたのである。ところが彼は、今日のそれが行われないことを望んでいた。あの駆け引きを、あの子が話さないでいてくれるかどうかを訝ったためである。間もなく、彼の不安が杞憂であったことを、モーリスの態度が証明した。秘密は守られた。だがそれは、果たして暗黙の了解によるものか、それとも恥じらいによるものか？

その週の月曜朝の聖体拝領で、ジョルジュはもはやあの子の傍らにすることはなかった。その後で、あの子は驚いた表情で見つめていた。彼にその変化の理由を推測

させるため、ジョルジュは定位置に戻って来たリュシアンの方を向いた。あの子は、その隣人に自分たちの陰謀を隠す必要があると推測してくれたようだ。彼が自主的に、それを兄に隠してくれたように。いずれにせよ、その顔の表情は、待っている証拠のそれであった。

もちろん、あの子はすでにジョルジュと戯れたのだが、どれほどまでにそれを自覚しているのだろうか？ 彼の視線はしばしばこちらに向けられたが、依然として不確かだった。それでも、うわべの取り繕いはミサへと続くべきであるにもかかわらず、彼はやや注意力散漫になっているように見えた。ジョルジュは、取るに足りないというわけではない別の細部を見つけた。あの気まぐれな巻き毛が、今日は見事に櫛を入れられていたのだ。

翌日、聖体拝領台で、ジョルジュはリュシアンを乱暴に押しのけ、彼の前を通り過ぎることに成功した。

「一体どうしたんだ？」後者が囁いた。

「少し変化が必要だよ。『華麗なる変奏曲』さ」

あの子は、その戦術が大胆さなしにはあり得ないことを理解し、それが報酬に値すると判断したに違いなかった。自分のベンチに戻ってから、彼は微笑んだ。どれほど

の喜びで、ジョルジュはその微笑を受け入れ、微笑み返したとか！ 彼は、目的にたどり着いたことと、この問題を巧妙に段階を踏んで調整したことに、多少の誇らしさも感じていた。勝利の陶醉を感じ、自分の勝利の中でも最も貴重なものであると感じた。人生の中に、たった今、生まれ直したかのように思われた。

同時に、彼は表面上は共同体に復帰した。もう微笑むことなくあの子と目を合わせることができない以上、以後、彼は祈りを読むという義務を負うことになる。聖体拝領で、あの子のそばのポジションを取り戻すことさえ避けなければならない。接触が果たされたのだから、二人して注目を浴びる危険を冒したところで何になるだろう？ 自分たちの高ぶりやときめきを冷ますことになってもいい。必要不可欠な成果は手に入れたのだ。

その週は穏やかに過ぎ去った。ジョルジュの視線は毎朝あの子のそれを捕らえ、それからきっぱりと祈禱書を読む時間となる。

彼は、日々の典礼の中に愛の糧を見つけることを好んだ。それまでは一時的な娯楽だったことが、決まりごとになった。神聖な物事に、今では人間味が感じられる。彼は次の言葉を自分のものにした。その日の聖人の固有式文である。《あなたは宝石の

冠を私の頭に置きました。あるいは《あなたの輝きと美に、来たれ、勝利と君臨よ》。彼があまり高く評価しなかった別の文もあった。《主を畏れる者は幸いである！》。《色欲は罪を生み、罪はそれが犯されるとき死を生む》。これらのテキストを読んだあの子は、自分と同じ見地でそれらを見たのだろうか？　そしてどれにいちばん心を動かしたのだろうか？

六旬節の主日の日曜日。ジョルジュは礼拝堂に行く途中で、その日曜日の名称を口述試験のように繰り返した。学長が朝の講話の間に二、三回、不正確に発音していた名称である。

六旬節の主日のために、あの子は完全な新品のように見える赤いネクタイを着けていた。彼は、日曜日にジョルジュが、それと同じものを青い制服とともに身に着けることに気付いたに違いなかった。だが彼は、自分が愛の色をこれ見よがしに身に着けていたということは、おそらく知らなかったであろう。聖体拝領前の短い間、彼は本を閉じてジョルジュを真面目な顔で見つめた——彼はこの時間を期待していたのだろうか？

聖体拝領台で、彼は、火曜日同様押しのけられたリュシアンの後ろを素早く通ったが、リュシアンの肘が突き出されてジョルジュに接触した。白い布が、それを支える

彼らの両手の上でわずかに震えた。

ジョルジュは、自分の心を奪った喜びが、ある省察によって損なわれたことを残念に思った。子供っぽいいたずらじゃないか？ たぶんそれが、リュシアンが自分自身のために採択した仮説なのだろう。彼はこの新しい出来事に何の注解もなかったのだから。

あの子は歴史の作文で三位になり、ジョルジュは二位だった。彼らはクラス内でそれぞれ序列を落とした。

ジョルジュは続く一連の科目を思い（地理、数学、自然科学）、それらが自分をして、坂を滑り落とさせ続けることになると思った——それらの場合、写すのは困難なのだ。少なくとも、名声を必要としていたまさにそのとき、作文の順位がその足しになっていたことは、何と幸運だったことだろう！ 今の彼は、それを気にしなくなっていた。コレージュの栄冠は、宝石の冠の前では見えなくなってしまうこともあるのだ。

結果の読み上げが終わったとき、彼はあの子の方を向いた。二人とも、同じ考えを持っていた。それ以後、食堂でも彼らの微笑みが認められた。

一時間休憩の最初、リュシアンはピアノの方に行ったばかりで、ジョルジュはいつもの面会に行こうとしたモーリスを目で追った。そのとき、弟がこちらにやって来る

のを見ながら、彼は自分が幻覺の虜になったように感じた。

モリスも劣らず驚いたようだった。彼は、こんなにも熱意を示されることに明らかに慣れていなかった。彼は中庭の隅に弟を連れて行き、手紙を読ませた。しかし、弟はしばしば頭を上げた。礼拝堂のように、誰かを探しているように。弟は最後にちらっとジョルジュを見たが、微笑みかけることはなかった。

ジョルジュは思い切って近づくことができなかった。あまりにも真剣な視線に押しとどめられたのだが、その視線が、同じ真剣さで再び彼に注がれたとき、その意味が理解できた。あの子は、ただ彼のためにやって来たのだ。今朝のをいっそう重々しくしたその振る舞いは、彼のことを、自分を魅了した者であるとはっきり認めていた。

モリスはいらいらし始め、手紙を取り返すような素振りをした。弟はなかなか読み終えなかった。おそらくまったく読んでなくて、（彼が来てくれなかったら、僕は？それでも、彼がしなければならぬことは、僕がしたことよりも難しくはない）と不安に思っているのだろう。

ジョルジュは、リュシアンが彼に預けていたボールを持ち、それを必要とされる方向へ投げ、それを取りに走った。モリスはそれを捕球し、彼に返そうとしたが、あの子は素早い動作でそれを落とさせた。この見せかけの茶目っ気が、ジョルジュの戦

略への反応であつた。こうすれば、彼らのすぐそばでボールを拾い上げることが出来るわけだ。

「君の弟さん？」彼はその子を指してモーリスに尋ねた。

「えっ！ 知り合いじゃなかったのか？ 同じネクタイを着けているのに？」

二人とも赤くなつた。彼らのネクタイの色が頬の上に移ってしまった。

モーリスはもつたいぶつてジョルジュに言つた。

「紹介しよう。弟のアレクサンドルだ。すぐ上級生になる。五年生で、十二歳半。《いとも神聖なる処女》の会員。今日歴史で三位になって兄に恥をかかせてくれたよ」

「それから君に」彼はその子に言つた。「紹介する。サール侯爵家とその他の領地の推定相続人。アカデミー会員資格保持者で、習慣的な首席コレクターだ」

三人は笑い出した。ジョルジュはその子の手を握つた。彼はそのほっそりした指に触れてどぎまぎした。多くの視線、多くの思いによつてすでに心に抱いてきたその顔を、彼は心に刻み込んだ。二月の太陽が、冷たい光線でその子を包んでいた。今のジョルジュにはとてもよく見えているその目は、その髪と同じくらい金色だった。扱いにくそうな髪の毛が垂れかかっているのは、まるで目にヴェールがかかっているようだった。その子は感じの良い頭の動きで、それを後ろに跳ねのけた。それは、舌先で唇の

輝きに磨きをかけたばかりの彼の美しさを、完全なものにするためのものなのだろうか？

ジョルジュは、彼を会話に向かわせるほど自分が大胆だとは思えなかった。モーリスの方を向きながら、機知に富んだことを何も思いつかずに、彼は言った。

「君も歴史でもっといい位置に、きつと行けると思うよ」

その子は陽光に輝く明るい目で兄を見て、それからよく転がる軽やかな声でこんな言葉を口にした。

「そんなことを言ってくれるなんて、彼は優しいね」

散歩の間じゅう、ジョルジュはひどく陽気だった。彼はリュシアンにキスしたかった。彼はアンドレとの夏期休暇の、刺激的な詳細を要求した。しかし、リュシアンは再び寡黙になっており、クリスマスの手紙で十分だろうと主張した。その注文が喚起されるのを避けたがっているようだった。彼は親しげだが慎重を期している。ジョルジュは彼に、これからは平穩でいられるよ、と言いたかった。彼がキスされるとしても、それは彼自身のためではない。

日曜日のソネットは、《ナイチンゲール》という題だった。

銀色の夜のしじまの中で……

ニコラス・コルネの追悼の辞の音読が続けられていた間、学長は音読係に活力がないことに気付いた。

「さあさあ、誰それさん」彼は言った。「あなたの朗読にもう少し生命を注ぎ込んでください」

すぐに彼はそれ以上我慢できなくなった。その本をつかむと、自分でその本文を朗読した。あたかもモーの驚と一緒に窓から飛び立ってしまうかのように。

今日は最初のときよりもずっと、ジョルジュはこの集会の中であの子を見たいと思っていた。しかしそれは、彼の存在によって、この集会をまずまず耐えられるものにするためであった。彼なしでは、アカデミーなど哀れな茶番でしかなく、その取るに足りない榮譽が自分の頭上で魅力を放つにすぎない。そもそも、たぶん彼は入会に値する力を持っている。彼はフランス語作文で二位だったし、彼のクラスは、このサークルに登場し得る最低学年で、そこでは目下たった一人の生徒を数えるだけなのだ。モティエ弟は、完全にうってつけの候補者ではないか？ 彼のためのキャンペー

ンが張られ、彼の五つの課題それぞれに千の美点が見いだされることになれば。ジョルジュは、彼に氣に入られるためだけでなく、彼をそこに入れる許可を得るためにアカデミーに入ったということになるだろう。こんなことを考えて、彼はまたもや肘掛け椅子を奪われたままになっていて、状態を慰めた。もしアレクサンドルが仲間になつたなら、二人ともベンチを選んで、そこで隣り合うことになるだろうとさえ自分に言い聞かせた。

集会の後、ジョルジュは学友たちと別れて下級生の自習室沿いに歩いた。おなじみの窓の前でつかの間足を止め、勉強中のあの子を見つめた。今回は夢のイメージの問題ではなく、現実のそれなのだ。そこにいて、並ぶ者のない美しさを持つ者は、自分の友人なのである。

アカデミー会員を作り出すのを待つ間、ジョルジュは修道会員になることを決めた。それは大して難しいことではない。その会長に対する敬意からモティエ弟がマリアの子供に違いないということ、どうして思いつかないことがあるのか？ そのことをモリスから教えてもらう必要がある。修道会の会合は、アカデミーのその後だ。ジョルジュは、リュシアンが礼拝堂に行こうとしているのを見たとき、

「ねえ」と言った。「僕は次の日曜日、君の後に付いていく。ローゾンが、僕を君ら

のものにするために、また嫌がらせを始めたんだ。僕の宗教教育の賞が危機に瀕しているという気がするよ」

自習の最後の三十分に何を使っているかわからず、彼はウェルギリウスを持ち出して、明日の翻訳の準備をした。ニスとエウリュアルスのエピソードの結末で、それはあまり彼の心をとらえたことのないものだった。翻訳しつつ、彼は最初の詩句を思い出した。それは若いエウリュアルスの美しさに関するもので、彼が愛するあの子の顔立ちが、その古典の文章に光を当てようとしていた。

友情によって結び付いたこの二人の英雄の運命は、彼を高揚させた。彼には、エウリュアルスの胸の上のニススのように死ぬよりも素晴らしいと思えるものはなかった。その感情は彼自身を驚かせた。ラテン語を翻訳しながら泣きたくなるなど、思ってもみなかった。

就寝時、ジョルジュは、散歩で疲れたから、舎監がいなくなる前にきつと寝入ってしまうと思う、と言っておいた。世にも稀なる一日を、ありふれたおしゃべりで終えたくはなかったのだ。自分と、急に第二の自分となったあの子と、二人だけになることが待ち遠しかった。午後の間じゅう、魔法のようなヴィジョンが背景にあったのだ。共同寝室の静けさの中で、それは前面に出てきて、自由に見つめることができるよう

になった。

ジョルジュは、報酬となった時間を再度体験した。彼は、自分の肘に当たったあの小さな肘や、自分の手の中にあつたあの小さな手を、もう一度感じていた。ついにあんなに近くであの子の視線を読み取り、ついにあの子の声の響きを知ることになった。彼はこの言葉を繰り返した。「そんなことを言ってくれるなんて、彼は優しいね」とりわけ、ついに自分の心が満足できるような名前を知つたのだ。その名前は、自分の領域とあの子とを結び付けるのにうってつけであるように思われ、また伝説の深淵へといざなうかのごとく人生の深淵へと自分をいざなうように思われた。

それは、たくさんの奇跡にふさわしい結末だった。自宅のメダル陳列箱にはアレクサンドロスの硬貨があり、極めて美しいものだった。それはジョルジュにギリシャの課題へのインスピレーションを与えた。『古代史』の中にこんな魅惑的な一節があつた。《ピリッポスの息子アレクサンドロスは、その美しきで有名であつた……》。ピリッポスの息子？ 医者の子？ アレクサンドロスはユーピテルの息子だ。神託ではそう言っていた。

ジョルジュは、あの子の名前が自分のと異なつていたことを残念に思わなかつた。あの子の名前の方がずっと美しいからである。彼は、ド・サールよりもモティエとい

う姓を好ましくさえ思った。だが、モリスが自分の身分を言ってくれたことに悪い気はしなかった。それは、ある者の目に、多少は自分を高く映してくれたことだろう。それとは違ったふうに自分を幻惑し、またその前で自分が混乱状態に陥った者の目になつてゐる、という自分の意志を伝えに行つた。その善良なる神父は勝ち誇つたような微笑みを浮かべ、優しく手を取つた。

「あなたのために、その決心をうれしく思います」彼は言つた。「それはあなたに素晴らしい幸福を味わせてくれるでしょう。確かに、あなたの場所は私たちの中にあるということ、私はもう長いこと考えていたわけですが、あなたの待機の理由に敬意を表さざるを得なかつたのです。尊重すべき理由ですが、私に言わせれば、あまりにも生真面目すぎますけれどね。だから私は、私もまた待ちました。しかしながら私のことは問題ではない。聖処女がどんなに長いこと待っているのかが、私には不安だつたのです。マリアの子供となることによってしか、善き生徒になることや、その状態を維持することはできません。それは同時に、信心の真の完成と、学業の成果を確実なものにする最高の方法なのです。あの気の毒なブラジャンを思い出してください。あの熱意にもかかわらず、彼は決して修道会に入ることに同意しませんでした。

何ということでしょう！ 彼は病氣になり、一年間の学業を失っているのです。

あの挑戦的言動が罰せられたのだと言う場合、私は軽々しい判決を下さないよう気を付けるつもりですが、この偶然の一致には我ながら感嘆しているのです。認めるかどうかはあなたの自由ですが、さらにもう一つあるのです。どんなに曇っていても、太陽が土曜日に輝かないことは決してありません。一瞬だけでもね。で、その日は聖処女に割り当てられていますよね？ その場合も、原因が結果からはるかに隔たっている以上、結論を下すのは幼稚で、そのうえ軽率なことでしょうが、それもまた偶然の一致ですし、私はそれにも同じように感嘆しているだけなのですよ」

ジョルジュは、自分が次の日曜日、礼拝堂での集会に参加することがあるかどうかを尋ねた。

「あなたがそれほど熱心であるのなら」神父は答えた。「私はあなたの観察期間の免除を引き受けましょう。ですから、あなたは次の日曜日からすぐに来てかまいません。普通は、まずは志願者として気楽に迎えられ、次に最終的な資格と正規の手続きとをもつて、三か月後によりやく受け入れられるということを、あなたも知らないわけではないですよね。私はあなたのために、その最終期限の方も短縮してあげましょう」彼はテーブルの上にあったカレンダーを参照した。

「今日は二月二十日です。従って、規則によれば、あなたの入会は五月二十一日の日曜日に持ち越されます。とはいえ、思うのですが、あなたは、自分がその子供になりたがっている会に捧げられた月に、それが行われればいいと思っっているに違いありません。ですから、私は四月三十日の日曜日に、正式にあなたを迎え入れることにします。マリアの月への入り口の日です」

彼は付け足した。

「もちろん、あなたがそれほどの信頼を裏切らないよう心がけるだろうことを、私は疑いません。私があなたの仮入会期間を二週間以上も短縮することを忘れないでくださいね。私はそんなことをしたことがありませんし、誰にも言わないようお願いします。嫉妬を引き起こさないためにね」

神父は立ち上がり、本棚から二冊の小冊子を取り出してジョルジュに渡した。

「こちらは」彼は言った。『マリアの子供マニユアル』で、注釈は不要です。こちらが私が書いた小論で、一九一一年にルーアンで、パリノー・アカデミーの前で賞をもらったものです。こんなコンクール課題だったのです。《いとも神聖なる処女について、何よりもまず考えられること。ただし、無原罪の懐胎には限らないものとする》。手前味噌でなく、アカデミー会員であるあなたが、そこから二重の利益を得られるの

は確かです。それに、天の元后が同じく知性の元后でもあることは、あなたもご存じですよ。以前、あなたが好きなこの古代作家たちの時代、ウェルギリウスが予言的に彼女のこと書いています。《ポリオへの牧歌》の中で……。『今や乙女は立ち返り……』

今、神父は答案を調べていた。

「いいですね」彼は言った。「これを確認したかったです。あなたのこの前の数学課題はとても良い出来です。それにしても、一月からのあなたの進歩には感動しますよ。自分でも少しはびっくりしませんか？ 私があなたに言ったことをよく考えてみてください」

ジョルジュはうれしかった。状況は望みどおりに展開していくし、人は自分の道具になっていく。彼の幸運は、ローゾン神父のように待つこと以外、何の苦痛も与えなかった。これからは、すべてが隠された同じ目標に自分を導くように思われた。

踊り場に来ると、アレクサンドルが大急ぎで自分の方に昇って来るのが見えた。あれほど長いこと空しく期待していたこの遭遇が、今では当然のもののように思われた。運命の微笑みが彼を驚かせることは、もうなかった。

「そんなに急いでどこへ？」彼はその子に言った。

「ローゾン神父の所です」

「僕はちょうど彼の所から戻ったところだよ。でも、もし君が迷惑でなければ、一緒に引き返そう」

彼らは一緒に行った。ジョルジュは思った。（先生の誰かにあったり会わなければいいんだけど）ただ廊下の壁に並んだ写真の中の、昔の生徒たちだけが、彼らを通り過ぎるのを見つめていた。ジョルジュは彼らを指し示しながら言った。

「僕は、この人たちが今日僕を見ているのを誇らしく思うよ」

彼はその子に、君のために修道会に入れてもらったばかりだということを教えようと思ったが、すでに昔の生徒たちについてお世辞を言っている。節度を弁えないのは良くない。

神父の部屋の前に来たとき、彼はアレクサンドルに手を差し伸べ、さよならを言った。それから、二人ともよく知っていることを、伏せた目でひそやかに付け加えた。

「僕らは友達だよね？」

「はい」その子は囁き声で答えた。

自習室に戻ると、ジョルジュは、あまりにも感傷的すぎ、またあまり実践的でなかったことで、自分を責めた。この会話は日曜日のそれと同じくらい魅力的だったの

に、事はあまり前進していない。アレクサンドルは、運動場に一度行ったが、きっともう戻って来ない。ジョルジュは今日彼と偶然出会ったけれども、きっともう出会うことはない。

このような機会は利用すべきだった。会う約束を取り付けるか、せめて文通を約束するくらいのことはすべきだったのだ。会う約束についての考えには少したじろいだものの、もう一つの方は検討に値するように思われた。彼は短信を送ることにした。

彼は自習中、そうした秘密のメッセージが、届け先まで手から手へと渡っていくことを考えた。彼はそれを誰にも託したくなかったが、自分の手でアレクサンドルに渡すには、修道会を考えるほかはない。しかし、それは自分たちそれぞれの座席次第だし、そのうえ日曜日はずっと先だ。実際は、確実に自分たちが会える機会は、リュシアンを犠牲にする聖体拝領台にとどまっていた。あの子は、肘と肘が接することを受け入れてくれたわけだし、短信だって簡単に受け入れてくれそうではないか？ 危険はジョルジュを煽り立てさえした。彼はあの子がどんな気質を持っているのか見ようと思った。時間は、窓ガラスを割り、敷石を焼却するようになっていた。

翌日は一日中、彼はメッセージをどうしようか、あれこれ夢想した。それと比べれば、学習課題などはよほど簡単なように思われた。最初はどう書いたものか。《アレ

クサンドル」か、それとも《アレックス》みたいな愛称か？ 次のように呼んだとしたら滑稽ではないだろうか？《我が親愛なる少年》とか《我が最愛の君》とか？ それは彼に、「最愛の君」の詩を思い出させた。その夜の自習時間中、彼は下書きノートの一ページに、自分の名前とアレクサンドルのそれとを混ぜ合わせて遊んだ。彼は心の中で、たくさんのフレーズをこねくり回した。

彼は、これは翌日に渡すことになるのだと、傲慢にも心に誓った。しかるに、それは翌々日の夜、自習時間の終わり頃になっても依然として少しも書いていなかった。もうすぐ学長が、宗教書読解とともにそこに現れるだろう。ジョルジュはもう迷わなかった。彼は紙をつかむと機械的に書いた。

我が最愛の君よ、私は夜明けから

あなたを探していました……

等々

彼は以前リュシアンに提供したこの詩をもう一度使うことをかなり恥ずかしいと思ったが、あの子こそ本当の「最愛の君」ではないか？ リュシアンは全然真剣に取

り合ってくれなかった。彼のアレクサンドルに比しての地位など、ルキウス・ウェルスの、別のアレクサンドル大王に比してのそれであった。

ジョルジュは署名した。ほかのどんな理由よりも文学への敬意のために、リュシアンの手帳にはそれをしなかったのだ。今回の彼は、自分のサインの中に不正を償う勇氣の印を見ることを好んだ。予想外の事態が起こったら、これが自分を放校に追い込むことになるだろう。たとえエドモン・ロスタンがフェルサン男爵よりも学長によく知られていたとしても、だ。そうなくても仕方がない。彼は一か八かの勝負に出た。

聖体拝領の前に、彼は組んだ指の間の、あの子に宛てた短信を指し示した。アレクサンドルはまったく驚いた様子を見せなかった。ジョルジュは隣人に挨拶せずに通り過ぎた後、そのメッセージをあの子にそつと渡した。

彼は、ややしつこく繰り返しすぎの嫌いがあるこの無法行為に対するリュシアンの批判を恐れた。しかし、彼はそれに気付かないふりをしているようだった。にもかかわらず、ジョルジュは、あの子が慎重を期して、返事をくれるまでに何日間かは過ぎ去るに任せてほしいと願った。彼は、あの子がそれを推察してくれたものと安心していった。

ところが、日曜日の朝、礼拝堂に行ってみると、アレクサンドルが期待を抱かせる

ような微笑みを浮かべ、その直後、自分の赤いネクタイの上に白い四角い紙を一瞬置いたのだ。万事がうまくいきすぎる。

もしルヴェール氏に見られることを恐れなかったなら、ジョルジュは祈禱書の中でその手紙を開いたところだろう。しかしその直後、彼は本の中でいちばん分厚いもの——ウェルギリウス——を自習室に持って行き、その中でその小さな紙片をそっと開いた。筆跡は繊細で緻密だった。かわいらしく描かれた花輪模様が、その文章を取り囲んでいた。

ジョルジュへ

すてきな詩をありがとう。

ずっとあなたのことを思っています。

五年生を留年しないように一生懸命勉強しています。

そうすれば来年は一緒にいられますね。

それはとてもすてきなことでしょ、あなたが僕を好きで、

僕があなたを好きだから。

署名の後に、こんな追伸が見えた。「モーリスには言わないでくださいね」。それからこんな括弧が。（踏み損なつた韻が一箇所あります）。

ジョルジュは、模様と紙の折り目と青いインクを、最後にもう一度凝視した。ほこりの一粒を吹き飛ばすかのように、彼は身を屈め、その手紙にキスした。彼はそれを丁寧に折り畳むと、レスピアのアムールの写真と重ねるように財布の中に入れた。

慣習に従つて、次に彼は両親に手紙を書いた。彼は両親に宛てて、かつてこんなに愛情を込めた手紙を書いた記憶はなかった。「親愛なるパパとママ」。いつもならば開始はこうなるのだが、彼はこう書いた。「最愛の、いとしいパパとママ」。そこには自習室を照らす最初の陽光や、遠くに聞こえる鶏の鳴き声についての、詩的なフレーズがあった。今日結果が発表されるであろう、今週行われた数学の試験についても、勝利は確実であるかのように彼は書いた。とはいふものの、自分で自分本来の能力を削いでしまっている以上、彼は自分の席次が最悪なものかもしれないことを覚悟していた——ローゾン神父は、自分が聖処女を不快にしたと疑つたのではないだろうか、と自問さえした。最後には、通常の節度を跳び越えて、彼は「百万のキス」を送つたのである。

無意識にはあつたが、彼はその試験について誤りを書いたことにはならなかった。正午、八番目に名を呼ばれたことで、彼は非常に驚いた。おそらくローゾン神父は、修道会員になると問題がうまく解けるようになるということを、彼に確認させたかったのだろう。この場合、ジョルジュはアレクサンドルのために修道会に入っただから、席次は彼のおかげである。そのうえ、今日は彼よりも順位が下であることがうれしかった。あの子は五位だったのである。

アカデミーで、ジョルジュは肘掛け椅子を確保できたけれども、それでもなおうんざりするような冗長さを覚えた。彼は学長のソネットも、パスカルの回心も、コレージュ・ド・ナヴァールの偉大な指導者も、演題全部を悪魔に売り渡していた。彼は一つのことしか考えられなかった。修道会の時間である。彼は、修道会志願者という自分の称号を見事に正当化したのである。

自習室に戻ったすぐ後で、ローゾン神父がドアの闕しきみの所に姿を見せた。それはマリアの子供たちのための出発の合図だった。

アレクサンドルの目は、幸福な驚きで輝いていた。しかし、ジョルジュがその集会で手紙の交換をすることを期待しなかったのは適切だった。認可された修道会員たちは身廊の左側にいて、その他の者たちは右側にいたのだ。説教の間、ジョルジュは身

を屈めてアレクサンドルの横顔を盗み見た。

その晩、リュシアンが彼に言った。

「たとえ散歩で疲れているとしても、あんまり早く、すぐには眠らないでくれ」

彼はいたずらっぽい表情をしていて、ジョルジュはすぐに秘密が嗅ぎ付けられたことを理解した。アレクサンドルの問題だろう。たぶんリュシアンは、真っ昼間からこの繊細なテーマに取り組む勇気がなかったのだ。薄明かりの中、低い声で尋問する方がより大胆になれると感じたのである。ジョルジュはあの子とここで二人きりになることを中止した。

「ひどいじゃないか」リュシアンは言った。「君は僕を信用してないな。まるで友達じゃなくて、裏切り者みたいな扱いだ。今朝君が手紙を読んでいるのを、僕が見なかったとでも思うのか？ その様子を見れば、聖体拝領での決まった場所の変更、君の修道会への入会、それから僕が傍受した微笑、これらの出来事の理由を見抜くことくらい、僕には難しいことじゃなかった。たくさんのことを隠していただけじゃない。さらに加えて『華麗なる変奏曲』でもって僕を馬鹿にした。思いやりのかけらもないじゃないか」

ジョルジュは、リュシアンが話したばかりのその声色に感動していた。彼は、あつ

て当然の厳しい叱責や、耐えられそうにない痛烈な冷やかしを恐れていたのだ。

「分かったよ、親愛なるリュシアン君」彼は言った。「僕らは今もこれからもずっと友達だ。もし僕がひどくつまらない隠し事をしたというのなら、誓って言うけれど、それは警戒心からしたのでは絶対にない。そうしたかったってことと、それを楽しんでいたってことと、あとはちょっと恥ずかしかったってことなんだよ。さらには、僕が君とのものの以外の友情を探しているってことを君に教えたら、君が怒るんじゃないかと心配していたんだ」

「でも僕は君に腹なんか立ててない！ それどころか、それで君の気分が落ち着いているんだから、僕は満足だ」

ジョルジュはその言葉に笑い、リュシアンは続けた。

「しかも君は、僕にも別の友達がいることをよく知っている。僕は、アンドレが霜焼けのために僕とやった方法にはいつも感心していたけれど、別の学年の男子にアタックする君の大胆さにはもっとずっと感心しているよ。何も言わずに、僕は君の手管を見ていたけれども、実に面白かった。見物するのは順番ってわけさ。アンドレと僕のことについて、君は最初の自分の批判を覚えているかい？　ところで、モティエ弟の名前は何て言うんだ？」

それを口に出すと、ジョルジュはこの上なく甘美な歓びを覚えた。そして、すべての経緯^{けいゐ}を話すにつれて——《最愛の君》の詩を再現することはせずに——、彼は自分の慎重さが歓びを奪っていたことを残念に思った。彼は一瞬、リュシアンとそれを話しているという事実が、この歓びと関係しているのではないかと自問した。いや！そんなことはどうでもいい！関係のない別の記憶が今の感銘に付け加わることもあるだろうし、それらは今の感銘が比類ない状態にいるのを妨げることはない。

リュシアンは、アレクサンドルとアンドレは同じイニシャルを持ち、その二つの名前は語源的に似通っているということを指摘した。彼は、時には手紙を渡してもいいと申し出た。

「もし君が詩人なら」彼は言った。「感情を向けるのに必要なものを持つことになる。アレクサンドルの名前があれば、全オリンポスが手助けになる。それはもう、ロスタンをコピーされるだけの僕のようにではない」

「君はフェルサンをコピーされる方がいいよね」ジョルジュが言った。

リュシアンは微笑んだだけだった。彼は、アレクサンドルの誕生日と誕生時刻と出生場所を知りたがった。次の休暇中に彼のホロスコープを作らせるためである。ジョルジュの出生図も同じく作成され、その星回りによって、アンドレとリュシアンのよ

うな名高い友人たちの中に、二人を共に登録することになるかどうかを見ることができらう。

アカデミーの厳格な会合が四旬節中日に開かれた。それはジョルジュには、主として追悼の辞の読解とルイ十四世時代の宗教に専念している仲間に対し、かなり不作法に思われた。だがそれでも、彼は——始まったばかりのこの三月の、二十八日——その日の発言者の一人になることを、喜んで受け入れた。それはアレクサンドルの前で自分が目立てる新しい機会になるだろう。しかしまた、何というテーマを押し付けられたことか！《ランブイエ館》とは！アレクサンドルによって描かれた花輪の方が、ジュリーの花輪よりも彼の心に訴えかけた。

自分の課題に役立つ書物に目を通しながら、彼は愛の地図の写真を見た。リュシアンによって提案された星図の代わりに、彼はそのもう一つの地図で自分の愛を照合したかった。スキュデリー嬢は、彼女の嘲笑すべき兄が文学においての手引き者ではなかったのに比べ、愛情においての手引き者だったのではないか？ 後者、その兄のインシャルは、ジョルジュのリストに記入されているのだが、友情の歴史におけるアン Dre とアレクサンドルのインシャル同様、その点について示していない。アレクサン

ドルなら、ランブイエ館のポレクサンドルの輝きを奪ったであろうことは、まったく明らかだ。彼があゝの時代の若い貴族の服を着たならば、魅力的だったことだろう。彼はどんな時代にも存在できる。

愛の地図は、容易に読めるものではなかった。その国を進むには良い目が必要とされる。ジョルジュは、自分の道程の中にその名前がすでに記載されているか、事前にその名前が含まれている宿泊地を捜し出した。《きれいな詩》、《恋文》と《艶書》、《誠実》、《気高い心》、《実直》、《熱心》、《細やかな気遣い》、《大いなる奉仕》、《感受性》と《不変の友愛》。

彼は、《愛》のそれぞれの町で、市民権を等しく要求することができた。《敬意による愛》、《感謝による愛》、《嗜好による愛》。嗜好は彼をアレクサンドルの方に向け、敬意は彼をアレクサンドルに結び付け、そして彼らの感謝は相互的だった。今では彼らの愛情とそれは、同じくらいなのだから。

いくつかの場所は、自分たちの道程で決して出くわすことはないものだ。《無頓着》、《むらつ気》、《無節操》、《失念》、《無関心》、《無分別》、《不実》、《意地悪》、《反目》。

早い話が、こんなものはどれも、ひどく面白くないものだ。が、彼の想像力を喚起させるための、別の二つの名称がそこにあったのも確かである。《危険の海》と《未

知の土地》である。

ジョルジュとリュシアンは、日中はアレクサンドルのことを決して話さなかった。そのテーマは夜の対談に取っておかれた。彼らが初めてそれに取りかかったときのよう。目には見えないが、あの子もその小さな対話テーブルの、彼らの間に着席した。その時間と場所は、彼に新しい魅惑を与えた。

今のジョルジュは、アレクサンドルのこと以外は話題にならなければいいのと思っていたが、リュシアンはいつでもアンドレのイメージをあの子のそれと混同していた。代わる代わる、彼らは自分たちのヒーローを称賛した。牧歌を交代で歌う羊飼いのように。しかし、彼らの叙情性は異なっていた。ジョルジュのそれには、強い誠実さと少ない冗長さしかあり得ない。リュシアンは逆に、今ではその隣人に関しては警戒心を解き、最初の会話のときよりもさらに自由に自分をさらけ出していた。そしてジョルジュは、最近、彼がかつては引き出したがっていたその打ち明け話に困惑させられていた。彼がアレクサンドルのことを話しているその場所は、去年はアンドレのものだった。シニズムとともに詳細を得るに至ったその友情は、自分の友情とは趣が異なるということを彼は知った。たいていの場合、彼は各々がそれぞれの秘密を秘めておかなかったことを後悔したが、時にはリュシアンのそれを妬むこともあった。

こうした秘密に興味を引かせることができるのは、必ずリュシアンなのだった。ここでのほかの友情の中に偶然そういう秘密を嗅ぎ付けたとき、それらは彼に嫌悪感を催させただけだった。しかし、その同じ嫌悪感が、幻のように思われる日々もあった。あるときは理想と純粹さに夢中になり、あるときは逆の例に惹き付けられるように感じられるのだ。彼は『雅歌』の表現を思い出した。「閉じた園……、封じた泉……」。彼は、その園のすべての果実を思いのままに摘めるのではないか？　そして、もし望むならば、その澄んだ水を濁らせることもできるのではないか？

休憩時間の間、ピアノの所へ行くことを口実に、彼は下級生の庭に忍び込んだ。

その庭に至る廊下の端で、彼は立ち止まった。アレクサンドルを見かけ、名を呼べることを期待して、彼は少し待った。しかし、あの子は現れず、ジョルジュはそこから先を冒険する勇氣はなかった。

そこを離れたとき、彼は完全に間抜けになったような気がした。二人が廊下で遭遇したあの日のように。己の決断力の欠乏を説明しようと努めつつ、もしかしたら、自分が足踏みをしていたのは舎監を恐れてのことではないかと自問した。

彼は、自分は誰にも気兼ねなどしないし、自分が好きな者は、相手が誰だろうと自

分を立ち向かわせるに足るはずなのだと結論づけた。してみると、自分を依然として怖じ気づかせているのは、あの子だけなのである。ジョルジュは、手紙で彼をだましたという感覚の中に、その余計な羞恥心の原因を見つけたように思った。自分は、あの子に近づく前に、借り物の文章とは違うものを送るべきだったのだ。

その夜の自習時間、彼は書いた——今度は一氣に——明日の聖体拝領中に彼に渡すつもり、次のような文章を。

親愛なるアレクサンドル

僕は日曜日以來、君の手紙の甘やかな歓びの中で生きている。それはいつも僕の心であり、君の存在をより完全なものにしてくれる。コレージュ、それはすなわち君の存在だ。その時間は、僕にとって、君の存在をもたらすのに定められているものでしかない。君は寢室から僕の方に降りてくる。朝のイメージのように。昼には君という糧を与えられ、夜、君が遠ざかるのは、僕とさらに良い再会を果たすためとは思えない。君はそれを知っているかい？

朝食のとき、アレクサンドルは彼に微笑んだ。ジョルジュはその微笑みに満足した。

今の聖体拝領台でのリュシアンは、必要とされる場合は遠慮して場所を譲るようになっていた。今日、アレクサンドルは、渡すべき手紙があるという合図をし、ジョルジュは礼拝堂内でそれを読んだ。そこには、大きな文字で書かれた三つの語しかなかった。「*Les suis heureux*」
「僕は幸せです」

ジョルジュもまた幸せだった。だが、リュシアンがその手紙を見せてほしいと頼んだとき、彼は見せたくはなかった。すでに最初のそれを避けているのだ。

「他愛ないことしか書いてないよ」彼は言った。「僕だけには大事なことでしょ」
彼にとっては、もはやその他愛ないことしか大事ではなかったのである。時には、彼は一日のうちにアレクサンドルの二つのメッセージを繰り返した。その味わいを楽しむためである。自習や授業の最中には、彼が両親に書いていた陽光や鶏の鳴き声と同じく、それらは突然心に差し込んでくるのだった。

逆に、夜のベッドの中では、彼はそれに高揚作用よりも鎮静作用を感じた。その言葉はもはやきらめきではなく、勝利の賛歌でもなかった。それらは耳元で囁かれ、感じ取れないほどゆっくりと夢の言葉になっていく。それらは彼の眠る魂を見守る小さ

な終夜灯であつた。寢室を浸す光を放つそのような。

ジョルジュは、一時間休憩の間に下級生の居場所をあらためて散策しようと、金曜日を待った。彼は、ヴィーナスがその日を祝つて、彼に保護を授けることを期待した。初めての肘の触れ合いでアレクサンドルの注意を引いたのは、二月の金曜日だったのだ。神話の神を多少は信じるのも当然ではないか？

彼は髪にたっぷりと香水を付けて、まず食堂に行った。彼は自分がより生き生きとし、より大胆になったと感じた。

あの日躊躇した例の廊下の端に着いたとき、ちょうど正面に、木に寄りかかったアレクサンドルが見えた。彼は小石を拾い、その子の方に投げた。後者は彼の方を見て、喜色満面といった様子を見せた。しかし、彼がジョルジュの方に進む足取りは、まるで彼に敬意を表するかのような荘重な緩慢さであつた。

「君とおしゃべりしに来たよ。もしあまり危険なことがなければ、だけどね」。ジョルジュは言つた。

その子は、軽蔑的なジェスチャーで、片手で自分のスータンの裾を持ち、遠くで生徒たちとボール遊びをしている舎監を指し示した。

「あの木々の下に行きましょう」彼は言った。「あそこならとても快適です」

二人は庭に沿った小さな壁の下に座った。ジョルジュは、彼が衆目を引かなかったことに驚いた。彼が思っていたよりも、いつでももっと事は容易だったのだ。

「もし舎監が僕らに説明を求めたら」それでも、彼は不承不承言った。「僕は修道会の要件で来たんだって答えることにしよう」

「でっち上げるなら別の内容にしましょう」アレクサンドルは笑いながら言った。「僕らの問題にローゾン神父を巻き込まない方がいいと思うんです」

「彼がもう十分に巻き込まれているのは確かだよ。僕は一月の間、彼には我慢できなかった。特別席で、毎朝君を引き止めていたんだからね」

「おお！ 彼は僕を息子のように愛していると言っているんです。僕、休み時間に体が冷えると、彼の所に暖まりに行くんです。すると彼は蜂蜜入りのハーブティーを淹れてくれます。僕は彼の告解者なんですよ。あなたは？」

「もちろん僕もだよ。でも僕にはハーブティーでもてなしてなんかくれないな。ところでさ、君に、これからすぐに僕を『君』で呼んでくれるようお願いしたいんだけど」
「いいですとも！ じゃあ君は、僕が最初の手紙に書いた、韻を踏み損なった詩を覚えてる？」

……あなたが僕を好きで、
僕があなたを好きだから。

（……ピュイスク・ヴ・メモ
エ・ク・ジュ・ヴゼーム）

あれはこうすべきだったんだよ。

……君が僕を好きで、
僕が君を好きだから。

（……ピュイスク・テュ・メモ
エ・ク・ジュ・テーム）

けれども僕、素晴らしい詩人で、アカデミー会員でもある人を、『君』呼ばわりする勇気がなかったんだ」

「僕ら二人のうちでより素晴らしい詩人は君の方さ。君に不足しているのは、もっぱ

らアカデミー会員になるってことだ。君は候補者になれるような得点をフランス語で取ったことがあるかい？ いずれにしても、もし舎監が僕らの方に来るならば、こう言えればいい。僕はアカデミーの密使ですって」

その子は記憶の中を探してみた。紹介すべきものは二つの文章しか思いつかなかった。前学期の課題の《種まき》と、彼に第二席をもたらしした作文の《ヘクトールの死》である。

ジョルジュはアカデミーの資格集めを早めるための手助けを申し出た。アレクサンドルに伝えられるテーマについて、彼が計画や下書きを素早く作ってあげようというのだ。しかしその子は、彼にお礼を言った後で、自分は決して人のものを模倣することとはしないと答えた。

「それにしても」彼は付け加えた。「僕、そんなに頭は良くないよ。君の詩の中にも分らないことがあったくらいだし。例えば、

あなたの名は主だったあらゆる香油を撒いたよう

ってどういう意味？」

「それは聖書ふうの文体さ」ジョルジュは言った。「というか、その文体の模倣だね。『重要なあらゆる香水』などの表現も同じことだ。《雅歌》の最初にこのフレーズが見つかると（学をひけらかして申し訳ないけれど）。『その素晴らしい香水のために、愛するあなたの名は撒き散らされた香油です』」

その子は笑い出した。

「君の詩は^{苦勞の跡が感じられる}ランプ油の臭いにするって、僕らの先生ならそう言うだろうね。でも君は、君の方は、香水の匂いにするよ。それに、僕、その香水が好き。僕はある日、聖体拝領のテーブルに向かったときに、それに気付いたよ」

「これはラベンダーさ」ジョルジュは言った。

彼が根気よく組み上げていた骨組みにおいては、何も失われていなかった。また一方、その詩の感動的なからかいは、彼を魅了した。それによって、自分の欺瞞が贖罪を果たされたように思われた。にもかかわらず、その欺瞞は彼には親しいものだった。アレクサンドルは、リュシアンのように、その詩が彼の自作ではないことも、それが女性が口にしたものであることも、一瞬も想像しなかった。

「僕、暗記しているんだ」その子は言った。「寝る前に君の詩を繰り返すんだけど、それは眠るためじゃない。礼拝堂でも、君を見るときはいつもね。そのうえ、この前

フランス語の授業で、ヴィクトル・ユゴーの暗唱をやったんだ。『我が父よ、その英雄……』僕、最初に指されてさ、ちょうど君のことを考えていたときにだよ。で、『我が父よ……』って言う代わりに、『我が最愛の君よ……』って言っちゃったんだ。どんな騒ぎになったか、想像してみてよ。僕、最初の言葉がそうなっているお祈りを思い浮かべていたところだったんです、って言って謝った。それって、本当のことじゃない？　だって僕、真っ赤な嘘はつけないから」

彼は立ち止まり、それから微笑んで言った。

「もし君が来ると分かっていたなら、赤いネクタイを着けて来たのに。友達からそれを買ったの。君と同じものを身に着けるためだよ」

「気を付けて！」ジョルジュは言った。「それは火の色だ。火傷するのは怖くない？」少し前から、彼は自分のそばで壁にもたれているその子の手を、指先で愛撫していた。そして、その手は彼の手を優しくつかみにきて、少しずつ力を込め、やがて力いっぱいそれを握った。

寝室で、ジョルジュはリュシアンに、今日の午後の幸福な訪問を話した。アレクサンドルについての話の中には、常に省略があった。今回は、詩の解説だけでなく、手

の握りのことがそれに該当した。ジョルジュは、静修の講話の間に一緒にやった動作をリュシアンに思い出させたくなかった。

「会う約束をしたのかい？」後者が尋ねた。

「いや、でも彼はあそこで、また僕の方に来ることができるだろう。舎監は僕を見なかったしね」

「君は変わった友人だよ！ 本当に好き合っているなら、休憩時間の最中以外に会いたいと思うものだろう。もっと詩的なデートのためにいい場所を教えてやるよ。高台の上の温室だ。偉大なる聖クロードの洞窟の上の。あそこは知られていない。アンドレと僕は、二人でそこにたびたび行ったものさ」

こうしてジョルジュは、自分が初めて逢い引きをするという見通しの前にいることを知った——彼には、今の自分は確実にリュシアンの助言に従うことが分かっていた。その可能性は、彼が最初は遠ざけていたものだったが、すでにそれは彼のすぐ近くに迫っていたのである。彼はその温室を見たことがあったが、外見しか知らなかった。ブラジャンが、そこが自分の話し相手の友情を守ることになることも、リュシアンのそれをすでに守っていたことも、どちらも想像だにせずに教えてくれていたのであった。ジョルジュは、リュシアンの後援が自分にどんな運命をもたらすことになるのか

と自問した。リュシ안의直近の言葉が明確なイメージを伴って思い起こされた。だがそれは、彼が眠くなるのを妨げなかった。その思考の上を砂糖売りおじさんが通って行った。二、三年前に、同じ時刻にそうだったのと同じように。

今日との対照性を判定するために、彼は当時の子供っぽい心配事となったことは何だったかを追求して楽しんだ。そしてその努力が、彼をもうしばらくの間、覚醒状態に保った。猫に引っかけられたこと、ビー玉遊びでだまされたこと、インドの小説に夢中になったこと、アントルメが失敗していたこと、小間使いが間抜けだったこと——明日の朝、朝食を運んでくるとき、彼女はまた砂糖を忘れるだろうか？

これらの思い出は、彼を優しい気持ちにし、また不安にもした。彼は相変わらず子供だったし、また彼はすでに冒瀆や欺瞞や禁じられた友情の中に生きていたのである。

ジョルジュは、この四旬節の最初の日曜日ほど、大ミサを待ち遠しく思ったことはなかった。

四旬節は、六旬節の主日ほどは彼を感動させなかった。しかし、その朝の読誦ミサで、彼はアレクサンドルからこんな手紙を受け取っていた。

もうすぐ、僕は香炉持ちを務めます。僕が上級生たちのそばで撒香さんこうしたら、それは君のためなのです。

その子は、内陣の、ほかの侍者たちの間に到着したところで、彼を信頼し、彼との秘密に力を得て落ち着いているようだった。

一月の新学期以来、彼はこうした典礼の務めを果たしていなかった。ジョルジュは、彼と一緒に仕えている者たちや、彼に仕えているように見える者たちと彼とを比較した。司式している学長でさえ、彼のそばにいるみすぼらしい聖職者でしかなかった。このコレージュの統括者が司教の杖を演じているようなものである。アレクサンドルは、望みさえすれば教皇にもなれるだろう。過去には、彼は十五歳の枢機卿であったのかもしれない。説教師が引き合いに出す福者の一人のような。

ジョルジュは、アレクサンドルが持つ香炉を、リュシアンがアンドレのそばで持っていたのを見た日を思い出した。彼はそのときのその瞬間には憤慨したが、今はまったくそうはならなかった。ずいぶん成長したというわけだ。今度は厚かましく勝ち誇る番である。しかしながら、彼は撒香の間、注目しないようリュシアンに頼んだ。自分一人だけでその恩恵に浴することを望んだのである。

アレクサンドルは、学長に、それから身廊と下級生たちに撒香した。彼は上級生たちの方を向き、ジョルジュにまっすぐ視線を注ぐと、ほかに誰もいないかのよう、あるいは自分の友人が聖クロードの若い主君であるかのように、慣例どおり、彼に向けて三度香炉を振った。顔つきは変わらなかったが、ジョルジュは人が自分のそれを注視していいことがうれしかった。彼は動転していた。それでも、彼はアレクサンドルがこれほど大胆でいてくれたことに感謝し、自分もそうあろうと決心した。翌朝、彼は、温室で夕方六時に逢う約束をした。

校庭を横切ってから、二階から見られないように、ジョルジュは壁に沿って行った。彼は小道にたどり着き、つつがなく温室に到着した。リュシアンは正しかった。そこは素晴らしい隠れ家だった。オレンジの木箱がガラス張りの内側を遮蔽している。壺たちを支える階段状になった棚は、一方が開かれていて、その下部は危険が生じた場合に隠れやすい避難所を提供している。

ジョルジュはドアのそばで警戒した。彼は、期待したことがあり得るかどうか疑問に思った。食堂で、アレクサンドルははっきりと承諾の合図をしていたが、もしかすると席を外す許可を拒まれたかもしれない。罰を受けている可能性だってある。もし

彼が来るにしても、見られる危険のある通路を通ってしまおうのではないか？　彼は、より目立たないけれども迂回を強いられる小道を知っているのだろうか？

不意にジョルジュは胸を高鳴らせ、こちらの方向に近づく足音を聞いた。あの子が、空気ののように、優雅に現れた。まるで高台の端に魔法で着地したかのようだ。彼はいつでもこんなふうに自然で穏やかなのだ。彼は簡素な力で歩く方法を完成しているように思われた。

それでも、中に入るとすぐ、まだ近づくのをためらっているように、彼は段状棚のいちばん上によじ登った。彼は、この会合が二人の友情の中にさらに何かを足すものであることを、ちゃんと意識しているに違いなかった。

ジョルジュは壺の間を通って彼を追い、下の段の、彼の剥き出しの両脚近くに座った。彼には自分が何か言えるとは思えなかった。言葉を発すれば、魔法のような魅力を壊してしまったことだろう。彼は傷跡が星形を描いたその両膝を見つめた。今日、別の面を見せたこの少年の、存在の記念である。

彼は、その美しい両膝に頭をもたせかけた。こんなふうに眠るか、こんなふうに死にたいと思った。彼の全人生は、この刹那のために作られたにすぎなかった。それから、彼は胸のあたりまで体を伸ばした。何と驚いたことか！　その称賛すべき落ち着

きぶりは、表面的なものでしかなかった。その小さな心臓は、彼の友人のそれのように、激しい鼓動を打っていたのだ。この魅力的なアピールには応えなければならない。ジョルジュは起き上がり、アレクサンドルの隣に座り行つて頬を寄せ合つた。彼にその顔が染み込み、次にそれをよく見るために離れてみた。その顔は、あまりに驚異的すぎて、キスすることなどとてもできないということが分かつた。

その子の首に金の小さな鎖が見えたので、彼はそれを手に取り、そこに下がつていたメダルを熟視した。それらは、彼の秘められた熱さによってどちらも温かくなつていた。そして、そこに自分自身の熱と秘密を加えようとするかのように、ジョルジュはそれらに長々と口づけした。

戻つたとき、彼はほとんど自習室が識別できなかった。しかしながら、何も変わつてはいなかった。舎監は宗教雑誌を読んでいた。隅には、同じ生徒がまだ罰を受けていた。尋ねるようなリュシアンのみなざしに、ジョルジュは微笑みで返事をした。

夜になされる報告の中で、彼は自分の清らかな口づけについては何も言わなかつた。彼が話し終えると、アレクサンドルにキスしなかつたのかとリュシアンが尋ねてきた。この少年の悪魔ときたら、推察力を働かせすぎるといふものだ。彼はすでにそこを通

り過ぎてはいたのだが。

「いや、キスはしなかった」ジョルジュは答えた。「必ずしなければいけないものでもないだろう？」

「今に分かるよ！ 感情が始まって、それから少しずつ感覚に至るのさ。ブルダルーがそんなことを言っていたし、説教師が最初の講話でそれを話していたとき、アンドレが僕の足を押したのを思い出すよ」

ジョルジュは、アレクサンドルがすでにリュシアンのようになっているかもしれないという考えに動揺した。彼の無垢さはたぶん相対的なものでしかないのだとは思ったが、彼にはよこしまさを知ってほしくはなかった。彼は、二人の友情が、善から悪から等距離の位置にとどまることを望んでいた。それにしても、どんな状況が、あの子が自分に対して抱いてくれた感情の高まりの原因となったのだろうか？ 彼は、実は悪魔である天使たちの一人だったのか？ 彼は、実にたやすく二人きりになることに同意した。彼は、より用心深く振る舞うことへのジョルジュの配慮にもかかわらず、次の逢瀬は明後日にするよう主張していた。その焦燥は、彼の早熟さの打算ではなかったのか？ モーリスの立派な弟である彼は、リシュパンの悲しい詩から自分の信条を得たのだろうか？

なるほど、つい最近も変わることなく、彼は宗教的行為にかなり気を配っていたように見えた。しかし、聖クロードにおいては、そうしたうわべが何を表しているかなど、知られてしまっている。ジョルジュと知り合う前、特別席でミサに仕えている間、彼はたぶんミサとは別のことを考えていたのだろう。彼の宗教的献身が本当に本物ならば、その後の聖体拝領でいかがわしい隣人を受け入れたりするだろうか？

要するに、彼は、聖なる子供の階級長で、かといってアンドレを愛することもやめずにいた、最初の学期のリュシアンのようなものなのだ。彼が自分の学年で特別な友情を経験したことがなかったかどうか、どうすれば知ることができるのか？

この問題は、次の逢瀬までジョルジョを悩ませ続けた。

「君の学友たちの中に、親友はいるかい？」二人が再び温室で一緒になったとき、彼はアレクサンドルに尋ねた。

その子は、驚きながらいないと答えた。

「もちろん僕にもいない。僕には君しか親友はいない。けれども、僕の隣のリュシアン・ルヴェールとは、とても親しくしているんだ。礼拝堂で僕の左にいる彼だよ。それは僕に、君のことを彼に話す楽しみを与えてくれている」

アレクサンドルは愕然としたように見えた。

「何だって！ 君、僕のことを話しているの？」

「リュシアンは友達だから」

「それじゃあ君には二人友達がいるってことじゃないか！ 僕には一人しかいるはずもないのに」

そう言うと、彼は走って飛び出した。

ジョルジュはその場に残った。今起こったばかりのことを信じることをためらいながら。彼はかつて経験したことがないくらいの絶望を感じていた。幸福は指の間からこぼれ落ちてしまった。そしてそれは自分の失態のためなのだ。彼は、アレクサンドルを試すためにほかの友情のことを話したにすぎない。そして、その試験が自分に逆以降りかかってきたのである。彼は、あの子をエセ信心家だと想像して、あの子の忠誠の余計な証拠を手に入れる結果となった。彼は愛の地図をあまりよく読んでいなかった。避けるべき場所の中に《軽率》があったのだ。それでも彼は、自習室に近くにつれ、あれほど多くの苦勞の成果が失われたわけではないということを、自らに説得しようと努力した。そこに持ち帰った最後の記憶の中に、自信を持つべき理由を見つけ出すことができた。なるほど、あのように激しい反応によってではあったが、

あの子はそれで、自分を愛してくれていることを示してくれたではないか？

リュシアンもまた彼を安心させた。そんな小さなことで本気で怒ることなんかあり得ない、と彼は裁定した。あらゆる友情、あらゆる愛情には腹心の友がいるもので、その証拠が古典劇だ。あの子には僕自身が説明しに行ってもいい。僕にも真の友がいて、引き離されてはいるけれども、誰も代わりにはなれないんだって、彼に教えてやるさ。ジョルジュはこの調停を辞退した。彼は、アレクサンドルと自分との間にリュシアンを入れてしまったことを十分に後悔していた。

翌日のミサでは、あの子はいつもよりも優雅さがなくなることなく、おそらくずっと念入りに櫛を入れていたけれども、一度もジョルジュの方に目を上げなかった。もし彼があまりにも速くページをめくっていなかったなら、彼は本を読んでいると推測されたことだろう。聖体拝領では、ジョルジュもリュシアンも自分のそばに位置することがないようにするため、彼はわざとぐずぐずした。そして、彼の態度は、それに続く日々も同じままだった。

それは何と悲しい日曜日だったことか！ ジョルジュは大ミサの間じゅう、先週の日曜日のそれを考えていた。今日は彼の視線を避けているあの子が、そのときは彼に撒香したのだ。食堂では、少し前にはその優美さで彼をうっとりさせ、今日は胸を締

め付けるその名前を、彼は聞いていた。

彼は晩課で短い慰めを味わった。アレクサンドルが、今は赤いネクタイをこれ見よがしに身に着けていた。彼はそれを朝は着けていなかったのだ——一時間休憩の間に、彼はその変更を遂行したに違いなかった。だが、それはたぶん単なる気まぐれだろう。それは皮肉っぽい注意でさえなかった。彼がその者のためにネクタイを買った、その相手に対しては、彼はもう興味を示そうとしなかったからである。

その週は、同じように陰気に過ぎていった。ある朝、不在によって心を動かそうとして、ジョルジュは寝たまま居残っていた。昼食のとき、彼はあの子が自分の席の方を一瞥したのに気付いた。それは良い徴候のように思われた。ひそかに観察され続けている。しかし、個人あてに思い切ってかけ合う前に、アレクサンドルにはリュシアンに関するこの誤りに気付いてほしかった。彼は当事案の最初の夜の決定を取り消して、彼らの不和を引き起こした罪のない張本人に助けを求めることにした。

リュシアンは、新学期以来やめていた役割の一つを再開し、生きたロザリオの勧誘のために他学年の中庭に行った。彼は目撃者なしにアレクサンドルに近づくことに成功し、君に話すべきことがある、と言ったけれども、その子はその前に姿を消していた。彼は、聖なる子供の会報を持って、翌日も攻撃を繰り返した。会話の口火を切る

ために、彼はこんな記事を勧めた。《マダガスカル島の子供の魂》。そして、中国人の子供にしか関心はないという交渉相手の返事に甘んじなければならなかった。

ラテン語の授業では、今、《牧歌》の翻訳をやっていた。今日は、アレクシスというタイトルの第二の牧歌の順番だった。注に、このアレクシスとは、詩人に与えられた若い奴隷で、アレクサンドルという名であった、と書いてあった。

アルマジロは、皮肉な調子で音読を始めた。生徒たちは、深い愛情が表現されている部分ではにやりとした。

ジョルジュは、あの子との初めての出会いの後、ニススとエウリュアルスの死の物語に抱いた感情を忘れていなかった。今また彼は、ウェルギリウスの作品の中で自身と再会した。詩人の愛情とアレクシスのつれなさ、それは彼自身の物語であった。自習の間、彼はさっきの詩がどういうふうに終わるのかを知るために、翻訳した。

別のアレクシスを選ぶべきだという助言に、彼はひどいショックを受けた。自分にはローマの心を感じることがまったくできないと思った。

夜は、あの子を彼に近づけた。彼はシーツの下に潜り込み、自分の懐中電灯の光で、彼がこの世で決して作り出せなかったであろう二通の手紙を再読した。彼は、実際多くもないそれらの言葉だけでなく、その体裁や筆跡の細かい部分まで、それらを慈し

んだ。その行間に、それぞれの語の背後に、それに傾けられた顔や、それらを書いていた手が、再び現れるのが見えるような気がした。彼はその夜の典礼が呪術的効果を発揮することを期待した。ある神がそれを司るのだ、テスピアのアムールが。手紙と一緒にしてあるその写真は、すべては塵でしかないことを否定し、永遠に信仰を持つべきであるということを主張していた。ジョルジュとアレクサンドルの友情は、その美しさによって救われることだろう。その像が持つそのように。

ある午後ジョルジュは、たまたまカレンダーを見たとき、幻惑されたような状態になった。まさしくその日、三月十八日の土曜日が、聖アレクサンドルの日であることが目に入ったのだ。それがなければ、彼はそれを知ることがあっただろうか？ 黙想のとき、学長は司祭で証聖者の聖キュリオスのことを発表した。聖ルキアヌスのときと同様、殉教者名簿は世俗のカレンダーと一致せず、そこでは聖アレクサンドルは五月三日に記載があるだけだった。ジョルジュはこの幸福な発見の中に、許しの約束を見たかった。神に続き、今度は聖者が、彼のために現れたのだ。

あの子に手紙を渡しに行こう。いけそうな方法で。そのメッセージは、食堂の彼の引き出しの中に入れられることになる。二、三の下書きの後で——ペンはあまり滑らかに進まなかった——、ジョルジュは書き写した。

アレクサンドルへ

良き祝日に、君に僕の誓いを述べる。ある贈り物と共に。その慎ましさを、君は許してくれるだろう。君を愛していると繰り返すことを、そして僕は君だけしか愛していないし、これからもそうだと誓うことを、僕に許してほしい。君は僕の命になっている。

慎ましい贈り物とは、ジョルジュが受け取ったばかりのラベンダー香水の小瓶だった。アレクサンドルへの最初の訪問の後、彼に贈るため、両親にその小瓶を頼んでいたのである。彼がその香水を気に入っていたからだ。その発送品は、よいタイミングで到着した。

食堂には人けがなかった。ジョルジュはアレクサンドルの席に行き、引き出しを開けた。金属カップの上に彫られたイニシャルが目に入った。《A・M・》。「友情(Amitié)」か「愛(Amour)」の最初の二文字のようだ。彼は、ナプキンの下に小瓶と手紙を置いた。それらの物や、その引き出しに触れたことで、彼は感動した。

夕食のとき、ジョルジュは注視した。あの子は驚いた様子を見せ、それからポケットに手紙を入れた。そこを出る前に、彼は小瓶の方も同じくそこに滑り込ませた。ジョルジュの方を振り向くことはなかったが、彼には利益を勝ち取ったという感覚があった。

翌朝、礼拝堂に着いてみると、アレクサンドルが微笑みかけ、ジョルジュはこの微笑みのためならもらった手紙さえ差し出してしまうところだった。彼らは聖体拝領台で並んで再会した。その子からはラベンダーの香りがした。彼はジョルジュに囁いた。「今夜、六時に」

何て違いだらう、またもや、ある日曜日と次の日曜日の間で！ 今日雨が降っていたが、ジョルジュはこの前の日曜日よりも今日の方がずっとよいと思った。その日は太陽が輝いていたのだったが。

彼の、自然科学の作文でのあまり良くない席次コウジも、この喜びを悪化させることはできなかった。重要なただ一つの場所マカ、それは温室の中に再び見いだそうとしているそれなのであった。

「僕は急に君が嫌いになった」アレクサンドルは言った。「君が僕らの秘密を守らな

かったことと、君に友達がいるってことを、僕に告げたときはね。その後、別に何でもないことなんだ、いろんな友達がいることなんか、って納得はしたんだ。でも、僕は君がどうするか見るために待ちたかった。僕としても、自分に何ができるか分からなかったんだ。君、この前の日曜日、僕の赤いネクタイを見て、思わなかった？ その朝、僕はわざとそれを着けなかったんだけど、それって狭量で意地悪だったなって思っ、反省したんだ。それでも、僕は君と目を合わせることができなかった。喧嘩したのが恥ずかしかったんだよ。けれども、僕は君のことを自分の中でじっと見つめてみたら、前と同じように、前以上に君が好きだったんだ」

ジョルジュはその子の首の周りに腕を回した。今回は、あのことが実行された。彼はもうキスすることを恐れなかった。だが、アレクサンドルは赤面し、彼にキスを返さなかった。

「君は忘れてたね。でもかえってよかった！」ジョルジュは言った。「日曜日のこの時間、僕は自習室にはいないってことを。僕はアカデミーの真っ最中に外出許可をもらわなきゃならなかった。たぶん学長は、僕がよほど気分が悪いと思ったことだろう。僕が出たとき、ルイ十四世の王太子について議論していた。僕は僕の小さな王太子の方がいい」

それから彼は、微笑みながら付け足した。

「もうリュシアン・ルヴェールをうらやんだりしないね？」

「僕は君しかうらやまないよ」

「ところで、君の誕生日は？　僕は、ちょうどいいタイミングで君の霊名れいめいの祝日に氣付く幸運に恵まれたけれども、君の誕生日を見逃すのはすごく嫌だ」

「僕は九月十一日生まれだよ」

「なら僕は七月十六日だ。同じ月じゃないにしても、同じ季節ではあるね。弱まっていく頃の、それから焼けつくような頃の、夏」

「また火傷の話だね！」

「僕らは春生まれでもある。だって、聖アレクサンデルはほとんど春の初めだし、聖ゲオルギオスは四月二十三日だしね」

彼らはドアに向かった。ジョルジュは温室の中に向かって振り返った。まるでこの場所から離れることをためらうように。

「オレンジの、何ていい香りがするんだろう！」彼は言った。「これは君のためのものだ。君の春のための」

その子は彼にキスした。こっそりするかのように素早く。そして微笑んで彼に言った。

「僕の春が始まったよ」

ジョルジュは、自分の肘掛け椅子に戻った。学長は例の追悼の辞を朗読していた。それは終盤にさしかかっていた。「ああ！　コルネの穏やかさ。君はこの盲目的な若者にひどく困惑しているに違いない！……」ジョルジュはアカデミー会員たちを観察した。ある者はレンズを拭くためにしょっちゅう眼鏡を外していた。ある者は漏斗みたいな形の耳が滑稽で、このボッシュエをそこに全部詰め込んでいた。哲学科の一人は、指にはめた印章付き指輪を飽きもせず回転させていた。彼がそれを誇らしく思うのはまことにもっともで、哲学科の学生だけが、あえてここに指輪をはめてくることが許されるのである。

修道会の会合に出たとき、ジョルジュはアレクサンドルを見た。その子は自分のベロンチで真面目そうにしていたが、知覚できないくらいわずかな微笑みを浮かべていた。ローゾン神父は聖ヨセフのことを話していた。翌日は聖ヨセフの日であった。

夕食のとき、ジョルジュは自分の引き出しの中に手紙を見つけた。アレクサンドルが、彼を驚かそうとして、温室から戻ってからそこに入れたものに違いなかった。それを開くと、紙の端にのり付けされて留められた金髪の房が見えた。その下にこんな

言葉が書かれていた。

ジョルジュへ、僕の初めての霊名の祝日と、素晴らしい仲直りを記念して——この僕の髪の一房を（香水付き）。

その後、ベッドに横になったとき、ジョルジュはこの手紙を出して、それを長枕の下に入れた。オレンジの香りを嗅いだように、その匂いを嗅いだ。そこからは甘い香りでした。

メッセージを楽しんだ後、その日の主要な出来事の意義について自問した。アレクサンドルと彼は寓話の岐路にいた。悪徳と美徳の間である。彼らは選択しなければならぬ。そしてジョルジュは、その選択の前でしばし決心が付かないままだった。彼はあの死ぬほど退屈な、最後は埋められた追悼の辞の、奇妙なフレーズを思い出した。その《恥ずべき約束のもっともらしい口実》が問題だった。それに対してコレージュ・ド・ナヴァールの偉大な指導者は、《その危険の次なる機会を避けるためには、鉄も火も》惜しまなかったのである。ジョルジュはその危険の前にいた。

その責任は彼を不安にさせた。辛抱強く、ためらいもなく、こんな不純な交遊関係

を結んで、コレージュの模範生であるアレクサンドルを誘惑したのは、自分なのだ。せめて、あの少年の品位を尊重してやらねばならない。アンドレがリュシアンをそんなふうには扱わなかったとしても、同じ学年に所属していた以上、彼には対等の者を相手にするといふ言い訳が成立したわけである。

ジョルジュは、たぶんしかるべき理由で年長者たちから離された状態になっていた者の一人を丸め込んだ。聖体拝領台での組織された組み合わせには、神秘的な意図があった。彼はそれを冒瀆で返した。一つの学期以上の間、アレクサンドルは、聖務日課に出席し、説教を聴き、自分の務めに従事しながら、学友たちの間で穏やかに生活していたのだ。奉納の子羊を抱え、一か月間ミサに仕えた。去年の同じ日には聖ヨセフに祈りを捧げ、今日は温室で逢い引きをしたのである。キスされて赤くなっていたのに、結局はそのお返しを敢行して赤面もしなかった。あの恥じらいは無垢さの証明で、同時にあの自在さはどれほど手本に対して敏感かを示していた。

そう、ジョルジュこそがその芽生えつつある混乱の原因だったのだが、彼は誰の前において有罪であるというのか？ アレクサンドルと彼には、自分たちで審判を下す権利がある。彼らは幸福なのだから、余計な後悔など何になるだろう？ このような友情を駆り立てたのはあの子であり、それが形成されたのは自分のためだということ

を、あの子は行動で証明した。であるならば、それが理想的な形を保つか、そこに別の形を持ち込むかどうかを決めるのは、あの子の方なのだ。ジョルジュは、この仕事を始めるのを自分が望んだように、仕上げを彼に委ねることにした。

それにもかかわらず、彼は自分自身をこの蠱惑的な力から守るため、二人の接触にはさらに間隔をあける方がよいと判断した。アカデミーでのスピーチを口実にして、火曜日に予定されていた逢瀬を中止し、それを金曜日に延期した。金曜日は僕らの日だよ、と彼は手紙に書いた。

モリスはご満悦だった。小さなグループの真ん中で、コレージュのある使用人の配慮のおかげで、恋人から手紙を受け取ったことを話していた。彼は、それが関心を引いたかもしれない学友たちのために、このサービスの報酬について教えていた。笑いながら、この注文の仲介は、この場合はまったくぴたりだった、だって自分の恋人は母親のハウス・メイドだったんだから、と言った。彼は、その娘が彼にもたらした喜びを闊達にしゃべっていた。リシュパンはもう通り過ぎられてしまったのだ。

モリスは、事はあまり簡単ではなかったと付け加えた。なぜなら、彼の部屋は弟と共有だからである。彼は一人きりになった時間を利用した。それでも、その危うさは、事をいっそう楽しいものにしただけだった。

ジョルジュは、この話を聞いて胸が締め付けられた。リュシアンのそれよりも悪かった。彼らの年齢、エコールの学生という身分にはふさわしくない話だし、冒瀆のようなものによってあの子の名前が混ざった話である。モリスとアレクサンドルときたら、何て似ていないことだろう！ あの子の生彩のない目、赤い頬、低い所から生えた髪などが、彼の談話と同じくらい、卑俗なものへの情熱を語ってしまっている。彼の未熟な人間としての不純さは、ジョルジュに対し、《悪い仲間》の見本であるリュシアンの影響の中和剤になった。それは彼に、純粹無垢であるものを尊重させることになった。アレクサンドルの純粹さを、より貴重なものとしたのである。

あの子は大急ぎでやって来た。ジョルジュは温室のドアを後ろ手で閉めた。

「ローゾン神父から離れるのは容易じゃないよ」アレクサンドルが言った。「僕、君に知らせるのを忘れちゃってたね。告解は、土曜日にほかの子と一緒に礼拝堂でするんじゃないくて、金曜日に彼の部屋でするって。彼はいつもは六時頃に僕を迎えに来るんだ。だから、君と逢うためには、少し早く彼の所に行くための工夫をしなきゃならなかった。君は告解の時間の真っ最中とかち合ったんだよ。この前の日曜日、僕がアカデミーの最中とかち合ったように。それでね、告解の後にはお話をするんだ。で

も、テーブルの上の時計を見たら、もう六時になっていた。僕、長い宿題を終えなきゃいけないで急いでるって言ったの。それでここに来たんだよ」

「なら僕は、その告解の跡を継ぐだけさ！　僕は共同で秘跡を全部やることになるだろうね。僕らは、耳にたこができるくらい聞かされている、ルイ十四世時代の人間を手本にしている。宗教生活と愛情生活を同時に送る人たちをね。僕らの学校の司祭は、一日おきに僕らの罪を許す。僕らがお互いのことを彼に話していること——それとなく遠回しに——にも、僕らが同じ香りを吸わせていることにも気付くことなく」

「ねえ、神父様は、君が想像するほど馬鹿じゃないかもしれないよ」

「何が言いたいのかな？」

その子はあるオレンジの花に身を屈め、それから別の花に身を屈めた。彼は心地よさそうに、その香りに陶然としていたが、それは返答の時間稼ぎをしたがっているようにも見えた。花粉が顔に付いていた。ジョルジュがそれを拭いてやると、彼は最初の日のように階段状の棚をよじ登った。友人が自分に続こうとしているのを見ると、「待って」と彼は言った。「そのまま下にいて。君に言わなきゃいけないことがあるんだけど、それを言う間は君の隣にいたくないんだ」

ジョルジュはオレンジの箱にもたれなかった。

「聞くよ」彼は葉を一枚噛みながら言った。

「僕、神父様に言われたばかりなんだよ。君は少し変わったように思う、君のことが心配だ、君からは匂いがする——ラベンダーじゃないよ、面会ときは付けないから——そうじゃなくて、何か怪しい匂いがするって。彼は僕を膝に載せて、僕の耳に囁きかけた。僕が悩んでいないかどうか、夜、夢を見ていないかどうか、少なくとも彼には何も隠しごとをしていないかどうかを、僕に尋ねた。僕があんまり彼の目をまっすぐ見るものだから、彼はしつこくは言わなかった（僕、彼が『何か怪しい』って言葉を使ったときに、すでにそうしていたんだ）。彼は一つ忠告をするだけにとどめた。まず、僕は僕のままでいること——君の代わりに彼にお礼が言いたかったよ——、次に、祈禱書の中の《邪悪な思念を払うための祈り》を毎日読むこと。幸いにも、もし僕にまだそういう思念がないのであれば、その祈りは僕がそれを抱くことから守ってくれるだろうって言ってたよ」

ジョルジュは、その祈りをよく知っていた。以前、リュシアンが彼に吹き込んだ邪悪な思念を追い出すために、静修の間、それを読んでいたのだ。そして今は、一人の神父が同じ祈りをアレクサンドルに勧めている。まるでこの子を脅かす危機を見通したかのように——邪悪な思念に対する祈りは、ジョルジュに対する祈りになったのだ。

二人の少年は、少しの間、黙って考え込んでいた。

その晩の黄昏は暗^{たそがれ}かった。アレクサンドルは見えなくなり、段のいちばん上から、この言葉をゆっくりと口にした。

「ジョルジュ、君は知るべきじゃないことを知ってるの？」

「うん、知ってる」

「君はそれに興味がある？」

彼はそれを真剣な声色で言った。その真剣さは容認のサインなのか？ 彼が上級生の中庭に來た日の、彼の視線のそのように？ この十二歳は、何を望み、あるいは何を恐れているのだろうか？ 彼が神父には拒んだ告白を、ジョルジュにはしようとしている、ということはあり得るだろうか？ かつてその手の場所に精通していたアンドレとリュシアン影が、その薄暗がりの中に見えたような気がした。取り返しのつかないことが起こる運命なのか？ ジョルジュは、あの決意と嫌悪感を思い出した。同じく真剣な調子で、彼は答えた。

「いや、そんなことに興味はない」

アレクサンドルは段を軽やかに降りた。何か光のようなものが、彼の顔を明るくしていた。彼はジョルジュの顔にそれを近づけた。

「すぐうれしいよ！」彼は言った。「君は僕を安心させてくれた。君のことがいくら好きでも、君が僕に望んでいるものが何なのか、僕には分からなかったんだ。何か悪いことなんじゃないかって、怖かったよ」

アカデミー会員全員と共に、ジョルジュは、先生方の真正面、この厳肅な公開会議の議長を務めに來た枢機卿からあまり遠くない、祝典ホールの一列目にいた。緑の肘掛け椅子に座り、アレクサンドルから見えるようにできるだけまっすぐに頭を保ちつつ、聖体拝領で渡した手紙を思い出していた。

僕の退屈な言葉は、もうすぐ君のための愛撫に変わる。

この式典には彼の両親が参加していた。彼には、両親によってげいか猓下げいかに提示されるべき名誉があった。猓下は彼らの知り合いなのだった。

学長先生が火ぶたを切った。彼は壇上に上らなかったが、おそらく、完全にしなびて小さくなり、緋色の衣の中で縮こまっている枢機卿を、あまりにも高い位置から見下ろさないようにするためであろう。彼は、数歩の所で、ごくあっさりと猓下の方を

向いた。

彼は長い間、《知性のプリンスでもある教会（原）のプリンス（機）》の話をした。それはジョルジュに、天の元后に關係のあるローゾン神父の目的への注意を促した。そして彼はこう続けた。

「皆さん、あなたたちの聖クロードのイメージは、ただこの素晴らしい環境だけではないでしょう。緑色の山々、谷の優雅な曲線、この学び舎（や）が建つ光に満ちた丘、静けさの中での実りある学業、あなたたちの信心が溢れる宗教上の祝日。あなたたちに知識と世話を惜しみなく与えてくださるこの献身的な先生方のことも同様でしょうが、それだけでもないですね。こうしたいろいろなイメージに加えて、あなたたちの記憶の底に、あなたたちの青春時代に、微笑みかけにいらしてください。威厳ある高位聖職者様のそれを、聖遺物箱のように、ぜひ残しておいてくださいね」

すると猊下は、賛同のために頭を振った。まるで彼が聖クロードのアカデミー会員で、「ですよね、皆さん？」に対して答えたかのように。

終わりに、学長は今日の祝典の意味を説明した。教会が我々に、《喜べの主日》の日曜日における、この罪のない喜びを許可しました。教会自らが、その典礼書の中で、四旬節の紫色を薔薇色と取り替えたのです。ジョルジュは色には一つも興味がなかつ

た。彼は、学長が、枢機卿の赤い法衣ではなく、一人はアカデミー会員である二人の生徒の赤いネクタイのことを言うとしたら、どう言ったかを知りたがっていた。

ある修辞学級の生徒が、半分真面目に、半分陽気に、モーの司教の『沈黙の瞑想』を解説した。学長がその生徒の演説を、その他全員のそれと同様、作り直したことを、ジョルジュも知らないわけではなかった。自分のものについても、もちろんそれに驚くことはなかった。ランブイエ館は彼の関心を引かなかった。愛の地図は機知に富むと思える若干の暗示を与えてくれたが、学長は彼の研究論文を修正し、それらを削除した。残ったものには、最初の文章はほとんど残らず、ジョルジュの苦労は新しいものを清書することだけだった。学長は、いろいろな名前の陰に隠れた、その日の共通の演説者なのであった。もっとも、ルイ十四世時代について、誰がそれ以上に雄弁に長広舌をふるえただろう？ モーの司教が、イエスは子供の頃、博士たちに教えたときの一度しか話をしていない、と言いつつ、沈黙について雄弁に論じたのに劣ることなく。

今や、三学年のアカデミー会員氏の番がやって来た。ジョルジュは壇上のテーブルの後ろに座っていた。彼が気品ある姿勢を取り、発音に気を配ったのは、猥下のためでも両親のためでもなかった。

翌朝の礼拝堂には、上級生が最初にやって来た。下級生が入って来たとき、アレクサンドルは学友たちから離れ、内陣の中央にたった一人でひざまずきに行った。

そのような罰は非常に珍しく、今年に入ってから二、三度しか与えられたことのないほどのものだった。

ジョルジュはその光景を凝視した。彼はその子が彼にした冗談のように、それを笑うようなふりを装った。彼はその優美さ、冷静さ、高潔さに感心した。彼は、友情から、自分自身のことも誇らしく思った。彼には、アレクサンドルが、みんなによく見られるように、侍者の資格でその場所にいる日よりもさらによく見られるように、そこに置かれただけのように思われた。しかし、数分間この空想に同調した後、彼は現実に戻らねばならなかった。アレクサンドルは罰せられ、全員の非難にさらされているのだ。ジョルジュがあればほど華麗に長広舌をふるった日の翌日に。

彼は、自分が前日の名誉を振り向けたあの子が、それを共有してくれていたこと、その記憶によって少しでも励まされることを期待した。にもかかわらず、彼はそれらに気が咎めた。そして、あの子の傍らで屈辱を受けていたかった。大理石への長時間の接触はつらいに違いないと考えつつ、彼はあの子のために、取るに足りないもので

あっても何か象徴的な行為をしたくて、自分の膝下の小さな敷物を取り去った。

一体全体、あの子は何をしたのだろうか？ あの上の特別席で、ローゼン神父はミサの祝福式のために体の向きを変え、ひどく厄介な立場で自分の元侍者を下に見ている。もう一度、アレクサンドルがすっかり変わってしまったと考えてはいけなかい？ 突然、ジョルジュの心にある考えが浮かんた。自分たちの友情がこの懲戒の原因かもしれない。だが、それは違う。その可能性はない。そうだとすれば、もうそれを突きつけられて、一緒に罰せられているはずなのだ。

聖体拝領で、ジョルジュがひざまずきに行ったとき、その子は静かに立ち上がり、両手を組んで、いつもの席にいるのと同じように、彼のそばに身を置いた。彼は囁いた。「今夜、六時に」。和解の日と同じやり方だったが、今のそれには、ジョルジュには違う響きを感じられた。これはもう間違いなく、アレクサンドルの罰は自分たちの情事に関係があるのだ。そうでなければ、直前のように同様金曜日に予定した次の逢瀬を、早めたりするだろうか？ 昨日の手紙が押収されたに違いない。アンドレの復讐の時が来た、ということか。

いろいろな授業でドアが開くたび、ジョルジュは、自分を呼びに来た学監が姿を見せ、それが目に入るのを不安げに覚悟していた。彼は、アレクサンドルは絶対に自白

しないと確信していたが、あの手紙には書いた者のファースト・ネームが書かれていたのだ。おそらく、この建物内のジョルジュ全員の調査が行われるのだろう。それは時間の問題でしかない。少なくとも、六時前に真相が明らかにならなければならないのだ！アレクサンドルに逢えた時間の後なら、ジョルジュはどんなことでも受け入れるつもりだった。彼は、前日にもらったささやかな贈り物の中から、あの子にあげるためのコイン型チョコレートの小箱を取り出した。

彼は外出許可を一つの勝利と認めたが、温室の入り口を見張りながら、再び自分が不安に苛まれているのを感じていた。あの子が来るのを見られないことを恐れ、小道に彼の足音を識別したとき、初回よりもずっとうれしさを感じた。

彼は見抜くことは見抜いていた。問題になっているのはいずれにしても手紙だった。だが、それはアレクサンドルの方の手紙であった。その子は、熱に浮かされたような饒舌で、顛末を話した。

ゆうべの自習中、アカデミーの講演会に際してのジョルジュの言葉に返事を書きかけた。すると、そっと入って来ていた彼の学年の学監が、そのメッセージを没収した。そこには幸いにして、誰の名前も書かれていなかった。それに続く、二人きりでの取り調べの中で、その子は通信相手を白状するよう強く迫られたが、沈黙を守った。

デザートを奪われ、ベッドのそばで一時間ひざまずかされ、もし翌日のミサの前までにすっかり白状しなければ、罰として内陣の真ん中に行かされる、ということになった。今朝、学監は礼拝堂の入り口において、言われたとおり、平然と、衆目には罰としてそこに行つたと見なされたアレクサンドルを監視していた。

一時間目の間まると、学監は再び彼を呼び出した。彼は自分の事務机に説教計画表を置いていた。アレクサンドルは、彼の言うことを聞きながら、逆さになったそれを読み取った。ある紙に、こんな言葉が記載されている。それは先の紙の下に紙に書かれていた。《無宗教・慢心・不服従・欠陥》。学監は、彼なりに愛の地図に手を入れたのだが、無駄骨だったわけだ。

万策尽きて、アレクサンドルは、学長による最高裁判所の前に召喚された。学長はあらゆる手を試みた。最初は、彼がマリアの子供であることを思い出させつつ、優しく接してきた。次に、その学友が明らかになっても、その者の自白は要求しないと言って、彼をだましにきた。最後に、彼は怯えさせられた。学長が、実際、こんな状態であるからには、次の休暇以後、彼の両親にそのまま監視を要求することになる、と申し渡したのだ。それまで毎朝罰がある、とも。

「僕、学長の罰なんかどうでもいいんだ」その子は言った。「でも、僕が追い出されたら、

君は当然追いかけてくれるよね！」

「うん」 ジョルジュは言った。

「僕らは一緒に、別のコレージュに行くことにする。誓える？」

「うん、誓うよ」

アレクサンドルは彼の手を取り、心臓の上にそれを押し当てた。彼は、最初の逢瀬のときと同じくらい、かなり冷静さを失っていた。今日の彼は、別の所で自制心の貯蓄を使ってしまったのだ。彼は高ぶり、震えていた。

「僕らがお金を払っているあの人たちは」彼は叫んだ。「悪いことなんか、彼らに対しては何もしていないのに、何だって僕らが好きなことをするのを阻止したがるんだ！ 僕らの楽しみを欠陥と呼ぶくらいだから、彼らは僕らからそれを剥奪する権利があると思っっているんだ！ でも、僕は例えば、彼らに、手紙を探して僕の身体検査をさせてみたいよ！ そうしたら引っ掻いて、噛みついてやるから！」

その子の考えを変えさせようとするかのように、ジョルジュはポケットからチョコレートの小箱を取り出し、彼にそれを差し出した。彼はそのコイン型チョコレートを食べた。

「君はローゼン神父のことは何も言わなかったね」彼は尋ねた。

「彼のことは、あんまり心配してないんだ。もちろん、この騒ぎに関わらないわけにはいかなかったんだけどね！ 彼とは細かく議論したよ。僕がほかの人とは話せない現状の埋め合わせにね。でも、ちゃんとした理由があるんだよ。彼が僕を呼び出させたのは午前中だった。で、夜の自習には出させてもらえるかどうか分からないから、そのときに会いたって言ったの。それで、僕は六時まで会話を引き延ばそうとした。ほかの日の告解の後みたいだね。でもさ、僕、宿題はやり終えたけれども、ちょっとやつつけ仕事になっちゃっただろうね。授業の方は、僕が正気を失ってないって見せつけるために、いつもよりずっとよく聴いたし、どの授業でも質問されたから、ちゃんと答えてやった。これ、僕が尋問台に立たされてるってことだよ。」

話をローゾン神父に戻すと、彼は僕が《不完全な告解》をしたと言って責めた。《私

が知らない、罪深い不義》を、僕がしたからって——これ全部、彼の言葉そのままなんだよ。もうほとんど嫉妬みたいなものだよね。僕、彼に言ってやった。誓って、僕は自分が罪深いとは思いません、だってその《不義》は全然《罪深い》ものじゃないし、だから僕はそれを話す必要性をまったく感じません、って。彼は美辞麗句で答えた。より重い罪がないにしても、規則を破った以上、少なくともあなたは反抗の罪を犯しているし、先生方や両親や神様、永遠の生命に対して公然と反抗したことになる

のです、アーメン。彼は僕が大罪人、つまりきの石だと言い張った。彼は聖体拝領を禁じたいとまで言ったけれど、僕、枢機卿や、教皇にだって手紙を書いてやるからって脅迫して、それをやめさせたんだよ」

「僕らがしなきゃいけないことを考えようと思う」ジオルジュが言った。「食堂の手紙で君にそれを伝えるよ。とにかく、僕が何を決めようと、僕を信用してくれ。そして、僕に同意してくれ。たぶん、僕らが再会する機会はいくらもないだろうけれど、今日の今、君の目の前で、僕が言うことを覚えておいてほしい。若いアテネ人の誓いだよ。『私は戦の中で、仲間を見捨てたりしない』」

その子はジオルジュの肩に自分の頭をもたせかけ、なじみのない甘い声音で言った。「君は僕の手紙に何を書いてあったのかを聞かなかったね。僕も君に言うのを忘れるところだった。『君の言葉が愛撫なら、僕の視線はキスだった……』」

彼はからかうように笑って、そっと抜け出した。

ジオルジュが自習室のドアを乗り越えようと、舎監に声をかけられた。舎監は教壇近くの隅を指し示した。一瞬、彼はこの罰がアレクサンドルのそれと関係していると思っただが、すぐに安堵した。その指は時計の方へと上がっていき、舎監は、彼が時間を忘

れていたらしいことを示したのだ。彼は頭痛を口実にそこを離れたのだったが、その口実には限度が決められていたのだった。あの子の方も、また罰せられてしまうだろうか？

立って腕を組み、壁を見つめて、ジョルジュは、自分の後ろの自習室の雑音を聞いていた。机や本が閉ざされ、定規が落ちる音、ペン軸がインク壺を叩いたり、紙がきしんだりする音。そこに突っ立っている彼、一度も罰を受けたことのない彼を見て、学友の大半は明らかにうれしそうだった。だが、その中の誰が、教皇に手紙を書く問題さえ孕む事件での罰を経験したことがあっただろうか？

ジョルジュはリュシアンのことを考えた。自分に同情してくれる唯一の人間。自分の秘密を知る、同じく唯一の人間。こんなに長い時間不在にしていたのだ。その間にあの親愛なる少年の想像力が発揮されていたのは間違いない。彼は幸運にも、ジョルジュのラテン語翻訳練習を写す労を取るだけでよかった。彼は厄介な事件になるなどとは考えもしないから——いかに彼らしく、ジョルジュを安心させることに丸一日を費やしてくれていたのだ——、たぶんこの友人を説得して安全性を認めさせるよりもさらに多くのことを、温室の客たちは語り合っていると推測していたのだろう。

ジョルジュは運命のいたずらに感心した。自分のせいでリュシアンがアンドレと共

にした状況に、アレクサンドルと自分がいる。二人の友人の一方が、もう一方——今度は年下の方だが——のために危機に陥り、その者は起訴資料の上に自分の名前がなかったおかげで罪を免れた。いずれにせよ、ジョルジュが受けた小さな懲罰は、運命の不平等が、すでに苦い経験を通じて是正されたことを知らせていた。そして、それはたぶん始まりでしかない。だがまた、自分への懲罰に対し、あの子は自分の強さを何と魅力的に証明してみせたことか！ 彼は学監、学長、ローゾン神父に次々と立ち向かったのだ。彼は、侮辱や脅迫を無視し、宿題をやり、授業に集中し、逢い引きの場にきちんとやって来たのだ。

そのような前例より下であってはならない。ジョルジュはそれにふさわしい決断をした。アレクサンドルの無罪を証明するために、自首するのだ。この情事を子供っぽい遊びに矮小化することで、自分自身の弁明もする。もしそれがあの子の意志、その闘争への志向性に一致しなければ、そのときは仕方がない！ ジョルジュは年長で、どこまでも思慮深くあるつもりだった。もし事が悪化したならば、あの子がそれを約束させたような、聖クロードを離れなければならないという見通しについては、特に何も感じなかった。しかし、それらの解決を図りつつ、ここに残ろうと努める方が、彼には自然に思われた。

彼はローズン神父に会いに行き、許しと援護を請うことにした。神父はジョルジュを信用している。修道会員ではないマルクに対しては、もっとためらいを示したことだろう。そのうえで、アレクサンドルの美徳を信じ続けてほしいと言うだけにとどめる。自分の小さなお気に入りへの心が自分に対して閉ざされているということを、彼ははたして認めることができるだろうか？ それでも、その心が純粹なままである以上、その純粹さの説得力が弁護の役には立つだろう。しかし、それは勝訴するには不十分だし、素早く勝訴することが必須なのだ。

ジョルジュは、コレージュのどんな生徒も経験していないようなさらしものの状態で、翌朝もアレクサンドルが変わらずひざまずくと考えるのは、我慢ならなかった。彼は、今夜にでも学長にこの処置を撤回させるよう、あの神父に仲裁を頼むつもりだった。アレクサンドルはどんなに驚くことか！ 彼は、先生方に対する友人の口の軽さを受け入れなければならないだろう。リュシアンに対するそれを受け入れたのよりもずっと好意的に。

ああ！ 大時計と一致して、腕時計は七時十五分前を示している。もうすぐ宗教書読解、それから夕食、それから就寝。今日はもう万事休すか。

鐘の鳴る音で、ジョルジュは自分の席に戻ることができた。学長が入ってくるのを

見て、彼に別の考えが浮かんだ。この要人に直接会いに行くこと。聖人よりも神に訴える方がずっと有効ではないか？ これはすぐに問題を解決するための唯一のチャンスだ。だが、それはいつ実行可能だろうか？ 宗教書読解の後、食事前の数分間か？あるいはその後、食卓を離れるとき？ この二つの機会では、学長は請願者を明日に回してしまいかもしれない——明日、黙想とミサの後にと。となると、今夜受け入れてもらうために使ってしかるべきもの、それは策略と、ほとんど力である。

ジョルジュは学長の顔を見つめた。今までに、毎晩宗教書読解をし、朝の黙想を指導し、その後に公衆ミサを執り行い、食事時には食前の祈りと感謝を、日曜日には月間学習成績と作文の順位を口にし、ボッシュを朗読し、ソネットとアカデミー会員の発表原稿を書き、ジョルジュにコレジウム・タルシアンの話をし、古代の書籍を貸してくれたその人を。もうすぐ、アレクサンドル・モティエがまなざしをキスに変えた相手を、ジョルジュ・ド・サールが言葉を受撫に変えた相手を、知ることになるその人を——ランブイエ館についての学長の発表原稿が受撫に、その高貴なる装身具の中で生まれた詩がリシュパンの詩になったわけだ。実は、ジョルジュは虚栄心のようなものを感じていた。自分は先生方に、あの人たちの生徒の中でも最も魅力的な生徒の秘密の友人として、正体を現すことになるのだ。

彼は、何よりも自分の勇氣の衝動を誇らしく思った。しかし、学長の話聞いているうちに、あの人はかなり簡単にだまされそうだと考えずにはいられなかった。黙想から宗教書読解まで、朝から晩まで、晩から朝まで、彼とその仲間はだまされるためにのみ存在している。だが、あの人の宗教的活動がいちばん精力的なのだから、たぶんあの人は、ほかの人よりもだまされやすいのではないか。あの人が知っていると思っているこの少年たち全員の考えや感情は、彼らの行動同様、あの人に気付かれてはいない。目下、ボシユエの『小四旬節』の読解が傾聴されているようだ。それはマシヨンのそれよりも好ましい、と彼は言った。モリスは、彼の若いメイドのことを思い浮かべているに違いない。マルク・ド・ブラジャンがかわいいとこのことを思っていたように。その同じブラジャンが悪い仲間と呼んでいた者たちは、自分たちの共犯者のことを考えているに違いない。ジョルジュはリュシアンが思う者を知っていて、リュシアンはジョルジュが思う者を知っている。『小四旬節』という言葉が、空虚の中に響いている。学長と同様、ジョルジュも空虚な言葉を言うことになるだろうが、それを学長には真実だと思わせることになるのだ。

リュシアンは——幸運にも「神への感謝」があったので——食事の間に詳しく知らされ、彼の計画に賛同した。

「もしアンドレを救えたなら」彼は言った。「僕は何を前にしてもためらわなかっただろう」

彼は、ジョルジュが語った話を改作するのを手伝った。彼らは真面目で、陽気でもあった。問題の利害収支が彼らを熟考させたが、リュシアンはその準備なしの面会における名誉がうらやましいとジョルジュに表明した。彼は、部屋着のままの学長を見たがっていたのだろう。学長は、リュシアン自身が以前そうしていたように、ガウンを着てスカプラリオから見せ、自らの美德を保つために聖職者たちがかけていると言われる樟脳のサシェを、身に着けているのだろうか？ そこにあるのは、最愛の君の詩のそれとは別のサシェである。

共同寝室での二人の友人の夜は、騎士の徹宵てっしょうとなった。神父が寝るとすぐに、
「幸運を、君に」リュシアンが言った。「僕は君が戻るまで眠らないから」

ジョルジュはそっと起き上がると、もう一度着替えた。手紙を守ることについてのアレクサンドルの言葉を思い出しつつ、彼は大事をとって自分のものを安全な場所に置くべきだと判断した。彼はそれらを財布から取り出して、洗顔用具箱に入れて鍵をかけた。彼は懷中電灯を持ち、リュシアンと握手して、抜き足差し足で抜け出した。

廊下で一度、自分の進め方の危険性が不意に彼を襲った。それは彼がアンドレを告

発しようとした日のようだった。自首することは、それよりも深刻である。彼は、リュシアンが自分の方向性を変えさせなかったことに驚いていた。彼は、自分の元犠牲者の友人が、復讐への本能のようなものに駆られて後押ししたのではないか、という結論を出そうとした。最低限恐れるべきこと。この時ならぬお邪魔訪問は、不快感を引き起こさないか？ しかし、九時半では、学長はまず寝ていない。きっと田園のソネットを推敲しているか、明日の『小四旬節』解説の準備をしているだろう。

ただし、もし書斎のドアの下方に光が一切見えないか、誰かしら雑談中の先生がいるならば、ジョルジュは共同寢室を離れたのと同じくらいの控えめさでそこに戻ることになる。

控え室の中で、彼は学長が眠っておらず、一人でいることが確認できた。彼の灯りに照らされた聖タルチシオの彫像が、彼に十月の訪問を思い出させた。今日の目的の方がさらに名誉があり、あのときのそれをわずかに補う。そのうえ、今度は自分に、同じ裁判官に相対する番が来て、自分はアンドレと同じくらい強くあらねばならない。彼にはもう不安はなかった。彼は事前に、嘘を通すために自白するふりを装うことへの喜びを感じていた。彼は、余分なものを犠牲にしながら、重要なものを守ろうとしていた。

学長は昼間の服装で、フロアスタンドの下に座って書物を読んでいた。入るよう言った者を見て、彼は確かにひどく驚いたようだった。

「すみません、学長先生」ジョルジュは言った。「僕は許可なしで共同寝室を出しましたが、僕のせいで友人の一人が罰せられることを考えると眠れなかったんです」

学長は椅子を指し示し、それから厳かな感じで綿入れ外套をゆったりとまといながら、膝の上で本を閉じた。ジョルジュは、日曜日にアカデミー会員として振る舞うときと同じくらい厚かましく肘掛け椅子に沈み込むようなまねはしなかった。アンドレのことを考えていたあの夜のように、彼は視線を落としていた。だが今日のその慎重な深さは見せかけで、自分の話に精彩を与えるために用意されたものにすぎない。

彼は顛末を語った。夕食の間に調整しておいた内容のとおり。ある日曜日、上級生の中庭で、アレクサンドルと彼はモリスによって紹介された。彼らはとりとめのない話をし、アレクサンドルはアカデミー会員になりたいと表明した。ジョルジュはふざけて、僕が後援者になってあげるよと面白がって約束した。次の公開会議、すなわち先週の火曜日のその話をしながら、僕は最高に愛撫するような声でスピーチを読むからね、と言い、それが冗句をいくつか誘発してしまったのだ。そのとき以来彼らは、二人共通の聴罪担当者であるローゾン神父の部屋のドアの前で、偶然一度再会

しただけである。

ジョルジュは、話したときの自分の落ち着きぶりに驚いた。彼の自信は、そのために大きくなった。彼は、学長の視線に耐える準備ができており、古代の拷問の責め苦にも立ち向かってしまえそうだった。彼は、自分が真実を言っているという思い込みを追い払おうとしなかった。

学長は、自分の本の表紙に両目を固定していた——ジュール・ルメートルの『演劇印象集』の一冊である。この人は、ニコラス・コルネを引き合いに出そうとしているのか？ ゆっくりと、頭を上げることなく、彼はジョルジュに尋ねた。

「モティエ弟は、どうやってこの事件をあなたに知らせたのですか？」

「リュシアン・ルヴェールを通じてです。彼は聖なる子供としてあの子を知っていて、まさに今夜、天のお導きであの子と廊下で遭遇したのです。ルヴェールは、『神への感謝』を利用して、食卓で僕に伝言をくれました」

「彼は正確に何と言ったのですか？」

「アレクサンドル・モティエが、『愛撫するような声』という僕の言い回しについて、僕に書面でいたずらのようなことをしようと考えたこと、でも彼は捕まってしまい、苦しみを受けました。当然、彼は僕を巻き添えにしたくなかったからです」

「少なくとも、彼は告白することを受け入れました」学長はジョルジュを見つめて言った。「すでに別の手紙を、優秀な文通相手に送ったということだね。私は、あなたに関する限りにおいてということでは、それらを読みたいとは思いません。私が知った限りでは、その文体は嘆かわしいものであるからです。価値のない三文小説を手本にしているのですよ。さあそれでは、申し訳ないですが、あなたの財布を私に見せてくださいますか」

「でも、僕はモティエ弟の手紙を一つも受け取っていません！」
「ということは、彼は嘘をついているのですね。もっとも、そんなことはどうでもいいのです。時には、私も自分の生徒の財布に閉じ込められているものを見てみたいのですよ」

ジョルジュは赤面したが、それは恥ずかしさからではなかった。先ほどの幸運な用心を考えて喜びが込み上げてきたのだ。彼は、アレクサンドルの嘘を責めながらたった今自分で嘘をついたばかりの、この学長に復讐した。だがそれはおそらく、学長が《意図の導き》と呼ぶ嘘なのだろう。

たぶん学長は、この訪問者の興奮に気付いたのだろう。

「私が求めることは、あなたを侮辱するわけではありません」彼は言った。「あなた

くらいの年齢の少年は隠し事をすべきでないということを、あなたに証明することが、私の務めなのです」

ジョルジュは膨らんだ財布を差し出した。学長殿は注意深くそれを開いた。まるで多額のお金か決定的証拠書類かがそこから抜け落ちてしまいそうになっているかのよう

に。彼が見た最初の仕切り部分は、少し前に、そこからアレクサンドルの手紙が取り出されていた場所だった。しかし、ジョルジュはそこを完全に空っぽにしないため、テスピアのアムールの絵はがきはそのまま入れておいた。学長はその写真を一瞬じっと見た。

「その像はプラクシテレスの作品です」ジョルジュは言った。「そして、それは現在ヴァチカンにあります。貸してくださった『神話』の中に記載がありました」

返答せず、学長はテスピアのアムールを財布の中に戻した。

ほかの仕切りは、さまざまな紙を提供した——ジョルジュが保存した紙は、いかなる興味も引かなかったけれども。前年の学校の身分証明書、《海運と植民地連盟》の現役メンバーのそれ、自動車メーカーのイラスト入り広告、薬剤服用量カード、観光チラシ、そして《そこにいない子供の守護天使への祈禱》。

「そのお祈りで、四十日の免償を得られます」彼は言った。

侯爵と侯爵夫人の肩書き入りの、父と母の面会カードもあった。これはメリットをもたらしただ。次に学長は城館の写真を眺めた。

「それは僕らの家です」ジョルジュは言い、微笑んでこう付け足した。「全部説明すべきですね」

彼は自分が何者であるのかを多少でも思い出させることには、悪い気はしなかった。学長は貴族だが、そのことと彼の両親が城館を所有することとは関係がない。

結局、最後の仕切りに紙片が入っていた——紙幣と——最初のものと同じく、絵はがきであった。アナートル・フランスの写真で、テスピアのアムールと対をなしていた。「この作家の作品が禁書であることを知らないわけではないでしょう」学長は財布を返しながら言った。

『我が友の書』しか読んだことはありません。その肖像画はそれに挟まっていました」「それ以外決して読んではいけませんよ。それだけじゃなく、さあ！ その写真と彫像のそれをこちらに渡してください。それらはマリアの子供の財布には、あまりふさわしくありません」

ジョルジュはそれらを取り出して差し出した。学長は、それらをランプのように

片手にまとめ、つかの間注視した。しかし、あたかもギリシャとヴァチカン両方に対する自分の敬意を立証したがつているかのように、彼は寛大そうな身振りで古代の彫刻をジョルジュに返した。次に、冷淡にアナトール・フランスの肖像を四つに引き裂き、紙くず籠にその断片を放り込んだ。その一片はカーペットの上に落ちた。聖クロードのアカデミー会長が裁いたばかりの、その高名なアカデミー会員の顎ひげを見せながら。

「いいでしょう！」学長は言った。「私はあなたが真実を言ったことと、自分の非を認めたことを理解しました。しかし、私はこの教訓があなたのためになることを期待します。友人は、あなたの学友の中だけから選ぶように。それが、きわめて深刻ではないにしても、少なくとも滑稽なもめ事を避けるための、最上の方法です。この出来の悪い生徒があなたにどんな言葉で手紙を書いたのかをあなたが知れば、あなたは混乱するでしょう。若い想像力は、すぐに前後の見境がつかなくなるのです。従って、そんなものはそのまま放っておくことが大切です。あなたはすでにリュシアン・ルヴェールと繋がっています。彼だけにしておきなさい。彼は信頼できますし、十分に良識があります。

確かに、あなたをここに導いた良心の咎めには賛辞を送りますが、あなたは許可を

取らずに來たわけですし、規律を満たすために、私はあなたに罰を与えなければなりません。今度の日曜日の外出禁止がそれです」

廊下で、ジョルジュは自分の足取りが軽いと感じた。学長のつい最近のソネットの記憶が戻って來た。

私は大らかな夜を愛す、とても穏やかな夜を。

彼は笑いに満ち溢れていた。彼は寓話作家の詩句を繰り返した。それは学長が、出典の詩のタイトルを引用していたものだ。

日は時間になり、時間は絹を紡ぐ！

通りがかりに、彼は自分の電灯で、昔の生徒たちの額縁にからかうように照明を当てた。たとえアレクサンドルが明朝再び罰せられ、また自分が日曜日に罰を受けたとしても、それでもなお自分たちは二人とも困難を切り抜けたことになる。あの子は、自分の立場を悪化させた強情さにもかかわらず、もう疑われることはない。彼の態度

は、その秘密の重大さによるのではなく、彼の性格の傲慢さからのものと納得されることだろう。おそらく、これからの逢瀬をどんなふうに再開すればいいのか、二人の友人たちにはまだ分かっていないけれども、この勝利の後ならすべて良い方向に行くと期待しても差し支えあるまい。奇跡的に助かったテスピアの写真は、友情が守られたことをもう一度証明していた。

ジョルジュは、そっと共同寝室に戻った。オリーブ山の伝道者のような、眠るリュシアンを起こしたくはなかった。親愛なるリュシアン！ それでも彼は、自分を守っていてくれたことを証明したがっていたようだった。実際彼は、自分としゃべるために取っていた姿勢、すなわち、普段なら眠るときには自分に背を向け、右を向いた姿勢を取るはずなのに、左を向いた姿勢で寝ていたからである。

アレクサンドルもまた眠りに落ちているに違いない。たくさんの事が成し遂げられたばかりであるとは思ってもせずに。なるべく夢に捕まらないようにするために、横向きで眠っているのだろうか？ それともジョルジュのように、それらを十分に受け入れるために仰向けで？

その翌日、彼は長い間呪ってきた特別席を祝福した。アレクサンドルは、そこでロー

ゾン神父のミサに仕えていた。きっと神父は、さらなる屈辱からアレクサンドルを救うのに、あの方法を思いついたのだろう。たぶん罰はまだ取り消されていない。それにしても彼は、説き伏せるために、聖務の後であの子を引き止めなければいいのだが！彼がすでにジョルジュの証言を知らされ、あの子にそれを話していた場合、あの子は間違った方向に行ってしまうおそれがある。できるだけ早く、公式説明が当事者に知られることが重要だ。ミサに続く自習時間の間に書かれた手紙が、朝食の前、食堂で、リュシアンに託されることになるだろう。

ジョルジュが書き始めたとき、ローゾン神父の呼び出しが伝えられた。伝言を書き終える時間がなかったことに、彼は悔しい思いをしたが、なるべく早く戻れるよう急いで出て行った。

部屋のドアの前に着いたとき、神父の話し声が聞こえた。いったい誰がそこにいるのか？アレクサンドルであった。たぶん彼は来たばかりであった。立っていたからである。それに、たぶん彼はまだ何も知らされていないかった。ジョルジュを見て驚いた様子を見せたからだ。

神父は、自分の机の両側に、彼らを互いに向き合って座らせた。その子はこわばった表情をしていたが、ジョルジュが送った小さな目配せにほっとしたようだった。彼

が前日の忠告を思い出し、どんな異議も唱えず、到来した新しいチャンス逃さないようにしてくれればいいのだが！

「こんな朝からあなた方を来させたのは」神父は彼らに言った。「私の知らない間にあなた方が結んだ関係を話してもらうためです」

彼はわずかに時間を取り、《子羊の礼拝》を凝視した。それからジョルジュの方を向きながら、

「黙想の前に、昨夜あなたが行った告白を、学長先生が私に知らせてくれました。あなたがまず私に打ち明けることを考慮しなかったことに、私は驚いています」

「僕は考えたのです、神父様」ジョルジュは答えた。「これは良心の問題というよりも規律の問題なのだと。それに、これは同じ学年に所属していない二人の生徒に関することなので、学監先生に委ねることもしませんでした」

「たぶんあなたにとっては規律の問題だったのでしょうが、残念ながら、あなたの仲間にとっては良心の問題になっています」神父は、平然とし続けているアレクサンドルを見ながら言った。

「あなたは」彼は続けた。「あなたはふざけただけだった。でも彼は真に受けた。あなたは《愛撫するような声》という表現を使い、彼はあなたにキスを送った——二人

ともよくお聴きなさい、キスを、ですよ！」

神父はその言葉に小さな嘲笑を伴わせた。それは、ブラジャンがアンドレの行状に対する自説を力説していたときのそれを、ジョルジュに思い出させた。その子は、怒りの表情で真っ赤になっていた。ジョルジュはすぐに皮肉っぽい調子で言った。

「本当にキス？　コイン型チョコレートじゃないの？」

今度はアレクサンドルが噴き出した——神父のそれとはずいぶん異なる笑い、勝ち誇った笑いで、ジョルジュはそれに秘密の勝利を感じ取った。昨日の逢瀬を思い出すことは、彼らのための別のキスであった。

「やっと打ち解けましたか」神父は微笑みながら言った。「冗談が、私の説教全部よりもよほど多くのことを達成しましたね。それはあなた方の間に冗談以外の何の問題もなかったということを、私に完全に納得させました。

子供たちの笑いは、彼らの魂の言語なのです。墮落した存在は、決して笑いません。あなた方は子供のままです。ありがたいことに！　でもあなた方は、さほど大きな犠牲を払うことなく、非合法な関係の大いなる障害を推し量ることになるでしょう。秘密であるものは、ほぼいつでも厄介なのです。

実際私は、この陽気な若者については、あまり心配していませんでした。彼のこと

はよく知っていますからね。しかし、この坊やは何でもないこと、お笑いぐさ、つまらないことを、大げさにしてしまいました。もし初日から受取人の名前を白状してくれてさえいれば、すべてがすぐに収束したはずなのです。それどころか、もし問題の受取人が介入してこなかったなら、これがどんなふうに終わったことか、私には分かりかねます。

あとは、アレクサンドル氏が、学長先生に平身低頭して謝るだけです」

再びアレクサンドルはかっとして赤くなつた。それは彼には過度の要求であると思われた。しかし、ジョルジュは彼に同意するよう合図をした。かくてその子は、強靱な意志を持ちながら頭を下げるということもあり得ること、敗北することなく譲歩することもあり得ることを、納得しなければならなかった。

「お望みならいつでも」彼は言った。

神父は満足したようだった。

「コレージュの天使が、再びコレージュの天使になる。この表現によって、私はあなたのうぬぼれを刺激したいわけではありませんからね、我が幼子よ。しかし、あなたの宗教的献身の方は刺激したい。実際、コレージュの生徒だったときの聖ジャン・フランソワ・レジスも、そんな異名で呼ばれていましたから」

彼は立ち上がり、ジョルジュとアレクサンドルの髪に軽くキスした。

「テサロニケ人への第一書簡を」彼は言った。「聖パウルはこの言葉で終わっています。《すべての兄弟たちに、清い接吻をもって、よろしく伝えてほしい》。いろいろなキスがあります。小説のキス、それについては放置しておかねばなりません。あとは清らかなキス——親から子へのキス、ミサの平和のキス、赦しのキス。

同じ書簡でその使徒は、こんな助言も与えています。《絶えず祈りなさい》。説教師様は、十月の最初の説教からすでに、あなた方にもあなた方の学友たちにもそれをお説きになりましたし、学長先生は新年の演説の途中でそれを繰り返されました。それはまさしく、あなた方がそうとは知らずに冒した危険から、二人を共に守ったお祈りなのです。私は、あなた方が日々の聖体拝領の実践に忠実であることを知らないわけではありません。それはあらゆる祈りの中で最も美しいものです」

「今学期、僕が不参加だったのは一度だけです」ジョルジュが言った。

「それってたぶん」アレクサンドルは言った。「君が病気でそのままベッドに残った日だよね」

アレクサンドルは、ジョルジュにコイン型チョコレートへのさりげない言及に対する返礼をしたことで、うれしがっているようだった。神父の目の前で、自分たちの友

情についてのある出来事を、今度は自分が想起させたことで——二人の友情をより強くしたあの仲たがいのときの。だが、その言葉は軽率だった。それはあまりにも深い好意を証言してしまっていた。

「よく分かりました」神父は言った。「あなた方の気持ちを少しでも整理する時間だったということがね。あなた方がお互いに向けて持っていた好意は、あなた方の勤行さえ直ちに妨げかねませんでした。さあそれでは、今日からその早すぎる関係に終止符を打ちなさい。来年あなた方は一緒に、本当の同窓生になります。そのとき、ロマンチックな感情から離れ、あなた方の友情を我々が作り直せばよいのですがね」

礼拝堂で、その子はまだジョルジュと向き合っていないかった。彼はベンチの一行目を変更され、ジョルジュは最終的に最後列にいる彼を認識することになった。今後彼らが視線を交わし合えそうな場所は、食堂のみになったのである。

ジョルジュは、しばらくはどんな小さな主導も控えることにした。彼は、逢い引きの嫌疑をかけられないため、自習中に部屋を出る要求をしないようにした。再び抜け出そうとする前に、秩序を取り戻したふりをする必要がある。復活祭休暇までには十二日間あった。外から戻ったときには、生徒たちに知られていないあの小事件は、

上層部の頭から消えていることだろう。そのときまでおとなしくしていることは、大きな犠牲ではない。

ジョルジュには下心もあつた。それはあるときは彼を微笑ませ、あるときは彼を励ました。彼は奇跡を待っていたのだ。アレクサンドルと彼の間のことは、すべてが奇跡的ではなかったか？ そこには困難な状況を切り抜けた先の方法も含まれているのだ。

その週が過ぎないうちに、彼はこの状況が耐えられないことに気付いた。奇跡が訪れないとなると、彼の方からそこに向かうことになる。マホメットが、自分の方から山に向かったように。単なる推定だけでこのような足かせを自分に強いるのは、馬鹿げたことではなからうか。彼は、自分の観点からは強化されたように思われる規律を、検証してみようと決心した。ある朝、彼は席を外す許可を願い出た。それはいつもの厚情をもって認められ、彼は自由を再び経験することで喜びを味わった。

彼は温室に入った。そこにはいつもオレンジの香気が満ちている。アレクサンドルが嗅いでいた花の香りを吸う。二人で並んで座った段に座る。この場所が思い起こさせるイメージは、彼に今の制約をいっそう強く感じさせた。彼は以前の方法を再開すべく、動き始めることに決めた。

それは主として、アレクサンドルとの遭遇を期待して、ローゼン神父を訪ねることにあった。口実は、もう良心の咎めはやめて、休暇中の読み物の相談とした。ジョルジュは禁書便覧のいくつかの禁止書目に異議を唱えた。アレクサンドルに再会し損なったにしても、彼は一度だけでもその子のことを話せればうれしかったことだろう。彼は聖ジャン・フランソワ・レギスに会話の矛先を向け、《コレージュの天使》の参考文献を尋ねた。だが神父は、その話題を脱線させることなく、次には別の理由のために《エコールの天使》と呼ばれた聖トーマスの話をするのだった。

ジョルジュはこの上なく甘美な手紙を書いていた。それを休憩時間の間にアレクサンドルの引き出しに置くつもりだった。彼はいつもよりも頻繁にピアノの方に行った。歴史教師の蚕に桑の葉を運んだり、彼のマウスにビスケットを持って行ったりした。それは通りがかりに食堂に入るためのものでしかなかったのだが、そこにはいつでも誰かしらがいた。都合が悪い状況をわざと作られているようだった。

枝の主日の日曜日、休暇の前々日、行列は礼拝堂の内部に広がった。悪天候のためである。ジョルジュは上級生の一列目について、先頭を歩く下級生の、最後尾の生徒たちの後ろに付いた。アレクサンドルからは、彼の三人の学友たちによって隔てられているだけだった。少しでも巧妙に振る舞えば、彼はその子の隣に位置することができ

ただろう。その子は、彼がそれを考えていないことを明らかに残念がっていた。実際、近寄って届けるべきメッセージが彼にあるように見えたのだ。ジョルジュは、その子の手のひらの中にいつもの四角い紙を識別したように思っていた。彼はかつてないほど自分を間抜けだと思い、自分の枝に腹いせをして、葉を一枚しか残さなかった。

こんなに素晴らしい機会を二重に逸したことに激怒して、彼は手紙を全力で到達させることを心に誓った。今日じゆうにだ。だが、正午前の食堂でのリトライは、やはり無駄であることが明らかとなった。アレクサンドルはアレクサンドルで、どうやらジョルジュよりついているということはなかったようだ。ジョルジュは彼からのものを何も見つけることがなかったからである。彼らは現在、素晴らしく互いを理解し合っていた。彼らが交わし合った目線には、いっばいの期待といっばいの悔しさが同居していたのである。

ジョルジュは手紙による関係を自分が先に復活させることを決心したが、もし自分の手紙の危険性が低ければ、自分ももっと大胆になれそうだと思われた。彼はそれを破り捨て、さらに人畜無害な別の手紙を書いたが、それも廃棄した。彼は、あまりにも書くことが少ないことよりも、何も書かない方を選んだ。紙の端に自宅の住所を記すにとどめ、ただこの言葉だけを付け加えた。「君へ」。

その夜、アカデミーから帰る途中で、彼はうまく任務を遂行した。彼は最初の文面を保存しなかったことを嘆いた。仕方がない！ 文通については、復活祭にすぎるしかない。

翌日の夕食時、アレクサンドルのメッセージが引き出しの中に入っていた。運命は、変転しつつも最終的には彼らに報いたのだ。そのメッセージは賛美歌集から切り取られた一枚で、歌詞は別の意味を表すように切り抜かれていた。

ページの最上部には大分類のタイトルが印刷されていた。《受難節》。そしてその下には賛美歌のそれ、《イエス・キリストの高貴な旗》。それは、《クリスマスの季節》の開始前夜のそれのように、柔らかく優しい賛美歌ではなかった。それは、それだけでもうすでに熱情と苦悩に富んだ、まさしく情熱的な賛美歌なのだった。ジョルジュは掛布の中、懐中電灯の明かりでそれを読み、動揺させられた。それまで牧歌的な色調を持っていた歌が、悲劇的な色調に変質しているのに気付いたのだ。あの子はもう自分の言葉で彼をからかうようなことはしないだろう。

.....
我は汝を愛する、崇拜している――

どれほど果てしなく

我が愛は我が心に汝を縛り付けることだろう！

.....
ひどい不安が

我が胸を苛むとき

汝は我が不安を受け入れてくれるだろう。

.....
そして我が唇は震え、

苦しみの日には

汝の足に

燃えるような口づけをするだろう.....

胸に残る、

最愛の君の贈り物！

.....
我が傷の中に隠された、

愛に我は陶醉する.....

紙の裏には、鉛筆で文字が二行書かれていた。「僕に手紙を書かないで。僕の方から君に手紙を書くよ」

聖体拝領の後で自分の席に戻ったジョルジュは、アレクサンドルが聖体拝領台に近づくのを見つめた。彼は目をその愛すべき光景で満たした。今日から始まる休暇のために、彼はそれで心の方もいっぱいに満たすことを強く望んだ。二週間にわたる厳しい状況が過ぎたばかりだというのに、彼はこの休暇をほとんど残念に感じていた。

駅で、再びローゾン神父がモーリスとアレクサンドルと共に出発したとき、ジョルジュは彼らの車両とは別の車両に乗らなければならなかった。しかし、彼はクリスマスのときほど臆病ではなく、最後にもう一度あの子に会いたいと望んでいた。蛇腹を通って客車から客車へ、リュシアンと彼は偵察に行った。ガラス付きドアが閉じられたコンパートメントを突き止めると、彼らはおしゃべりをするふりをしながらゆっくりと通過した。

ローゾン神父は聖務日課書を読んでいた。その向かいのアレクサンドルは、頭を壁に寄りかからせて眠っているようだった。青いコートにくるまれていたが、二つの裾の間では両膝が明るさを見せており、その光が溢れ出るように感じられた。彼は靴下

をくるぶしまで丸めていて、脚はほぼ剥き出しだった。ジョルジュはそっと引き返すことを強いられたくはなかった。彼と二人だけになりたかった。自分もまた燃えるような唇で足に口づけするため、彼の足元にしゃがみ込んでしまいたかった。そしてその後には、彼の膝の上に頭を載せたかった。温室で二人が初めて逢ったときのように。

(三)

その晩、応接間にいる間、ジョルジュは父親に、アレクサンドロスの貨幣をもつと近くで鑑賞させてほしいと頼んだ——そのメダル陳列箱は閉ざされていたのである。父は自分のギリシャ研究の話をした。それはアカデミーの選挙に一役買ったという。彼は、その国の過去をよりよく呼び起こすために、この金貨を思い出したものだと言った。

彼は、敬意をもってその小さく重い円盤を取り上げた。その肖像を熟視した。皮膚の接触がゆっくりとそれを温めた。あの子が首に掛けていたメダルのように。輪郭は不揃いだった。これらは打ち抜かれたのだ、と父は言った。古代のアルパゴンどもによって。しかし、英雄の横顔は無傷で生き生きしていた。彼は時代と人間たちに反抗したのだ。羽根飾り付きのヘルメットをかぶって。裏には勝利の女神の絵がある。その翼の一枚はアレクサンドロスの名前によって支えられているように見えた。テスピアのアムールの翼に劣らないほどの吉兆がある。

「その硬貨は」ド・サール氏は言った。「一スタテールという名なんだが、刻印がはっ

きり残っていて実に保存状態がいい。それはアレクサンドロスを、その最盛期の中に永遠に保ち続けているんだよ」

その言葉は、ジョルジュをこの上なく甘美な気持ちにした。彼は完全な上品さで父にキスした——それが清らかなキスカどうかなんて、誰が言えるというのだろうか？

彼は、大人になったら自分もまたコレクションをすることを決心した。それは、自分の年下の友人の名前を高名なものにした、このアレクサンドロスに注がれることになるだろう。硬貨だけでなく、胸像、タペストリー、絵、版画、彼について書かれたあらゆる著作物も集めるのだ。破産するかもしれない。それは自分の不朽の業績となる。イエスの聖なる御名の教派は、ジョルジュがアレクサンドロスの美しい名前のためにそうするのと同じほどには、リュシアン的情熱を鼓舞することはなかった。

彼の主たる業務は、郵便を毎日見張ることだった。郵便配達人が訪れてくる間、彼は気を紛らそうとして外へ出た。自転車で行くか、フェンシングのレッスンに行くか、プールに行くか、川にボートを漕ぎに行くか。彼は、もう家に留まりたいと思わなかった。読書は、かつてはお気に入り活動だったのだが、自分が期待しているメッセージを読まないでいる限り、それは彼に何も伝えてはくれないのだった。彼は父の本棚からアンリ・ド・レニエの『罪人』を借り、習慣に従って別の本をその場

所に置いた。その小説は、仮にそれが聖ジャン・フランソワ・レジスの生涯であったならともかく、それよりも彼の注意を長時間引き付けることはなかった。

手紙が一通届いた。それはリュシアンからのものでしかなかった。それには、今回初めてアンドレに手紙を書いた、彼が非難できないように、と書いてあった。彼は『舞姫タイス』を読んだばかりで、いささか退屈な部分もあるけれども、ジョルジュの以前の称賛を共有した、という。

「本当なんだろうか？」彼は書いていた。「僕がこの前の休暇に『愛すべきイエス、スペイン語からの翻訳』を読んだなんて」

彼はもう占星術者のおじの助力を提案してはこなかった。ジョルジュが、占星術には免償よりもさらに興味はないと明言したからだ。

その次には成績証明書を受け取った。《所見》欄に校長は《非常に優秀な生徒》と書いていたが、三点中断符（…）の後にこの言葉を続けていた。それはジョルジュには、何やら意味に満ちているように思われた。両親はそれには注意を払わなかった。その代わり、その日に到着した彼のいとこたちは、内々に、からかい気味に、それを話すことを忘れなかった。彼女たちはコレージュの秘密に好奇心を抱いているようだった。「君らに話せるのはこれで全部だよ」ジョルジュは抗弁した。「ミトラの連中みたい

なものだ（ミトラについては辞書を引いてくれ）。女性はそこからは除外されるんだよ」
「たぶんだけど、君、全然白状してないでしょう」リリアーナが答えた。「彼女のこ
とを考える人もいるし、その代用になる人もいるのよね」

この言葉にジョルジュは苛立ち、それには我慢ならないという様子を見せることで、
そのいとこに罪を償わせることに決めた。彼は、アレクサンドルが、自分にとって誰
の代用でもないこと、誰とも取り替えることができないことをよく知っていた。そし
て、彼が考えるのはいつもアレクサンドルのことだった。

あの子の沈黙は、彼を不安にし始めた。彼は、コレージュであっても解決した手紙
の事件が、家庭で後を引いたのではないかと訝しんだ。保護者であるローゾン神父の
善意は信用していたが、学長の方は通知票の中断符だけでは我慢できなかったのかも、
と思うと怖かった。

彼は自分からアレクサンドルに手紙を書けないことにひどく苦しんでいた。おそら
くあの子には、彼にそれを自制することを依頼するしかるべき理由があったのだ。そ
の埋め合わせとして、ジョルジュは、クリスマス休暇のときのように、モーリスとブ
ラジャンに短い手紙を送った。彼は、彼らの意中の女性の近況を尋ねようと思ってい
たが、部分的にでもリリアーナが正しいと認めたくはなかった。もしアレクサンドル

が手紙を読んで、その趣旨についてモーリスに尋ねるかもしれないことは、さらに望まなかった。

復活祭の火曜日の晩、ジョルジュは駅までいとこたちに同伴した。彼女たちの存在を排除できることにとても満足しながら。彼女たちは、君はすっかり変わってしまった、ひとりきりで時を過ごすことばかりを好むし、寄宿学校がかわいい子熊を山出しの偏屈熊にしてしまった、と主張した。すると彼は、『まねび』の見出しを引用しながら彼女たちに反駁した。食堂で最近朗読されたのを覚えていたのだ。《世俗の交わりにおいては、あまりに親しくなりすぎることは避けるべきこと……》、《無益な会談を避け……、隠遁と沈黙を愛し……、他人の欠点を許すべきこと……》。

帰宅すると、盆の上の、いとこたちの出発を待つて届いたかのようなハガキに、自分の宛名があるのが目に入った。そこにはこの言葉だけが書かれていた。

永遠に。アレクサンドル。

陶醉しつつ、ジョルジュはゆっくりと夢に浸るため、階上の自分の部屋へと籠もりに行った。

確かにもっとたくさん読みたくはあったけれど、彼にはこの簡潔な表現を敷衍できるだけの想像力があつた。重要なのは、永遠を支える名前によって言われたということであるように思われた。硬貨の上で、それが勝利の女神を支えていたように。あの子は、彼に永遠に身を捧げること、彼にとって重要なこと全部を彼に与えたのだ。

ジョルジュは、アレクサンドルの手によって向かい合わせに書かれた、自分の名前と簡素な宛先を見ることを楽しんだ。学校での手紙よりも、さらに誇り高く力強く、それでいて優雅な筆跡だ。彼は今日初めて、自分はその名前と住所の正当な所有者なのだと思つた。それまではあまり確証が持てなかつたのだ。

彼は挿絵の中にまで意味を見いだしたかつた。《S……、駅の眺め》。すぐにお互いを近づけてくれるだろうから、彼の居住地の中では駅だけにいくらか興味を引かれたということ、あの子は自分に言いたかつたのではなからうか？

今、ジョルジュは、完全に幸福だつた。不安からは解放されていた。アレクサンドルの家の雲行きが怪しかつたにしても、それは深刻なものではなかつたに違いない。この考えは、彼を両親と和解させた。アレクサンドルが家族に責められたのでは、と仮定したとき、彼は両親の存在を快く思わなかつたのだ。ディナーのとき、彼は無愛想さが減少したことを祝われた。

寝るとき、彼は手に届く範囲に置いておいたハガキを手を取った。ここなら、もう共同寝室でのようではない。あそこでは、敷布の下に隠した懐中電灯で読まねばならなかったのだ。思いのままに、いっぱい照明の下で、枕で守られながら、彼はそれと、あの子の学校での手紙と、解釈された賛美歌とを読み返した。彼は枕元のテーブルの上にその全部を髪の毛の房と共に再び置き、その近く、ランプの下部に、テスピアのアムールの写真を立てた。彼は明日、ローゾン神父に魅力的な手紙を書くつもりだった。朝食の後、彼は財布の中に以前の手紙を戻した。部屋を照らす陽光が、ジョルジュが同じくしまおうとしていた巻き毛を輝かせた。彼は、それが光をきらきら反射するのをよく見るために、のり付けされていた紙から剥がして手のひらに載せた。それは、メダル陳列箱の硬貨とほぼ同種の金色で、重さまでもあるように思われた。これは、あの金色の小さな頭の特徴ではないのか？ 彼は、二月の日曜日、コレージュの中庭で、日に当たるアレクサンドルの髪を見た最初の機会を思い出した。彼はその巻き毛をつまんで例のアムールの頭に当ててみた。それは突然生命を得たように見えた。彼はそれらの物をそのままにして、身繕いをしに行った。

彼は自分の髪をとかしつつ、巻き毛のことを考えた。その金髪は、いとこのリリアーヌのそれなど比較にならないほどに美しかった。彼が彼女を怒らせるために、きつと

染めてもらったんだろうとよく言っていた、その髪よりも。もしブロンドに染めたなら自分はどうなふうになるだろうと、彼は自問した。自分のくすんで艶のない肌と茶色の目は、それほど明るい色にはまったく合わない。結局のところ、髪を染めるなどという考えは、滑稽で男らしくないのではないか？ ジョルジュはそれについて何かするのは抑制した方がよいと思った。彼は、聖クロードの何人かの仲間たちのような、違った色合いの髪の一房を持つ少年たちを思い出した。彼は、この自然の気まぐれから、アレクサンドルに表するための独創的な称賛を思いついた。

彼は自宅の界限で必要な薬品を買うことは望まず、もっと遠くに行くために自転車を取り出した。店主が一人だけで働いている店なら、信用に値すると思われた。彼は金髪染めを注文した。

「それには四種類の色合いがあります」理容師は言った。「ゴールドンブロンド、アッシュブロンド、ライトブロンド、ただのブロンドとありますが、どれがよろしいですか？」

ジョルジュは当惑した。不意に、髪の手帳が財布の中に入っていることを思い出した。彼は横を向きながら、革のポケットからそれを取り出した。髪の手帳はレスピアの写真に隣接して収められていて、理容師に示された。

「よく見せていただけますか」理容師はそれを手に取りながら言った。

この男ときたら、髪に触れることを生業なりわいにしているというのに、その髪に触れるときは荒っぽくしていなかったか？

「これはアッシュブロンドですね」彼は言った。

それから彼はその巻き毛を放り投げようとしたが、急いで取り返された。何本かの髪が落ちるのをジョルジュは見た。学長の所で、アナトール・フランスの顎ひげが落下していくのを目撃したときよりも、はるかに動揺しつつ。もし自尊心が許容していたなら、彼はそれをかき集めてしまったことだろう。

「金髪で、しかも色が薄い場合」理容師は言った。「最初の白髪しらがはほとんど目立たないはずです。そのブロンドにするには、通常はわずかな過酸化水素水で十分ですよ」最初の白髪？ 白髪のアレクサンドル！ そう考えるとおかしくて、ジョルジュはその理容師を許すことにした。

「よく分からないのですが」彼は微笑んで言った。

「白髪頭を染めたがっている、金髪の方の処理でしよう？」

「違う違う！ 金髪に染めたがっている、褐色髪の人の処理なんです。さっき見せた髪色みたいな金髪に」

「ああ！なるほど！ やっと本題に達しましたね！ それは髪染めとは言いません。脱色ですね。微妙な処理になりますよ。理容師にやってもらわないと」

「問題の人物は、自宅で試したがっているんです。髪の一房に」

「その場合、私が調合したものをあなたにお渡しすることになります。その方に必要なのは、その液剤を染み込ませた脱脂綿の切れ端で、髪を湿らすことだけです。毛根部から始めて、念入りにやってください」

ジョルジュは自転車飛ばした。栓がしっかりはまっていることを確認するために、時々ポケット内の小瓶に触れた。彼は理容師との会話のことを考え、「やっと本題に達しましたね！」という台詞を笑った。何とまあ紛れもない尋問だったことか！ 理容術の全迷宮を通して、最後には真理に到達したのだ。

自室の鏡の前に座って、ジョルジュはどちら側を染めたらよいか、自問した。右、それとも左？ あるいは真ん中か？ 彼は左を選んだ。心臓のある側である。髪を一房取る。時折アレクサンドルの目を覆っているそのように、額の上に落ちるのに十分なほどの長さの髪を。それから、処方に忠実に従った。

自分の体に変化を加えたのは、これが人生初だった。このブロンド色は、彼には似合わなかった。比較してみると、この色合いは確かにアレクサンドルの髪のものであ

る。しかし彼は、あの子にあっては比類のない奇跡と信じていたものを獲得したばかりだったが、それに伴う俗っぽい安易さには後悔を感じていた。彼は、自分の暗い色の髪の下にそのブロンドの髪を覆いつつ、髪を梳いた。先端が見えるだけになった。矢のそのように。

食事の間、彼の母親はその小さな特異点に気付いた。彼は、運悪く過酸化水素水のシャンプーで処理したことによる事故であると説明した。これがいとこたちだったなら、こうも簡単には納得はしなかったことだろう。ブロンドのリリアーナにも、それは自分に向けられた自尊心をくすぐるほめかしなのだ、などと信じ込むだけの理由はない。別の顔の象徴であるこの髪は、さぞかし彼女の目には、彼女が《小さな寄宿生たちの大きな変貌》と呼んだものの、新しい手がかりとなったことだろう。

なるほど、ジョルジュはかなり変わった。髪は房による以上に、ローゾン神父にとつてのアレクサンドルがそうだった以上に。彼が家で見つけたものは、過去しかなかった。彼にとっては、現在と未来はよその場所にあった。アレクサンドルは、彼をすべてに對して無関心な人間に引き下げた。アレクサンドルがすべてのものより上だったからである。昨日のハガキも、彼に何も戻すことはなかった。今ここにいないあの存在なしには、そこには何もないからである。彼は、骨の髄から育まれた愛情の価値を理解

した。その対象となった者が見えていることが、肉体的精神的均衡にとって必要とされているのだ。生きることを再開するには、コレージュに戻るしかない。それはコレージュの埒外で生きるためであるというのに。今後、彼が真の人生を送るのは、コレージュ生活の外側であるのと同様、家庭生活の外側でもあるのだ。彼の手紙のうちの一通の言葉に従えば、アレクサンドルは彼の人生になったのである。

いとこたちの指摘によれば、彼は一人きりでいるのを好むというが、それはあの子と共にあることをうまく夢想できるから、ということもある。しかも、失うことなど恐れないほど、彼はあの子を所有していた。ほかの者は、もはやあの子を何らかの方法で間接的に想起させるために存在するように見えるだけだった。例えば、食卓でコレージュやアカデミーや学長や枢機卿のことが話題になったとき、輪郭が浮かんでくるのはあの最愛の子の顔であった。あたかも、あの子に近づいたものすべてがあの子に帰着していくかのように。ジョルジュはテーブルクロスの上でそっと手を開き、手のひらを上に向け、あのスタールやブロンドの巻き毛をなおも見つめているような気がした。応接間では、自分の秘密に注意を引き寄せることへの懸念から、思い切ったメダル陳列箱の鍵を求めることもできなかった。彼はガラスに寄りかかり、アレクサンドロスの上にキスのつかの間の冠を与えることで我慢した。この部屋を飾る収集

品の一つに、彼を新しく喚起するものがあつた。それは十八世紀制作になる銀の香炉であつた。彼にアレクサンドルの撒香を思い出させたのだ。蓋を持ち上げると、その空の容器からかすかな香の香りが立ち上り、彼は無上の喜びでそれを吸つた——彼はそれを、彼が長いことあの巻き毛に染み込ませていたラベンダーの香りと、記憶の中で混ぜ合わせた。金と銀、香と香水、これらは彼が公現祭の日、二人が向き合った最初の日曜日、東方の三博士の日曜日に、アレクサンドルに捧げたものではなかったか？

四月二十二日、あのハガキが届いたときと同じく最終便で、ついにアレクサンドルの手紙が届いた。喜びに有頂天になつたジョルジュは、それをどこで読むかを自問した。自室はハガキを読むのにすでに使用した。応接間は母親が客を迎えている。彼は誰もいない書斎に行き、革張りの肘掛け椅子に沈み込んだ。

封筒の折り返しの下に指を差し込んだが、それはアレクサンドルからの初めての封書を開封するにはあまり上品な方法ではないように思われた。裂け目のささくれが目に入ることを考えると不快になる。彼はペーパーナイフを取りに立ち上がった。必要になりそうなのは、学長からもらったそれと、《神とフランス》という銘が入ったアカデミーのそれだった。彼はきれいな方を選んだ。手紙はそのことに値した。たっぷ

り六枚もあるではないか！ それはハガキの簡潔さを補うものだった。読む前に、ジョルジュは髪を手で梳き、皺になっていた靴下を引き上げた。

S……、一九……年四月二十一日

親愛なるジョルジュ

僕は、何とかしよう、何とかして君にたどり着こうと、心に決めていました。でも実際は、君に手紙らしい手紙を書いて、君の霊名の祝日のために二十三日に間に合わせるの無理ではないかと思いついていたのです。うまくいきますように、僕の愛の祈りがかかりますように。聖ゲオルギウスが、聖アレクサンデルよりも効果的に僕らを守ってくれますように！ 今、僕らの二人の守護聖人が再会し、もっとうまくやってくれるかもしれません。

君は分かっていますよね？ コレージュで、僕が自由を奪われていたってことを。ローゾンの命令に従って、舎監は僕をもう自習時間中にしか外に出してくれませんでした。二つの授業の合間に、僕は自分の賛美歌を君に渡すことに成功したのです。

こちらでは、事はさらに深刻です。まず第一に、ローゾンが——いつも彼——休暇中に書くようにとノートを僕に与えました——信仰ノートでも復活祭ノートでも好きに呼んでください——まあ静修ノートみたいなものですね。これは、僕に接近して、定期的にお説教をするための新しい口実なのです。第二に、通知票が届いたのですが、そこには学長がこんな所見を書いて《意地悪》をしていました。《小さな危機を通過》。それは僕に学監の《欠陥》を思い出させました。危機と欠陥は同種のものです。ローゾンは事前に情報を父に伝えていて、父はそのことを僕に言いました。そんなに強く叱る感じではありませんでした。父は、許される感情と禁じられた感情についての軽い《スピーチ》で抑えてくれました。それから、医者 of 立場において、誤った考えについての僕の指導者の目的を自分なりに繰り返し言い聞かせましたが、父はそれを《悪癖》と名付けていました。悪に関しては、何て不毛な、気の毒な人たちなのでしょう！ いずれにしても、あれやこれやの口実のもと、僕は絶えずこっそりと見張られていて、用心しなければなりませんのです。結局僕は、以前の仲間たちに会うことや、青少年クラブだの何だのに所属することを強制されているのです。向こうと同じくここでも、僕が絶対に一人きりにならないように。そういうわけで、《良い映画》の幕間に、君にハガキを送ることしかできなかったのです。

今日、君の祝日の前日、ローズンが僕を散歩に連れ出すというイベントが発生しました。すぐに彼は、君からの極めて模範的な手紙を受け取ったと言いました。彼の執務室前で僕らが遭遇して以来、彼が君の名前を口にしたのはそれが初めてでした。それは、彼とたった今和解しようとは決心するほどの大きな喜びを僕にもたらしめました。というのも、そのときまで僕は、彼に対して嫌な顔をしていたのです。それでも、彼のすべての嫌がらせに復讐するため、少し痛い目に遭わせて笑ってやりたくて、今の僕は神によって打ちのめされています、サウロがダマスコへの途上でそうなったように、と言ってやりました。君が僕の立場なら言いそうなことを想像したのですが、大げさに言いすぎたかな、と思って、僕は不安になりました。とんでもない！ まるでそれだけしか期待していなかったかのような、大喜びする男が僕の目に映りました。そして、こんなことを僕に言ったのです。彼は僕をまったく疑っていませんでした、僕が彼の信頼を取り戻したこと、休暇中の僕の素行——僕としては不承不承ながらも良好ではあった——が彼を安心させたこと、それは乗り越えるべき最難関であったこと、そしてそれがなされたこと。「コレージュでは」彼は付け加えました。「今後は何の苦もなく事は進むでしょう」——「僕もそう願っています」と僕は答えました。そうして僕らは教会に入りました。「励ましと感謝の祈り」を唱えるためです。その後、

僕は家に戻されました。奇跡的に誰もいなくて、僕は直ちにそれを利用しました。君は今、この手紙のために必要とされたことの全貌を見ているというわけです。

実際、夜は書くことができません。モーリスと同じ部屋で寝ているからです。彼は、僕が秘密の文通をするかどうかをローゾンに監視するよう言い付けられたことを認めました。彼は、それをしそうな相手は誰なのかを知ろうとし、とても気になったようでした。僕は、せむし男とだよ、と言ってやりました。

君の手紙については、とにかく安心してください。僕は毎晩枕の下に紙入れを忍び込ませています。そうすると、君の散文と詩は僕にいろいろなことを語ってくれますし、僕は君が受け取ることにない長い手紙を想像します。それでもやはり、それは悲しい内容になってしまいます。

目下、僕は雌伏しています。僕らには何も企てがないからです。そして、君が譲歩した以上——僕が言いたいのは、譲歩するふりを装ったことですからね——僕らには企てるべきものは何もありませんでした。こんな非難めいたことを書くのを許してください。僕は君が臆病からそうしたのではないことをよく知っていますし、今日僕は同じように行動しましたが、繰り返すことはしないつもりです。反抗する方がより素晴らしいと思うからです。

だいたい、なぜ僕らは絶えず譲歩しているのでしょうか？ 僕らが子供で、常に間違いを犯す可能性があるから？ 子供は生き物ではないのですか？ 子供だけは愛する権利を持つべきではないと？ とはいえ、僕ら二人には、そんなのは無駄なことでしょう。親たちだろうと先生たちだろうと、僕らの愛と、僕の最愛の人を妨げることができる者など、存在しないのです。

アレクサンドル

追伸。——始業式の翌々日——金曜日、僕らの大切な金曜日を記念して——温室で六時に逢いましょう。どんな手を使っても、僕はそこに行きます。

僕はラベンダーの小瓶を買いました。

ジョルジュはその文章を連続して三回読んで、それからそれをキスで埋め尽くした。彼の心は有頂天だった。彼は生きる喜びをよりよく味わうために立ち上がった。テラスに出て、少しの間歩き回った。この手紙は、信条の真の表明であり、アンドレのそれがリュシアンを鼓舞したのと同じくらいの高揚をもって、彼を鼓舞した。そこには、

アンドレが簡潔に提出していたあの権利の要求もまた見いだせる。彼が、自分の友情が他者の判断に従属しかねないと考え、それを身をもって経験した日の、あの反逆の感情。しかし、彼にとっては一時的な衝動でしかなかったもの、あのリュシアンの人にあつては副次的な批判でしかなかったものが、ここでは決定的な抗議となつてゐる。ジョルジュはそれを自分のものとした。今や、彼は世界に刃向かつてゐた。

就寝のとき、彼はその手紙を四つに折り畳んでパジャマのポケットに入れた。眠つてゐる間、それは彼の心臓の上にある。自分の手紙が、夜はあの子の頭の下に置かれ直すのと同じように。

翌日の午前中、あまりに天氣が良かったので、ジョルジュは庭を一回りするために夜の服のまま降りた。彼は温室に赴いた。それは聖ゲルギオスの日には最適の巡礼であつた。聖アレクサンデルの日は、温室の中で祝福されたものではなかつたか？ そこにオレンジの木はなかつたが、あの別の温室よりも香りが少ないわけではなかつた。フジが窓ガラスに沿つて這い上がり、ヒヤシンスの植木鉢が棚板を占めていた。

ジョルジュは、この清新な様相とあの子を結び付けて幸福感に浸つた。彼はあの手紙をここで再読したかつた。彼の母親は、フジは花言葉では友愛の繊細さを表すと言つ

ていた。また彼は、ヒヤシンスが、アポロンに愛された若いヒュアキントスを思い出させることを知っていた。その花は彼の血から生み出されたのだ。ジョルジュはその花冠をいくつか摘み、手紙の封筒の中にそれらを滑り込ませた。

その後彼は、階段状の棚が見える半円アーチの下に座った。彼は、自分が夢見る者が自分の客となり、一緒になるために自分と同じようなパジャマを着て庭に降りるのを想像するのが好きだった。あの子はツゲ材の縁を跳び越えて、池で遊ぶ。彼の乱れた髪が目にかかる。彼は境界神テルミヌスの近くで足を止め、その顎ひげにそっと触れる。彼は芝地のちょうど真ん中に長々と横たわり、大喜びで転がる。それから起き上がり、温室の方に行く。そこではジョルジュが聖クロードのように彼を待っている。向こうでの人目を忍んだ逢い引きのことを思いながら、彼らは温室の中でのパジャマ姿の再会を笑う。

今のジョルジュは、モリスからもらったばかりの手紙の文面にはほとんど心をかき立てられなかった。もっといいものをもらっていたから。しかしながら、アレクサンドルに手紙を書けないことには、もっとひどい失望を覚えるしかなかった。時間をつぶすため、彼はあの子に捧げられる予定の計画に没頭したいと思った。いつかのあ

る日、あの子の名前について集めることになる歴史的コレクションを始めるまでの間の。彼は、あの子に敬意を表し、子供についてのあらゆる詩をかき集めることに決めた。それらを彼に捧げるのだ。統率者に捧げるように。それはアレクサンドルの冠を形成することになる。ランブイエ館のそれよりもパルナソスにふさわしいような。書架は非常に豊富。ジョルジュは探すのに必要なものを持っているのだ。それは休暇の最後を占有することになるだろう。

彼は現代詩人から始めたが、多くの作品の目次に目を通してみても無駄だった。興味を引くような作品が一つもない。同時代でこの主題のものには、《目覚める時の子供の祈り》《家庭の喜び》しか残らず、ほかに『子供——香炉』に含まれる説教師と善良な人々のための詩があったのだが、この題は暖炉の天使のことなのだろうか？ 何てことだ！ 最も敏感で、最も素晴らしい人々は、家庭の詩と宗教の詩にしか詩想が湧かなかったとでもいうのだろうか？ おそらく、アンドレがリュシアンのために写したド・フェルサン氏の、かなり風変わりな詩の本の中になら、別の調べが見つかるだろう。残念ながら、ここの書架には、ほとんど知られていないその詩人の作品は一つもなかったのだが。

ジョルジュは古典的な作品において、もっと幸運に恵まれることを期待した。しか

し、ここにはギリシャ人はあまり多くはないのだった。ホメロスと悲劇作家たちを除くと散文作家しかおらず、もちろん彼はその者たちの援助を求めることなど考えもしなかった。

ローマではもつとよく表現されていた。ウエルギリウスの主要な牧歌は知るところであったが、それは無視しつつ、ジョルジュはいろいろなラテン語詩の翻訳を調べた。彼は多くのものを、多すぎるほどのものを発見した。彼は感動でき、不快でないものを欲していた。

結局、彼の素早い調査に引かかったのは、カトゥルスがユウエンティウスの蜜のような目に三十万回以上もキスするつもりだったという短いエピグラムだけだった。これがアレクサンドルへの、古代の詩の奉納物になるのだ。「蜜のような目……」あの最愛の君の歌の中に、蜜という言葉がすでに出ていた。あの子は行きすぎだと言うかもしれない。目までどっぷり蜜に溺れていると。

その歌の詩を考えながら、ジョルジュは、アレクサンドルに常にその作者が自分だと思われるのも、彼がその夢にこれ以上揺られるのも、窮屈だと感じた。最初のうちは彼を気持ちよくさせていたその欺瞞は、耐えがたいものになっていた。アレクサンドルには真実だけを話す、それは自分の義務である。カトゥルスを引用したとき、彼

はエドモン・ロスタンのことにも言及しようと思った。

その間、彼はローゾン神父の手紙を受け取った。ブラジャンやモーリスからの返信を数えると、一週間のうちにS……から彼に届いた五番目のものだった。全砲台がこちら側に向いたのがよく分かった。彼は、その善良なる神父のパラグラフ全部が《私は》で始まっていることに失笑を禁じ得なかった。まったく、これでは頑固で独断的な人間だと思われやしないだろうか？

親愛なる子へ

私は、あなたが手紙をくれたことに感謝しています。それに対し、あまり早く返事を書くことは望みませんでした。コレージュの生徒は、休暇中は安らかに過ごさねばなりません。そういうわけで、私の手紙はどちらかと言えば新学期への序文なのです。私は、あなたが書いた内容をうれしく思いました。あなたが素晴らしい決意を失っていないという証を、そこに見いだしたからです。何を読むべきかについて私が与えた助言があなたの役に立ったこともまた確認できましたが、あなたが言っていた『愛すべきイエス』という作品のことは知りません。とはいえ、すべての事柄同様このこ

とについても、ご両親に助言を求める以上によい解決策はないでしょう。あなたの先生方とともに、あなたに慎重に人生を教えることを使命としているのがご両親なのです。

私は、あなたが間もなく修道会の最終的な資格を授けられることを忘れなかったことにも祝意を表します。あなたはその出来事の重要性を事前に見抜いていました。あなたは、あまりにも限定的な道德的完成度に甘んじることがないよう努める、と私に言ったのですから。

私のイエス・キリストへの深い献身を信じられんことを…敬具。

＋ローゼン

追伸——二十三日、ミサ聖祭を催すとき、私はあなたのために敬虔なる意向を立てました。

とうとう新学期！ ジョルジュはアレクサンドルの手紙を持って行きたかったのだが、学校でもらった手紙ともども家に置いてくる方がよいと判断した。最後の学期の

間に何が起り得るかなど、誰にも分からないではないか？　さらに、慎重なこの行為は、リュシアンが執着した、メッセージを彼に見せるといふ事態を、免れさせることになるだろう。なるほど、彼はかつての手紙についてはあまり執拗に食い下がったりはしなかったが、今回の手紙については平等な処置を強く要求してくるおそれがある。彼はアンドレのそれを読ませてくれていたのだから。ジョルジュは、彼を満足させられないことをこの上なく申し訳なく思うと、良心に何ら恥じるところなく彼に誓うことになるだろう。

彼は、応接間にあった高価な化粧箱を空にして、それを自分の部屋に持ち込んだ。母親には、優等生名簿であるコレージュの小さな紙束をそこに保存したいと言い、その鍵を保管する許可を求めた。アレクサンドルからの貴重なものの下に、紙で仕切ってリュシアンからの手紙を滑り込ませた。財布の中にはあの髪の毛しか入れなかった。テストピアの写真に隣接したままにしたが、それはすでに学長の認印を受けている。

彼は一月は鉄道で聖クロードに戻ったが、今回はそれをしなかった。両親が車で送ってくれたのだ。彼らは息子のうれしそうな様子に驚いていた。

面会の間、学長は通知票の中断符の解説をしなかった。そういうわけで、ムッシュ・

アカデミー会員は完全にその寵愛を取り戻していたが、それは彼一人だけなのだろうか？ アレクサンドルにとってもまた、あの三月のちょっとした過失は終わった事件になっているのは間違いなかった。

解放されると、ジョルジュは友人を探して通路を歩き回った。しかし、それは無駄となり、時間も遅くなって、彼はリュシアンに休憩時間中に戻ることを強いられた。彼はモリスと少しだけおしゃべりをし、その後すぐに伝統的な挨拶の鐘が鳴るのを聞いてうれしく思った。

彼は、少し前に向こうの最終列を照らしていた小さな金髪の輝きを目で探したが、今日は見当たらず、その不在が彼を不安にした。彼は自分の内部に映像が生じ、それに幻惑されたような思いに囚われた。ミサをあげるローゾン神父の前に、アレクサンドルが、侍者たちの先頭に立って内陣にやって来たのだ。

償いは完成した。それは聖ゲルギオスと聖アレクサンドルが協力しての、初めての奇跡であった。賛歌はハレルヤを鳴り響かせている。受難の時は終わったのだ。

時々、あの子は微笑んでいた。たぶんジョルジュに対して行った、すてきな不意打ちに對してだろう。法衣の切れ込みの間に、赤いネクタイが輝いていた。彼らの集結の合図のように。それは、その法衣やジョルジュのネクタイのみならず、神父の長袍

の祭服や聖櫃の裝飾にも調和してゐるのだった。この前の新学期以上に、その夜はあらゆるものが二人の友人たちの大切な色をまとっていた。

ジョルジュは、祈禱書の中の、誰の祝日かの記載に注目した。聖クレトとマルケリヌス、二人とも教皇で殉教者。いや、クリスマス前のように、殉教のことは子羊のそれさえ何も話されることはない。

アレクサンドルがこんなに魅力的に見えたことはかつてなかった。彼は幸福に輝いていた。ジョルジュは、本を手すりの上で開き、両目をもっと遠く、それらが吸い寄せられるたった一つの対象に固定した。彼は、彫刻やメダルの横顔よりも、古典と現代のあらゆる詩よりも、栄光や富よりも、生命よりも永遠よりも、さらに価値のあるその横顔を、再び見た。彼は、花と果実が一緒になったようなその唇を、たぶんラベンダーの香水が付いたあの金色の髪を、優美な曲線の中にきれいに伸びたあのうなじを、極めて細密に切り抜かれたあのピンク色の耳を、再び見た。

ジョルジュが今愛しているもの、それはアレクサンドルだけではなかった。彼によつて、彼のために、コレージュを愛していたのである。彼はローゾン神父に、学長に、あらゆる者に感謝した。これから先は、誰も恐れることはないように思われた。ここでは皆、優しさを呼吸するしかなかったのだ。

共同寝室では、会話がなかった。舎監は新しい人で、情熱満々であるらしく、巡回をやめないのだ。音がもう聞こえなかったかと思うと、ある隅か、別の隅にいる彼に気付かされるのである。

もしこの変化のために夜のおしゃべりを失うとしても、ジョルジュは慰める根拠を見いだしていた。この学年の前の舎監は、下級生の方に移った。アレクサンドルに対して厳しい態度を見せた人の代わりに、である。ということは、あの子は以前のように外に出ることもできるのだろう。外から判断する限りでは、ローゾン神父は懸念を捨て元どおりになったようだし、あの指令が繰り返されることもないだろう。ジョルジュ自身については、彼は新人に気に入られたことを確信した。彼には、ド・トレンヌ神父という名の人物に期待する権利がちゃんとあるのだ。「ド」が、彼らの間に絆のようなものを作り出している。名前がそれで飾られている生徒は多くなく、バリケードの向こう側には、今までのところ、学長、聖歌隊指揮者、修辭学の先生しか知らされてはいない。

高い身長、痩せこけた顔、短く刈った髪、ぶしつけな視線など、ド・トレンヌ神父がかなり印象的な人物であることは確かである。

こんなにも長期の別れを経て、ジョルジュとアレクサンドルは、ついに温室で一緒になった。その子はすぐに、自分に敬意を表してくれたことが露わな金髪の房に気付いた。彼はその艶っぽい暗示を理解したのだ。笑いながらこう言ったからである。

「何てすてきなアイディアー！」

「それに、何て変わったアイディア！ だよね」ジョルジュは答えた。「でもさ、ほら、この新しい秘密は隠すのが簡単なんだよ」

ポケット鏡の前で、彼はその長く明るい髪を隠すために髪を直した。

「君に手紙を書くことができなかったから」彼は言った。「僕が君のことを思っているってことを証明するために、何かいいことをしなきゃと思ったんだ」

次に、彼のために同じように行った詩の調査について話した。三十万以上のキスについては、カトゥルスからユウェンティウスへの詩を引用したのだと言った。熟考の末——半分は自尊心が残っていたことから、もう半分は文学講義をするような雰囲気にしたくなくて——彼はエドモン・ロスタンについては一言も言わなかった。それが何になる？ 最愛の君という言葉は、もはやその作者にも剽窃者にも属してはおらず、アレクサンドルのものなのだ。

「僕もね、僕も考えたことがあるんだ」その子は言った。「僕らがしなきゃいけないことだよ。二人の血を少し交換するんだ、君と僕で。そうすれば、僕らは永遠に結ばれるだろう」

彼はポケットから折り畳みナイフを取り出して、袖を捲り、腕に軽い傷を付けた。わずかに滴がにじみ出た。彼はジョルジュにそれを飲ませるために近づいた。それから彼はナイフを差し出した。今度は彼が血を味わう番だった。彼らは寄り添い、傷が癒着するまでの間、しばらく無言のままでいた。

ジョルジュはこの場面に激しく心を揺さぶられていた。その素早さが、彼の目に対し、その価値を減少させることはなかった。自分の思考は、この子のそれに比べてかなり貧弱なように思われた。彼は自分が引用したユウエンティウスを恥じていた。自分では、アレクサンドルがしたばかりのことに、本物のキスを付け足す勇氣など出てくるはずもない。彼は想像力では上を行かれたが、それを嘆くことはなかった。このような友人を持つことに陶然としていたのだ。

彼は、アンドレと共に同じ儀式をしたリュシアンのことを考えた。ジョルジュは、彼の近くに到達したことがあまりにも遅くなったことをどんなに後悔したことか！そして、彼は今それに何と満足していることか！それは一度しか起こり得ないこと

なのだ。

ジョルジュは——確かに永遠に——彼がかつて愛した誰よりも愛している者と結ばれたのである。引用やキスや手紙や金髪だけでなく、まさに彼ら自身の血によっても、二人は結ばれた。彼らはお互いへの入団を許した。それぞれが聖職者であり、いけにえでもあった。彼らの友情は宗教になった。彼らはそれを偶然安全な場所に保管した。自分たち自身の中にそれを同化したのだ。あの賛美歌の言葉に従って、それは彼らの傷の中に隠されたのである。

四月末日日曜日の修道会で、志願者たちは手に大蠟燭を持って祭壇前にひざまずいた。ローゾン神父が慣例的な質問をして、彼らはそれに一緒に答えた。

「……我が子供らよ、あなた方をマリアの祭壇の前に連れて来たのは何か？」

「我が神父様、それはいとも神聖なる処女の修道会に受け入れられるようにという燃えるような望みです」

次に神父は、マリアの子供を特徴づける徳、とりわけ純潔の徳を養うよう新会員たちに勧告し、入会許可を宣言した。それからその者たちは聖化の唱を唱え、神父は彼らの胸の上で、緑のリボンの上にメダルをピンで留めた。最後に、彼らはほかの者たちと平和の接吻を交わした。ローゾン神父の監視下で、ジョルジュはアレクサンドル

と聖なる接吻を平然と交わし合ったのである。

その夜、リュシアンと彼は、以前の小さな会話を取り戻すため、必要なだけ夜更かしをする決心をしていた。新学期以来、共同寝室ではおしゃべりができないので、秘密を打ち明けるのは休憩時間中になっている。ジョルジュは、アレクサンドルと友情を結んだ最初の頃に比べれば、もうあまり排他的ではなくなっていた。休暇前にはすでに、リュシアンがアンドレのことを話すのを聞くのを楽しんでたのだ。それでも、彼らが共同で作る出す会話の喚起力が両者に共に喜びを与えるのは、とりわけ夜なのである。彼らはこれ以上の長期間、それを自らに禁じることを望まなかった。

彼らはド・トレヌヌ神父にはほとんど怖さを感じていなかった。今では彼についての情報知られていたし、彼自身、生徒と親しむことしか望んでいないようであった。この神父は考古学者で、学長の友人だった。彼は、研究に引き止められていた近東での長期滞在から、聖クロードへと戻された。そして、この舎監のささやかな役割を願ったのである。それはおそらく、自分が支払わねばならない分を払うための方法だったのだろう。

彼の品位は申し分なく、身だしなみもよかった。あれほど上等な生地のスータンを、聖クロードで見た記憶はない。同時に、あれほど高貴で柔らかな物腰や、あれほどき

れいにひげを剃り、いつもうっすらとパウダーで覆われた頬も。それが一見しての厳格さを和らげているのだ。

その神父は、すでに上級生からは評価されていた。休憩時間の間に彼らと散歩するのが好きで、そのときに自分の旅の話をする。彼は四年生の生徒たちの所でも人気を得ようとした。球技の試合の最中に加わってきて——君たちの先輩と遊ぶほどの体力はないのだと言った。しかも、規則にもかかわらず、彼は遊びを生徒に強要せず、皆、学監があえて干渉してこないことに気付いた。自習時間においては、彼はどんな許可も決して拒まなかった。彼が、絶え間ない監視によって厳しい規律を持続させようと心に決めているらしいのは、共同寝室だけなのだった。皆、彼以上に粘り強くなるしかなかったのである。

ジョルジュはやっと神父の部屋の中で光が消えるのを確認した——暗いカーテンはきちんと引かれなかった。彼はまどろんでいたリュシアンを呼んだ。できるだけ控えるに会話をするために、彼らは寝る前に自分たちのベッドを近づけておいたのだ。ジョルジュはこの場面のために華々しい復帰を準備していた。彼は胸をさらけ出して、修道会のメダルを見せつけた。彼はそれをパジャマにピンで留めていたのだ。リュシアンは大声で笑いそうになるのを押し殺した。

「君は、スカプリアオを僕に見せたときのことを忘れているだろう」ジョルジュは言った。「でも僕がまねたのは君じゃないよ。部屋着に勲章吊^{つり}と勲章を付けている僕のおじさんの一人さ。それに、僕はこのマリアの子供のメダルが好きなんだ。これの裏をよく見たことはあるかい？ 一本の短剣で突き通した二つの心臓があるんだ。薔薇と棘で囲まれて、炎を吹いている。炎、それは僕のためのものだ——僕の家紋の図案だし、僕の名前の語呂合わせを思わせるし、ここでみんながやっている語呂合わせと比べても悪くない。《サーメンティス・フランマ》（若枝の炎）さ」

「あとのものも推して知るべしだな。でも火事に対する保険が必要だ」

「短剣。それはアレクサンドルと僕が、僕らが使って腕を切ったナイフだ。君がアンドレとしたみたいだね。薔薇と棘については……」

不意にジョルジュの目に、薔薇と棘に苦笑し、目をつぶり、深い眠りに落ちた者の静止して動かない状態になり始めていたリュシアンが映った。同時に、軽い床のきしみ音が彼の頭を回転させた。舎監がベッドの前にいた。その神父はリュシアンに近づいて低い声でこう言った。

「いいから、眠ったふりをしないでください、親愛なるルヴェール君」

彼はその言葉を言いながら微笑んでいた。その微笑みはジョルジュを安心させた。

神父はリュシアンの小テーブルにあつた小箱を壁際に押しやり、そこに腰掛けた。彼は二人の枕元の間にいた。アンドレとアレクサンドルの代わりに。

「このいつも一緒にいる二人が、こんなに遅くまで話さねばならないことは、いったい何なのでしょう？」彼は尋ねた。

彼は相変わらず微笑みを浮かべ、声はかろうじて聞き取れるくらいになった。それは声と言うよりは囁きだった。

「たぶん二人は話し合っていたのでしよう」彼は追及した。「新しい舎監のことを——臨時舎監ですが——散歩を引率し、次に晩課で説教して、ひどく疲労しているはずで、今夜はわずかな休息に身を委ねている。ところが！ ご覧のとおり、彼は部屋に入ったけれど、眠ってはいなかった。彼は窓のカーテンの裏にくつつけた耳で聴いていたわけですね。彼は、ある程度持続する監視が、無意味なおしゃべりのことばかり考えている者を落胆させて終わることを知っているけれど、そうでない者がより深刻な理由のために根気よく待つものだということもまた知っている。さて、深刻なこととはすべて彼の関心を引きまします。それが彼をして、待ってみようかという気にさせる理由なのです」

神父が、先の晩課で自分が説教したことを思い出させたのは間違いだつた。彼の雄

弁さが礼拝堂を満たした壮大な印象は、この夜の囁き声の気品を損う結果となつてしまつていた。彼はジョルジュとリュシアンに代わる代わる視線を投げた。たぶん今の話の効果が生じたことを納得するために。しかし、ジョルジュは彼の視線を避けた。彼は、どうやらリュシアンも感じたらしい困惑を覚えた。神父は言葉が続けた。

「考古学は非常に魅力的なものです——ご存じのように、俗世での私の職業です。建築物の破片から神殿を復元したり、言葉がほとんど消えてしまった碑文を解説したり。大部分の人と違って、私は自分の学問にずっと集中しているのですよ。身振りや、ちらっと見た感じや、ごくわずかなことから、各人の秘密を復元し、解説するわけです。

最初の夜に、ド・サール氏の左の場所は空いていますから、あなた方がその隅で孤立していることは、抜け目のなさそうな二人の少年の問題に、有利に働くのだろうと推察しました。私は目と耳を開いておきましたが、さっきあなた方二人のベッドが奇跡のように近づいているのに気付いたとき、あなた方の同級生によるのと同様、私はあなた方に目をくらまされるのではないかと心配になり始めました。私は、その奇跡が結果をもたらしたのかどうかを見に来たというわけです」

彼はジョルジュとリュシアンを見つめた。彼は二人を安心させたと思つてゐる。しかし、ジョルジュはますます驚いて、リュシアンに視線で問いかけ、彼同様顔を背け

てしまった。

「いいでしょう！」神父は急に立ち上がりながら言った。「冗談を長引かせすぎました」彼の声はかすかなままだったが、そのトーンはかなり変わっていた。

「二人ともひざまずいて、さあ、早く！」彼は付け加えた。

ジョルジュはシートに紛れさせてマリアの子供のメダルを引っ込めた。リュシアンがした振る舞いを見て、そのとおりに、彼はベッドから降りた所にひざまずいた。

「すみませんが、そこではありません！」神父は言った。「通路に、です。あなた方がどんな状態にいるかを監視しますから」

彼は、二人からあまり遠くない、共同寢室のそちらの側に備え付けられた整理棚に背をもたれかけさせた。彼は綿入れ外套のポケットの中からコンタツを取り出し、静かにその数珠をつまぐった。

ジョルジュは、この追従ついでようと厳格さの混合をどう考えるべきか分からなかった。神父は、罰する前に安心させるふりをしていた。より効果的に苦しめるために愛想良く振る舞っていただけなのだ。どういう人間なんだろう？ 言葉の方も、態度と負けず劣らずの意外さだった。彼は召使いのように、あるいはネロのように、カーテンの後ろで聴いていた。会話犯を現場で取り押さえようとしたが、それはそこに参加するため

だった。彼はそれを引き延ばし、突然怒り出した。話していたから怒ったのか、それとももう話さなくなったから怒ったのか？ 本当に、本職の考古学者でない者にとつては、彼のケースは不完全な碑文と同じくらい解説が困難だった。

とはいえジョルジュは、多くの謎を突き止めようとはあまり思わなかった。アレクサンドルとの逢瀬を左右しそうな人間の不興を買わないことだけが望みだったのだ。彼は熱心さを証明するため、曲げた膝の上で見事な姿勢を保った。彼はベッドの中にあるメダルのことを考えた。リボンは皺になってしまふだろう。

神父はコンタツを終えると二人の少年の方に向かい、立ち上がるよう命じた。彼らを互いに近づけると、彼は自分の腕の中に彼らを抱き寄せた。その愛情の籠もった抱擁によって、彼らを許そうとしているかのように。それから彼はゆっくりと離れた。彼は二人を終夜灯の明かりで見つめたが、彼の顔は陰になっていた。最後に彼は、真面目な声でこう言った。

「私のために深く祈ってください」

ジョルジュとリュシアンは、ド・トレヌヌ神父が昨晚彼らにいった何を望んだのか、今日の昼間の彼の態度からはほとんど理解できなかった。実際、彼は二人に対する機嫌をまたも変化させていたのだ。それは完璧な無関心ぶりを彼らに見せることだった。

彼は二人に祈りを求めたことをとくに忘れているか、あるいはたぶん、そうしたことを悔いているのだ。だいたい、自分のために深く祈ってもらうことに、どんな理由があるというのだろうか？

要するに、この二人の友人たちは、彼は少しおかしいという結論に達するのをためらわなかったのである。とにかく彼らは、彼がもう自分たちに関心を持つまいと決めていなかった場合に備えて、彼の方からの新たな侵入の危険を冒すまいと決心した。神父は、自分の来訪は長すぎるだけの冗談であると表明していなかったか？ 実際は短かったと思うのだが。

眠っている最中、ジョルジュは強い光を感じて目を開いた。隣が空いている方の枕元に、手に懐中電灯を持って自分を照らし、観察しているド・トレンヌ神父が目に入った。神父は灯りを消してナイトテーブルに座った。このテーブルたちは、彼が腰掛けのを受け入れるという目的だけのためにこんなに低く作られたのだ、と言われそうだった。

「起こしてしまって申し訳ありません」彼は囁いた。「ルヴェールは眠らせておきましよう」

少し体を起こし、彼は数秒間懐中電灯をつけて、ちょうどこちらを向いていたリュシアン顔の上に向けた。

「彼がどんなにぐっすり眠っているか、ご覧なさい！」彼は言った。「閉じた目は天使を見つめ、口は彼らを吸い込む。彼はミュッセが魅力的に書いたものを思い出させますね。」

子供たちの唇は薔薇のように開く
夜の息吹に……」

神父は再び点灯したが、それはリュシアン美しさにジュールジュを感心させることを喜んでいるかのようだった。

すべてを推察した彼は、先学期、懐中電灯がジュールジュのために共同寝室で役割を演じたことも推察したのだろうか？ 今のそれよりも美しい顔を思い浮かべさせ、ミュッセのものよりもさらに甘美な詩を読ませてくれたのだ。

神父の引用はジュールジュを気持ちよくさせた——自分は詩的な話題にふさわしい者として扱われたのだ——だけでなく、彼を信用してもよいという気持ちを起こさせた。

ミュッセは、神父たちにはほとんど信用されていない。その作家を称えたばかりのこの人は、してみると自由な考えの持ち主であると示したことになる。結局、自分には咎めるべき点がないのだから、ジョルジュはこの夜の訪問者を確実に友好的な性格であると推定し、差し出される保護をこれ幸いに歓迎する準備ができていた。彼は逢瀬を確実なものにし、友情をいっそう確固たるものにしてくれる。ほかの神父たちに対して、また学長に対して、アレクサンドルと彼はド・トレンヌ神父を持つことになるのだ。だとすれば、それには微笑みの価値があった。その微笑みには、舎監はかなり喜んだように見えた。彼は枕の近くまで頭を傾け、呼吸音の中で言った。

「眠くないのでしょうか？ 私は、あなたと長時間盛んにおしゃべりをするような気がします。一度だけ、かなり力不足でしたが、私がリュシアンに代わりを務めましょう」

エリキシル剤と化粧水の爽やかな香りが、その言葉と混ざり合った。ジョルジュは、聖職者が、彼に、彼だけに、ほとんど耳元に、こんな場所で、こんな薄明かりの中で、このように話すのを聞いて、動揺した。彼は、告解の後で、悪しき思いについてのローゾン神父の言葉を聞いているアレクサンドルのことを思い浮かべた。ド・トレンヌ神父も、たぶん同じように祈りを勧めようとするのではなからうか。

彼は、どこから始めるかを探しているかのように、一瞬沈黙した。

「私はぜひとも、あなたがギリシャ語翻訳の首席であったことを称えたい」彼は言った。「実に素晴らしいことです。さらに言えば、いろいろな授業の全首席の中で、その栄冠を戴くのはあなたが最も適任でした。あなたは、この聖クロードのよりもプラトンのアカデメイアの方がずっとふさわしい」

「恐縮の至りです」ジョルジュは再び微笑みながら言った。

彼は、アカデミー・フランセーズに立候補するとき、聖クロードの会にプラトンのそれを加えることになるかもしれない。

神父は夢見るような声で言葉を続けた。

「私はギリシャ語が大好きで、ギリシャも大好きで、よく知っているのです。あなたにも知ってほしいと願っています。あなたはあの国を見なければなりません。完璧さが生まれた国で、それ自身が別の完璧さを有しています。岩山と泉、空と海岸、禿げ山とオリーブ畑、それらは、パルテノンやデルポイ競技場やオリンピアのヘルメース像よりも学ぶことが少ないとは限りません。しかし、それら驚嘆すべきものは、それらを照らし、それらを創り出したと思われる光の中でしか理解されないのです。同様に、人々にあっても、美と純粋さは常に結び付いていなければなりません。私はあなたたちに最初の点で賛辞を送りましたが、第二の点についてはそれに値するのです」

うか？　あなたは、その美点より千倍も本質的なその美德を立証することができますか？」

「もちろんです」ギリシャの空の純粹さから素行の純粹さまで移り変わる、その素早さに驚きつつ、ジョルジュは言った。

「リュシアン・ルヴェールとのあなたの友情には、ずいぶん固い絆があるように見えます。道に迷ったことはありませんか？」

ジョルジュは枕の上で赤くなつた。神父の興味関心は、少し度が過ぎるように思われた。にもかかわらず、彼はあまり感情的にならずに返答することができた。

「神父様はご存じでしょう、僕にはそういった問題に対する指導担当者がいます」

「まあまあ、ジョルジュ君、私のしつこさに腹を立てないでください。貴族は赤面するものではありません。つまり、赤面させられかねないことを犯してはならないということなのです。バイールのように、恐れるものなく、また非の打ちどころなくあるべきです。ところが、不幸なことに、自責の念に苛まれるような何らかの問題があるとき、もしその者の指導担当者が凡人であるならば、その者が告解に躊躇するのを、私はよく知っています。そうになると、その者は自分のカーストシヤストゥに属する別の者を選ばなければなりません。この《カースト》という語は、《純潔シヤストゥ》の同義語ではないでしょ

うか？ 使徒の言葉のように、純粹な者にはすべてのものが純粹なのです」

ジョルジュは、これもまた純粹さのことを熱心に説いていた説教師のことを思った。彼はその語とラテン語の《子供》は語源が同じだと教えていた。人は子供と純粹さをとことん利用して、あらゆる仕事をさせるのだ。彼は、ド・トレヌヌ神父が半分しか言わなかった文の全体も思い出した。《純粹な者にはすべてのものが純粹だが、不純な者には純粹なものはない》。

「私はね」神父は続けた。「私は男の子を理解しています。彼らは、雪は黒いというギリシャの詭弁を納得させてくれました。あの純真さが、どれほど目を曇らせることか！ 告解の場では、ジャムをあまりにも愛しすぎたことくらいしか告白しない者がいます。その者は、実際は言語道断な過ちに身を委ねているのに、です。それは聖パウロが、当然のことながら、信者たちの中で耳にしたくもなかったような過ちなのです。そのような罪に身を任せつつも、少なくとも指導担当者にはそれを話したがいというのは、おそらく彼の正しさを示すものでしょう。

土曜日、あなたの仲間たちが告解からとても平穩に戻って来るのを見て、私はいらっとしました。私が彼らの顔に読み取ったのは魂の平和ではなく、背徳の勝利でした。その時間は、コレージュの秘密の生活すべてが明らかにされるべきなのに、最高

度の欺瞞の時間になっているのです。その人自身が本物の子供ではなかったとしたら、子供にどんなふうに質問すればいいのでしょうか？ その人は、本物の子供らしさを、意志や祈りの力で支配してきたのです。罪の機会は多い——篤信とくしんの人で一日に七回だと聖書は言っています！ そして、子供たちは篤信の人にはほとんど似ていません！ 彼らには、暇も観察力も、大人よりずっと多くあるので、はるかに多く罪を犯します。実際に罪を犯せないときには、思考、視覚、聴覚の罪を犯すのです。

あなたはたぶん、聖アウグスティヌスの『告白』も、聖ペトルス・カニシウスのそれも、同じくベックとクリュニーの『ベネディクト会の習慣』も、読んではいないでしょう。聖アウグスティヌスは、少年の彼が幼い仲間たちと犯した放蕩の状況を説明した後、次のことをかなり雄弁に語り加えています。『当時のそれは、いわゆる子供の無邪気さと言われているものだったのでしょうか？ 彼らの中にそんなものはまったくありません、主よ、まったくくないのです、おお主よ（彼は繰り返しています）、そして私は今日もなお、その無邪気さの中にいたことの赦しを求めているのです』彼は、多少奇妙ではあるものの、さらに力強いことを述べて終えています。彼の見解では、我らが主が、天国は子供のような人々のものであると説明するときは、いわゆる無邪気さを徳の手本とするのではなく、ただ彼らの背丈の小ささを謙虚さの象徴とするように

勧めているのだ、とのことだ。

ローマ・カトリック教会の神父が言ったことがあります。聖ペトルス・カニシウスは、十六世紀のカトリック教育の改革者の一人ですが、少年時代の過ちの告白はもつとずっと重苦しいものです。でも、たぶん謙虚さの聖なる誇張は尊重されるべきです。私は彼の適切な結論を引用するのみにとどめます。『主よ、若者の教育者たちの目を開かせてください。彼らが盲目的な指導者でなくなるように』

中世において、聖ベネディクト会の修道士たちは、聖アウグスティヌスの注記を熟考し、聖ペトルス・カニシウスの祈りを叶えました。彼らの学校の規則がそれを証明しています。例えば、そこにはこう書かれています。『子供たちがいる場所においては、互いにあまりにも接近しすぎることを禁じるものとする……。教室においては、共同のベンチではなく、それぞれに別の座席が与えられねばならない』各々の生徒のそばにはずっと教育者がいて、その者たちは夜は隣のベッドで眠ったのです。

現代において流行しているのは、子供の無邪気さです。ここでもどこでも、感じのいい偽善者たちに都合のいいこの偏見が続いているのが見られます。規則は、法と同じく、この問題については、例の『マクシマ・デーベートウル・プエロー・レウェレンティア（子供には最大の敬意が払われるべきである）』から一致して着想を得てい

ます。この寸言は、あなたもご存じのようにユウエーナリスが書いたもので、子供の問題についてキリスト教世界が異教徒世界から受け継いだ道徳的教義を要約しています。聖クロード以外の場所で、たぶんあなたはギリシャ系やラテン系の作家を読んでいますよね。そうでなければ、あの素晴らしいユウエーナリス以後、古代においては、子供は非常に尊敬すべきものであったがためにとりわけ尊敬されたと、あなたは信じてしまったでしょう。しかし、もし私が、二人の偉大な聖者の子供時代にあったことを、さほどはばかることなくあなたに言うことができたとしても、古代の最も偉大な人々のそれをあなたに話すことには躊躇すると思います。ただ、その悲惨さを前にしても、自然を非難しないようにしましょうね。それは皆、原罪のせいなのですから。

それで、このすべてがあなたに、純潔がいかに壊れやすい徳であるかを教えているのですよ、ジョルジュ君。シエナの聖ベルナルディーノの生涯を読むと、『人は純潔にはなれないだろう、神から純潔という贈り物を賜らない人は』という部分が出てきます。しかし彼はこう付け加えてもいます。我々にその贈り物を授けるために、我々がそれをご自分に求めてくることを、神は望んでおられるのだ、と。とは言っても、それを求めることができるようにする必要はありませんし、求め方を知る必要もあります。

そのような心がけは、あなたくらい年齢の少年にはやや荷が重いでしょうね。もしあなたが孤立した状態でいたならば、あなたやほかの者に援助がない状態だったならば、という意味ですが、その場合は、あなたが誘惑に屈してしまうことでしょう。注意深く友好的な目が、あなたの心を監視する必要があります。私があなたの心の舎監になってさしあげますよ」

彼は自分の言葉に微笑みながら立ち上がった。

「おやすみなさい」彼はジョルジュの手を握りながら言った。「私が申し出たことは、もちろんあなたの友人にも同じように向けられています。私たちは三人の友人になりました」

リュシアンはこの話のすべてを面白がったようだが、ジョルジュがアレクサンドルにもそれを楽しませるつもりだと告げたとき、彼は慎重を期すよう助言した。これは僕ら二人にしか関係ないことだ。僕らは誰かに報告する必要も、誰かを恐れる必要もないくらい十分に成熟している。あの子は、この神父との交流を育てようとすることへの僕らの好奇心を、評価できないだろう。確かに十分に好奇心をくすぐられる。自分たちの先生方の一人が、規則への復讐をするのだ——彼らにとってベックとクリュ

ニーのそれよりも重要な、聖クロードの規則への。彼らは、国語の授業で『プロヴァンシャル』を取り上げたときに聞いた曖昧な表現の説を、実地に学習することになった。とにかく彼らは、できる限りこの小さな陰謀と一緒にやり続けるということで見が一致した。もし二人のうちの一人が神父によって起こされるなら、その者がもう一人を起こすようにする。そして二人は告解を聞くといい申し出について、もちろん彼に大いに感謝することになるのだらう。

彼らには就寝時刻が神秘に満ちたものと思われた。祈りの後、夜の出来事を見越して、したり顔で互いに見つめ合う。神父がベッドの前を静かに通ったとき、ジョルジュは自分が不安を感じていると思った。コンタツがスータンのボタンに当たって音を立てた。それから再び軽い物音が遠ざかり、舎監の影が壁の上に広がる。彼の意図が呼び起こしたイメージが、共同寝室に浮かんできた。

ギリシャを知っているこの人間——《アレクサンドロス、ピリッポスの息子》の祖国——は、ジョルジュの目には非常に魅力的に映った。神話や古代の歴史書の中に描かれる彫像群や記念建造物群を、彼は見ているのだ。おそらく彼は、この夜々の中の一晩で、テスピアのアムールのお話をすることもあるだろう。もしアテネへ行く途中でローマに引き止められていたならば、ヴァチカンでその大理石像を見たに違いないし、

教皇についての話題と同じく、会話の中にそれを含めるための方便を見つけたことだろう。

ジョルジュは、もうアレクサンドルのことだけを考えてはいられないことを残念に思っていた。にもかかわらず、彼は、それが決して自分を不実にするわけではないということをよく知っていた。あの子自身、リュシアンのことについて、いろんな友達がいると言っていたではないか。ローゾン神父も、いろいろなキスがあると言っていたし。舎監とのこの交際は、完全に理知的なものだ。その人の意図に反して、心は何の役割も果たしていない。ド・トレヌヌ神父はマルク・ド・ブラジャンの代理なのだ。マルクの少年たちへの評価は、神父のそのの前兆になっていた。アレクサンドルは、何かありそうなリュシアンとの友情を容認できたくらいなのだから、何もないこちらの方も暗黙のうちに受け入れてくれることだろう。

ジョルジュは、皆と一緒に朝にしか目を開いていないことに驚いた。その夜、訪問はなかったのだ。日中神父は、彼にもリュシアンにも、もう最小限の注意さえ向けなかった。夜には、彼らの好奇心はさらに強くなるほかはなかった。話すことができないというのに、二人はなかなか眠れなかった。ジョルジュは神父が来る方に賭けたかったが、リュシアンも同じことを考えていたのである。

目を覚ましたとき、彼らは自分たちが間違っていたことを確認した。二人はほとんど失望させられた。あの神父は、あのあらゆる前進の後で、撤退してしまったのだろうか？ 学識という宝を抱えたままで？ 彼は、血行をよくするための温水と冷水が交互に出るシャワーを実践することを愛好していた（彼は、そのシャワーのように態度を豹変させることも好きだったのである）。リュシアンはそれを暑い国々での逗留で説明した。

木曜日の自習時間の間、ジョルジュは散歩から帰ると、課題作文を清書しながら、アレクサンドルに会いに行くことを考えていた。それは今日のド・トレンヌ神父の雄弁と沈黙を忘れさせるに十分だった。彼はもう一つの世界を取り戻していた。今すぐ外出許可を求めたとしたら、舎監からのそれを待つだけ、そんな世界である。

いずれにせよ、逢瀬を増やさなかった慎重さを、彼は自画自賛した。彼は、非常に鋭敏であると同時に非常に気まぐれな人間からの優遇は、求めるにしてもほどほどにしておきたいと思った。彼との交流は、そこから大きな利益を期待し続けられるようになるためには、かなり多くの浮沈を見せることだろう。この点についての見解は、意を決して変更する必要があった。金曜日、アレクサンドルは、最初の頃のような週

に二度の逢瀬を望んだのだが、一種の直感によって、ジョルジュは一度だけという方針を主張した。彼はそれを木曜日に決めた。つまり、彼は聴罪担当者の跡を継ぐことを嫌ったのだ。彼は、運命によって与えられた警告は、尊重するほかはないものなのだと確信していた。そうでないとしても、その運命によって、彼は、すでに知らない間にその警告を別の者から聞いていたのである。

午後の散歩でまだ活気の残る温室に、あの子がやって来た。彼の髪は少し乱れていた。それに再び櫛を入れるのは、お互いの喜びである。今や櫛は彼らの逢瀬の一部をなしていた。

彼のクラスは、森に植物採集に行っていたという。

「そのときの花は全部」彼がジョルジュに言った。「君のために摘んだんだよ。僕はこうつぶやいた。『このスマイレを彼に、このスイカズラを彼に、このスズランを彼に、この赤いヒヤシンスを彼に』ほら、これだよ！」

彼はポケットからささやかな花束を取り出した。

「ちよっとしおれちゃって残念だけど」彼は付け加えた。「フジもあるよ。帰ってから、庭の近くで摘んだんだよ」

ヒヤシンスとフジの着想たるや、実に驚異的だった。それは、復活祭のときの手紙

の封筒に、別の温室のどの花をジョルジュが入れたのかを、その子が見抜いたかのようだった。ジョルジュはそのことを話し、そのついでに、美しいヒュアキンソスの伝説、アポロンが花にヒュアキンソスに由来する名前を付けた伝説を差し挟んだ。

アレクサンドルは笑いながら言った。

「僕らは赤いヒヤシンスをヤサントウ・ジョルジアヌと呼ぼう。僕、植物学はすごく得意なんだ。君の神話学と同じくらいね。君はヒヤシンスがどんなものかを教えてくれたけれど、じゃあタラクサカムって何だか分かる？ お手上げなんじゃない？ それってタンポポのことなんだよ。植物図鑑の中に、赤いインクでラテン語名を書くんだ。よく覚えられるようにね」

「僕らは赤の加護に身を置いている。ところが、僕は聖人の祝日に、君のために祈ることを忘れるところだったんだ。殉教者名簿によれば、昨日の五月三日が聖アレクサンデルの日になっていた。だから、僕はもう一度君のために祈る。花束を持って来るべきだったのは僕なんだ。君は僕のレトリックの花で我慢してほしい。」

祈禱書には、九月十一日の君の誕生日が、殉教者聖ヒアキンソウスの祝日であると書いてあった。君は僕ら二人の宗教のヒュアキンソスだ」

「うん、でも、どちらにしても僕は血を流すよね。赤が僕の、僕への色であるのは、

たぶんそのためなんじゃない？ 僕は君のネクタイを採用する前に、よく考えるべきだったよ」

ジョルジュは微笑んだ。

「この色はもう一つ意味を持っている。二つあると言っている。最初に会ったとき、僕はその間にそれをほのめかした。『雅歌』は——君にはそれを話すしかない——『愛は火と炎のランプ』、つまりそれが赤だということを僕らに教えてくれる。別の箇所には、また聖書だけれど、『緋のように赤い罪』と取り上げられている。（静修の説教師がこの文句を言っていたよ）。愛と罪、それが僕らに突きつけられた選択で、僕らはうまく選んだんだ」

「でも、僕らはどちらも選ばなかったよ。僕らが選んだのは友情だ」

「言葉遣いなんかどうでもいいじゃないか？ 互いに好き合っていることが重要なんだ。渡してくれる手紙の中で、賛美歌の中で、送ってくれた手紙の中で、君は僕を好きだってよく言ってくれていたよ」

「僕はそれを書きはするけれど、言っではいない」

「それでも君は繰り返して言ってくれているよ。だって君、赤くなってるから。それは第三の赤、告白の赤だね。で、僕と聖アレクサンデルの縁はまだ終わりじゃない。」

昨日の静修の時間に、学長が『皇帝ハドリアヌスの統治下で教会を指導した、偉大なる聖アレクサンデル教皇』について論じていたのを聞いて、僕はうれしかった。ところで、君が僕に撒香してくれた日曜日、僕は、もし望むなら君は教皇になれるかもしれないと思った。君がすでにそうだとは知らなかったよ。学長が貸してくれた『ローマ史』の中で読んだんだけど、ハドリアヌス皇帝にはアンティノウスというお気に入りの若者がいたそうだよ。彼はその美しさで今でも有名だ。アレクサンデル自身もね——アレクサンドロス大王はさ、偉大な教皇じゃないよね。アンティノウスが死んだとき、神殿が建てられた。ヒュアキントスに建てられたように。もし僕がローマ皇帝で君の友人だったなら、君が生きている間に神殿を建てさせて、君は地上の神になったかもしれないって思うよ。それって教皇であるよりよかっただろうね。僕は瞑想の間にこんなことを考えていたんだよ。アンティノウスのおかげで、僕は聖アレクサンデルが好きになった。ウエルギリウスの牧歌で、アレクサンデルが僕をアレクシス好きにさせたようにね」

「ユウエンティウス、アンティノウス、アレクシス、ヒュアキントス」指を折りながらその子が言った。「僕は四名様ご一行ってわけだね」

ジョルジュとリュシアンは、まだ手に薔薇を持ったド・トレヌ神父の部屋にいた。彼らに一瞬香りを嗅がせた花で、その香りで目を覚まさせるためであった。ジョルジュはこんな雅なやり方は初めてで、それから続けて彼はリュシアンにその処理をした。ミユッセは、子供たちの唇は、夜、薔薇のように開く、と言っていた。ド・トレヌ神父は、薔薇で子供たちの目を開いたわけだ。

彼は二人の少年を自分の所に雑談に来るよう招待した。そこならもっと快適に話せると。二人にそれを拒むことなどできただろうか？ 彼は、音を立てないよう、二人がいないことを悟らせないためにベッドをうまく整えるよう勧めた。彼らはスリッパを履き、そして上着を羽織っているのを見て、パジャマのままでいるよう頼んだ——もし寒くても、電気ストーブをつけるからと。そういうわけで、すっかり驚いたまま彼らはここにいるのであった。

神父は花瓶に薔薇を入れ、微笑みながら言った。
ロサ・ミステイカ
「奇しき薔薇、我らが神秘の薔薇」

彼は共同寝室に面しているカーテンのかかった窓をそっと閉じた。ベッドは乱れていなかった。いくつもの瓶で占められた化粧台のそばには、ゴムの浴槽があった。テーブルの上、ランプのそばの、リキュールのボトルとビスケットの塊の間に、三個のグ

ラスが置かれていた。

客用の椅子を差し出してから、神父は枝編み細工の肘掛け椅子に、彼らに向き合って身を落ち着けた。

「お伝えせねばなりません」彼は言った。「詩篇作者の言葉です。『兄弟とともに暮らすことは何と素晴らしく甘美なことだろう！』……ハビターレ・フラートゥレス・イン・ウーヌム。これはテンプル騎士団に好まれた格言で、その迫害者たちはそこに忌まわしい意味を見たりしました。大いなる友愛は、迫害とまではいかなくても、少なくとも誹謗中傷くらいは引き起こすものです。私は、私たちのそれを守るためにここにあなたたちを召集したのです。この場所はより快適であるのみならず、より安全でもあります。私は次々とベッドを回り、全員が眠っていることを確認しました。そのうえ、時間も好都合です。今は最初の、いちばん深い眠りに落ちている時間帯です。それでも、声を落とし、もっと近づきましょう」

二人は椅子を彼の方に寄せた。二人の膝は、ほとんど彼のそれに触れていた。

「昼間は」神父は続けた。「私は同じように用心に用心を重ねようと思います。私の関心を引いたあなたたちとは、私は決して付き合うことはないでしょう。私を楽しませてくれるけれども関心を引かない者は別ですが。自分が大人だと思っているあなた

たちの先輩や、自分が子供だと思っている四年生の後輩たちのことです。あなたたちは、ほかの者より上にいるという感覚をより多く抱くばかりでしょう。そして、真の勝利は秘密なのだということも学ぶことでしょう」

それから彼は、微笑みながらも一度付け加えた。

「我が父の家には、住まいがたくさんあります」

彼は立ち上がり、瓶の栓を抜いてドリンクを注いだ。ジョルジュはギリシャについていくつか質問した。人々は、ホテルは、食べ物、道路はどんなふうか、買うべき美しい彫刻はまだ見つかるのかどうか。神父は愛想よく答えた。彼はミュッセの詩集を注文することも約束した。リュシアンが、自分はそれを読みたい、ジョルジュによれば、自分が神父様にある文句をそこから思い出させたという栄光に浴したから、と言ったのだ。

「確認できて満足です」神父は表明した。「あなたたちが決して人目を避けていないことを。あなたたちが仲間から離れた状態でいたことを、私が確認したようにね。たいへんな親密さといへんな慎重さは、私を惹き付け、引き止めるためになされたものなのですね」

彼は招待客たちに最終的な小さなグラス一個を差し出し、彼らを観察するために後

ろに下がった。

「思ったとおりです」彼は言った。「あなたたちのパジャマはまったく合っていないですね。リュシアンのがジョルジュに似合いそうです。ジョルジュの方が細いですしね。そして、ジョルジュのそれはリュシアンにいいでしょう。リュシアンの方ががっしりしていますから。明日交換なさい。ピタゴラスの言葉によれば、友人間ではすべてのものが共用なのです」

彼は腕時計を見て言った。

「私はあなたたちの休息に気を配っています。夢の世界に戻るために私から離れる時間です。あなたたちが誰の、何の夢を見るか、私がどんなに知りたいと思っていることか！ 明日はおそらく、私の考えのおかげで、ジョルジュはリュシアンの夢を見て、リュシアンはジョルジュの夢を見るでしょう」

いつかの夜のように、彼は彼らを凝視した。

「忘れないでください」彼は言った。「私はこれをあなたたちに繰り返すことを決してやめません。神の目には、純粋さは子供たちの最も美しい装いですが、それは非常にしばしば、彼らに不足する唯一のものにもなるのです。あなたたちの年齢、すなわち十四歳のとき、トレンティーノの聖ニコラウスは、純潔を守るのに、鎖と鉄の帯と

苦行衣を用い、週に四度の断食と、睡眠は直に地面の上でだけ、ということを実践するしかありませんでした。

悪魔を永遠に屈服させられる者に栄光あれ！ というのはもちろんなのですが、それでも、もし過ちを犯したとしても、悔悛の道がずっと開かれたままであることも覚えておかねばなりません。心の純潔は取り戻すことができませんし、それこそが重要なのです。高邁なる魂においては、悪徳への激情は、それらを浄化しに来る恩寵の力の前兆となるのです。絶望してはいけません。苦境のどん底でも、私はあなたたちに神を取り戻させてさしあげます」

その次の日曜日、臨時の劇団が祝典ホールで『ポリュークト、キリスト教徒の悲劇』を上演することになっていた。ジョルジュは、自分のクラスのカリキュラムに入っていて、アルマジロによって大量の解説を付けられたこの戯曲には、ほとんど感心しなかった。その点についてはランブイエ館への見解と共通だった。表彰式で上級生たちが演じるはずの『訴訟狂』の中のある役を与えられていたのに、彼は演劇芸術の講義を受ける気などほとんどなかった。それでも彼はとても喜んでいた。『ポリュークト』はアレクサンドルを見かける機会になるだろう。『訴訟狂』が彼に自分を見せる機会

になるように、そしてそれはおそらく三月のアカデミーの虚飾よりも喜ばしいものになるように。

近郊の主任司祭様たちが招待されていた。彼らが入って来ると、その田舎っぽい様子とずんぐりした体格が若い観衆を喜ばせた。彼らは前列に席を与えられ、そこにはアカデミー会員が枢機卿のそばに座る榮譽に浴していたが、肘掛け椅子は学長の所に残されたままだった。主任司祭様たちの何列か後ろ、ジョルジュの何列か前に、アレクサンドルの金髪のうなじが目を引きいた。

ついにポリュクトが登場し、ネアルクに厳しく咎められる。《神》、《天》、《キリスト教徒》、《洗礼》などの言葉が聞こえるたびに、愚直な主任司祭様たちはどっと拍手を送っている。それらの発声において、俳優たちはその非常に恵み深い音節を丁寧に強調した。生徒たちは急いで主任司祭様たちのまねをし、まるで嵐のようだった。学長は振り向いて喝采を静めなければならなかった。それなのに、俳優の演技や、招待客の熱情や、キリスト教徒のという形容詞を持ったルイ十四世時代の作品である悲劇の性格など、自分がそれら全部を非難しているように見られることへの恐れから、彼は困惑しているように見えた。彼は『ポリュクト』に関する行動を抑制されたのである。ジョルジュの《テスピアのアムール、ヴァチカン宮殿》の絵はがきによってそ

うなったように。

モーリスはジョルジュからあまり遠くない場所にいて、別のものに拍手するために対抗デモを編成しなきゃならないと言っていた。《女性》《愛人》《色香》《美しい目》《婚姻……結婚》。彼はそれらの用語の途中で控えめに床を蹴り、面白おかしい抗議を申し立てた。そして彼は、《肉体》も《ジュピター》も《快楽》も忘れていなかった。堂々としたフェリックスが最後の一行で張り上げたのは、大声のこの台詞だった。

「そして至る所で鳴り響かせよう、神の名を」

授業で先生が言っていた。「戯曲がこの言葉、『神』で終わることに注目してください」今日は皆そのことにすっかり気付いていたことだろう。退場時のざわめきの中、ジョルジュは目で自分を探していたアレクサンドルの近くまで滑り寄った。天と地に立ち向かうことを喜び、彼はその子と二言三言やりとりをした。ポリュクトの熱情が彼に乗り移り、ローゾン神父でさえも彼を遮ることはできなかっただろう。

翌日の夜、ジョルジュとリュシアンはド・トレンヌ神父の部屋にいた。二度目であ

る。もう真夜中を過ぎていた。

「あなたたちならとんでもない時刻でも許してくれるでしょう」神父は言った。「しかし、あなたたちを起こそうとしたときに、窓の朝顔口の中に静かに座ってタバコを吸っていたお仲間を嗅ぎ付けたのです。近頃はいつもそうですが、夜開けっ放しになっていますからね。中庭のライラックから立ち上ってくる匂いは、多くの少年たちの安眠妨害になるのです。私はその喫煙者のタバコを没収しました。彼のためにそれを私たちが吸いましょう。私は彼をひざまずかせました。あなたたちとの最初の夜のようにね。それから彼が再び眠りにつくまでにかなり時間がかかってしまいました。それでこんなに遅くなったというわけなのです」

彼らは一本タバコを取った。

「でも神父様」リュシアンは言った。「あなたは、まさか眠らないのですか？」

「二、三時間で十分なのですよ」舎監は答えた。「何にしても、私は少量で満足する術を心得ています。しかし、どんなに些細なことであっても、私はそれが自分を満足させてくれることを求めます。私はあなたたちにパジャマを取り替えるよう提案しました。その意見に従う代わりに、あなたたちはそれぞれ新しいパジャマを身に着けました。それは古いものより似合うでしょう。あなたたちにもっと従順でいるべきことを教え

るために、私はあなたたちの洗濯物入れからそれを引っ張り出して、あなたたちの支度一式の中に、ほぼ同じくらいのサイズの別のものと取り替えて入れたのです——ちようど私はそれを、甥たちの所に行くことになっていたスーツケースの中に持っていたのですよ。苦行として、あなたたちはご家族に嘘をつくことになります。この取り替えはリネン担当シスターの間違いだったと言ってね」

彼はグラスを満たし、ビスケットを勧めた。事態は終息した、というわけだ。

「あなたたちの信頼は、私のものにまだ完全には見合っていないのですけれど」彼は続けた。「私はあなたたちなしではいられません。誰かへの愛情を育む前に、私は念入りにその人の顔を観察します。私はあなたたちのお仲間も観察しましたが、私が選んだのはあなたたち二人です。毎夜、私の選択は追認されています。私はあなたたちのベッドのそばにしばらく座るのです。時折、あなたたちにいっそう感心するために、懐中電灯をつけながらね。そのときを、どんなにうずうずしながら待っているのか！私は祝日のためにするようにその心構えをします。ソクラテスは、美のそばに赴いたとき、自分も美しくなったと言っています。しかし、彼と私の間にはこんな違いがあります。私の主な美容の手入れは、ひげを剃ることにあるということです。あなたたちは、キニク学派の哲学者たちよりもソクラテスにはふさわしくない私の同業者たち

が、その点についてどんなに怠慢を装うか、気付いていますか？ 日曜日、大ミサの前にかひげを剃らない人もいます。私の礼儀作法は違います。私はみんなのために朝ひげを剃るだけでなく、あなたたちのために夜も剃るのですよ。私はね、あなたたちの眠っている目にも、あなたたちのぼんやりした子供の心の鏡にも、あなたたちの汚れなく無防備な顔にも、人間の名誉ある顔を見せたいのです」

ジョルジュは、このひげへの凝りように微笑まずにはいられず、やや皮肉っぽい声で言った。

「天の聖なる安らぎ、崇めるべき思想！」

『ポリュクト』のこの記憶が、彼ら三人全員を笑わせた——神父はおそらく、自分が冗談を解することを証明しなかったのだ。その後で、話題を変える術を心得ていることも示し、彼は前日の上演に話を向けた。彼は、自分が付き添った、来客用食堂での善良なる司祭たちの食事の話をした。彼らが閉じ込められたのがそこだったのだ。たぶん生徒たちの悪意からできるだけ長時間彼らを保護するためだったのだろう。生徒たちの方は食堂から閉め出された。まるでアルテニスの青い部屋のように。舎監は彼らの牧歌的な流儀を描写した。首の周りに巻かれたナプキン、飲んだ後の舌打ち音、片方の手で傾けられ、もう片方の手で猛然とソースを拭われた皿、腕を伸ばして振り

回されたチキンの下もも。会話も同様だった。ド・トレンヌ神父の隣席の一人はウナギ釣りを、もう一人は新聞に載った初のアメリカ先住民聖者の来たるべき列福式の問題を、ひどく押し付けてきた。

ジョルジュは、神父の会話自体が今日は油断ならない成り行きになっていないことを喜んでいた。先例の結末から《悪徳への激情》についての長広舌を予測していただけに、彼はいつそう驚いた——《悪徳への激情》という表現には、彼はたびたびふつと吹き出してしまふのだった。リュシアンもそうだが、彼としては《苦境のどん底》の方を好んでいた。

神父は面白おかしい話を中断した。

「私の話を楽しんでいるようですが——私はその聖者のことは話しません——あなたたちはこれをトゥキュディデスやサッルスティウスの歴史書と同じくらい早く忘れるでしょう。あなたたちにとって、コレージュでの歳月のうちで重要なこと、それは違った分野の思い出で、あなたたちの一生に痕跡をとどめることでしょう。視線の暗黙の了解、髪の色、唇の輝き、手のぬくもり」

彼はジョルジュの方を向き、尋ねた。

「昨日の上演の後で、あなたが話していた子は誰ですか？」

その質問は矢のようにジョルジュに突き刺さったが、彼は平静を保ちつつ答えた。

「あれはモーリス・モティエの弟です」

「よくご存じなのですか？」

「おお！　ほかの者と同じくらいには」

「残念なことです。私はそのような友情を祝福することができのですけれどもね。あなたは二重の意味で祝福されるに値するようです。その理由は、一つは、あなたがそれを秘密にしていたのだろうということ、もう一つは、あの子はあのお方の御手によって創造された最も美しいものの一つであるということです。神の、ね」

ド・トレンヌ神父は、その語で快く自分の話を終えた。《神》。『ポリュークト』や、それに似た何かのように。しかしジョルジュは今、今夜の会話のことをベッドの中で考えており、考えたからといって安心できるわけでもなかった。彼は、舎監がアレクサンドルに興味を抱いた原因が自分だけにあると考えるほど純朴ではなかった。彼は、あらゆる言動がある意図を隠蔽している人間を識別することを学んでいた。彼は、アレクサンドルがこの人物の思考の中に入り込んでいると感じた。彼はすでに二人の関係を疑っていた。あの考古学者は、碑文を解説し、神殿を再建したのだ。ジョルジュには、コルネイユに影響されて自分を裏切ることになったその軽率さが高くついた。

今や、自分の友情に新しい脅威を引き起こしたのは自分である。それは口の固さを身に付けた人間から生じたものではあるのだが、以前よりも彼は不安になっていた。学長とローズン神父は、彼らなりの、善意の職人であったにすぎない。だが、ド・トレヌ神父は、つまるところ何者だったのだろうか？ 最初のもめごとのときからすでにジョルジュに生じていたこの疑問は、未解決だった。ともかくも、彼は、アレクサンドルがリュシアンに付け加えられて、「私たちは四人の友人になりましょう」と言われるがままにはなるまいと決心した。ピタゴラスの言葉に反し、彼は神父に、友情に制限を設けるよう懇願するつもりだった。そのうえ、彼はその会話の話題を巧みに避けようと思った。純粹さや古代についての宗教的あるいは学問的な脱線に、アレクサンドルが絡んでこないようにすることはできそうだ。あの子と自分は、天使たちの近くの人間の協力も神々の近くの人間の協力も必要としないのだ。

木曜日の夜の自習中に外出許可を求めたとき、彼は舎監がうっすら笑みを浮かべて、ドアまで自分を目で追っているのに気付いた。疑いなく、逢い引きが見抜かれている。ということは、恐れていたように、彼の企みは暴かれてしまったのだ。月曜日以降、神父が取っていた慎重さは、記憶の欠如ではなかった。彼は確実に、めったに外

出せず、毎週木曜日の同じ時刻に退席の許可を求めるジョルジュを監視していたのだ。ジョルジュは、この監視を予測しなかった自分を責めた。

アレクサンドルの存在も、彼が感じていた不安を一掃することに成功しなかった。

彼は、その子のそばにド・トレヌ神父が見えるようだった。共同寝室で、リュシアンのそばに見るように。

舎監たちは、どのみち彼らに対して結束しているのだ。アレクサンドルも自分の舎監は警戒すべきだった。その舎監は、その子の直近の退席が少し長すぎると判断し、今日のところは外出させたものの、彼に警告を与えていたという。その子はもちろん立ち向かう心の準備はできていたのだが、ジョルジュはこれまでよりもさらに、面倒事になるのは避けたいと望んでいた。彼は、疑わしげな遅れによってド・トレヌ神父の推定を強化したくはなかった。それで彼は、難しい課題を課せられていて話を短く切り上げなければならぬと告白した。それはアレクサンドルがジョルジュに会いに行くために、ローゾン神父に対して一度利用した口実だった。ジョルジュは舎監を混乱させることを期待して逢瀬の日時を変えようと考えていたが、その用心も今となっては無駄なことを認めていた。

共同寝室では、不首尾に終わった逢瀬の記憶が彼を悩ませた。妨げられたのは今日

の楽しみだけではない。自分の幸福も危機に瀕しているのだ。彼はリュシアンと話せないことを残念に思った。話せていれば自信を取り戻させてくれただろうに。彼は、アレクサンドルの手紙を家に置いてきたことも同じように残念に思った。それらを掛布の下で読むためになら、再び彼は必要なだけ眠らずにいたことだろう。そうすればおそらく、彼は付きまとう悲観的展望を追い払うことができただろう。彼にとって、今後の共同寝室での時間はド・トレンヌ神父の時間でしかなかった。彼はそれを、うずうずしながら、あるいは好奇心とともに待つことはもうなかった。彼はそれを恐れていた。眠る彼に身を屈めに来る、ひげをきれいに剃った神父のことを思い浮かべつつ。

事態は煩わしいものになり始めた。薔薇の香りによる目覚まし時計の東洋風な優美さは、彼のお気に入りではなくなった。彼は大声で叫びたかった。「薔薇なんか糞食らえだ！」遊んでいるとき、小さな男の子が叫ぶように。「導き手なんか糞食らえ！」彼はそう独りごち、リュシアンと共に素直に部屋へと赴いた。まあ、それが繰り返されることを強いられたくなかったのなら、そこに足を踏み入れなければよかったのだが。彼は、午後の逢い引きについての尋問を予測し、愛想よく返答できる気分ではなかった。

「あなたたちを起こしたのは」神父は言った。「良いニュースをお知らせするためです。明朝、私は聖ミサをあげることにしています。舎監たちのように一時間目の間ではなく、共同ミサの間に、私たちの側の特別席で、です——私が学監と相談して決めました——それで、私には二人の聖歌隊員が付くことになります。リュシアン・ルヴェールとジョルジュ・ド・サールです」

彼は非常に喜んでるように見えた。

「あなたたちは想像もできないでしょう」彼は付け加えた。「こんな単純な解答を得るために私がどれほどあれこれ考えねばならなかったかを。でも、集団生活の単調さに手を加えるとなると、たちまちそれは大事になるのですよ。^{おおむね}

私は、あなたたちがその日の一斉ミサで私に仕えることを願い出たと言いました。明日がその祝日である聖パンクラティウスに捧げている私的な祈禱のためであると。その聖人は、ガニユメーデースの故郷である墮落したフリギアの生まれで、十四歳で殉教しました。私は、この若い庇護者に心を捧げるに当たっての、あなたたちの意志を予告したと確信しています。私の敬虔なる虚偽を正当化するのはそれなのです。さらに彼は、年齢同様、その美しさのために、苦痛から救われることを望まれたと言われています。あなたたちがその年齢と美しさが必要とするのは、実際は喜び^{デリス}に対して

であって苦痛ではありません（韻が恐ろしくびったりですね）——それは瞬間的な喜びにすぎません。もしあなたがその瞬間に死ぬとしたら、その一瞬の喜びはあなたたちに地獄での永遠の苦痛を余儀なくさせることでしょ。聖パンクラティウスの援助で、誘惑に対する力を持ち続けられますように！ あなたたちの友情が決して墮落せずにいられますように！」

十四歳の聖人はほかにもいる。聖プラシド以来、コレージュの友情は庇護者に不足することは無い。ド・トレンヌ神父のリストは十月の説教師のそれと同じくらい完璧で、彼の話は興味を引くに値するほど詳しい内容を常に含んでいた。その二人の人間の言語はほとんど同じだったが、ド・トレンヌ神父のそれは違うこだまを響かせた。聖プラシドや聖エドモンドと、聖パンクラティウスやトレンティノの聖ニコラウスとの間には大きな隔たりがあり、それはつまり、一方で示された流儀は、他方のそれといかなる点でも似ていないということだ。舎監が純潔のことを話したとき、それは特に心に関する純潔を説明するためだった。彼が美について話したとき、それはやはり静修の演説者と同じ精神ではないように感じられた。おそらく、彼はむしろ地上でそれを見ていたのであり、もし天上にそれを探すために天を仰ぐなら、驚にさらわれたガニュメーデースの方か、天使によって連れ去られた聖パンクラティウスの方を見るの

ではなからうか？

彼は話を再開した。

「ですから、私は幸いにもあなたたちに聖体の秘跡を施すことになるわけです。その聖体拝領は、人生で最も重要なものであるべきです。それはまさにあなたたちの厳粛なる聖体拝領になるでしょう。完全な告解によってしっかりその準備をしてください」彼は祈禱台を指し示した。そこにはストラとサープリスが乗っていた。ジョルジュは呆然としていた。ド・トレンヌ神父の説教と説教師のそれとの間にある違いは、この部屋での告解と、ローゾン神父の部屋において聖クロードで初めて彼が経験した告解との間のそれよりも、さらに違っていた。彼は、自分が罫に直面していることを知った。舎監は良心の指導の申し出を繰り返さなかった。この機会を待っていたからだ。もちろん真実を言わないこともできるが、尋問されるがままにならない方がさらに安全であると言える。ローゾン神父以外の人間であることが問題なのだ。彼の論法が、その方針の一部のようにソクラテスから着想を得たのだとすれば、彼は恐るべき聴罪者であるに違いない。アレクサンドルに関するあらゆる直撃をかわそうと決心した後で、ジョルジュは告解の罫の危険を冒さないでいることを望んだ。自分は悪い告解者だらうから、本来の聴罪者を相手にするしかなく、その方がいいのだ。ミサに仕

えるという誘いを辞退することさえ考えているのも同じような理由によるが、彼はそれには妥協する方が賢明だと判断した。

「申し訳ありません、神父様」彼は言った。「僕は喜んで侍者になりますが、告解は無用です。明日はそのまま聖体拝領をするような気がします」

リュシアンは彼のために急いで同意した。舎監は祈禱台の方に向かい、急に振り向いた。

「何と！」彼は叫んだ。「私に従うことを拒むのですか？」

「あなたに従うことが問題なのではありません」ジョルジュは言った。「でも、僕らが大して良心の呵責となるものを持っていないという証拠は——僕は仲間を代表して話してよいと思っていますが——僕らが毎朝聖体拝領台に通っているということですよ」

「そんな論法で異議を唱えるとは、何と不実なのでしょう！　だまされませんよ。お忘れですか？　あなたたちが天使のパンに近づくのを見たとき、あなたたちやあなたたちの仲間から知るすべてのことを忘れたがっているのが、私にほかならないということ。ずいぶん素晴らしい光景ですね！　あなたたちのうちの一人にその様子を話して聞かせた、あの告解からの帰途の様子に匹敵しますよ！」

「そうそう！　それは弁明の賛美歌、祝福の詩です」彼は部屋を歩き回りつつ、皮肉

たっぷり続けた。「ああ！ 別の賛美歌を作りたいものです。本当に、少年たちの純粹さを歌う詩と賛歌を。それにはえり抜きの韻があるのです。《ピュエルペラル（産褥の）》——《バティスマル（洗礼の）》、《エビュルネアンヌ（象牙の）》——《ニヴェアンヌ（雪深い）》、《アダマンタン（ダイヤモンドのような）》——《クリスタラン（水晶のように透明な）》、《ミリフィク（夢みたいにとてつもない）》と《セラフィク（セラフィムの、熾天使の）》」

客たちの前に立ち止まりつつ、彼は怒った声音で言った。

「ベッドに行きなさい、あなたたちの純粹さとともに！」

彼らは立ち上がった。ドアに近づいたとき、彼は穏やかに彼らを呼び戻し、彼らはそのまなざしから怒りが収まったことを理解した。

「子供たちは」彼は微笑んで言った。「猫のようなものです。いつだって誰も信用せず、誰も好きになりません。しかし、人は彼らを愛さずにはいられないのですよ。」

せめて一緒にお祈りをするまでは行かないでください。明日のミサで神の恩寵を祈るためです。私は、自分の経験にもかかわらず、あなたたちが私の援助を必要としないうということ、本当のことを話したということ、まあ信じるとしましょう」

彼は祈禱台に達し、二人の仲間の間にひざまずいた。十字を切ってから彼は祈禱を

始め、二人はそれに応唱した。

「もしあなたが私に嘘を言ったのなら」次に彼は低い声で言った。「心の底から神に許しを請うように」

彼は二人それぞれの手を取り、それから一瞬沈黙してそのままの状態を保った。まるで彼らを生贄に捧げるように。

皆が礼拝堂に赴く時間、ジョルジュとリュシアンは祈禱書を取りに行った後で、特別席に至る狭い階段を下・トレンヌ神父の後ろに付いて行った。舎監が敬虔な思いに耽っている間、二人は大蠟燭に火を灯し、厚紙、書見台、薔薇を生けた二つの花瓶を並べた。《神秘の薔薇》とリュシアンが言った。

これらの世話に従事しつつ、ジョルジュは向かい合った下級生の方に目を向けた。今、彼は、遠くにアレクサンドルを見ることができた。差し向かいにいるときとほとんど同じように。そこからの方が、下での距離よりも短いように思われた。友人がいないことを認めたなら、あの子はたぶんこちらで見ている自分に気付いたことだろう。あの子は、彼が驚かせるつもりで事前に知らせなかったのだと思っているかもしれない。あの子自身、始業式の夜に彼にそれをしたように。

衣装置き場として使う小さなテーブルのそばで、ド・トレンヌ神父は二人の侍者に手伝われながら祭服を着た。ジョルジュはそれまで、この式典で解説されるラテン語の言葉に注意を払ったことがなかった。神父はそれぞれの音節を明瞭に発音した。まづ白の祭服を着て——アミクトゥスとアルバ——、彼は《悪魔の襲撃》を祓い、《子羊の血で白く洗われる》ことを求めた。それから彼は腰紐を巻いた。《色欲の気分を腰で消す》ためである。そして今、彼は少しずつ赤を重ねた。腕に《苦悩と歓喜の束》の象徴であるマニプルス、首に《不死》の記章であるストラ、最後に《負いやすいくびきと軽い荷》を表す聖職の最高の印であるカズラ。

彼が振り向いたとき、ジョルジュの目には、変化が起こったように思われた。彼はもう青春の考古学者で心の舎監のあのド・トレンヌ神父ではなかった。それはイエスキリストの司祭であった。

昨晚、コレージュでの初めての告解を思い出したように、ジョルジュは今、自分が仕えた初めてのミサを思い出していた。そのミサで仕えたのは学長だった。同じくこのリュシアンと一緒に、自分の神のために命を失った侍者である聖タルチシオを記念したのだ。聖パンクラティウスは同じ神のために死んだ。ほかの神々のために死んだ者もいた。

そして彼らは、三人ともここで何をしているのだろうか？ 自分たちが儀式を挙げているのは、いったいどんな宗教なのか？ この司祭は、本当に自分の神の司祭なのだろうか？ 彼は殉教者たちの血で身を飾り、子羊の血で白くされるに値するのか？ 彼は、共同寝室への自分の訪問を、自分の奇妙な言葉を、自分の部屋での歓待を思い出させるために、この薔薇をここに置いたのではないか？ そして二人の侍者は、聖パンクラティウスと聖タルチシオよりも彼にはふさわしくなかったか？ 大昔なら、彼らの上に雷が落ち、地が裂け彼らを飲み込んだかもしれない。天の声がこの言葉をかき消したかもしれない。《私は罪なき者の間で手を洗うだろう》。

ジョルジュは水の提供から戻りつつ、礼拝堂の奥の方を一瞥した。彼の欲求は満たされた。アレクサンドルが彼を見て微笑んだのだ。あの子は、手すりの上に彼が現れるのを見張っていたに違いない。あの子もまた、別の特別席にいたのを長い時間見張られていたように。ジョルジュは、自分がもう神秘主義的な状態にはまったく陥っていないと感じた。超自然的な問題には完全に無関心な状態に戻っていた。彼は本物の信頼を再び見いだした。友情への信頼である。それはコレージュを見下ろすこの特別席の高さだけではなかった。彼は秘密の勝利者だった。ド・トレヌヌ神父が彼に予告した以上の。彼は、コレージュの規律の外側にいるのと同じくらい、神父の規律の外

側で生きているのだ。昨日の自習室での謎めいた微笑にもかかわらず、舎監は、幸いその夜アレクサンドルのことを再び口にしなかった。そして今朝、礼拝堂の真ん中で、ジョルジュはその口直しとして別の微笑を受け取ったのだ。

聖パンクラティウスの名前は、あの歌のリフレインを思わせた。《ファリエール大統領の娘の結婚式》。その三行は、彼にアレクサンドルをもたらしただの二月初めの聖イグナティウス以来、思い出しもしなかったものだ。

祖父はイグナス

いとこはパンクラス

おじはセレスタン

ジョルジュは聖ケレスティヌスがそこに記載されているかどうかを見るために祈禱書をぱらぱらとめくってみた。ある、しかもその日付はごく近くだ。五月十九日。そのときすぐに歌は終わるだろう。

聖体拝領の時間がやって来た。再びジョルジュは、自分が感動しているのを感じた。神父は《癒やしの言葉》を要求し、彼の聖なる職権が、それを得る権利を彼に与えた。

彼が実現した行為は猿まねではあり得なかった。彼はゆっくりと、並んでいるジョルジュとリュシアンの方を向いた。手に聖体器を持ち、彼は遠くの、アレクサンドルの方角を見た。彼は赤のカズラを背景に浮かび上がる輝くオスチャを、祭壇の二つの花瓶の間に掲げた。

翌日の夜、かの名誉はジョルジュにしか向けられなかったが、花はなかった。懐中電灯による覚醒だったのだ。おそらく神父は、点灯されたランプを持つ賢者のようなものを演じているのだろう。三人の取り決めに反して、彼はジョルジュの近くに座ってリュシアンに干渉する困難さを見積もった。

「私は大好きなのです」神父は言った。「あなたが目覚める瞬間がね。まばたきする目、少し不満げにわずかにとがらせた唇、もう片方よりも赤い頬——あなたが枕に押し付けていた方のそれです。それに、調髪術の奇跡によって、あなたはほとんど髪を乱していません。ただし、あなたの金髪の房だけは、昼間ちらっとしか見えないのですが、そのときは新鮮な空気を吸おうとするかのように、ほかの髪の間から抜け出すわけですね」

神父は懐中電灯を点灯し、もう一度その興味深い髪に注目した。ちょうど今日、ジョ

ルジュは休憩時間中に姿を消していた。洗顔用具箱の中に入れて鍵をかけておいた道具で、その髪房の金色をそれとなく磨くためであった。

「その房はどんなことが原因で？」舎監は続けた。

ジョルジュはいらつき、過酸化水素水で洗髪してしまった事故を手短に話した。

「私は」神父は言った。「天然の金髪の問題だと思っていますのです。金髪になったのはその房だけですか？」

「はい」ジョルジュは答えた。

「あなたの財布の中には同じ色の髪の手紙が入っていますね。それはあなたが大切に保存しているもののように見えます。私は、あなたがそれを自分の髪から切ったのだと想像していました。そうになると、それは別人の金髪の記念品ということになります」

ジョルジュはがばっと体を起こした。

「何ですって！」彼は言った。「わざわざ僕の財布の中を見たんですか！」

絶望は、彼に無力さをもたらし、憤慨を上回った。彼の頭は長枕の上に再び落ち、涙が目には浮かんできた。自分は巧妙に嗅ぎ付けられたのだ。彼には、今自分と話したばかりのこの男に囚われた、アレクサンドルと一緒に自分の姿が見えた。二人の友人たちは、この者の手に落ちるために、学長とローゾン神父から逃れたにすぎなかったのだ。

神父はジョルジュの額にそっと触れた。

「そんなに泣くことはありません、子供っぽいですよ！」彼は囁いた。「あなたがこれほど秘密にしないでいてくれれば、私もそんなに無遠慮にはならなかったのです。あなたには私を恨む権利はありません。私もあなたを恨んではいません。あなたが企みを隠蔽する術を心得ていたことで、私はあなたを称賛していたのですから。しかし、その瞬間から、あなたはもう私に何も隠すことはなかったのです。あなたはまだ理解していませんでした。私が知り得るすべてのことは、私たちだけの秘密であるということ、罰するためではなく啓蒙するために、私がすべてを知ることが望んでいるということ、を。繰り返しますが、気付いていないとしても、あなたは千の危険に囲まれているのです。警戒しなければならぬのはそのためです。私はあなたの純粋さに夢中なのです。詩篇の中の『王はあなたのうるわしさに夢中である』という文句のようですね。そして、純粋さは天使の美しさです。私はある夜、あなたにそれを言い換えて説明しました。

私たちは役割を分担しています。あなたは私の天使で、私はあなたの守護者です。守護者を警戒しようとしないうに。あなたと、あなたが愛するその子が、私の能力を超えることを恐れる必要はまったくありません。私は年若い生徒キュルノスのそば

のテオグニスのように行動します。『私は城壁を乗り越えるが、町を荒らすことはない』もし私がつと傲慢だったなら、私は神に仕える栄光に包まれた者と自分を比較するでしょう。禁欲生活の最中に、料理によって誘惑された聖ロムアルドや聖ジャン・ド・クエンティのように。彼らは自らそれを運んで来させたのです。そうとう物欲しうにそれを凝視し、それからそれを持ち帰らせるためにね。彼らは禁欲の戒律を実行したのです。『最もひどい、焼け付くような渇きにあつては、うがいをさせるしかない』私はね、空腹と渇きのままでいることができるのですよ」

神父は立ち上がりつつ、ポケットから小箱を取り出した。

「木曜夜の外出のために」彼は言った。「このタバコをさし上げます。これが私のことを連想させるでしょう。これはこの前のよりもいいものです。エジプト産ですよ。私はこれをそこで買ったのです」

ジョルジュはそのエジプト・タバコを彼の頭に投げつけてやりたかった。してみると、この男はアレクサンドルのどこに惹かれたのだろうか？ 純粹さや美しさか？ 何を知ろうとし、どこまで探求は進んでいるのだろうか？ 彼は学長のように財布を調べ、また同じように、自分に対して秘密にすることがあつてはならないと主張した。少なくとも、ジョルジュが、つい最近再読できないことを残念に思ったあの友人の手紙を

自宅に置いて来たのは、とにかく幸運だった！ 学長の部屋を訪れた夜に、共同寝室にそれらを置いておいたのよりもずっと良策だったのだ。

さらに、アレクサンドルは学年の障壁に守られていると考え、彼は安心した。自分の目的を満たすためには何度も呪ったその障壁が、今では思いがけない幸運であるように思われた。逆に、ド・トレンヌ神父があの子の枕元に座るかもしれないと考えると、彼はひどくいらついた。ジョルジュは、自分だけの問題であるので、ひたすら黙秘したいと思った。しかし、別の場合だったなら——幸い、完全に架空の話ではあったが——神父を怒鳴りつけ、共同寝室に騒ぎを起こしていたことだろう。

続く数日間、神父は忘れようと努めているかのようだった。彼は選ばれた二人を一瞥する素振りさえ見せず、彼らを安らかに眠らせておいた。さらに彼は、共同体への興味も薄れているようだった。前の舎監が彼の代理を務める休憩時間もあったのだ。木曜夜の自習時間中、不安ではあったものの、ジョルジュが外出許可を願い出ると、神父はぼんやりした様子でそれを許可した。

最初の打ち明け話の後に、

「君に言うことがあるんだ」とアレクサンドルが言った。

彼の声はかなり深刻そうだった。

「いつかみたいに、僕が距離を取らなきゃならないってことかな？」ジョルジュは笑いながら言った。

「そんな必要はないよ。僕が聞きたいのは、君がド・トレヌ神父をどう思っているかってことだけだよ」

何と、この口からその名前が出るとは！

「なぜそんな質問を？」神父が初めてアレクサンドルについての質問したときのように、うまく平静を保ちつつ、ジョルジュは言った。

「日曜日にモーリスに会ったんだよ。彼、あの神父様はすごく優しいって僕に言うの。いい助言をくれたんだって。で、夜、神父様の部屋に時々招待されて、リキュールを飲んだりビスケットを食べたりしているんだよ。それから、月夜にじゃなくて、神父様ご自分の所にいる休憩時間の間に、今度は僕がその部屋への道を歩いて、こういうことをみんな利用するようになって僕を誘ったの。僕が兄さんをどんなに追っ払いたかったか、君にも分かるよね！でも彼、僕に、よく考えてほしい、それから誰にも、特にローゾン神父には言わないように、って頼むんだよ。僕の指導担当者としては気を悪くするかもしれないからって。これってちょっと変だと思わない？」

アレクサンドルが話すにつれ、ジョルジュの中では仰天が猛烈な嫌悪感へと変わっていった。彼は嘆き、神父を軽蔑した。身分柄、真理に身を捧げながらも、偽りの生活を送るしかない者を。もし少年たちが嘘をついたとしても、それは自分たちの益を守るためであり、他人のそれを奪うためではなかった。

あの神父は先生方のみならず、少年たちをもだまそうとしたのであり、我々までもだまそうとした。自分が好きだと言った者たちさえ蝕んだのだ。

彼は自分がさうとう有能だと思っているようだが、知らないうちに化けの皮を剥がされていた。

が、本当に知らないうちに、か？ この子がジョルジュにこの陰謀を打ち明け、その結果、ジョルジュがこの前の晩の保険には価値があったのだと気づく、という筋書きを、彼が予期しないことはあり得るだろうか？ 神父はおそらく、それについてはほとんど気にかけていないのだろう。とにかく彼は、自分は何らかの方法で目的を遂げるのだということを示すつもりだったのだ。とはいえ、彼のふるまいはいつでもあまりにも面食らうようなもので、まさしくこの上なく怪しいと思われる場合においては判断保留とすべきなのかもしれない。たぶん彼は、アレクサンドルとジョルジュを招集して驚かせることしか考えていないのだろう。ジョルジュとリュシアンを

招集して、それを習慣としたように。だが、その驚きは、ジョルジュに気に入られようとするためのものではない。それは、昨日共同寢室で浮かんだった思いと同じくらい、彼に嫌悪感を催させた。それは彼をぞっとさせたのだ。

「僕が願いたいのは」彼はその子に言った。「君が追い回されたりしないことだ。それに、僕は君の話には半分くらいしか驚いていない。ド・トレヌヌ神父は一種の狂人なのさ。その常識外れな言動ときたら、数え切れないくらいだよ。あの人の活動範囲からは離れていることが肝心だ」

「ルヴェールと君は、あの人と仲がいいじゃない。ミサに仕えていたし」

「全然！ あの人は僕らを予告もなく引っぱり込んだんだよ。聖パンクラティウス同様、称賛されるという栄光を僕らにもたらすと思ひ込んでね。今なら分かるんだけど、それはだますための方法だったのさ。だってほら、君の兄さんは彼の大のお気に入りなのに、今のところまだミサで彼に仕えてはいないじゃないか」

ジョルジュが自習室に戻るとすぐ、ド・トレヌヌ神父は近くに来るよう合図した。あのタバコが吸われたかどうかを確認したいのか、それとも逢い引きのことを話したいのだろうか？ ジョルジュは教壇への階段を昇った。彼は、アレクサンドルと

もに遅刻した日に、自分を迎えた罰のことを考えた。彼をもう一度落胆させるために、神父は今度は自分が罰を課そうとしているのか？　だが、彼はこう言っただけだった。「あなたは間もなく、食堂で朗読することになります」

食事中の朗読役は、最上学年の生徒に割り当てられてきた。それは学監によって指名される。三学年ではこれまで誰も読んだことがなかった。

ジョルジュは、この新しい処遇の意図は何なのかと訝った。神父は、この奇妙な計らいによって自分を喜ばせようとしているようである。それはアレクサンドルも同様に喜ばせることだろう。さらに彼には、あの子の暴露と釣り合いを取ることで、カードを切り直せるという利点もあるわけだ。結局のところは、たぶん彼はわざわざ説明することなく、単なる幕間劇を楽しんだのだ。ジョルジュは、今回のように規則に則っている限りならともかく、それ以外では彼の気まぐれには参加しないことに決めた。

日曜日を除けば夕食時の「神への感謝」は稀にしかなく、神父は、今日もその例外的な実施はおそらくないでしょう、と保証した。彼は、友人の学長にこの奇妙さを弁明するために、そして学監にジョルジュを選ばせるために、何を語ったのだろうか？

二学期には『聖処女の生涯』が読まれていたのに、この聖母月の間は『聖人の生涯』が読まれていた。というのは、今は毎朝の瞑想がロザリオの玄義に割かれているため、

学長は、食堂の朗読において中心となる自分のいつもの関心対象を、少なくとも重要な聖人については、もう瞑想の時間には取り上げていなかったからである。このことは、ジョルジュ君は、聖パンクラティウスのみならず、その日の聖者にも傾倒しているのですよ、ということをお口に作る機会を、ド・トレヌヌ神父に提供したに違いなかった。だが、それは誰なのか？ 二人の候補者がいた。一人は聖ヴナン、その日が祝日で、聖パンクラティウスと同様十五歳で殉教した——ジョルジュは祈禱書の紹介記事にあったのを覚えていた。もう一人は、朗読のために学長が選ぶであろう聖者であった——それは聖ヴナンではないだろう。そのお方は重要とは言えない聖者だから。聖ペトルス・カニシウスよりもはるかに偉大な宗教教育改革者である聖ジャン＝バティスト・ド・ラ・サールは、取り上げられたばかりだ。ジョルジュは、陽気なタルタランがもはや食堂の英雄でないことを残念に思った。全員の幸福のために、聖処女と高潔なる十戒の跡を継いだのが彼だったのだ。学長は朗読に変化をつけたわけだが、その作品を知っているジョルジュが気付いた限りでは、タルタランの朗読はかなり不穏当箇所が削除されていた。学長は、死者にも生者にも検閲を入れるのだ。

美しい季節が、夕食前の休憩時間という恩恵をもたらした。ジョルジュはリュシアンに知らせた後で、今日からはもうド・トレヌヌ神父の部屋には行かないと宣言した。

力づくで連れて行かれることはないだろう？ 最初の長談義のとき、自分はそっぽを向いてやる。自分は味方になったり敵になったりする人間にはうんざりして、しつこい場合は、思っていることをはっきり言うのを躊躇しないつもりだ。神父が高潔さについて話した以上、彼は自らそのレッスンを受けることになるのだ。

「思うんだけど」リュシアンが言った。「もう潮時なんだろうな。アレクサンドルは素晴らしい貢献をしてくれたよ。僕らの神父様は、福音書からの言葉を僕ら二人に向けて引用した。『我が父の家には、住まいがたくさんあります』僕らも今なら分かる。神父の部屋には侍従がたくさんいるってことだ。彼が僕らに満足していないのだから、モーリスくらいじゃ我慢できないと君は確信している。彼に選ばれた連中、彼の甥っ子たち、パジャマ、顔、みんな同じことだ。

彼は僕らに嘘をついた。僕らに言ったことと反対のことをした。ほかの者に関心を持って、僕らを馬鹿にしている。僕らは彼の気まぐれを理解していなかった。訪問者の輪番表があるに違いないってことだ。それはすぐに公然の秘密になって、後悔する者も出てくるだろう。アンドレは僕のせいで放校になった。君はアレクサンドルとそうなってもいいと思っているんだろう。でも、ド・トレヌ神父と死ぬ気なのかい？ 子と共にあれ、父とではなく！」

休憩時間終了後、ジョルジュは給水所でもう一度髪の手入れをした。ローションはいらなかった。これはもうアレクサンドルのためではなかった。それでも、彼は今朝自らをエレガントに整えたことに不満はなかった。彼が逢い引きの機会に施す処置は、見栄という大衆的満足感を満たすのに役立っていたのである。

彼は、四旬節中日の祝日のときと同様に、朗読にも期待した。彼は、学長の鈴の一振りを食らう、不幸な朗読者のことを思い浮かべた。それはこんな強制的な注意を添えて装飾される。「声が大きすぎます!」とか「もっと大きな声で!」とか。もし文章や表現の切り方がまずければ、「間違っています!」、さらには「さあ分かってください!」

ジョルジュが説教台に上ったとき、下級生たちはすでにしかるべき場所において、彼に背中を向け、食前の祈りの朗唱を待っていた。次に、皆が着席する前に、学長はジョルジュに本を取って来るよう合図をした。今夜の朗読者は、まだ全然アレクサンドルの注意を引かなかった。ジョルジュは、開かれる引き出しや大理石に当たってカチャカチャ音を立てる食卓用具の騒音の中を降壇した。下級生たちの列に沿って歩きながら、彼はアレクサンドルを軽く叩き、その後通り過ぎた。説教台に戻ると、彼は自分が引き起こした驚愕を楽しむことができた。あの子の視線は不十分に抑制された喜び

でいっぱいだったが、ジョルジュのそれは可能な限りの慎重さと厳肅さを保ち続けていた。先生方のテーブルは上級生のそばで、そこにはローゾン神父やド・トレンヌ神父が座っていたからである。

『聖人の生涯』。指定されたページはこんなタイトルだった。《シエーナの聖ベルナルディーノ。祝日五月二十日》。五月二十日は明後日なのだが。前もって取り上げられたわけだ。ジョルジュはド・トレンヌ神父の引用を思い出した。この聖人の生涯から取った、純潔に関するものである。ここまで純潔に付きまとわれるとは。

慣習に従って、リュシアンが水がたっぷり入ったタンブラーを持って来てくれた。ジョルジュはそれを内側の棚の、殉教者名簿と『まねび』の間に置いた。殉教者名簿は昼に読まれ、『まねび』は夜だった。その本の中の香り付きのカードに示された箇所には——朗読者たちにも気障なところがあるわけだ——、爪の傷が前日の節に下線を引いていた。

学長は優しかった。彼は新参の朗読係に、テキストに目を通して準備する時間を与えた。ジョルジュはそれを、アレクサンドルを見つめるためにひそかに利用した。彼には、先日特別席の高みから見たのよりもはるかに完全に彼が見えた。あの子はスーブを注いでおり、その単純な動作には彼の魅力のすべてが含まれていた。それから彼

は目をジョルジュに固定し、口にスプーンを近づけつつ、彼にキスを送った。

少なくともド・トレンヌ神父は、アレクサンドルを見ることができない。だから、彼の注意力は、たとえジョルジュの喜びを妨げたとしても、あの子の喜びを妨げることはなかった。そしてジョルジュには、あの子とあの神父の視線によって、この説教台に上がったように思われた。彼は、光の精神と闇の精神の間にいるような、オルムズドとアーリマンの間にいるような、いとこと話したあのミトラの信徒のような気がしていたのである。

とうとう鈴が鳴った。学長が決断したのだ。ジョルジュは朗読を開始した。

フランシスコ会修道士、イタリアの伝道者であるシエーナの聖ベルナルディーノは、五月二十日が記念日である。ベルナルディーノは、一三八〇年、聖処女誕生の日である九月八日、トスカーナ州のシエーナで生まれた。同州のマッサ・カッラーラであると書かれたこともあるが、そうではない……。

それから家族、幼少期と学校時代（十三歳で哲学課程を修了）に関する詳細が続いた。学長は二つの文に抹消線を引いていた。「その容貌の類い稀なる美しさがさらさ

れていた危険にもかかわらず、彼の純潔は守られた。学友たちは、彼の前では放埒な話題をあえて持ち出そうとはせず、彼が近づくのを見るとこう言った。『その話はここまでだ。ベルナルディーノが来る』聖クロードの少年たちは、十四世紀の少年たちが咎められるような会話をしていたことを知っても、それほど驚かなかっただろう。彼らはすでに、聖エドモンドの逸話を知っていた。静修のときの記憶で、十二世紀もまた、子供たちの話題は常に穏健なものとは限らなかったのだ。

ド・トレンヌ神父に引用されていた部分にも線が引かれていた。あの神父は自分の引用を選ぶことができた。それは完全版から取られていたのだ。だが学長は、おそらく戒めとして、ジョルジュが今まじめくさって口になっている、ド・トレンヌ神父がたぶん削ったであろう話を、そのままにしたようだ。

ある貴族男性が何人かの学生の間で破廉恥な申し出をしたとき、おとなしくて愛想のよい子供だったベルナルディーノは激しい義憤に駆られ、その場所全体に鳴り響くほどの暴力的な殴打で彼を黙らせた。その道楽貴族は見物人たちの嘲笑の的となり、当惑して引き下がったが、この折檻は彼の中に悔悛を誘発した。後に彼は聖ベルナルディーノの説教を聴くためのあらゆる機会を逃さず、その説教の間は泣き崩れていた。

休止ごとに、また時には読んでいる間にさえ、ジョルジュは最初と同じようにアレクサンドルをちらちら見ていた。先生方や生徒たちの上から、ローゾン神父やド・トレンヌ神父がいるにもかかわらず、彼は自分の声の響きに浸らせているあの子と繊細な絆を結んでいた。アレクサンドルはその声を聴いているだけで、朗読の中身は聴いていなかった。ジョルジュもまた報われていた。彼は、とてもよく知っている者であるのに、彼のそれまで知らなかった面を発見した。彼はすでに、礼拝堂、自習室、廊下、休憩時間、休暇の列車、高台、そして温室にいるアレクサンドルの記憶を有していた。今後彼は、両手でパンをちぎったり、片手でその一切れをテーブルの上に押し付けたりにしているアレクサンドルの記憶を加えることになるだろう。きれいな喉を見せながら最後の一滴までタンブラーを飲み干したり、鳥のように縁から啜ったり。あるときは素早く、あるときは厳かに、唇を拭いたり。追加された肉（彼らは同じ追加を頼んでいた）を急いで食べたり。その色が彼の唇と見まがうようなサクランボを食べたり。食事は終わった。合図とともにジョルジュは立ち上がり、『まねび』から数節を読んだ。それは《神の愛の驚くべき効果》の章の終わりの部分だった。その夜の最後を飾るためには神の愛が必要なのだ。

愛は慎重で、控えめで、まっすぐなものである。それは弛緩することなく、軽率でもなく、空しいことに心を奪われることもなく、節度があり、貞潔で、揺るぎなく、穏やかで、官能の監視に気を配る……。愛する者の意志に従うためならどんなことでも耐え忍ぶという覚悟のない者は、愛とは何かを知ることはない……。

ジョルジュは、降りる前、食堂が無になるのを待った。彼は目でアレクサンドルを追った。出口で、あの子は振り向くことができなかった。彼の学年の学監が行列を監視していたからだ。だが彼は右手を挙げ、友に最後の挨拶を送った。

ジョルジュはテーブルに座り、この無人の広いホールの中、節約された灯りの下で、先生方の食事を給仕された。彼は、朗読者たちが重視していたこの特典を、ひどく心配していたのである！ 彼には、かつて見つけていた顔が不足していたのだ。そして、ここで初めてそれが断たれるという考えが、この孤立がほとんど耐えがたいということとを彼に気付かせたわけである。彼は共同寢室を思い浮かべようと努めた。アレクサンドルは、横になっている間、きつと『まねび』のあの言葉を思うのだろう。

使用人は、食べ終わったら灯りを消すよう彼に頼んで引き下がった。今やジョルジュ

は完全に孤独だった。デザートサクランボは素晴らしく、生徒たちに与えられるそれよりもはるかに大きくて、二つかみ分ほどもあった。彼はそれをアレクサンドルの引き出しの中に入れた。

ライラックの香りが中庭に満ちていた。

ジョルジュは、ド・トレンヌ神父が言ったことを思い出した。それが生徒たちの睡眠を妨げる、と。それは昼間のジョルジュも煩わせたが、それがアレクサンドルのことを語りかけるからである。実際しばしば、自習中、開いた窓から、彼は花をいっばいに咲かせたライラックたちを凝視し、その香りがあの子の吐息を運んで来ることを想像した。

ド・トレンヌ神父が食堂の入り口の、控えの間の戸口に佇んでいた。彼はジョルジュが通り過ぎるときに引き止めた。

「さて！」彼は低い声で言った。「あなたは満足していると思います。秘密の逢い引き、公然たる流し目……」

「どの逢い引きです？」ジョルジュはつつけんどんに答えた。

彼はすぐにでも話を中断し、自分の領域を荒らすことは許さない、と知らせたかった。だが、はっきり言ってやる前に、否定的な態度によってそれを理解させようと試

みた。自分にはそれが許される。実際のところ、自分はこれまで何も告白してこなかったのだから。彼は、偏見を持った目にとって、食堂での態度が自分の不利に働くことを気にしなかった。ド・トレヌ神父という人間の前では、何も弁明する必要はない。何も釈明することなどないのだ。

神父は怒った様子も見せずに、穏やかに話を再開した。

「最後の休憩時間の間に、下級生の舎監殿が私と話をするためにやって来ました。私は彼に、生徒たちの外出を、理由ごとに分類して記録するよう頼んでいたのです。比較統計のためです——私は統計が好きなのでね。ローゾン神父様への面会という恩恵を受ける者がアレクサンドル・モティエという名であることを彼に説明させることなど、私には兎戯に等しいものでした。ところが、その面会はあなたが席を外すときと一致するのです。それが、私が疑いを抱いたことの証拠です。あなたなら、あの最初の夜から推察することができたでしょうに。私の裏をかこうなどとは考えるべきではないということ。私があなたの友となるか敵となるか。選んでください。」

今日あなたと接触する間に、あなたとあなたの学友は、共通の利益のため、私が彼にさせていた働きかけについて、きつとあれこれ論じたことでしょう。私は彼を、私の告解者になるよう持っていきたかったのです。それはあなたを安心させるは

ずでした。彼の心は、あなたのその代わりに、私の監督下に置かれることになった
だろうからです。彼の拒絶とあなたの猜疑心さいぎにもかかわらず、私は二人がともに思
いがけない満足を味わえるよう気を配りました。今夜の食事の間に、あなたたちがお互
いに惜しげもなく振りまいたものでね。そうすれば、若干の友情や感謝の念を、あな
たたちが遅れて抱くと私は思っていました。残念ながら、私は間違えました。そのあ
なたの話しぶりは、私のそれを変更することを私に課そうとしています。私はもう提
案はしません。これは命令です。

明日、一時間休憩の間に、あなたはモティエ弟を迎えに行くことになります。舎監
には私から知らせておきます。そしてあなたたちは、私の部屋に一緒に来るのです。
あなたたちは、一種の相互告解を私にするのです。それは、あなたが個人的に避けた
私的な告解の埋め合わせです。赦しは、あなたの誠実さの代償となるでしょう」

ジョルジュは、その夜速やかに眠りに就くことは期待しなかったが、もう怒りの涙
さえ流すつもりはなかった。彼は冷静にあの男の破滅を決心したばかりだった。かつ
てアンドレのそれを決心したように。その計画は、彼にどんな良心の咎めも引き起こ
さなかった。それでも彼は、あのような少年を追放したのに続き、あのような男をコ

レージュから追放することで、慈善行為を実現させる、という考え方はできなかった。公の利益のことは気にしない。問題となるのは自分の利益なのである。アンドレに対しては躊躇した。彼は自分には何もしなかったから。が、あの神父に対してはためらいはない。彼は自分の不幸を望んだのだ。あの神父は、時々は親切な態度を見せ、またいつでも興味を引かれるような面を見せた。だが、それよりはるかに偽善的で腹黒いのだ。暗黙の協定は破棄された。

明日の朝すぐ、ジョルジュはリュシアンと一緒に、何をすべきかを検討することにした。彼は、先生方の一人を犠牲にすることでアンドレの仇を討てれば、喜ぶのではないか？ もちろん、現時点での攻撃は危険極まりない。神父は、ジョルジュの共犯者全員を思いのままにできる。告発者になることで自らも告発される。その名声、手腕、学長からの信頼が、神父を守っている。結局のところ、彼は最強の相手なのだと思えなければならぬのだろうか？ そして、彼の意向を我慢して受け入れるしかないのか？ その考えは、悪夢のようにジョルジュを息苦しくさせた。眠気を誘うため、彼は仰向けで身動きせずじっとしていた。

神父が共同寝室に入ってきて来るのが聞こえた。いつものように、コンタツがスータンに当たって音を立てた。あの男は、本心で祈っているのか、それともそのふりをして

いるだけなのか？ 以前のリュシアンのように、免償を見積もっているのだろうか？ ロザリオ信心会のメンバーだったとしたら、珠ごとに二〇二五日分の免償が交付される。あるいは、カール五世のように、勝利を数えているのか？ 罪に対する勝利か、罪の勝利を？ 彼は非常に多くのことを数えたかもしれない。統計が好きなのだから。引用の数、お気に入りの者の数、甥っ子の数。

ジョルジュは、彼がまっすぐ自分の方へ向かって来る予感がした。おそらく、また会話をするためだ。彼は眠っているふりをした。ベッドの前で一瞬立ち止まり、それから枕元に近づく。顔に香りのある吐息を感じる。彼は動揺の頂点に達したが、何とか眠った状態を維持することができた。彼はこんな経験をしたことはなかった。自分が眠ったふりをしながら、関係を持たされるような場面を。薔薇の戯れか、それとも懐中電灯のそれがあるのだろうか？ 彼は、今日を覚ましたように見せかけ、神父に放っておいてほしいとかなり真剣に頼むために、その戯れを待つしかなかった。

だが、神父は遠ざかり、共同寝室を二、三周巡回した。彼は別のベッドの前に立ち止まり、ジョルジュに今しがたしたように、そこに寝ている者に近づいた。それはモリスのベッドだった。もっとよく見るために、ジョルジュは長枕の端まで首を伸ばした。神父は横板に座って身を屈めた。おそらく彼は、以前話していた顔たちへの、例

の観察点検を仕上っているのだ。ところが、モーリスは頭を上げた。会話があるということだ。囁き声さえ聞こえてこない。その会話が誰の注意も引かなかっただろうことも、驚くことではない。とうとう舎監は自分の部屋に戻った。少し後、モーリスが立ち上がり、慎重に掛け布団を整えて、そっとその場を離れた。ド・トレヌ神父のドアは彼の前に開かれた。

ジョルジュは胸をどきどきさせ、影になった入り口の枠と、やはり暗いその内側の窓に視線を固定したままでいたが、その後ろのカーテンはかなりきっちり引かれているに違いなかった。が、それは部屋の中の視界を妨げない。そこにいるのと同じくらい中がよく見える——バスケットにリキュールのボトル、祈禱台、化粧品の小瓶、ゴムの浴槽——そして真ん中にたった一人、モーリスがいる。

あの男と縁を切るチャンスが訪れたという考えが、矢のように彼の頭に浮かんだ。以前のアンドレのときのように、もう一度奇跡が与えられたのだ。彼は誰に感謝すればよいのか分からなかった。神々か、聖者たちか。

神父の命運は確実に決定された。一人の生徒を、こんな非常識な時間に、自分の部屋に迎え入れて、一人きりになる。もうそれだけで有罪確定である。ジョルジュは、モーリスは確実に巻き添えを食らって悪評を立てられるだろうということを、いくらか気

の毒に思った。だが、どうすることもできない。直ちに行動を起こすことが必要なのだ。明日は彼がアレクサンドルのことで受けた最後通牒の期限である。そして今夜、あのスパイは彼の意のままだ。立場を逆転させるためにすべきことがたくさんある。こんな優勢な機会が再び訪れることがあるだろうか？ 今日のジョルジュは、食うか食われるか、悪魔を滅ぼすか悪魔に滅ぼされるかの選択に直面している。その考えが、モリスのためを思う同情へと傾きそうな感情を抑制させた。それに、休暇の間、アレクサンドルを監視する任務を負っていたのは、同じくモリスではなかったか？ ローゾン神父は、監視者とはどういうものか、どれだけ役に立つのかということを示されようとしていた。学長が自分のそれを知らされようとしているのと同じように。そして、まさにあのド・トレンヌ神父にアレクサンドルの興味を向けさせようとし、彼の所に行かせようとしたのも、同じくモリスではなかったか？ あまりにも臆面がなく、信じやすすぎるといふものだ。彼はその代償を支払うことになるだろう。彼には、彼が幸福を損なおうとしたその弟を救うための犠牲になってもらうのだ。実に教訓的である。

ジョルジュは、相談するため、隣で眠る友を起こそうかと考えた。彼は、神父がカーテンの後ろで耳をそばだてていないことを確信していた。しかし、彼は自問した。リュ

シアンは、密告という観点から考えると彼の意見に同意しないおそれが多分にあるし、もし無視して密告したならば彼に厳しい裁定を下すだろう。ジョルジュにはなすべきことが分かっていた。これはアレクサンドルと自分の問題なのだ。ド・トレンヌ神父に対する行動をリュシアンに知らせる必要はない。リュシアンの助言をアレクサンドルに知らせなかったのと同様に。完全に単独で、彼は密告によって見せかけの献身に返答することにした。

彼は立ち上がり、室内履きを履き、パジャマの上から上着を羽織って、抜け出したことがばれないようベッドの枕元を整えた。かつて神父が教えたように。それからひざまずきつつ、小さな手帳から紙を一枚切り離して洗面用具箱の上に置き、終夜灯の拡散光の下で大文字で書いた。「*Allez donc tout de suite chez le Père de Tenness.*」
「さあ直ちにド・トレンヌ神父の所へ行け」彼は指を折って数えた。これはアレクサンドラン（十二音節詩句）だ——アレクサンドルを救うこ

とになるアレクサンドラン。学長は満足することだろう。彼なら、この核心が《*donc*》にあると気付く。彼は、この詩句の韻律を分析すると、駆けつけて来るだろう。神父が日曜日に朗唱した見事な説教に、彼が見抜こうとしていたどんな注釈が付くのかを知りたくて。

ジョルジュは自分の手帳の縁が金色であることを思い出した。もし学長がこの紙片

を見たら、自分の正体を暴いてしまう危険のある部分だ。彼はそれをポケットに入れ、引き出しの中に入れてあったノートから一枚を破り取った。もう一度書き込んでから読み返す。書いたときはあれほどしっかりしていた彼の手も、その紙を持つときには少し震えていた。素晴らしい仕上がりだ。アンドレのときよりもはるかに。これは密告ではない。陶片追放の貝殻だ。十二韻脚のこの詩は匿名の手紙である。一瞬、このような卑劣さへの恥がジョルジュを苛んだ。もう一度、騎士道の掟を引き合いに出すべきだろうか？「殊勲なければ騎士に非ず」自分には、それは一つで十分ではなかったか？しかし、十月にリュシアンへの思いが彼にさせることができたのよりも、アレクサンドルへの思いは彼にもっと冷酷になることを命じていた。

彼はその紙を折り畳み、片方の手にそれを、もう片方の手に懷中電灯を持って、かなり静かに進み出た。神父の部屋の前で、タバコの香りが彼の嗅覚に達した。これはエジプトのタバコに違いない。

廊下は闇に沈んでいた。ジョルジュは懷中電灯をつけた。自分が悪事を働いている泥棒のような気がした。いつもの習慣で、現在と過去を比べつつ、以前の夜の退出を思い出していた。アレクサンドルの手紙が押収された後だ。彼はあの夜、自分のせいで罰せられたあの子のために身を捧げた。今日、彼は先生の一人と学友の一人を密告

しようとしている。だが、それはやはりあの子のためなのだ。

書斎からは、少しも光が漏れていなかった。今回、学長は寝ているのだ。ジョルジュは紙片を広げ、文字を書いた方を上にしてドアの下に差し込んだ。それから扉を拳で叩いた。ああ！ 彼は起こされようとしている。学長先生は！ 反応はなかった。学長は、モーの鷲の翼に守られて、深い眠りに落ちているのだろうか？ ジョルジュにはこの問題が生じたが、不安になりすぎることはなかった。うまく物音を聞きつけられるだろう。彼は、紙片がいたずらだと思われることはあまり恐れなかった。彼が恐れたのは、読み手の到着が遅くなりすぎることだけだった。もし現行犯でなかったら、ド・トレンヌ神父にどのように罪を認めさせればいいのだろうか？ モーリスが訪問してから優に五分間は経過している。そしてジョルジュは、今から十五分ほどでこの状態は失われると見積もった。失敗するかもしれないという考えに激怒して、彼はさらに力を入れてノックした。ついに、聞き知った声が内側で返答した。確かに誰かがいるのだと確認したくて、もう一度ノックしてから、彼は部屋の外に飛び出した。自分を導いてくれる壁に軽く触れながら、廊下に沿って走る。共同寢室のドアに触れた。懐中電灯をつけずにそこまで来た。彼は、先刻のように神父が自分を待ちかまえているのではないかという考えに恐怖して、立ち止まった。それに、今にもここに来よう

としている学長！裏切り者は挟み撃ちになろうとしているのか？三人の貴族が集まるのなら、場面はさらに刺激的になるほかはないだろう。

ジョルジュは室内履きを脱ぎ、裸足になって、舎監の部屋の前を抜き足差し足で歩いた。ベッドの間を通り過ぎるとき、彼は身を屈めた。自分のベッドの近くで急いで上着を脱ぎ、何も変わっていないように見せかけるために同じ場所にそれを置き、ずり落ちたままにしておいたシーツの下に潜り込んだ。彼は、アンドレの破滅を自習室で待っていたあの夜とは、まったく別の感情を感じていた。彼はもはやこの事件の続きを恐れていなかった。歩き回ったことで、彼は確かに興奮していた。神父が自分のベッドに近づき、モリスが自分のベッドから離れるのを見たとき、彼はすでにそうになっていたのだが、ひどく興奮した後、彼は冷静になった。自分によって企画されたショーをじっと観察することだけが待ち遠しく、自分はその唯一の観客になるだろう。これは文学作品の制作なのである。加えて言えば、これは自分の幸福を守り、復讐するという文学作品の制作なのであった。

誰かが共同寝室に入ってきた。神父の部屋をノックしている。ジョルジュはわずかに体を起こした。いつもと同じように薄暗いその控えの間を注意深く観察したが、彼はその間に一つの影を見分けることができた。そのとき、不意に強い感情が彼を襲った。

彼は自分がしたことを理解した。低い声での短い問答が始まった。それから学長の声がさらに高くなってこう言った。「開けなさい、命令です！」次は舎監がその言葉を聞く番だった。

光の氾濫があつた。ド・トレンヌ神父と学長が向かい合つた。激しい情動に襲われたジョルジュは、もはや聞き取ることができなかつた。間もなくモーリスが現れ、嗚咽に息を詰まらせながら自分のベッドへと戻って行つた。その部屋のドアは大きく開かれたままだつた。ド・トレンヌ神父は少しの間、挑戦的な態度を取っていたが、その訪問者がじつと見つめるだけで何も言わなかつたのに、彼の方は頭を少しずつ下げていき、足元にひれ伏した。それからドアが二人の男性に向かつて閉じた。

ジョルジュは学友たちのベッドを注視した。動く者は誰もいない。彼以外の誰も、この結末を目撃した者はいなかつた。ということは、ド・トレンヌ神父が、その自尊心や学識や皮肉っぽさや不実さにもかかわらず学長の前に屈服するほかはなかつたということは、誰も知らないということになる。学長は、もう神父の友人ではなかつた。彼を裁く者であり、彼の職業組織の代表者なのであつた。共同寢室の眠りは、この破局によって妨げられることはなく、モーリスの涙によって妨げられることもなかつた。今ここで眠らずにいるのは、神父が受け入れた、たぶん最後になるであろう訪問の、

二人の目撃者だけであつた。

この静寂のただ中で、そして多くの騒動を目前にして、ジョルジュはベッドの心地よさを味わつた。後悔は、目的を遂げたという喜びに少しづつ場所を譲つていった。確かに彼は、モリスを氣の毒に思つていた。彼の嘆きは、アンドレが罰を受けた夜のリュシアンのを彷彿とさせた。また確かに彼は、ド・トレヌ神父さえも氣の毒に思つていた。神父は、仲間うちからの数限りない侮蔑を耐え忍ぶことになる。とはいへ、彼らは二人とも、結局は自らが招いたものを受け取つただけなのだ。彼らは回心するしかない。かつてリュシアンがそうしたように。ジョルジュは、天国への道を彼らに取り戻させてやつたのだ。本当に、何という回心請負人だろう！ 彼の友情は、ドラゴナードに似ている。たくさん人間が、ある者の救いのために努力を傾けているのであろう。その者は、もはやそのことを考えるよりほかに仕方がなくなるのである。

とにかく、彼はこの世の苦境から抜け出した。彼は自由だった。彼は再び運命の支配者になった。学長によつて再建させられた規律と權威以上に、事実上勝利し続けたのは彼だった。もう一度、彼は秘密の勝利者となった。その言葉の発言主を犠牲にして。彼は、学長を立ち上げらせ、舎監にひざまずかせたが、その日に返却されたラテン語

の翻訳に、教師に「あなたならもっとうまくできたはずですよ」という短評を書かれた、十四歳と十か月の少年でしかなかった。彼が今夜やったことは悪くなかった。彼が生じさせた場面は、おそらく画家や作家にとって非常に暗示的であっただろう。それはコンクールのテーマとして出題されるに値する。それはパリノー・アカデミーではなく、美術アカデミーのテーマだ。美術館の大きな絵の様式だろう。《ミラノ大聖堂のポーチの下で聖アンブロジウスに嘆願するテオドシウス》、《アティニーで司祭たちの前で悔悛しているルードヴィッヒ温厚王》、《カノッサでグレゴリウス七世の足元にいるアンリ四世》——これらは皆、換言すればこうだ。《床屋が別の床屋の髪を剃る》。

今この時点では、現代史の二人の主役が、少なくともその一人はしっかり髪を剃られたのだが、競うように我がちに祈りつつ、並んでひざまずいている可能性がある。だが、彼らの思考がよそへ行ってしまっているのも確かだろう。祈禱中の生徒のそのように。第一に、ド・トレヌヌ神父は、学長がここに踏み込むという事態が、どのような経緯で起こったのかを理解しているだろうか？ 後者は、詩の発見をアンドレに説明しなかったが、自分がやって来た理由を神父には説明するのだろうか？ そして神父は、自分が同僚あるいは生徒の、偶然の犠牲者であると思っっているだろうか？ もし彼がジョルジュを疑ったとして、彼はシエナの貴族が聖ベルナルディーノを許し

たのと同じ従順さで、彼の拳の一撃を許すだろうか？ 彼は、この少年を追い詰めたことに気付いていたはずだ。彼は、古代と聖人の生涯を授ける権利を濫用した。純潔のための彼の訴えはあまりにも熱っぽくなりすぎ、引用はしつこくなりすぎた。そして、彼はこの文句を忘れていた。それはミュッセからのもので、選ばれた者たちについて、の台詞である。

あなたは彼らにあまりにも純潔を望みすぎです、あなたが選んだ者たちに。

息がつきたい、と言っているのだ。

学長にしてみれば、通報された方法がかなり気になっているはずである。もちろん彼は、これが共同寝室の誰かによるものとよく分かっている。以前、許可なく外出したジョルジュを咎めた彼であるが、彼としては、今夜はほかにやりようがなかったこと、そして、無許可でなされるかもしれないことの中には非常によいこともあるということを、考えてみるだけの根拠があった。いずれにしても彼は、自分の生徒たちの上に、自分を安堵させる徳行のあかしを、この行為の中に見ることだろう。たとえば彼が、アンドレにしたのと同じように、モーリスに対しても容赦のない態度を示すと

しても。

落着がどんなものになるにせよ、ジョルジュはこの問題にどうしても不安を覚えることができなかった。モーリスが放校になれば、来年アレクサンドルもきっと一緒に別のコレージュに移り、その子と約束したとおり、ジョルジュもその後を追うことになる——そうなると、リュシアンもどうして同じようにしないことがあるだろうか？そこでジョルジュは、モーリスに被らせてしまった損害の埋め合わせに専念するのだ。リュシアンに対してそれに専念してきたのと同様に。モーリスがその変化で失うものは何もない。彼には友人が見つかるだろう。本当に素晴らしい友人が。アンドレもまた一緒にいる。彼ら六人は、特別な友人を持つことを非難されても、もはや恐れることはない。今度の彼らの協会は、コレジウム・タルシアンという名称を持つだろうか。

それにしても、ジョルジュ、アレクサンドル、リュシアン、その他は、懲戒を受けた者として聖クロードを離れなければならないのだろうか？あの舎監が、良心的な配慮、あるいは公訴的な心情によって、この学舎の小さな秘密を話すことは十分あり得る。その場合、ほぼ退学処分が普通だろう。従って、それはあり得ない。学長は、聖クロードがそのような不信冒瀆の寄宿学校であると考えることに同意しない第一人

者なのだから。

彼ら被告人たちは、もし望むなら、黙っていないことだってできる。彼らは、ド・トレンヌ神父の中傷に反論するに足るものを持っているのだ。ジョルジュは、アレクサンドルをして教皇に手紙を書かせようとしたあの脅迫的指導のことを思った。聴罪担当者が彼に聖体拝領を禁じることを求めたときである。ここでも、政府に手紙を書く脅せばいいのだ。それはたいへんな事件になるだろう。

さしあたり、ド・トレンヌ神父は去ることになる。どこへ行くのだろうか？ 自分の生徒たちのように、別のコレージュというわけにはいかないだろう。彼は甥たちへの面会を維持していたし、平和に身内びいきに励むのかもしれない。もし本当に回心しているならば、修道院に入ることだろう。そこで彼は『少数の選ばれし者へ』の古典的説教を十分に時間をかけて熟考し、それを自分のためにもっと上手に役立てるかもしれない。修道会を変えることが可能だったとして、彼がそれに甘んじなければ、の話だが。この点についてのジョルジュの情報は不十分だった。彼は、およそ一五〇ほどの修道会があるというくらいしか記憶していなかった。となると、もし変えることが可能な場合は、ド・トレンヌ神父は多すぎて選択困難に直面するだろう。だがおそらく、彼はむしろ考古学の方で自分を慰めるのではなからうか。彼はまた近東に

行つて、再びギリシャを見る。テンプル騎士団の金言は彼を保護するのに役立たなかつたけれども、古代の寺院は彼の避難所の役割を務めるだろう。

「よい旅を、神父様！」ジョルジュは独りごちた。「城壁地帯から、そして町からあなたを追い出したことを許してください。たぶんテオグニスで、ある日僕らは再会するでしょう。」

そして、リュシアンと僕が祈つたその部屋で祈る学長先生も、『祈れ、眠らずに！』という言葉に従わせたことを許してください。しかしながら、少々祈つて、それより長く起きていることは、将来あなたの利益となるでしょう」

何とまあ！ モーリスがまた涙の発作を起こしている！ まあまあ、親愛なる同僚よ！ 女性たちがいると男らしいあなたは、男たちと一緒にだといふ子供になるしかないのですか？

それ以上耳に入れないため、ジョルジュは横向きになり、シーツを耳まで引き上げた。

起床時、全員の視線が祈りを唱える学監に向けられた。「主よ、それは我らが善行によるのであり……」ほとんどの生徒は、ド・トレヌヌ神父の具合が悪いのだと推測したに違いない。モーリスは、今朝はリラックスした様子で姿を見せた。今の彼は、ジョ

ルジュと同じくらいのものきさで秘密を抱えている。あるいは自分の運命をおとなく受け入れたのか、はたまた熟考の結果、自分は許されると確信したのか。

皆、黙想をしに下に降りた。学長は疲労が刻まれた顔をしていた。眠らなかったに違いない。無精ひげが伸びている。ジョルジュは、「人間の名誉ある顔」というド・

トレンヌ神父の言葉を思った。あのアンドレの放校が正式に発表された十月のある夜の集会のことまた、思わずにいられようか？ 彼は、この春の朝のニュースがどんなものになるのかをあれこれと考えていたが、主要な点については聞く前から安心していった。自分の運命が、友人たちのそれと密接に結び付いていると分かっていったのだ。

学長ははつきりしない声で、ロザリオの苦しみの玄義に関するテキストを読んだ。

その成果は、とりわけ悔悛、苦行、魂の救いとなるはずである。それは理解できる者のための暗示を多く含んでいた。それは、アンドレを念頭に置いて心の淫蕩が非難されたあの日の、説教師の講演のようだった。それでも、学長がそれ以上のことを言わなかったことに、ジョルジュは驚いた。舎監たちの中でも最も傑出した者がいなくなることにについては、説明があつてしかるべきだ。今またその顔を見ている一人の生徒が、当該の舎監の部屋で自分に現行犯で踏み込まれ、名も知れないままの別の生徒がこのスキャンダルを密告した。それを思つてあの学長は困惑している、ということだ

ろうか？　なるほど、確かにこれは、おそらく新たに通達するのがためらわれるようなスキャンダルだろう。公表には、アンドレのときよりも微妙な難しさがある。彼は地位のため、学び舎やのためにそれを恥じたのだ。だが、彼は「一人の修道士の過ちが大修道院を危機に落とすことはない」という格言を思い出したのかもしれない。

鐘が鳴ったとき、彼は玄義についての本を閉じ、全生徒を見つめた。ジョルジュは思わず少し身震いした。その瞬間が来たのだ。ゆっくりと、学長はこの言葉を言った。誰も聞いたことがないような重々しい調子だった。

「私はあなたたちに、今朝の祈りと聖体拝領をド・トレンヌ先生に捧げるようお願いしたいと思います。あの方は私たちのもとを去りました」

ド・トレンヌ神父の追悼の辞は、ニコラス・コルネのそれよりも短かっただろう。

どれほどこの集団の雰囲気が一変したことか！　ほぼ全員が心を動かされたのもっともだった。いちばん下の学年の生徒たちはド・トレンヌ神父が彼らに興味を持ったからであり、その他の者たちは彼が彼らの興味を引いたからである。かなり深刻そうな態度を取っている。彼らはおそらく、この事件が彼らにとって厄介な結果を招いていないかどうかを疑ったことだろう。リュシアンが見抜いていたように、共同寝室は好意的と言ってよかった。では、ほんの数週間で、ド・トレンヌ神父はそんなにも

多くの災いをもたらしていたのだろうか？ その年度は、年度初めのそれよりもさらに刺激的な出来事で閉じられようとしている。礼拝堂に行く途中で、アンドレの記憶が行列を渡って思い出されていた。それは安心を得ようと努める者によるものであった。結局のところ、神父が間違っていたのではないか？ 過度に不安になる必要はない。今回は、騒ぎがあったのは少年たちの側ではないのだ。神父たちは内輪の責任など引き受けやしない。

礼拝の間、リュシアンはジョルジュに個人的な印象を尋ねた。

「捕まったのはモリスだよ」ジョルジュは答えた。「彼、妙な感じがすると思う」リュシアンは体の向きを変え、アレクサンドルの兄の方をちらっと見た。

「彼は本に没頭している」彼は言った。「全員が本に夢中になっているな。ド・トレヌ神父は満足だろう。彼は君と僕に祈りを求めることから始めた。それで今は、この学年全体が彼のために祈っているか、少なくともそのふりをしているんだから」

ジョルジュは彼に、ド・トレヌ神父がその夜すでに学長の祈りを受けていたと言ふこともできただろう。アンドレも同じようにこの学年の祈りを促されたことを、彼に思い出させることもできたかもしれない。ここではすべて、祈禱で始まり祈禱で終わる。三か月の間、リュシアンはジョルジュのために祈った。わずかであったにして

も、ジョルジュもリュシアンのために祈った。とにもかくにも、聖クロードにおいては、魂がそこになくても心は祈っているのだ。フェルサンの詩のように。

モーリスは、目立った熱意をもって聖体拝領台に向かった——以前のリュシアンの上級生たちにはただ一人の棄権者もいなかった。それは全員一致の聖体拝領であった。ド・トレヌ神父でないのなら、それは完全に学長のおかげである。

朝食のとき、稀なことに「神への感謝」の時間が与えられなかった。好都合だ。いつもより早く終了するだろうし、休憩時間が長くなるだろう。ジョルジュはアレクサンドルの微笑みを受け取った。あの子は、自分が原因となったこの革新のことなどまったく念頭になく、あの夕食のサクランボをナプキンの下で見つけたところだった。

再びその役に就いたかつての舎監は、中庭で生徒たちに囲まれた。彼は、学長がなぜ《ド・トレヌヌ神父》ではなく《ド・トレヌヌ先生》と言ったのか、それはもしや神父が学術研究に専心するために聖職を離れたことを意味しているのか、と尋ねられた。しかし舎監は、彼はまだ神父のままであると答えた。「そなたは永遠の祭司」と。皆、学長の表現が言い間違いであると結論づけたようなふりをした。この辞任には極めて単純な理由があるに違いない。ある者によれば、神父は家族が病気になったのだとい

う。またある者によれば、遺産を相続したのではないかとのことだ。舎監は、遊ぶべしという義務を課すことで、このひょうきん者たちを厄介払いした——皆その習慣を取り戻さなければならぬが、ド・トレヌヌ神父がもたらした放縦さは、今日のところはまだ援用されていた。

全クラスの代表者を含むような大きなグループが、片隅で見解を言い合っていた。ジョルジュとリュシアンは、モリスがそこにいるのを見て近づいた。今の舎監を馬鹿にすることよりも、前任者の真実を探索することが問題になっていた。真実は？こんなことが盛んに口にされていた。発言者たちは、互いに真実を見るまいと望んでいるように見えた。曖昧な表現という手段を用いつつ、自分たちが話すそれを大げさに言っていた。モリスは、神父が学校外で女性関係の巻き添えになったことをほめかしていた。だが、そんなことがあり得るだろうか？七面鳥番の田舎女しかないようなこの村の中で？自転車で一時間もかかるような小さな隣村で？四年生のわんぱく者は、さらに信憑性の高い仮説として、神父が親切にしていた学友の何人かとの共謀説を唱えた。誰なのかを言うように求められたが、その催促に名を挙げることは拒否された。リュシアンは、もしそれが真相なら、その不幸な連中はもうすでにここにはいないだろうと指摘した。別の者は攻撃を繰り返し、共同寝室でいつもあ

ることを疑っていたことを隠さなかった。ある夜目を覚ますと、ド・トレヌヌ神父が、懷中電灯で眠っている者たちを見つめているのを見た、という。だが、ジョルジュはその解説を中断した。神父は、眠れない者のためにコンタツを唱えていたと自分に打ち明けた、と主張しつつ。

上級生の一人が、それらの話は非常識だと宣言した。ド・トレヌヌ神父は、若い生徒たちやコンタツと同じくらい、七面鳥番の娘に対しても関心はなかったと思う。それは科学者で、度量の広い精神の持ち主で、懷疑論者だったということだ、と彼は表明した。あの人は人氣があつた。上級生たちに好感を持たれていた。先生方に嫉妬心を起こさせるのに、これ以上のことは必要ない。先生方はあの人を陥れたのだ。攻撃があの方たちの仕業であることは署名入りのように明らかだ。

哲学科の学生はこの見方に賛同したが、当件にはさらに高レベルの原因があると思はれていた。ド・トレヌヌ神父が怒りを買ったのは聖クロードの先生方ではない。神父は、あの人たちの間にずっといるわけではないのだから。怒りを買ったのは別の聖職者だ。たぶん彼は、その人たちに嫉妬心を抱かせたのだらう。彼は釈明を強いられようとしている。理由は誰にも分からない！ おそらく、異教徒の神殿を再建するといふので非難されでもしたのだらう。その哲学科の学生は、修道会ごとのさまざまな

モットーを思い出させた。《神のさらなる栄光のために》、《すべての人に神の栄光が讃えられんことを》等々。聖職者どうしのこうした迫害はすべて、神の名において行われた。昔なら、神父は地下牢に入れられて、パンと水だけの食事になったところだろう。少なくとも、宗教裁判所がもう存在しないのは幸運だった。ヴォルテールと『人間の権利』は、聖職者自身の役に立ったのだ。

十時の自習時間中に、学監がモリスを呼びに来た。リュシアンは、ジョルジュが間違っていたことを称えるかのように、彼を肘でつついた。交わし合った視線によれば、世論は一致していた。休憩時間になされた談話は、現実にとって代わられた。危険はすぐに忘れられていたのだが、それは存在していたのだ。試験を知るのは、今度は生徒たちの番となった。大量殺人は始まっている。モリスは、アンドレのようにかすめ取られてしまうのだろうか？ リュシアンは、少しは不安を感じなかったか？ ギリシャ語翻訳に身を入れていたジョルジュは、ド・トレンヌ神父を思い出した。ギリシャがとても好きで、出発の前に彼の前途を決定していったあの聖職者を。ついにドアが開き、全員が頭を上げた。モリスが戻って来た。彼は嘲笑的な態度をとっていた。しばらく経ってもほかの者は誰も呼ばれず、それが分かると、自習室は重圧感から解放されたようだった。皆、息を吹き返した。

課題を清書すると、ジョルジュは自習室の書架から教会法の小さな概説書を借り出した。自分自身については安心させられたが、ド・トレンヌ神父が自分の地位について受忍するかもしれないことが気がかりだったのだ。地下牢の考えが彼に影響を与えていた。彼は、神父の《不正行為》が教会法の《留保事項》には含まれず、従って《治療刑、別名・譴責》^{けんせき}を免れることを確認した。破門、聖務停止令、一時聖務停止令のことである。《報復的な罰、あるいは償罪の罰》については、それらはただ《一時的な形》で神父に課されるおそれしかなく、《永遠の》ではない。あとは《懲罰》が残っている。特別な断食、托鉢、悔悛の行、宗教施設での霊的修行。どこでもいつでも、ド・トレンヌ神父の修行は霊的なものになるのだろう。

昼食の後、休憩時間に入ろうとしていたとき、ジョルジュは舎監から、学長が自分と話したがっていることを知らされた。モリスよりも彼に対しての方がいっそう慎重になっっているように思われたが、それはおそらくいっそう不安を抱かせるものでしかなかっただろう。

「さあ、おいでなすったぞ」彼はリュシアンに言った。「万歳！ 死にゆく者より敬意を捧げん」

学長は勘が鈍いわけではなかった。だからこそ、神父の共犯者兼告発者に接触したのである。すでに昼食前、学監がジョルジュに朗読はなしだと知らせたとき、彼は最初の虫の知らせを感じていた。彼はあっという間に降格させられたのだ。彼に授けられていた榮譽はかなり不適切なものだったが、彼はそれをよくこなしていた。彼は、さらにもう一人の聖人の生涯を読まされる可能性もあった。今の彼は、自分が朗読者のリストから永遠に抹消され、別のリストに記入された理由が分かっていた。

それでも彼は意に介さなかった。昨夜の鬭争的な気分はもう静まっている。彼は、どんな防御も無意味だと思っていたし、さらには弁解もうんざりだった。一言も反論せず、唯々諸々と退学宣告を聞いて、アレクサンドルも退学になることの確認だけしよう。とはいえ、書斎を離れる前に、ドアの下に滑り込ませた謎のメッセージの原本を学長に差し出すことはしておこう。後にはひどく困惑した男性が残されることだろう。

ジョルジュは、あたかもそれがランブイエ館であるかのように、その館に入ると同じくらいしずしずと入室した。学長は、ライラックの芳香が入り込むがままになっている開かれた窓の近く、逆光の中に座っていた。彼は、それが訪問者に、ド・トレヌ神父の言葉とモティエ弟のイメージ、すなわちおそらく彼を出頭させる原因と

なった二人の人間のことを思い出させるかもしれないことに、気付いているだろうか？ 彼は椅子を指さした。

「私は気付きました」彼は言った。「あなたの作文の順位が、復活祭休暇以来あまりよくないことに、です」

彼は机の上の紙を取るために身を屈めつつ、彼に問いかけた。

「英語は四位でした。しかるに先学期は二位で、一学期は一位だったのです。ラテン語翻訳は、二度一位を取った後に三位になってしまいました。ギリシャ語作文においては、三位が一度、二位が一度、そして日曜日には、あなたは最新の成績がほとんど満足できないものであると知ることになるでしょう。つまり、ギリシャ語翻訳を除き、あなたはこれまで行われたすべての作文において成績が下がってしまったということです。何が原因なのですか？ 我が子よ」

ジョルジュは微笑みながら、それはきっと運が悪かったに違いないと答えた。今学期も同じ努力をしたという自覚はあったし、そのうえ次の表彰式のことを考えて鼓舞されてもいたのだから。それにもかかわらず力及ばなかった領域では、自分は最後の作文——《秘密の作文》、成績が公表されないもの——を当てにしている。失った場所を取り戻すために。

「私は心配していたのです」学長は言った。「あなたの学業や思考が邪魔されたのではないかと」

「もし邪魔されたのなら」ジョルジュは言った。「僕はギリシャ語でも失敗していたでしょう」

彼は、そこでは答えるまいと考えたとき、すでに自分が打ちひしがれるような目に遭うのを予想していたのだが、事態はもっと好意的な展開を見せ、それは彼を楽しくさせずにはおかなかった。

「確かに」学長は再び口を開いた。「あなたの秘跡への勤勉さ、信心深さを私は知っています。シエナの聖ベルナルディーノに対する崇拜心を持っていることだって知っていますよ。私はそれを祝福します」

ジョルジュは謙遜した様子を見せた。聖タルチシオに関心のあることを祝福されたあの日のように。だが、内心ではそれどころか、昨晚、自分を指名させた手管の推察が当たっていたことで、かなり得意になっていた。

学長は彼の方に身を屈め、手を取った。

「我が子よ、私の顔をまっすぐに見るのです。あなたはここ、いっばいの光の中にいます。私はあなたの魂を読み取るように、その目を読み取ることができます」

小休止の後、彼はゆっくりと言った。

「あなたはド・トレンヌ先生の影響下にありました」

ジョルジュは驚いたふりをした。

「僕が？ まったくそんなことはありません、学長先生！」

「では、あなたが食堂で朗読をするようとりなしたのは誰だというのです？」

「神父様は、求められることなく人を喜ばせるのがお好きでした」

ジョルジュは声音を変え、聖パンクラティウスのミサについてアレクサンドルに使ったのと同じ逃げ口上を使った。学長は、議論の余地のない信望の、その別の記憶を呼び起こす必要はなかった。

「あなたの返答に、私は感動しています」彼は言った。「ド・トレンヌ先生と私を結ぶ感情のためですが、しかしそれでも、私は私の正当な詮索心をさらに推し進めなければなりません。いちばん重要な関心事についてですが、それはあなたにはっきりと話しておく必要があります。ともかくも、この事件において、あなたがかつて私に伝えに來たときと同様（比較は理由になりませんが）、まあ言ってみれば、あなたのように優秀で信義に厚く、義務感の強い少年に出会えて、私はうれしいのです。状況があなたを選び出しました。私を安心させるためではないにしても、私の疑問を解いた

めに、ね。それに、私はあなたにしか尋ねないつもりです。私は、あなたが私の質問の重要性を理解しないとは思いません。同時に、このすべてについて第三者に対して厳に沈黙を守る必要性も。あなたの証言が主要な関係者に知らされることはないこと、この学舎にいる者に対していかなる結果ももたらさないことも付け加えておきます。しかし、あなたが責任を問われることも忘れないでください——超自然的な次元のそれはさておき——まず私の前に、次に聖職者としてド・トレンヌ先生が近づく機会があったであろう子供たちの前に、です。神のお言葉を思い出してください。《子供をつまづかせる者は災いである》。

ド・トレンヌ先生には、人を信用させる才能があります。彼が言うには、多くの生徒が自分の方向性の助言を求めに來たのだとか。しかし、私が知りたい重要なことは、そう見せかけておいて、遺憾な軽率行為がなかったかどうか、ということなのです。そのため、私はあなたに二つ質問をするにとどめます。あなたは夜、ド・トレンヌ先生の部屋に行ったことはありますか？ それと、別の者が行くのに気付いたことはありませんか？ 詳細や個人名は求めませんので、『はい』か『いいえ』で答えてください。それで十分です」

ジョルジュは再び驚いたように見せかけた。それは最初の質問に対してである。そ

れから、第二の質問には熟考するふりを装いたかった。自分が裏切った者の審判役に、
当の自分になることに心が動いたのだ。かつてあの男は自己に對する告白を自分に要
求し、今はあの男に對してそうすることを自分が要求されている。だが、だめだ！
毘から逃れた後で、ジョルジュは彼を罰から救おうとした。打撃を受けることを危惧
していた彼の将来を、無傷の状態に戻す。彼が自由に彼自身のままでいられるように
する。アンドレがそうしたように、ここの誰もがそうであるように。

責任という説得手段は、彼の心をほとんど動かさなかった。釈明しなければならな
いのはまずド・トレンヌ神父に對してである。彼の嘘を暴きつつ、彼が自分に引き起
こした災厄を、嘘によって訂正する。無実を守るべき子供たちについては、彼らは何
とか自分で切り抜けるだろう。ド・トレンヌ先生の典拠に従って、学長は聖アウグス
ティヌスを読むほかはない。彼はそこから、このテーマについては、モーの司教より
もヒッポの司教と共により多くのことを学ぶことになるだろう。そしておそらく、子
供たちをつまづかせる人に対して宣告された呪いの言葉に對し、彼はこの注解を付け
足すことになるだろう。《だが、人をつまづかせる子供がどれほど多いことか！》。

それまでの間、彼はジョルジュの態度によって、すでに半ば満足しているに違いな
かった。後の質問だけをもう一度繰り返したからである。

「それで！」彼は言った。「あなたは何も気付かなかったのですね？」

ジョルジュはその目をまっすぐに見て、静かに答えた。

「はい。僕は誰もド・トレンヌ神父の部屋に行くのを見たことはありません。僕がそこに行ったことがないのと同じように。さらに言えば、もし誰かがそこに行ったとしたら、僕はそういう話を耳にしたと思われます」

退出すると、彼はポケットに入っていた金縁付きの紙片を引き裂き、聖タルチシオの台座の下に素早く差し込んだ。こうして、アンドレの詩に対してはする時間がなかったことを、この文書に対して彼はした。聖タルチシオはリュシアンリュシアンの友を守護しなかったが、彼はリュシアンとモーリスを守った。きつとド・トレンヌ神父のことも守るだろう。いずれにしてもジョルジュは、もう一度学長をだましおおせたこと、懲罰の執行者である人間に復讐したことに満足していた。彼は不条理な規則と盲目的な権力を代表する学長を恨んでいた。変わった学長だ！あの人の演説の序論は、ド・トレンヌ神父のそれと同じくらい曖昧でまわりくどい。あの作文についての猫をかぶった談話や、ジョルジュの信心へのほめかしは、あの人がアレクサンドルの事件のときに仕組んだ敬虔なる悪意と等価ものだ。『ポリュークト』のあの主任司祭たちが対抗デモを呼び寄せでもしたように、もし真実を要求しつつ真実に反することしか呼び寄

せられなかったとしても、彼は不平を言うことができるだろうか？

ド・トレヌ神父は、かなりうまく身を守った。彼は明らかに、あの夜の訪問が例外であると思わせたのだ。アンドレも例外だったし、誰もが例外なのだ。皆、それぞれ自分そのままでいるのだから。そしてジョルジュもまた、学長に対して、ド・トレヌ神父といったときのままだった。もし両者が、彼らの言葉のとおりに彼を選んだのだとしても、彼はいずれの選択も承認しかねていた——顔による選択も、魂によるそれも。学長の選択は、その二つのうちのより好ましくない方のように感じられ、彼をいらつかせさせた。自分は、ジョルジュ・ド・サールは、告げ口屋だと思われたのだらうか？ また同じく、昨夜の伝達者であったと思われたのだらうか？ 一体自分はどんな人間だと思われているのか？

自習時間はもう始まっていて、彼は会見の概要を、学長のいくつかの名文で裝飾して記述し、隣人にその紙を受け取らせた。授業の後、二人の友人は勝利のおやつを共有した。リュシアンの方では、かなり奇妙な話を語る必要があった。

「君が学長にひん曲がった打ち明け話をしている間」彼はジョルジュに言った。「モリスが大っぴらに話したのは何だと思う？ ド・トレヌ神父との出来事さ！ 学友どもが、今朝の退出のことで彼にしつこく迫り始めたんだ。相変わらず神父が学校外

で女性関係の犠牲になったと考えているのかって聞いてたよ——昼は《神への感謝》がなかったものだから、食卓では彼にかまう者はいなかった。彼、しばらく抵抗してから白状すると決心した。で、僕らは笑いすぎて腹の皮がよじれちゃったってわけさ。

それによると、彼を起こしに来たド・トレンヌ神父が近づいたとき（僕らはそれを知らない）、彼は熟睡していた。永遠の生命について話した後で、部屋に一杯やりに行こうと彼を引っぱり込んだ——モリスが言うには、もちろんそんなことは初めてだったんだと。差し向かいになると、神父は十五歳で殉教した聖ヴナンについての説教を始めた。ご存じ、昨日の聖人だ——要するに、十四歳で殉教した聖パンクラティウスとか、トレンティーノの聖ニコラウスとかの再現だな。もし神父がもっと長くここにいたなら、十四歳か十五歳の子供の聖人とのちょっとしたパーティーを、短期間のうちにみんなが共にしたことだろう。

そうしている間に、この殿方ががぶがぶ飲んで、もくもく煙を上げていたとき、突然ドアを『コツコツ』叩く音がした。神父がモリスに言った。

『動かないで。あれは具合の悪いあなたの学友の一人に違いありません。聖務に呼ばれるのでなければね』

彼は一瞬考えて、付け加えた。

『でも、このところノクテユルヌ夜課はないのですが』

シヨパンの夜想曲ノクテユルヌどころか、聞こえたのは学長の声で、『すみませんが』と言っていた。『私はあなたの所に呼ばれたのです』

この冗談は実に素晴らしいけれど、神父は絶対にお気に召さなかっただろう。彼は祈禱台にモーリスを押しやり、サープリスを着る身振りをしたけれど、学長は待ちきれなかった。神父には、もう一人がドアを壊す前に開ける時間しかなかった。モーリスはそれを実に滑稽だったと言っていたけれど、僕は彼が自分に関することであり得ない小声の会話を聞いている間、あんまり勇敢だったとは思わない——灌水棒がフルーレみたいに交差していた。

『その生徒はあなたの部屋で何をしているのです？』

『彼は私に告解を求めたのです』

『こんな時間に？ 教会法違反ですが』

神父は教会法を吹っ飛ばしたらしい。でも彼はたぶん、良心に苛まれて眠れない罪人を気の毒に思った、とでも弁解をしたんだろう。

ああ、返す返すも残念だ！ 横目でモーリスを見ている学長には、テーブルの上には瓶と半分空になったグラス、それに灰皿の中には燃え尽きたタバコが見えている。

彼は顔色を変え、カンブレの白鳥とギュイヨン夫人とをその場で捕まえたモーの驚み
たいな目で、二人の共犯者を見据えた——ほとんど伝説の場面だな。彼はモーリスに
冷たくこう言った。

『パジャマで告解する人などいません。ベッドに戻りなさい。明朝、私があなたを呼
びにやります』

それでモーリスは退出した。神父はもはやギュイヨン夫人じゃなくて、抗議しよう
としているメロップみたいだった。『野蠻人、あれは我が息子だ！』

今日、学長は件の真夜中の悔悛者を取り調べようとしたけれど、あんまりしつこく
は迫らなかつた。ド・フェルサン氏のときみたいに辞書を引くこともなかつた。おそ
らくローゾン神父がそこに一枚噛んだんだろう。君も知つてのとおり、あの人のあの
家族全員への献身をもつてね。しかもモーリスは、僕らがド・トレンヌ神父にしたよ
うに、日々の聖体拝領に言及することで、聖体のパンとブドウ酒の背後に身を隠した。
彼が言うには、その返答に対し、学長は一瞬両手で頭を抱えたそうだ。どうなってい
るんだと自問するように。さてそうなると、彼がどこにいるのか分からなくなってい
るのをどうすればいい？ その哀れな男を？ みんな自分固有の武器であの人から身
を守るし、それぞれが持っている衣装で扮装する。彼の目には、君はシエナの聖ベル

ナルディーノのフードに守られていて、君はその下から彼に差し出されたように見えただろう。つまりモーリスについて、あの人は、聖体拝領は特に疑問視されるような事柄ではないと結論したに違いない。そして、これまで以上に聖体拝領に励むように促して、それからもちろん他言無用だと論じて、彼を帰した——君と同じ指示をされたわけだ。ド・トレヌ神父のことは他言無用。モーリスはアレクサンドルに、同じ墓のように黙っているよう勧告したらしい。ともかくも、彼も君同様、ド・トレヌ神父を救って学長をだましたってわけだ。

一つ、分らないことがある。どんな方法で学長はベッドから引き離されたんだろう。これらの話の中にはいつも謎がある。アンドレの詩がどこで見つけたのか、僕らにはまったく分からない。僕は守護天使を信じちまいそうだよ」

ジョルジュは、ほかの者たちの軽薄さの中に、自分に残っていた良心の呵責に対する一種のなだめの言葉を見いだした。同時に、悲劇が茶番劇に変貌するのを見て、彼は胸を締め付けられた。モーリスまでもが役を放棄したのだ！ 先生方にとっては、『ポリュクト』のように、幸運にも《神の名》を響かせることで終わったことになる。

今では共同寝室で話すことができるようになっていく。リュシアンはジョルジュの

方に身を乗り出した。

「秘密を君に話そう。ド・トレヌヌ神父は回心していない。彼は、僕が十月六日の夜十時三十五分にそうなったような、回心の衝動さえ持たなかったね」

「どこからそれを？」

「もし彼が悪魔を捨てたのなら、僕らのパジャマを放棄して、去る前に僕らの枕の下に置いて行っただろう」

「たぶんそんな時間はなかったんだよ。彼はオリンピアのヘルメース像の足元にそれを供えるつもりなんだろう」

「そのうえ、彼は学長に本当のことを言わなかった」

「うん、でもそれはモリスや僕ら全員のためだ」

「ビスケットとリキュールを残念がっている奴もいるな」

「僕はむしろあの人に、古代や中世や近世のことをもっと質問しなかったことが残念だ。彼は興味深い考証の持ち主だった。不作法に美のことを話すのを聞くために真夜中に起こされるのは、なかなかのものだったよ……」

「……それと、純潔のことを不純に話すのも、な」

（四）

月曜日の朝、ミサの前に、最初の豊作祈願行列が行われた。二列になって、下級生が先行し、上級生はその後に続いた。アレクサンドルとジョルジュは枝の主日の行列で機会を逸したことを覚えていた。一人は自分の学年の最後尾に、もう一人は彼のすぐ後ろにいるようにしていたことが、その証拠であった。

三月の事件以来、彼らは宗教儀式でこれほど接近することはなかった。こんな朝早くに戸外で一緒になることもなかった。

田園は陽光に輝いていた。堀の花々はまだ夜露を失っていない。ジョルジュはそれまで、『キリスト教精髓』の豊作祈願しか知らなかった。そして、彼がこの詩的な行列に快く敬意を表したのは、そのキリスト教徒としての精髓のためなのだった。彼は諸聖人の連禱に続くために祈禱書を開いたが、聖ジョルジュも聖アンレクサンドルも聖リュシアンもその目録には見えないことを確認することになった。少なくともイエスの御名の連禱なら、復活祭休暇のときにアレクサンドロスの美しい名前について考えたことを思い起こさせただろう。その代わり、三十年と四十分の三十の免償を得て

いるところであることを、彼は知った。

次に彼は、豊作祈願についての歴史的概要を読んだ。そこには、古代ローマではこの同じ時期に畑の神々を祝う行列があった、と書いてあった。ただその言葉だけが、たちまち彼の思考の流れを変えた。いかなる理由でこのキリスト教的荘嚴さの魅力を自分が感じ取れるのかを、彼は理解した。彼の不信心な魂は、シャトーブリアンには何も負っていない。彼は『キリスト教精髓』を閉じるように祈禱書を閉じ、想像力を自由奔放に羽ばたかせた。彼は古代ローマの行列を体験しようとしている。聞こえてくる賛美歌は、昔の宗教のそれだ。人々が呼びかける聖者たちは、彼が愛する神々だった。空を飛ぶ鳥たちは、鳥占いの線を描いている。十字路の十字架を形成するユナラの枝々は、ジュピターに再び捧げられたものだ。停止場所のそれぞれで、紫色の祭服を着た聖職者が四方面に聖水をかけるとき、ジョルジュは来たる収穫にケレスの優待を祈るアルウァレスに感嘆した。

彼の前を歩くアレクサンドルが、その夢想到現実を加味した。彼は若いパトリキの金の鎖を首に着けていたが、その小さなベージュの服装は、トガ・プラエテクスタの満足な代用品となっていた。

最後の祝福のときに二人の友人たちがいた道の地点は、カーブを形成し、壁が彼ら

を隠していた。彼らは、信経を踏みつけるかのように、自分たちのミサの本の上に隣り合ってひざまずいた。ジョルジュはその子の側の手を下ろしたままにした。草の中で、彼はその脚に触れる歓びを味わった。

二度目の行列でも、同じ場所場所でそれらがもたらされた。前日とは異なる方角へと向かうことにはなったが。

今回ジョルジュは、ギリシャの美しい日々の情景を展開させた。ド・トレヌ神父のいないギリシャである。彼の夢想は、これまで種々の機会において、休暇の間じゅうパジャマを着ているアレクサンドル、ランブイエ館の若い領主となったアレクサンドル、礼拝堂の教皇となったアレクサンドル、そして昨日の若いローマ人になった彼などを、すでに描き出していた。彼は古代アテネにおけるこの祝日のことを思った。そこでは、このコレージュの少年たちと同じような少年たち、アレクサンドルと同じような少年たちが参加している。アレクサンドルに似た者がかつて存在したならば、の話だが。写真で見たことがあるパルテノンのフリーズには、ギリシャの青年たちが進んで行く様子が彫られていたが、ほとんどの者はクラミスで身を覆い、一部の者はクラミスをまったく身に着けていなかった。ジムノペディアでは、アポロンとヒュア

キントスに敬意を表して、彼らはクラミスなしで済ませたのである。それは、ジョルジュが田園地帯に上るのを見た聖体の太陽ではなかった。それはヒュアキントスを目覚めさせようとするアポロンであり、その光でクラミスよりも美しく彼を覆わんとしていたのだ。昔花になった子供は今日また少年の姿に戻ったが、花の香りは常に彼に染み込んでいた。彼は、日の出のヒヤシンスよりもさらに甘美なラベンダーの香りを漂わせていた。

朝の澄明さの中でのその三回目、最後の散歩にあたって、ジョルジュとアレクサンドルは離れていた。舎監が厳しくて、並び順を変更することができなかったのだ。歴史の幻想の中を通り抜けることはもうなかったが、ジョルジュは今、オリンピックを想起させる『美しきエレヌ』の世界を通過中だった。彼はこのオペレッタがカジノで上演されるのを見ており、聖パンクラティウスのそれと同じくらい陽気な、このリフレインを思い出していた。

オヤ、カファレ！　カファレ！　オオ！　ラ！　ラ！
 オヤ、カファレ！　カファレ！　オヤ！

彼はしばらくこの言葉を口ずさんだが、連禱の伴唱と行列の歩調が、そのリズムを葬送行進曲に変形してしまった。そのうえ彼は、今この時間にはアムバルワリアとジムノペディアに興味を感じなかったのと同じくらい、『美しきエレース』には関心を持てなかった。自分の時代と自分の国のものよりもいいものは、何もないように思われた。彼は空気の愛撫と大地の香りに身を委ねた。アレクサンドルの手を取って、一緒に野原を横切って駆けて行きたかった。

その日の午後、床屋が開会した。それは復活祭の帰郷以来初めてのことだった。自分の番を待つ間、ジョルジュはその男がなぜ一言もしゃべらないのかと自問した。昔の牢獄の床屋たちのように、もしや啞者が選ばれたのではないかとさえ思った。そこでは尋ねることも答えることもないのは事実である。その作業には、マッサージもローションもシャンプーも含まれない。そこにははさみと櫛とバリカンしかない。それぞれが、座るときに、求める髪型の短い指示をするだけであった。するとその男は黙々と仕事に取りかかる。会計係があまり金を払わないと知ったから、あるいは子供も神父もあまり好きではないから、彼はこんなにも無愛想なのだろうか？ おそらく、神父が一人ずっとそこにいるために黙っている、ということもあるのだろう。彼が用事

を頼まれないかどうかが懸念されているのだ——彼が手紙を投函することもあるかもしれないし、タバコを持ち込むこともあるかもしれない——あるいは、彼が《信仰と品行》という、規則によって守られているものに反対意見をまくしたてることのないように。結局のところ、ピアノ教師よりも床屋の方が信用されていないということだ。彼女も彼と同じく外部から来ているが、立会人もなく自分の芸術を実践している。彼女は、教会法の定める年齢（四十歳）をはるかに超えており、聖フランチェスコの第三会（在俗修道会）の一員であることは確かなのである。

「かなり長めに」ジョルジュは着席しながら言った。毎朝念入りに櫛を通す、自然に授かった美しい自分の髪を、彼があまり自慢に思わなかったのは確かだった。バリカシが髪を噛む音が、舎監の足音と、彼のメダルが鳴る軽い音と一緒になった。ド・トレンヌ神父のコンタツは、共同寝室で同じように鳴り渡っていた。ここにいる神父は、リュシアンの子の主要な装飾となっていた隠修道士の聖母のメダルを持っているのだらうか？ メダルを数か月だけ付ける者もいれば、一生付け続ける者もいる。コンタツについては、東洋で指を冷やすために役立つにすぎない。

ジョルジュの目がケープに落ちた。ブロンドの髪がきれいにカットされて、はさみの下に落下したところだった。それは彼の心にささった。聖クロードの理容師が、

休暇の理容師による仕事を消滅させてしまったのだ。どんな理由、どんな権利があつて、彼はその髪を見捨てたのか？ 悪意があつたのか、あるいは不注意のためなのか？ これは不正行為である、あるいは偶発的事故の産物であるとして、その判断に従つたのか？ いずれにしても、監視人の存在がなければ、ジョルジュはこの不幸なかつら屋を厳しく非難したことだろう。彼は、それがアレクサンドルのブロンドでもあるかのように、手のひらにその髪の房をかき集めた。彼はド・トレヌ神父のことを考へた。彼が、この金髪のコレージュから追い出されるよう仕向けた、あの人のことを。

温室であの子は、友人の額の上方の、傷跡のような小さな空白部分に気付いた。床屋が作ったものである。ジョルジュは、別の髪束を脱色しようか、よくよく考へてみた。しかし彼は、それがばれることを恐れ、物笑いの種になることを望まなかったのである。

「これが僕が君に払うべき敬意だよ」彼はアレクサンドルに言った。切られた髪の房を差し出しつつ。

その子は、ジョルジュの天然の髪である栗色の髪と混ぜ合わされた、その明るい髪

を見つめた。

「これは君と僕だね」彼は言った。

それから彼は、ド・トレンヌ神父の出発の原因となったことについて尋ねてきた。

この事件は、以前の舎監を下級生に戻すことになった——上級生も同じ結果だった——のだが、アレクサンドルがそのことに不満を言うことはまだなかった。難なく外出許可がもらえたからである。ジョルジュは、推定されているところによれば、ド・トレンヌ神父は学長と口げんかになった後、荷物をまとめざるを得なくなったらしい、と話した。

「今は安心しているよ。君のために」アレクサンドルは言った。「まあ僕としては、何も心配しちやいなかったけれどね」

ジョルジュは笑い出した。

「それよりもまず、君は兄さんのために安心したはずだろう。彼には心配しなきゃいけないことがたくさんあったんだし」

その子は、傍らに座ったジョルジュの肩に頭をもたせかけた。

「僕が『ずっと君のことを思っている』って書いたのは、兄さん宛だったっていうの?」

日めくり暦は、初聖体拝領式が今週開かれることを知らせていた。それはもちろん、低学年の、学監に説き勧められた特定の生徒たちにか関係がないものだ。だがジョルジュは、まだその余韻が残っているアレクサンドルのことを思い浮かべた。あの子は、自分の初聖体拝領に感動させられただろうか？ 聖クロードでは、その日はその者の一生のうちで最も素晴らしいものになると言われていた。同様に、ド・トレヌヌ神父は、聖パンクラティウスの日の聖体拝領もすべての中でいちばん素晴らしいと主張していた。

下級生がその秘跡を受ける準備がされている間、上級生の所では『訴訟狂』の稽古が進められていた。劇場関係の十七世紀の紛争においては、学長はボシユエのやり方には従わなかった。コメディと信心とは両立し得ると見なしたからである。実際のところ、彼はそれよりも際立った矛盾を許容してきたのだ。『タルタラン・ド・タラスコン』の公開朗読と『聖人の生涯』のそれ、四旬節中日と弔辞、ド・トレヌヌ神父の解雇とモーリスの現状維持。

五月最終日曜のアカデミーの会合では、科学アカデミー動物学分野の会員であった昔の生徒の誕生日を祝った。この機会に、彼はその者の全業績のリストを読み上げた。そこには偉大なものと同じくらいつまらないものも共存していることが分かった――

最も重要な業績のそばに、『モグラの巣における策略の一例』などというものがある。

六月は素晴らしい始まり方をした。その木曜日は朔日^{ついち}で、月の最初の逢瀬の日だったのである。ジョルジュは、ド・トレンヌ神父のタバコをアレクサンドルに差し出した（彼はそれをリュシアンからのプレゼントだと言った）。これまで彼は、一種の慎重から、それを吸うことを躊躇してきた。また、それが自分に不幸をもたらすかもしれないような気もしていたのである。しかし、そんなのは迷信的な思い込みだと自分に言い聞かせ、彼は今日喫煙することを選んだのであった。彼はその行為にこの子を参加させたかった。いずれにしても、これはド・トレンヌ神父を満足させることだろう。

アレクサンドルは、持っていられる限り、指の間でマッチが燃えるままにした。

「ねえ見て」彼は言った。「崩れずに終わりまで燃えろと、それはいい徴候なんだよ」

まるでジョルジュが考えていたことをその子が見抜き、よい前兆によって彼を楽しませたかったかのようにだった。彼は喫煙を喜んでいたが、すぐに嫌になった。彼は咳き込んだ。ド・トレンヌ神父のタバコはオレンジの根元に投げ捨てられた。ジョルジュは、ある晩、あの神父の部屋のドア、アレクサンドルの兄のために開かれ、次に学長のために開かれなければならなかったあのドアの前を通り過ぎたとき、そのタバコの

匂いに気付いたことを思い出した。彼の哲学も、その不愉快な記憶を引き出すことを妨げることはなかった。もし彼が幼い男の子のように見えることを恐れなかったなら、アレクサンドルに倣って自分のタバコを投げ捨てていたことだろう。彼は別のことを考えずにはいらなかった。彼は、レスピアの写真を財布から取り出し、それをその子に提示した。その子はそれをまだ見たことがなかった。その子はそれを長いこと見つめてから、彼の頬にそれを押し付けてキスさせた。次にそれを、自分のタバコがその前で燃え尽きたオレンジの真ん中に置いた。エジプトの煙が、香のようにそのアムールの方へと立ち上っていた。

次の日曜日は、いくつかの理由で関心を引かれるものだった。ペンテコステ（五旬祭）、盛式初聖体、それにその月の外出日であることが、その日の特徴づけていた。この日は祭服が赤になる最初の日曜日でもあった。十月新学期のミサと同じく、勝ち誇ったその色は、殉教の色ではなく聖霊の色なのであった。この時期、ジョルジュはそこに異なる象徴を見ることに興じ、それ以降は、自分が間違っていないと考えられることを可能ならしめた。

大ミサのとき、彼は身廊の二番目のベンチに両親を見かけた。かなり良い場所に両

親がいて、そして二人をほかの人と比較して、彼は満足した。彼は、アレクサンドルの親がそこにいることを知っていたが、顔を知らなかった。日中の外出は、隣村に昼食に連れ出されてそこで過ごし、列車で来た家族が発した後は車で戻るだけだったが、今回の彼は、もっと短時間の外出になるだろう。晩課に参加しなければならなかったからである。

彼は参列者の中にアレクサンドルに似た人を探したが、無駄だった。この男性たちの中の誰が医者の外見をしている？ というのも、友の父親は医者を生業としているからである。だが、宗教的だろうと現世的だろうと、父親なんか糞食らえだ！ アレクサンドルは彼自身で十分である。《彼はいた》。その存在を称えられ、デルフォイの神殿に《彼はいる》と刻まれていた神のように。

その日の司式者は名義司教だった。ペルガモンの司教である。そのアッタロスとエウメネスの都市国家の名前は、これまでは司教ではなく青年を、ジョルジュの心に連想させるものだった。その青年は、父の書架の本にほめかされていたのである。

ペルガモンの司教は、太って貫禄のある人物だった。枢機卿はあんなに謙虚でほっそりしていたのに。彼は聖クロードで学業を修め、その後この教師になったのだった。彼はこの学舎で上座にいられることに、おそらく喜びを感じているのだろう。何と誇

らしげにミトラを上げていることか！ 神への敬意を表したのではなく、コレージュの称賛を受けるために、腕を伸ばしてそれを見せつけたのだ。とは言うものの、一瞬間が無帽の状態になったとき、彼は自分のはげ頭を撫でてみせたが、その様子はいかにも人の良さそうな雰囲気に満ちていた。たぶん昔の同僚の気持ちを和らげたり、生徒たちを面白がらせたりするためにしたのであろう。

ミサが終わると、ジョルジュは面会室に行った。そこでは両親がリュシアンの両親と打ち解けて話していた。アレクサンドルがそこにいないかと、彼は人でいっばいの広いホールを眺め回した。兄と一緒にいる彼が目に入った。近くには一人の紳士と、かなり美しく見える婦人がいる。彼は、その人たちを見て動揺した。自分はこの人たちの子供を奪ってしまったのだ。母親はアレクサンドルの首に片手を当て、シャツの襟ぐりの切れ込みの中で指を広げ、最初の逢瀬のときにジョルジュがキスした鎖で遊んでいた。

晩課では痛ましい失敗が繰り広げられた。ペルガモン司教の説教師は、アッタロスとエウメネスの都市国家では修辞学を修めなかったのだ。美しいレースのロシエ、胸に十字架、黄色と白の帯、毛皮で縁取られた短いマントを身に着け、信心への情熱に駆られ、動揺した哀れな聖堂参事会主席司祭よ！ 彼は鼻眼鏡を吹っ飛ばしたが、素

早くそれをつかんだ。頓^{とんこほう}呼法で、彼はかなりの大声で叫んだ。「おお、マリア！」その声は、初聖体拝領者たちからさえ真剣さを失わせた。聖霊については、彼は聖ベルナルディーノの言葉を引用した。「聖霊は神からのキスなのです」そのキスはローズン神父の聖なるキス集に付け足すべきものだ。

とうとう、その日の天上的な美しさとは対照的に、聖堂参事会主席司祭は罪と地獄の恐ろしい記述を持ち出した。それは静修の講演を思い起こさせた。アンドレの災難によって引き起こされ、バルメ家の男のそれによって例証された話である。「前に炎、後ろに炎、上に炎、下に炎、右に炎、左に炎、どこもかしこも炎、それが地獄です！」演説者は叫んだ。「そして、その恐ろしい炎からは、罪人として死んだ者は絶対に抜け出せません、絶対に、絶対に！」

「君の紋章の若枝に気を付けろ」リュシアンがジョルジュに言った。「炎が居座らないようにな！」

学長は呆然としていたようだった。ボシュエどころではない。皆、たっぷりの炎でふっくらスフレにする調理法の中にいるのだ。部外者のために、彼は恥じなければならなかった。彼は後悔したかもしれない。さらなる夜のパーティーを開かれる危険を冒してでも、ド・トレヌ神父が目下行われている説教をするためにここに残らな

かったことを。良い説教家を選ぶことは友人を選ぶのと同じくらい難しいということを、彼は忘れていたのだろうか？

翌日のペンテコステの月曜日、散歩があった。その散歩は魅力でいっぱいだった。川で水浴びすることになっていたのだ。

一学年クラスで最も優秀な三人の生徒が、ジョルジュとリュシアンの後ろにいた。ジョルジュたちには三人目としてモーリスが一緒だった——散歩は三人で歩くことになっていたためである。その修辞学級の生徒たちは、恋愛相手やダンスパーティーのことを話していた。彼らの一人がこう言ったところだった。「僕はダンスのためだけに生きている」彼は別の一人にサロンでの踊り方を説いていた。

「復活祭での君はまづかった」彼は言った。「一晩中同じパートナーから離れないんだから。君が両親に叱られても僕は驚かない。何人かの女の子と代わる代わる踊って、時々母親たちと踊らなきゃ」

それはジョルジュとリュシアンを笑わせた。

「ここでは」モーリスが言った。「ワルツを踊らせるのはむしろ神父たちだな」

そして彼は、ド・トレンヌ神父の縮小版のように水着とタオルを結んであったベル

トを、腕の先でワルツよろしく回転させた。

狭い谷のこの場所では、ここまではほとんど急流である川は、草原の中央で広くなり、柳に囲まれた湖を形成していた。赤や白の丈のある花をそびえ立たせている、水の両岸に咲くグラジオラスに、叫び声が上がった。

「必要なのは」舎監が言った。「聖処女の祭壇のために花束を持ち帰ることです。白いグラジオラスで作ってくださいね。マリアの月は終わっています、その年のすべての花は、天の女王であるだけでなく花の女王でもある方に敬意を表して捧げられるべきもののなのです——《神秘の薔薇》に」

この後半の暗喩は、舎監の唇の上で、ローゾン神父の言葉とド・トレンヌ神父のそれとを結び付けていた。

生徒たちは、服を脱ぐために木々の後ろに散った。間もなく彼らは水泳パンツ姿で三々五々現れた。ジョルジュは驚きの目で彼らを見た。誰が誰だかほとんど見分けられないし、そんな彼らを見たこともなかったのだ。シャワーは個別のボックス内で浴びているし、共同寝室での身なりは、皆総じて非常に質素だったからである。ここでは虚弱な者さえ優美さには事欠かなかった。彼らは自分が堂々とした体躯であると思わせたがっているようだった。太陽と、自分の美しい仲間たちの榮譽を賜るために。

こちらの者は、いつもはあんなにも軽率な様子なのに、今は美しく変貌している。あちらの者は、いつもはあんなにも不器用ななりをしているのに、今は優雅に硬い草を踏みしめている。そして全員が走って来た。古着を脱ぎ去ったうれしさと、自由と、誇りと、得意さとをみなぎらせて。入水が彼らを隠そうとするその瞬間を、彼らはわけもなく遅らせているように見えた。跳び上がり、地面を踏み、片脚で旋回し、宙返りをし、ひっくり返り、このにわか仕立てのレスリング場で転げ回っている。ついに一飛びで、彼らは同時に水に飛び込んだ。水しぶきが上がる。リュシアンは彼らと一緒に緒になったが、ジョルジュは川岸のそばに座って脚を組んだ。彼は彼らの遊びを記憶しようとしている書記であった。彼らはジムノペディアに参加しているのだ。

舎監は、彼もまたおそらく、生徒たちを識別することがもはやできないようだった。彼は、自分がこの解放された裸の生き物たちに対する権威を奪われたと思ったのだろう。彼は何も見ないふりをして花を摘んだ。それから一本の木の根元に身を落ち着け、神様に委ねた。十字を切った後、祈禱を読み始めた。悪魔によって乱痴気騒ぎのど真ん中に放り込まれた聖者のように。

それでも、この前の週の行列と同じく、実現したのは永遠の儀式であった。これは水浴の儀式である。こちららはもはや農作物を求めるためのものではなく、肉体の成果

を陳列するためのものであった。この少年たちは自然の中へ、彼らの構成元素へと回歸したのである。

潜水する者たちは岩に集合させられ、祈りのために両腕を上げ、順番に宗教的に潜っていた。こちらの者は反対方向に泳ぎ、あちらの者は競争をしている。何人かはどっちつかずにするするとすり抜けている——時折光る尻が現れる。沈むに任せる者、急に浮かび上がる者もいて、若いトリトンたちは口から水を噴き上げていた。ほかの者は、耳と同じくらい目を欠いている神父をあざ笑うために、一瞬海水パンツをずらし、それがなくなつたと叫んでいた。リュシアンは集団の狂氣に囚われ、川の中で跳ね回り、両手で川面を打ち、ひっくり返り、浮かれ騒ぎ、生きる欲びに酔いしれていた。今日もまた、ジョルジュはこのような時間のあるこのコレージュを愛していた。

彼は泳ぎがあまり上手ではなく、からかわれることも望まなかった。たとえきれいなイニシャルで飾られた、自分の茶色の水泳パンツに感心されたとしても。彼は、究極の無知とは《読むことも泳ぐことも》できないことである、というラテン語の諺を思い出した。彼は自分が文盲になつたような気がした。今では、彼はクラスの最後尾にいるのだ。彼は、かなりさりげなく、入水のために離れた。休暇中にプールで受けた講習を何度も反復すると、彼は川岸に頭を載せ、柳の尾状花序で重くなつた枝々の

下で、水中に寝そべったままになった。遠くからも向かいの岸からも彼を見ることはできない。何て気持ちのいい隠れ場所だろう！そこに一人でいることは残念だったが。

左の方の別の川岸に騒がしい物音が近づいていた。下級生たちの到着である。上級生の舎監は自分の読み物をしゅしゅ引き離し、水面上に自分が率いるグループを集めた。彼は、片方の手に聖務日課書、もう片方の手に聖処女の花束を持ち、帽子を斜めにかぶり、大きな身振りをして、おそろくわずかな権威を取り戻すためのきっかけを得たことを喜んでいた。

ジョルジュは動かなかった。アレクサンドルを識別しようと、目を凝らして探しても無駄だった。待つしかない。あの子はきっと自分の所へやって来る。この川に潜む精霊のように。

上級生たちの視線にせき立てられ、新しい水浴客たちは何と興奮して服を脱いでいることだろう！すでに最初に準備完了した者たちが走って来たが、彼らのその熱意はためらいを見せた。彼らはそよ風に震え、足先で水を探り、両手を、次いで両腕と上半身を濡らすために身を屈めている。別の者たちがやって来て、もっと奔放に、躊躇なく飛び込んで、内気な連中に水しぶきを跳ねかけた。先輩たち同様、一種の熱狂

がたちまち彼らを襲った。その浮かれ騒ぎが彼らを遠くへと運んで行った。

ジョルジュは先の光景よりもこの光景の方にさらに驚いた。あの貧弱そうな下級生たちのそれぞれから、あんなにも健やかで力強い生命力が発散されたことがこれまでにあっただろうか？　しかし彼は、あの裸体は人を欺くものだとも感じていた。この少年たちは、下級生も上級生も、自分たちを覆い隠すものをすべて脱ぎ捨てているわけではない。彼らが臆面もなくさらしているあの肉体は、その神秘性はそのままなのだ。聖職者たちが彼らに絶えず神の話をしているこのコレージュでは、各人が己自身の聖職者であるか、さもなければ神なのであった。自分の神への崇拜のため、ギリシャ人が子供たちに託したというかの聖職の、立派な継承者なのである。

突然、情景も思考ももうなくなってしまった。一人の人物だけがあった。草地の上、柳の間を、小さな青の水泳パンツを穿いたアレクサンドルが進んでいた。彼は真っ赤なグラジオラスを摘んでおり、歩きながら片手の手のひらにそれを直立させることを楽しんでいた。細い金の鎖が、彼の首の周りで揺れ動いていた。太陽光線がそれに当たったり、草が彼の足の下でほんのわずかに曲がっていた。ジョルジュはこれ以上に魅力的な光景を、夢でも見たことがなかった。「僕は一生忘れない」彼はつぶやいた。「これを見たこと、これがあったことを」

アレクサンドルは一人きりで、木々に近づき、ジョルジュが身を隠していたそれらと向き合った。彼らがこの場所を選んだのは、再会するためであるかのようだった。彼らの道は、一方を他方へと彼らを導くほかはなかった。その子は上級生組の方に視線を固定していた。おそらく友に発見されることを期待して。しかし、ジョルジュはまだ姿を見せなかった。この情景をもっと堪能したかったからである。まさしく今この瞬間、自分の映像がああ金髪の頭の中に存在し、そしてそのような少年が自分を見つけ、また自分に見つけられることを望んでいる、という考えが、彼を魅了した。今日の祝日は本物だった。それは豊作祈願の第二日、ヒュアキントスの空の下に位置づけたあの想像上の祝日を忘れさせた。

今、アレクサンドルは、自分の仲間たちの方に目を向けていた。彼の右腕は一本の木の高さに上げられ、平らに広げられたその手はハマドリユアスの唇を閉じ、もう片方の手はグラジオラスを足元まで垂れ下げたままだった。「あなたの輝きと美に、来たれ、勝利と君臨よ」という典礼のテキストは、栄光のこの瞬間を予測していたのだ。しかし、ジョルジュがここで感嘆したのは、別の者たちにも感じたような——別の者たちよりも千倍も素晴らしいのだが——魅力的な外見だけではなかった。それはもはやテスピアのアムールではない。神の魂と、あの子の年齢を超越した精神と、力と正

しさに満ち、また友情に満ちた心の神々しい顕現なのだった。

舎監の笛が、第一団の水浴の終了を告げた。その合図によって注意を引かれたあの子は、上級生の方を再び見た。彼は川の中に数歩進んで、太陽から目を守るためにその上に片手を上げた。そのときジョルジュが叫んだ。「おおい！ おおい！」アレクサンドルは顔を向け、たちまちひどく赤面した。彼はざぶっと沈み込んだ。そうやって、自分が対象とされたぶしつけな称賛を罰するかのよう。彼がいた場所にグラジオラスが浮かんでいた。それは神話の時代に、彼が変身するために用いられたものなのかもしれない。彼はすっかりびしょ濡れになり、またすっかりうれしそうな様子で浮き上がって、髪を後ろにはね飛ばした。二つの水滴が彼の耳の下で玉になっていた。彼はグラジオラスをすくって友に投げた。最も美しい逢瀬はすでに終わっていた。

ジョルジュは動き出した。その花の長い茎を花束のように肩に載せながら。友を見なければいけないのは、今度はアレクサンドルである。茶色の水泳パンツは、彼のお気に召しただろうか？ ああ！ ちょうど舎監が妨害にやって来る。乙女の花束を仕上げるのに従事しながら。彼は、離れたことと遅れたことで説教をしようとしているのだ。ある親切な行動が、彼をなだめてくれることだろう。ジョルジュはアレクサンドルのグラジオラスを、聖処女のためにと言って舎監に渡した——わずかな赤が、そ

れ以外の白を余計に目立たせていた。

六月は歓喜の月だった。カレンダーには大きな字でこう記入されていた。「六日木曜日。聖クロードの盛儀」式典を取り仕切るため、司教が日曜日から滞在していた。

水浴場から帰ったとき、学監が大ミサに仕える聖歌隊の子供たちの中に彼を指名したことに、ジョルジュは満足を感じていた。そして、翌朝礼拝堂に行ってみると、両親が再びそこにいないことを彼は残念に思った。アレクサンドルがいちばん後ろのベンチに座っていたことには、さらにがっかりした。昨日の水泳パンツのように、紫の法衣とフード付きケープを着て、彼の前をこれ見よがしに歩きたかったのに。

彼は祭壇を過剰なまでに飾ったばかりの花の香りに襲われた。温室に入り込んだような気がする。例の温室よりもずっと香りの強い温室に。そして、あの温室までが、合唱隊の周囲に並べられた緑色の植物で象徴されているように思われた。その植物はこの構内に何度も姿を見せていたものだが、今日のそれらには別の印象を受けた。自分が別の逢い引きに來たような気がする。聖具室のドアを開けると、盛装するのに余念のない侍者たちの間にアレクサンドルがいるのが見えた。

アンドレとリュシアンは、新学期の説教師によって祭壇の前に集められていた。ジョ

ルジュとアレクサンドルは、ペルガモンの司教によってそうされようとしている。一人も、もう一人も、香炉は持たなかったが、ジョルジュには、その儀式のあらゆる榮譽が自分たちに向けられたかのように思われた。アレクサンドルにはあの子羊の日よりもさらに多くの榮譽が、彼自身にはあの撒香の日曜日よりもさらに多くの榮譽が向けられたかのように。贅を尽くした猊下が金色のチュニックとダルマチカとカズラを身に着けていたことは、彼らの勝利を伝えるためであった。彼らは、もう秘密の勝利ではなく、公然と大勝利を取めたのだ。ド・トレンヌ神父のミサなど、これと比べれば何でもなかった。出る前に、ジョルジュは大胆にもアレクサンドルの小さなフードを素早く整えてやった。聖具室には恐れる者などいなかったのだ。

しかし、少なくとも礼拝堂には留意すべき者がいた。数学教師で、修道会の指導者で、ジョルジュ、アレクサンドル、リュシアン、その他大勢の聴罪人であるローゾン神父は、常に聖クロードに存在していた。今彼は、その最初の二人について何を考えているのだろうか？ 二人の接近を嘆いたか、それとも二人の品格に感銘を与えられただろうか？ ド・トレンヌ神父のように、人はここでは時にひどく無邪気になる、だから自分に相談するべきだった、などと思っただろうか？ あるいはむしろ、コレージュの最高の盛儀のため、かなり見栄えの良い二人の少年がうまく選ばれた、とても

思っているのだろうか？ 彼はおそらく、二人の友情を作り直すという約束を確認したことだろう。太陽はステンドグラスを通過して、彼らに宝石の冠をかぶせた。ここでもまた、典礼の言葉は嘘を言っていないかった。聖処女の足元には、散歩から持ち帰られたグラジオラスが立っていた。そこには赤い花は一本しかなかった。

晩課では、聖クロードの称賛の後に、その彫像が建てられた洞窟への行列が続いた。その日の賛美歌が響いていた。

汝に栄えあれ、威厳ある、崇めるべき父よ！

汝の子らに、クロードよ、目を向けたまえ！……

その行列は温室のテラスの前で止まった。その下には洞窟が掘られていた。アレクサンドルは一瞥でジョルジュにオレンジを指し示した。それは上のテラスを飾っていた——外気にさらすために一時的に利用されているのだ。ペルガモンの司教が助祭たちとともに進み出て、それからテラスを注視するかのように頭を上げながら、敬われるべきその場所を祝福した。去年、アンドレとリュシアンは、おそらく同じ光景にくわしていたのだろう。

翌々日、ジョルジュとアレクサンドルは温室で再会した。二人は直近の二度の邂逅を思い出した。その子は少し考え込んでいたようだった。彼は左手の手のひらを開き、注意してそれを見つめた。

「君、手相を信じる？」彼はジョルジュに尋ねた。

「うん。それがすてきなことを予告しているからね」

「今日の午後、散歩の間に、それに詳しいクラスメートが僕のを読んでくれて、僕が早死にするって予言したんだ」

「馬鹿馬鹿しい！ きっと君に嫉妬して不安にさせたかったんだ。そんな馬鹿なこと、もう考えちゃだめだ。ヴォルテールも早死にするって予言されたけれど、八十歳で死んだんだよ」

彼はその小さな両手を取って、それからまるで診察でもするように身を屈めてその手にキスした。

「ほら」彼は言った。「これで宿命を祓ったよ」

先日、アレクサンドルがマツチ棒について言っていたこととほとんど同じだ。陽気さが復活し、彼は『リチャード獅子心王』のある役を演じることをジョルジュに教え

た。それは歌を含む短い戯曲で、彼の学年は、それによって賞品授賞式の余興に貢献するのだという。彼らはその運命の新しい優遇を祝い合った。それは同じ時間帯の稽古の間や舞台袖で、二人がいくわす機会をしばしばもたらしてくれるだろう。彼らは、自分たちが自分たち自身に互いに守られていることを感じていた。彼らはこの学び舎の典礼には不可欠の存在なのだ。もはや彼らなしの祝典はあり得ない。もしローゼン神父がまだそれほど自分たちの味方になっていなかったとしたら、彼は状況に対処しきれないだろうと思った。そのうえ彼は結論づけた。休暇を間近にして、二人は絆を結び直すままにすることを許されたのだ。新学期には、二人は決定的な形で再会するだろうからである。

アレクサンドルはすでに自分の衣装を見ていた。赤のプルポワン、白の半ズボン、羽根飾りの付いたトック帽。彼は赤のプルポワンに満足していた。侍者の法衣よりも好きだという。

「僕らの色を着るんだよ」彼は言った。「もっと正確に言えば君の色をね。僕は君の小姓だよ。君は貴族なんだから！ ほら！ 君を知ってから、僕は一度も君の高貴さを考えたことがなかった——僕にとっては、君はもう《ド・サール》じゃなくて、ただの《ジョルジュ》だから。でも、貴族であるっていうのはすてきなことなんだよね」

「全然すてきじゃないよ。僕のすてきな小姓さん」

「君には紋章があるに違いない。リチャード獅子心王みたいな」

「おお！ 僕の家のはあんまり威嚇的じゃないな、きつと。乾いた木に貧弱な炎だし」

彼は《若枝》^{サールマン}とは言いたくなかった。この子の心の中で、自分の名前が《虚偽》^{マンリンジュ}と

いう考えと結び付いてしまうことを恐れたのだ。たとえその軽口が紋章のことではないとしても。

「乾いた木って！」アレクサンドルは叫んだ。「まったく！ 君の炎を燃やし続けてあげるよ、僕が。『火は生木に限る（＝大事には時に若者の活力が必要だ）』だよ」

「君はサラマンダーみたいに炎の話をするね。知らないうちに炎の中で生きていたりして。でもそれは別の話だ」

「炎についての別の話があるんだよ。前にギリシャ語の授業で習ったんだ。エレウシスの子供の話。彼を不死にするために女神が炎の中に放り込んだっていうの」

次の日曜日の午後、六月十一日——ちょうど休暇の一か月前——、『訴訟狂』の最初の稽古が行われた。修辞学級の学生と哲学科の学生は試験準備に没頭しており、役者を選ばれるのは主として二年と三年の生徒からである。ジョルジュはレアンドル、

リュシアンはイザベルであった。後者の役の割り当ては、ジョルジュの勝利であった。彼としては、自分の役が打診されると二つ返事で同意したのだが、その後不安になっていった。イザベルを演じる者がまだ分からなかったからである。四年生には十分にきれいな顔立ちの者たちがいて、興行責任者の学監は彼らの誰にしたものか決めかねていたのであった。ジョルジュはリュシアンに立候補するよう頼み、リュシアンは受け入れた。レアンドルは、アレクサンドルがたとえわずかでも嫉妬するかもしれないような女役に向かって、たとえラシーヌの名前であっても優しい言葉を言いたくはなかった。リュシアンとなら、大したことはなるまい。さらなる笑劇になるだけだ。あの司教が温室のカップルを祝福していたとしたら、学監は芝居のそのカップルを祝福しているかもしれない。

修道女たちは、試着されたさまざまな衣装と装飾品に施すべき修正が理解できるようにになっていた。ジョルジュは、アレクサンドルが赤のプルポワンに満足していたのと同じくらい、自分の白と金の服に満足していた。彼は選べる中でいちばん金髪のかつらを選び、それからあらゆる慣習に反してイザベルには栗色のかつらを着けさせた。その時間中、彼は川で水浴びしている最中のあの子のことを考えたが、ここに引き止められていることを残念だとは思わなかった。シャワーが削られている今、ペン

テコステの月曜日は實際混亂したので、その後上級生は木曜日に水浴に行き、下級生は日曜日に行くよう定められていた。ジョルジュとアレクサンドルは、常に二人が出会った場所で水浴をすることを約束した。

木曜日の逢瀬で、彼らは休暇について話した。二人は、その三か月を再会することなく過ごすままにはしないことで同意した。二人の家族は、七月末の出発で、それぞれが海辺に行く予定であることが分かった。だが、滞在にどの場所が選ばれたのかを、二人はまだ知らなかった。できるだけ早く調べる必要がある。ジョルジュは、自分が行きたい場所に行くよう事前に両親を動かすことを保証した。去年の夏、リュシアンとアンドレが同じような計画を成功させたのなら、自分はそれをまったく同じようにやってみせる。自分が獲得する賞があれば、何だろうと拒むことができるだろうか？彼はすでに、波の真ん中で、アレクサンドルのそばにいる自分の姿を見ていた。

「そのとき」彼は言った。「僕は泳げるようになるよ——君はもう泳げるよね——で、僕らは海を遠くまで行く。それから砂浜で長いこと寝そべるんだ。太陽の下で」

「うん」アレクサンドルは奇妙な声で言った。「それで僕らは水着を交換するんだね」それで彼らの会話は終わったのだが、この台詞はジョルジュに感銘を与えた。彼は

それを書き留めたりはしなかったが、その夜ベッドで、なおもそのことを考えていた。友情の海ではなく、愛の地図の《危険な海》の方への出発点がそこにある。彼は、ド・トレンヌ神父が、リュシアンとのパジャマ交換を提案したことを思い出した。そして、まだ十三歳にもならないあの子が、同じような考えを思いつくとは！彼の想像力に影響を及ぼし、あの小さな熱狂を誘発したのは、水浴の記憶なのだろうか？あるいはまた、その中で情交を深めた暖かい温室の雰囲気によって来るのか？ローゾン神父は間違っていないかった。秘密にしていることは、厄介な事態に発展するおそれがあるものだ。

聖体の祝日の行列の間、二人の友人たちはもう合唱隊の子供でも隣どうしでさえもなかった。何て多くの行列があることか！少なくとも、今回のそれは、豊作祈願のときの行列のように免償に恵まれていた——聖クロードへの行列には、それ自体の美点しかなかったのだ。

行列は村を横断した。経路はエニシダの花の山だった。ジョルジュはその芳香を発する敷物の上をアレクサンドルが歩くのを考えることを楽しみとした。仮祭壇が何箇所か、家々の前に準備されていた。それらの家のドアは桜桃の枝や羊歯^{しだ}で覆い隠され、それを通して兎の毛皮が^{びよう}鉾で留められているのが見えた。聖水散布のとき、聖水の滴

を両手に受け、恭しくそれに口づけするために、農民たちは前に出た。老婦人たちが自分のフィッシュの上にひざまずいていた。太った男性が、背中に両手を回して立ち、このすべてをぼうっとした表情で見つめていた。

帰路、ジョルジュがそれまで聞いたうちで最も美しい騒音が鳴り響いた。下級生の舎監が彼らに『サクリス・ソレムニス』を歌わせ、同時に上級生の舎監が『ラウダ・シオン』の合図をし、その間に聖歌隊長が『パンジェ・リングア』を始めたのだ。不協和音の一瞬後、下級生は協調して『ラウダ・シオン』を取り上げ直したが、ちょうどそのとき上級生はプロザを変更したところで、聖歌隊は自分たちの曲を続けていた。当然彼らは、全員が可能な限りその曖昧な状態を引き延ばした。聖歌隊長が自分たちが歌う賛美歌で全体を統一するため、下級生の所から上級生の所へと走っている間、聖歌隊員たちはほかの二団体に協力して分裂した。

木曜日、前々回同様、その子はぼんやりしていた。ジョルジュは、まだ手相のことを考えているのかと尋ねた。

「別れる前に君に言ったことが恥ずかしくって」アレクサンドルは言った。「休暇中、水泳パンツを取り替えたりはしないよね」

ジョルジュは微笑んだ。彼は、その子が自分を取り戻せていたことを喜んだ。

「ああもう、君が大好きだよ！」彼は言った。「僕が君の提案にかなりショックを受けたのは事実だ。でも僕は、君がその意味を理解してないんじゃないかと思ったんだ」アレクサンドルもすっかりうれしくなったようだった。以前は、彼が知るべきではないことや、少なくともするべきではないことについて触れた会話は、ジョルジュに對して彼を安心させた。今、彼は、自分自身に安心した。何も彼らの友情を曇らせることはできなかった。

「僕、埋め合わせを思いついたよ」その子は再開した。「それは僕らが赤い水着を買うことだよ。ある印でそれぞれを区別するんだ——例えば、刺繍された花で——でなければ、君のみたいにイニシャルで」

「赤い水着とは素晴らしい！ それってレスラーのユニフォームじゃないか。それにしても、君の言うイニシャルに君が気付いたことには驚いた。あれは同系色だし」

「君のことなら、僕は何だって気付く。毎回逢い引きの前、僕は、君が赤いネクタイを着けているのが青いシャツなのか、それとも白なのか、ベージュなのか、ピンクなのか、灰色なのかを賭けて楽しんでるんだ——僕はそれを全部覚えてる。僕は君の青いシャツが好きだよ。君にいちばんよく似合うのはそれだから」

「そして君にも、ね」ジョルジュは言った。「あの小さな青の水泳パンツ以上に君に似合うものはない」

アレクサンドルは唇に指を当て、沈黙の身振りをした。

「しいっ！」彼は言った。

日曜日、新しい兼務があった。学長の誕生日と聖心の祝日を同時に祝うことになったのだ。この祝典の重複は玉突き衝突の結果である。学長はジャンという名で、誕生日は二十四日、それは土曜日に当たったが、金曜日に当たっていた聖心の盛儀とともに翌日に延期されたのである。そのうえ、学長の誕生日に伝統として確立されている大規模散歩は、次の木曜日に延期された。学長が絡む場合は、多少の煩雑さが付きものののだ。

上級生の自習室では、規定に従い、哲学科の生徒が今後の抱負を、新年と同じように発表した。彼は生徒たちに、前駆授洗者の出生の象徴である内面の炎と光を願うことで応えた。その後、たぶん同じことを聞き、言うために、彼は下級生の方へ行った。ジョルジュは、学長が昨日の朝行った宗教的天文学の小講義のことを考えていた。

聖ヨハネの日の厳密な定義のためのものである。その祝日は太陽の年間軌道の最大高

度の日と記されている。その日から再び高度は落ち始める。同じように、聖ヨハネは救世主について話しながら言った。「その人は大きくならねばならず、私は小さくならねばならない」実際に、その聖人の誕生が序章となったイエスの降誕は、太陽が再び昇り始める時代の幕開けとなったのであった。

「僕の太陽、僕の救世主もまた」ジョルジュは独りごちた。「クリスマスの時期に我が地平に降臨したのだが、その者は決して滅ぶことはないだろう」

聖心の行列の間、彼は自分の本の先唱句の中に、自分に関係しそうな次の言葉を読み取った。「しるしのようにそなたの心に、しるしのようにそなたの腕に、私を置いてください」

あの子と自分は、不滅のしるしを封印した。それはあの最愛の君の詩の刻印ではない。それは、血の滴で二人の魂を交わし合うために腕に付けた、小さな傷だった。

ジョルジュにはすべてが好ましく思われた。彼はもうどんな危険も想像しなかった。休暇の展望と心の充実、障害を取るに足りないものにした。アカデミーに行く途中、彼は下級生の自習室に沿って歩き、ある開いた窓の前でわざと立ち止まった。アレクサンドルを見つめる。舎監の存在が、その子が微笑むことを妨げた。ローゾン神父や、特にド・トレヌヌ神父のせいで、説教台の高みにいたジョルジュがそれを妨げられた

ように。光線が自習室に差し込み、彼の金髪に愛撫を注いでいた。それはもはや、冬の夜、曇りガラス越しにジョルジュがこっそりその子を凝視した時間でも、最初の手紙を受け取ったばかりのとき、週ごとの家への手紙の中で、自分の自習室に差し込んでいた陽光を高揚した文体で書いた時間でもなかった。今彼は、このコレージュでさえ、アレクサンドルの手紙を隠れずに読める自宅にいたときと同じくらい、自分が自由だと思えた。二人の始まりのとき、その友情を照らしていたのは、二月の弱々しい太陽だった。だがそれは、この夏の最初の日曜日、熟した果実のように金色に輝いていた。修道会でも、ジョルジュは大胆さを失わなかった。彼は自分が、『ポリュークト』五幕の後よりもずっと情熱的だと感じていた。そして、ド・トレヌヌ神父に対する勝利は、ローゾン神父を高慢だと彼に判断させた。いつもの場所にとどまる代わりに、彼はアレクサンドルのすぐ後ろ、四年生の修道会員たちと一緒に場所にいるのである。皆がひざまずく間、彼は本を開いて、その子の両脚の上に写真を落とした。その子は振り向いたが、ジョルジュを見て、それを拾い上げることはあえてしなかった。勇気が反対陣営に移ったのだ。ジョルジュは身を屈めつつ、豊作祈願のときに愛撫したそのふくらはぎをつねった。

大規模散歩は、その名に恥じなかった。それは一日中続き、その間に二つの学年境界は結合状態となった。朝早くからコレージュを離れ、昼食とおやつを持って行き、日暮れ時まで帰らない。昨年と同じように、聖クロードから数キロ地点、『訴訟狂』でダンダン役を務める、二学年のある生徒の家の大邸宅まで行くことになっていた。リュシアンは、そこで受けたもてなしをかなり高く評価したと言ったが、それは大庭園のためでも城のためでもなく、アンドレとまる一時間を過ごした庭師の小屋のためだった。もっとも、彼は少しばかりタバコを吸いすぎたため、気分が悪くなってしまったのだが。

「あそこは」彼はジョルジュに言った。「監視が届きにくいのだ。今度は君がそいつを利用する番だ。君はあの小屋で伝統に回帰する。温室でそうしたのに続いてね」

上級生と下級生は、校門では一緒になったが、違う道を行った。ジョルジュとアレクサンドルは歓びのサインを交わし合った。二人の逢瀬を告げるものである。何て輝かしい日なんだろう！ 完璧なものになりそうだ。ジョルジュは喜び勇んで歩いた。この地上に足を置く者の中で、自分よりも幸福な者などいないと思われた。

その後生徒たちは、山をよじ登る狭い小道で列を形成した。滝が渦巻く頂上では、その水しぶきが彼らを涼ませた。ジョルジュはこの周辺にはまだ来たことがなかった。

あらゆるものが彼を魅了した。はるか向こうには、ローマ時代の道の遺跡である広大な敷石が、広い道にまで通じている。下級生たちはそこを通り、もっと規律正しく到着することになっている。ジョルジュはその道を踏破した古代の人々のことを思った。それに、たぶん自分と同じような者たちの中にいるある者のこと。それは自分 wait している友に再会しようとしている友である。ポンペイで、待ち切れない思いを碑文に残した者のような。その道が、古代からアレクサンドルの方へと自分を運ぶよう運命づけられているように思われた。綿畑がそれを縁取っている。この地域用の独特の畑で、今向かっている城の主たちによって工夫改変されたものである。皆、風に押されたふわふわの綿^{わた}莢の上を歩いていた。

「ローマに続いて、今度はエジプトだ」ジョルジュはリュシアンに言った。「僕らはいろんな旅をする」

「エジプトのあれは忘れてないか？」

「うん。その小屋で吸うけれど、気分が悪くならないことを願うよ」

彼らはとうとうコナラの通りに到着した。その端に、この散歩の終点である城がそびえていた。その壮大な建造物に対しジョルジュはどんな言葉も見いだせず、それは休暇の一部を過ごしに行く家庭的な城をほとんど連想させなかった。「城と言っても

いろいろある」彼は思った。「いろいろなキスがあるように、その他……いろいろなものがあるように……」たくさんの窓が壁で塞がれていた。それは税金を減らすためだと言われている。外付き階段の前に集まった集団は、学長と主人たちが祝いの言葉を言い合うのを見物した。彼らのそばで、その家の息子がそっくり返っていた。

遠くの、松林の中にある例の小屋を指し示すため、リュシアンはジョルジュを連れて行った。

「あそこだ！」彼は言った。

そして、彼がその言葉に伴わせた仰々しい身振りに、彼らは互いに笑い合った。

数分後、遅れて下級生がやって来た。学友たちに囲まれた二つの集団のリーダーは、いろいろな競争を立案するためにすぐに相談を始めた。袋競争、卵競争、ハサミ跳び競争その他についての彼らの協議を聞いている間、ジョルジュはアレクサンドルのそばに滑り寄り、そっと手を握った。討議の喧噪にあって、彼は耳元で言った。

「どの競争にも参加しないで。昼食の後、競技が始まるとき、距離を置いて僕に付いて来るんだ」

彼は昼食が終わるのが待ち遠しかった。だがそれは全然終わらないのだった。城主はアイス・コーヒーを振る舞うほど親切だった。たぶんそれは、さらなる窓の壁塞ぎ

を彼らに強要したであろう。あるグループの真ん中で、会計係が、その年に聖クロードで食べられたものすべての統計を伝えていた。これは何トンもの量で、あれは何トンで……。しかしながら、そのうち皆大通りに沿って座りに行った。

ジョルジュはアレクサンドルに合図した。首を回すことなく、彼は目標へとまっすぐ早足に進んで行った。それから止まり、木に隠れ、慎重に注視した。その子が近づいたとき、彼は叫んだ。「小屋へ！」彼は木から木へと再び逃げ、小さな建物へと侵入した。一瞬後にアレクサンドルが入って来た。ジョルジュは、彼が来る物音さえ聞こえなかった。地面を覆う針葉が足音を和らげたのである。

彼らは自分の領土を吟味した。シャッターのない小さな窓から明かりが取られていて、ひっくり返ったバケツが一つ、座る場所を提供していた。彼らはそれを園芸道具とともに壁沿いに押しやり、彼らを迎え入れるために用意されたかのような藁のベッドに隣り合って横になった。二人は上着を脱いでいた。その子は半袖シャツを着ており、あの四月の儀式での小さな傷跡をジョルジュに見せた。彼はその痕跡を保ったことをとても誇っていた。彼の友の方のそれは消えてしまっていたのだ。

「休暇のことを考えると心配だよ」ジョルジュは言った。「逢えるようにするためには、連絡ができなければならぬ。それについてずいぶん考えたんだけど、方法は二つし

か思いつかない。第一は、郵便局留という方法だ」

自分の年齢でも局留郵便物を受け取れるのかどうか、アレクサンドルは尋ねた。ジョルジュはそれを知らなかった。そのうえその子は、手紙を請求しに行くのは恥ずかしいと告白した。結局のところ、そういうものは警察に監視されたりしないのだろうか？「別の抜け道は、もっと確実だよ」ジョルジュは言った。「それに、僕らが家族で滞在することを可能にする。モーリスを謀議に参加させることにするんだ。彼への宛名で、僕が君に手紙を書くことはできるように。

仕方ないじゃない？ 僕らの友情が秘密じゃなくなるのは。休暇から帰ったら、それは公然のものになっているだろう。僕らはもう、すぐ役に立ってくれる誰かに打ち明けてもいいんじゃないかな？ 安心してほしい。モーリスに言うべきことは承知している。リュシアンに言ってもいいことが分かっていたようにね。僕の手紙については、二重封筒にして、さらには君の兄貴に、それを絶対に開封しないという誓いの言葉を要求するつもりだ。彼は僕を拒むことはできない。クラスのちょっとした問題で、僕は彼の行く手を阻止したこともある——おお！ 深刻なものじゃないよ。でも結局のところ、僕は彼の命運を手中にしているんだ」

説得されるまま、アレクサンドルはその問題に対して何の関心も示さなかった。ジョ

ルジュはそれを喜んだ。虚偽の話を通してでさえ、ド・トレヌヌ神父のことをここでさらに思い出したりしたら、残念な気持ちになっていただろう。

親たちの休暇の予定は、二人の友人の直近の手紙がはっきりさせたように、残念ながら一致していなかった。アレクサンドル一家はコート・ダジュールを選び、ジョルジュ一家はバスク海岸であった。しかし、ジョルジュはそれをあまり気にしなかった。「コートに変更するために何とか奮闘してみるよ」彼は言った。「モリスは、以前よりも僕らには貴重な存在になるだろう。僕は、ほかの級友たち共々、彼に再会しなきゃならないと言うつもりだ。それはコレージュ主催の集会だってね。

終業式の日には、君の両親が最終的にどの場所に行くことに決めたのか、たぶん君は知っている。万が一まだ決めていなければ、できるだけ早く手紙で教えてほしい。それまで僕は、自分の方を未定にしておくから。とにかく、どうってことはない。僕がどこにいて、君がどこにいても、僕は君にたどり着くから」

「七月十六日の前日に、きっと君に言うことがあるよ。何だか分かる？」

「もう僕の誕生日を考えてくれるなんて、君は優しいね。僕だって九月十一日を忘れることはない。聖ヒアキントゥスの祝日。少なくとも、君はいい日に生まれたよ。僕は生まれてくるのが二十四時間早すぎた。七月十六日は僕が選んだわけじゃない。聖

俗のいろんなカレンダーによれば、その日は聖ヘリア、聖ヒラリオン、聖アラン、聖エステル、聖レイネルド、聖マリアマグダレナ・ポステル、それにカルメル山の聖母の祝日、こういうののまったただ中で——自分のを調べてみたらこうだったんだ。こんな大勢の聖者たちと一緒にだっていうのに、僕は聖アレクシウスを逃している。その人は翌日なんだよ。がっかりだ！ アレクシウスとヒアキントゥスは、互いの声を聞くのには適していないのか？」

その子はジョルジュに、引用した一連の名前の最初のものをもう一度言ってほしいと頼んだ。その後、彼は言った。

「語源学によれば、ヘリアってのは太陽だよ。それは君に教わる必要はない。で、君が教えてくれたのは、太陽がヒュアキントスの友人だったことだよ」

彼らは一瞬沈黙を保った。ジョルジュは、自分のそばに横たわっていて、今は目に入らないその子の存在を、歎びとともに味わった。二人は仰向けのまま、空を切り取る窓の方を向いた。松の枝が、その青の切れ端の上に繊細な網を織り上げていた。遠くから聞こえてくる公式競技の叫び声が、その静寂をいっそう甘美なものにするように思われた。再びアレクサンドルの、流麗で心地よい声が響いた。

「夜、ベッドで、開いた窓から星が見えるんだ。僕、星々に君のことを話すんだよ」

その言葉の響きを引き延ばしたくて、ジョルジュは返事が遅れた。ようやく彼は言った。

「共同寢室の君の場所を知らずにヴァカンスに出るわけにはいけないな。それは今年の思い出の一つになるはずだ」

アレクサンドルは、列、タオルの番号、ベッド用布団の色などを教えた。

「君は」またジョルジュが口を開いた。「来年僕らが同じ共同寢室になるのを考えたことがあるかい？　僕らが隣どうしになるチャンスはまずない。クラスごとに整列させられる以上はね。でも、君が寝ているのは見えるだろう。僕らは消灯前に微笑み合おう。乱れた髪で君が目覚めたとき、君の目は何よりもまず僕を探す。自習室では、四年生の生徒である君は僕の前にいる。君は僕が勉強するのを照らしてくれる。君の字と僕のを混ぜ合わせるために、君は使った吸い取り紙を僕にくれる。」

休憩時間、僕らはあまり話さないようにする——目立たない友人どうしている必要がある——だから、毎日手紙をやりとりするんだ。僕が朝手紙を渡して、君は夜手紙をくれる。礼拝堂では、もし声部ごとに集められるとしても、あまり遠くに離れないようにする。食堂では、デザートを取っておいてほしければ、僕に合図を送るだけでいい。たとえ先生方のそれとは違うにしてもね。僕は自分のおやつから君にあげるこ

とになる。

この季節、僕らは散歩の日に一緒に水浴びする。今度の休暇にするように。コレージュは僕らにとって永遠の休暇だ。それは、十三歳の君と十五歳の僕の楽園になるだろう」

アレクサンドルは小声で言った。

「僕、命よりも君が好きだよ」

この少年は、友情の言葉しか話していないとまだ思っているのだろうか？ ジョルジュは彼の方を向いた。目を閉じていたその子は、まるで夢から抜け出るかのようにそれを大きく見開き、再び立ち上がった。

「タバコを吸おう」彼は言った。

「僕を完全に酔わせるつもりなのかい？」

「自分の酔いを覚まそうと思って、だよ」

ジョルジュは上着のポケットからエジプト・タバコの箱を取り出した。二本のタバコに火を付け、少ししたら交換しようと提案した。アレクサンドルは微笑みながら同意した。

「悪くないね！」彼は言った。

彼はジョルジュに煙を吹きかけて楽しんだ。彼もお返しをした。それぞれが、もう一人が吹きかけてくる煙をよけようと努める。二人はこの遊びを笑い合った。

唐突に、一つの影が窓の光を遮った。それはローゾン神父の顔だった。数秒後、彼はドアを押して小屋の中に入ってきた。ジョルジュは飛び起きた。アレクサンドルはゆっくりと立ち上がった。

神父の表情には、怒りではなく苦悩と嫌悪感が浮かんでいた。手に聖務日課書を持っている——しおり代わりに指を挟んで。彼は藁を見つめた。そこには二つの肉体の痕跡が残っていた。隅でくすぶっていたタバコを足で消す——ド・トレンヌ神父のタバコで、モリスが神父の部屋に来客となったあの夜、学長がそこで見たものをよく似ている。小屋へのローゾン神父の来訪は、元舎監の部屋への学長のそれによく対応するものであった。

今、神父は、アレクサンドルとジョルジュを自分の前に引き寄せようとしているのか？ 二人の盗賊が憲兵に追いつてられるように、見苦しく？ コレージュ全員の面前で、一本の木に対して彼らをひざまずかせるだろうか？ たぶん彼は、二人に平手打ちを食らわすことから始めてもよいと考えているのだろう。だが彼は、悲しげにこの言葉を口に出したただけだった。

「不幸な子らよ！」

それまで関心がなさそうだったアレクサンドルは、不作法に嘲笑した。ジョルジュは急いで介入した。二人のあの対決の日にしたように。

「すみません」彼は言った……。

神父は身振りでそれを遮った。

「行つて互いの学友たちと合流しなさい」

二人は上着を羽織った。ジョルジュは手首を、自分の腕時計を無意識に見つめていた。三時半。それは忘れられない時間になるだろう。タバコの箱がポケットから落ちた。彼はそれをあえて拾おうとはしなかった。

その子が急ぎ足で歩き出したので、彼は引き離されるままになる方がよいと考えた。神父が付いて来るかどうかを確認しようと、ちらっと後ろを見た。戸口に、固まって動かない彼が見えた。それは、かの塩柱のようにも思われた。

アレクサンドルは、生徒たちからあまり遠くない所でジョルジュを待っていた。彼は不遜な表情で言った。

「僕らには、こんなこと全然問題ないよね」

しかしジョルジュには、今後自分たちはある者のことを考慮に入れねばならない、

そして自分たちの幸福な日々は残り少ないのだ、という予感があった。

彼らは人目を引くことなく集団に戻った。リュシアンは、ジョルジュを迎えたときに浮かべていたいたずらっぽい微笑みをたちまち失った。彼は打ちひしがれたような表情で話を聞いていたが、すぐに自分を取り戻した。

「もちろん」彼は言った。「これは不愉快な展開だ。でもまだチャンスはある、あの下級生と君には。現行犯でとっ捕まったわけだよね、ほかならぬローゾンに。あの人は君ら二人の聴罪担当者で、モティエ一家の友人でもある。あの人はすでに一度君らを救っている。最近は、さらに危機的な状況にあったモーリスのことも救った。人命救助の勲章を受けるべきだよな。僕らの誰も修道会のそれを受けてないってのにさ。

彼は君らと親交がある。彼が君らを罰さなかったことに着目してみなよ。《子羊の礼拝》の前で大げさに罪を告白することで、こいつは解決に向かうことだろう」

聖務日課書を読みながら神父が近づいてきた。おそらく使徒ペテロとパウロの生涯だ。ジョルジュは今朝読んでいた、この使徒たちのための典礼の最初の言葉を思い出した。それより先は読んでいなかったのだが。「……あなたは私を苦しめた、主よ、あなたはわたしを知っている。あなたは私がどうしているかを知っている、立っているのか座っているのか」

大規模散歩の悲しい帰還。ジョルジュはその名称の中に、もはや辛辣な皮肉を見てはいなかった。大規模散歩は、彼の人生におけるあらゆる散歩の中で最も悲惨なものになってしまっていたことだろう。

道順は交換された。綿畑の間に古代ローマの道をたどるのがアレクサンドル。列はきちんと守られなかったので、おそらく彼は考えに耽りながら一人で歩いているだろう。気を紛らわそうと打ち明け話ができる友人がいらないのだから。おそらく今日の出来事は深刻な事態だったと、結局は彼も理解したのであろう。ジョルジュと彼が、ローマやアテネと同じように永遠だと信じた友情は、風の慰みものに、ただの綿花の毛玉のようなものになってしまったのだ。

モリスは、ジョルジュとリュシアンの後ろで陽気な仲間たちとふざけていた。ジョルジュには、自分が陽気であるとは思えないだけの理由があり、それと同時にそう思えるだけの理由もまたあった。ド・トレヌヌ神父とともに彼を追い出しそうになった人間が、自分が追い出される立場にいると感じているということ。けれども、それは彼の弟と一緒にであるということ。こうした問題にはほとんど感づくこともなく、モリスはワルツの旋律を繰り返していた。

金髪の夢見る人よ、

優しく魅力ある人よ、

君が漂わせるのは

キスの香りがする雰囲気……

彼が歌詞とそれに付けられた旋律をすっかり記憶にとどめたときだった。

「まったく」彼は叫んだ。「僕らはくだらないことを暗記させられてるものだ！ 世の中にはこんな楽しいものがあるってのに。リシュパンよりいいってわけじゃないけれど、こいつには音楽がある。この夏、ワルツのレッスンを受けるんだ。それが僕の休暇中の課題になる」

「覚えてる？」ジョルジュはリュシアンに言った。「いつだったか、さんざん踊らされた神父たちに対する彼の反応をさ。僕もさ、僕も一緒に踊ってるよ」

「かわいいイワシちゃん」愛情を込めてリュシアンが言った。「君に対しては後悔の念に苛まれてるよ。あんな呪われた小屋を君に教えなければ、こんな災難は何も起こらなかったのに」

「そんなことないって！ それは松葉を掃かなかった庭師の落ち度だ。それに、温室

デートはきみのおかげだ。誰にも捕まらなかったし」

彼はリュシアンに、後悔は不要だと言うことしかできなかった。アンドレ失脚の原因が自分だったからである。彼らに貸し借りはないのだった。

聖クロードの近くで、ジョルジュは道の脇にある観葉植物に気付いた。それは聖体の祝日を思わせた。今朝すでに通り過ぎていたのだが、彼はその枝が枯れていることには気付かなかった。彼は目を上げて山の方を見た。

彼が勝利を捨てたその学び舎に、彼は敗者として再び現れた。その場所の何もかもが変わってしまったように思われた。生命感が遠ざかり、もはや石しか残っていない。コレージュは魔法の園であることをやめてしまい、アレクサンドルに予告した楽園には決してならないだろう。彼は廃墟になったその壁を見たいと思った。あの小屋にタバコが火をつけてしまえばいいと願ったように。

夕食は活気に満ちていた。学長さえ乱れた髪で、生き生きした表情をしているのだ！ジョルジュは、アンドレが追放されたあの夜よりもさらに食欲がなかった。大規模散歩が食欲をもたらさなかったのは、彼とアレクサンドルの二人だけに違いなかった。

彼は両隣のテーブルの一方に、私有地がこの日の背景として役立った、その家の生徒を見つめた。『訴訟狂』で、彼の父親役を務めた生徒である。その者は、小塔や樹

林やアイス・コーヒーや綿畑によって名声を増して戻って来た。そして、彼の家の庭師の小屋で、コレージュの最も美しい友情は非業の死を遂げたのかもしれない。

共同寝室で、リュシアンはもう一度ジョルジュを元気づけようと努めた。

「よく分からないね」彼は言った。「何でそんなに君が心配しなくちゃいけないのか。君は自分がどんな人間かを忘れてるんじゃないか？ この十二日間で君がかき集めたものを考えてみなよ。優秀賞、勤勉賞、エトセトラ・パントゥフル。神父たちは大喜びさ、受賞者名簿のトップに君のような名前があることにね。一年中、至る所で輝く君をみんな認めることになる。アカデミーで、修道会で、聖クロードの聖歌隊で、食堂の説教台で、それに舞台上で。みんな君がそのままでいることしか望まないし、君に好きなようにさせてやることしか望まないさ。でも、君は抜け目なく振る舞うべきだし、自分の有利さを利用するべきだ。君は自分が追い出されると思っている。とんでもない、僕が君の立場なら、とどまるために条件を出すだろう。」

アレクサンドルについては、ローゾン神父は彼を同じくらい大切にして、そのままにすることを強く望んでいるに違いない。三か月前、学長に彼を保証したんだから、彼はそうせざるを得ない。そのうえ彼は、この前の休暇中、家族のもとで事の改善を図らなかったかい？ そう！ 彼はそこでももう何もできないってことだよ、な！

自分が間抜けだってことを認めることになっちまう。彼が、学長の目の前で前言を撤回することも、懲罰を科させることも恐れないとしても、だ。親の方は、彼が復活祭には何もかもを改善し、三位一体の主日にはすべてを台無しにしたなんて、まず納得しないだろうからね。

そう、繰り返し言うておくが、今日の出来事は、前例にかたどり、前例に似せて起こったもので、歓談しか引き起こさないだろう。アレクサンドルと君は、聖水の風呂でもう一度白くされて出てくるのさ。勝負は、来年はもっと緊迫するだろうが、それは君たちにとっていいことだ。君たちの友情は、カップアの歓びの中では眠りに落ちるかもしれない。君たちは、常に覚醒した状態でいることを強いられるだろう。君たちは、いつも初めての頃のような気がするからだろう。僕のアンドレとの別れも同じ効果を持っていた。天は、僕ら全員を安易さに墮落することから保護したかったんだ」

ローズン神父は、自分と向き合った椅子をジョルジュに指し示した。彼はまだ気を遣っていたが、今回アレクサンドルは呼び出されなかった。神父は椅子に座った。普段なら彼は肘掛け椅子に着くのだ。

彼はしばらくの間沈黙を守っていた。初めての騒動の後、ジョルジュとコレージュ

の天使が自分の前に出頭した日のことを思い出しているのだろうか？

「私には分かりません」ついに彼は言った。「あなたを支配しているのは堕落なのか無分別なのか。昨日私が中断したちょっとしたパーティのせいで、私はあなたが今朝聖体拝領をするのを見る覚悟をほとんど持てませんでした。私は、あの不良行為を現行犯で押さえることをお許しになった神に感謝しています。これ以上の再犯を避けられるからです。分かりますか？」

彼の声は大きくなり、その音調は高圧的になった。彼は頭をまっすぐに固定し、ジョルジュをじっと見つめた。最初の言葉と最後の高圧的な音調は、一瞬彼に不遜な態度を取ってやろうかという^{げき}気を起こさせた。しかし彼は自尊心を鎮火させた。それはアレクサンドルのよりも激しやすさにおいて劣るのだ。彼はそれをローゾン神父という人間の感情の中以外の場所に置いた。この召喚に向かう途中、彼はこう繰り返していた。「もう一度策を弄すること、常に策を弄すること、スパイよりももっと」彼は、それによってド・トレヌヌ神父の攻撃を避けた返答を思い出した。同じく、モーリスを学長の取り調べから保護した、この学び舎ならではの返答である。

「僕は毎日聖体拝領をしています」彼は言った。「そして、神様の恩恵に浴した状態以外で拝領したことはありません。外見だけで僕を疑うべきではないと思います」

「疑ってはいませんよ、今はもう。私は確かな筋から知っているのですからね。ああ！神聖なものがあなたにとっては何の意味もないのだということ。外見だけなのはあなたの敬虔さです。『神様の恩恵に浴している！』などと、よくも言えたものですね。そんな表現を悪用するのはやめなさい。あなたが送っていた秘密の生活は、信仰の否定です」

「誓って言いますが」ジョルジュは確固たる調子で言った。「今学期、アレクサンドル・モティエと初めて会ったのは昨日です」

「残念なことに、アレクサンドル・モティエがついさっき、こんなことを言っていたのです。あなたと彼は、二人がいつもそうしてきたように、私のいない所でまた会うことができるだろう、と。偽りの誓いを避けるためにあなたに残された唯一の方法は、何も誓わないことです。同様に、秘跡を崇めるための唯一の方法は、今後はそれをやめてしまうことです。それを忌まわしくも繰り返してきた、その後でね。」

私の告解を受ける必要はありません。よこしまな言い逃れは不発に終わりました。もしいつか私がそれをする必要があるならば、私はあなたの良心の方向性を取り戻させましょう。あなたの将来はとても悲観的で、そこにあなたを放置するのを私が悲しんでいるということは信じてください。しかし、私は一度しかだまされません。あな

たを神の手に委ねるときには、神がお選びになった手段に則り、神があなたを照らし、しかるべきときにはあなたをお守りくださるよう、私は神に祈り続けるでしょう。

それでも、しばらくの間はあまり心配することはありません。私は学長先生にも誰にも言うつもりはないのです。にもかかわらず、もし小さなモティエとあなたが何らかの方法で関係を戻そうと努めるのなら、私があなたたち両方の家族に知らせることになるのは避けられません。もうお分かりかと思いますが、私は一つしかあなたに要求しません。来年ここに戻ってこないこと、です」

リュシアンの見解にもかかわらず、ジョルジュはその判決を予想していた。それは避けがたいもののように思われた。今回のケースは、ド・トレンヌ神父のそれと同じ性質のものである。学長は、自分の信頼を悪用し、主義に反した者のため、友情の命じるままにはならなかった。ローゾン神父ももう容赦してくれない。彼もまた自分の無念を晴らし、また神のために復讐したのだ。彼はさらに、無意識にド・トレンヌ神父の仇も討ったのである。

今やジョルジュは、コレージュから追い出される少年でしかなかった。想像したことと目の前に事実としてあるのではまったく違っていた。彼は泣いていないことに驚いていた。それでも、彼の明晰さは動揺によって弱められることはなかった。それは

同情を引くための最後の試みをするという着想をもたらしした。彼は今朝香水を付けたハンカチを取り出し、それでこれ見よがしに目を覆った。

「すみませんが」神父は言った。「泣き落としの茶番はごめんです。その涙は偽りです。あなたの言葉と同じように。あなたには、その香水しか本当のものはありません。あの高い場所で、あなたは私に自分の心の窓を開いてしまいました。そこから思い上がりや、偽善や、かなり深刻な悪徳が私には見えます。哀れな未来のド・サール侯爵よ！」

ジョルジュは拭うふりをしてから、冷静にハンカチをポケットに戻した。神父は続けた。

「この最後の数日に向けての私が決めた処分を、あなたに申し渡す仕事が残っています。先学期の終わりに、私はあなたの尊敬すべきお仲間に対し、すでにそれをしていきます。その適用がさらに厳しくなるだろうということを言う必要はありませんね。かいつまんで言えばこうです。あなたは共同体から決して離れないこと。休憩時間の間、どうかピアノにも行かないように——快い響きを味わう機会が何度か犠牲になります。が、かまいませんね。自習中、先生方を訪ねるのもいけません。もし質問があるなら、授業の後にしてください。『訴訟狂』の稽古のときも、学友たちから離れてはなりません。あなたの舎監は、あなたをもう一人で外に出さないように、という指示を受けてい

ます。あなたの自尊心と、ほんの少し私のそれとに配慮して、苦行のためにその規律を命じるようあなたから私に頼んできたのだと、彼には言っておりません。苦行という言葉を愚弄していることを、あなたにも彼にも申し訳なく思います。ついさっき、私があなたに指摘した表現の悪用にも匹敵します。しかし私は、それはタバコを吸うのを妨げることを目的としたものだ、と付け加えておきました。半分は本当のことですよね？

私はあなたに退学以外の懲罰を課さないつもりだ、と言ったように思われたかもしれませんが、しかし、罰を免除するわけにはいかないものがあります。一つは、まあ言ってみれば道徳的な処分です。言うまでもなく、それはあなたが修道会から除外されるという内容です。あそこに顔を出さないという慎みがあなたにあることを期待しますよ。もう一つは、あなたにはさらに衝撃でしょう。それはあなたの賞の一つに関することです。私は、あなたが栄冠を得るのを許すつもりはありません。聞いたところでは、宗教教育のそれについて、あなたには要求する権利があるのだそうです。おかしいことを言うにもほどがあると思いますよね。しかも、です。それは一種の冒瀆でしょうし、私はそれも阻止しなければなりません。実は、宗教教育の秘密の作文が明後日行われます。それは、この嘆かわしい事態に第三者を巻き込むことなく、物事

をあるべき状態に戻す方法を提供してくれます。あなたがなすべきは、凡庸な文章を書くことだけです——あまりわざとらしくなく——賞が取れないように。あなたが次席賞を取るにしても、それはまるで違った意味を持つことになります。それはあなたの記憶、あなたの空想、あなたの皮肉、それに——繰り返すつもりはまったくありませんが、あなたの苦行、それらに対する報酬となるのです。

私はあなたが指示を果たす様を確認するつもりです。あなたが従わなかった場合、私は学長先生に頼ることになります。あなたは直ちにコレージュを追い出され、受賞者名簿からも抹消されるでしょう。賞の一つを失うか、そのすべてを失うか、お選びなさい。もっと正確に言えば、さらなるスキャンダルを引き起こすのはお避けなさい、ということですよ。同じように、新学期に再び姿を見せて、私に刃向かうような真似もしないでください。無駄な旅になるでしょうから。今度はあなたが、ご両親に対して何か恥ずかしくない言い訳を考えてください。もしあなたが、自分はどう嘘をつけそうにないと思うなら、言うまでもなく私がご両親のご用を承ってさしあげますよ。しかし私は、これが私たちの最後の会談になることを願っています。私たちは、何もかも言い合ったのですから。

もう一言だけ。以前私たちは、楽しく読書の相談をしましたね。あなたにアモン氏

の小論をお薦めしておきましょう。題は『慎み深くあるべき二十三の理由』です」

神父は立ち上がってドアの方へと向かい、自分の面会人の前でそれを開いた。

ジョルジュは今、読書の相談すらなしでこれと同じような判決が通告されたときの、自分の以前の犠牲者たちが抱いた感情を思い知った。アンドレの不幸は彼を動転させたが、それはリュシアンと自分自身がその打撃を受ける危険性があったからである。彼はその本人を苦しめたことは、あまり気にはいなかった。続いてモーリスとド・トレンヌ神父を苦しめたことは、もはやほとんど心配しなくなっていたのである。そして、今彼は、その全員と再び一緒になった。彼は聖クロードの少年ロベスピエールなのだった。対抗者とその加担者を処刑させることから始めたが、今度は自身死刑執行が迫りつつあった。

彼は人けのない共同寝室にたどり着き、自分のベッドに身を投げ出した。考えを妨げるものは何もなかった。コレージュはひっそりと静まっていた。束縛を受ける前の、この最後の自由な時間も、自分の災厄を推し量る役に立っただけだった。

ローゾン神父は、アレクサンドルに定められた運命については何も言わなかった。選択が必要となれば、彼がためらうことはあり得ない。リュシアンが言ったように、彼は以前からのお気に入りを手放すことはあるまい——神と和解させるためにも彼を

離さないだろう。彼は二人の友人たちを絶望的に離別させるのに成功した。土曜日には太陽が聖処女に敬意を表して昇るということを全面的に信じているのに、結局のところ彼は、己の策略の迷宮にいるド・トレヌヌ神父と同じくらい、物事をはっきりと見抜いていたのだ。パリノー・アカデミーの桂冠詩人は、生命感溢れる素晴らしい詩の終了を告げたところだった。ジョルジュとアレクサンドルのそれを。その強さとその威信は、手紙のパラグラフを『私』で始める以外の方法によって明らかにされたというわけだ。この人のよさそうな目を持つ聖職者、この親切めかした聴罪担当者は、子供たちにだまされたことに気付いた人のような反応を、不信心者に嘲弄されたことに気付いた聖職者のような反応を示した。

あんなにたくさんの約束をした休暇は、孤独なものになるだろう。新学期、あの子がこの共同寝室にジョルジュを見つけることはない。それは二人が再会するはずだった場所である。修道会からの除名、ある賞の喪失、コレージュに戻らないために両親に言うべき理由。そんなものは彼にとって何だというのか？ あらゆるものが存在するのをやめてしまったかのようにだった。この世の最高の幸福には、わずかに運が足りなかっただけなのだろう。

ジョルジュは、自分が絶望感に襲われ、目に涙が溢れそうになっていると感じた。

今度は偽りのそれではない。今は真実の時だ。友情がド・トレンヌ神父によって脅かされたとき、彼は泣いたことがあった。それが消滅した今、彼は大いに泣いてもいいはずだった。ここには一人しかいない。にもかかわらず、まるで共同寝室に人が大勢いるかのように、彼は嗚咽を押し殺した。リュシアンやモーリスもそんなふうにしていた。彼はハンカチを取り出し、次にはそれを投げ捨てた。ラベンダーの香りにいらついたのだ。

自習が終わる約二十分前、彼は下に降りる決心をした。すぐに遭遇したのはリュシアンおびやの視線だった。その視線は彼を元気づけた。次に彼は、舎監が優しそうに微笑んでいるのに気付いた。この神父は間違いなく、模範生の苦行のことを考えているのだ。喫煙の無邪気な歓びを自分から断つために、この自習室を離れることを自ら禁じた者のことを。ジョルジュはその微笑みにも励まされた。ある者は、まだ自分にだまされてくれる。彼はド・トレンヌ神父のことを思い浮かべた。あの人もまた、パジャマの話の中で、苦行として虚言を強要したのだった。

リュシアンは、できるだけ早く写せるようにと、自分の課題をそつと渡してくれた。クラス的首席がラテン語翻訳を写そうとするなど、これが初めてのことだった。しかし、彼は自習時間の初めに呼び出されたので、残り十五分では訳す時間がまるで足り

なかった。あちこちでいくつか語を変えながら、彼は素早く書き写した。リュシアンは、彼の助けなしで済ますことができていた。この翻訳の典拠となった『アエネイス』の文句は、アンドレが彼に与えた文集の中の、行間に翻訳されていた。彼の秘密を暴露する準備をした夜、ジョルジュはリュシアンの数学の課題を書き写した。その卑劣な行為の報いを受けた今、彼はアンドレ自身を写すことも確かに許されていたのである。この課題の仕上げとなるはずの韻律分析を終える前に、鐘が鳴った。用紙は回収された。ジョルジュは自分の紙のいちばん上にこう書いた。「良心の指導者に自習室の外で引き止められていて、韻律分析ができませんでした」

リュシアンは、ジョルジュが共同寝室で伝えたことに憤慨した。彼は、ローゾン神父によって追い出されるがままになることなど、認めることができなかった。学長にもう一度自首して、それでどうなるかを確かめるべきである。とにかく、根本的な決定を下す役目はあの人だけのものだ。もしジョルジュがド・トレンヌ神父の消息を尋ねたら、あの人は何を言うのなんて誰にも分からないだろう？ たぶん、ローゾン神父について、あの人冷静になるだろう。ド・トレンヌ神父の特別な庇護をお願いする 때가来たってことだ。それはたぶん、近くからよりも遠くからの方が効果がある。「ド・トレンヌ神父が十月にここにいなかったのは残念だよ」リュシアンが言った。「い

れば、アンドレはまだ僕らの中にいただろうことは保証するね。ギリシャを愛しすぎる教師は、コレージュの救いの神だ。これは、生徒たちにとっての、ってことさ。彼の素晴らしい同僚たちが君に対してもう何もできないような、裏の事情に通じるだけで十分なんだ。我らがモリスがそれを証明している。アンドレはその種の話に僕にしてくれた。どこで起こったことなのかは知らないけれども。

大事なものは、挫折に落胆しないことと、脅迫に怖じ気づかないことだ。絶対に勝負を捨てちゃいけない。この前やらされたヘロドトスの翻訳の文句を思い出すんだ。『成功するには何度も試行するほかはない』君がアレクサンドルの友情を勝ち取ったのは、何度も求めたからだ。アンドレが僕の友情を勝ち取ったようにね。真の友がいれば、誰にだって、どんなものにだって立ち向かうことができる。コレージュを追い出されるかもしれない。再会の時まで、丸一年か、それ以上も待たされるかもしれない。復活祭休暇に、アンドレは僕にそういう詩を送ってくれたんだ」

明白な事実の受容と戦うためにジョルジュはリュシアンに感謝していたが、彼はすっかり確信した。昨晚の彼の恐れが正しかったことが、今日実証されたのだ。食堂でのあの子はいつもとおり輝くばかりのまなざしをしていたが、ジョルジュが同じ微笑みで返したのは重苦しい心であった。二人の間の何もかもが終わったことを、彼は

確信した。

彼が、自分はアレクサンドルよりも洞察力があると思ったとすれば、同じように、自分はリュシアンよりも知的であるとも思ったことだろう。リュシアンの友情のこもった助言は、ローゾン神父の読書相談には及ばなかった。楽天的であるべき理由は、控え目であるべきそれよりも多くはなかった。第一に、ジョルジュには、ド・トレンヌ神父について学長と話し合う資格はないということ。できるだけ前舎監の有利になるように話した後で、続けざまに彼に不利な供述をするというのか？ 多くの矛盾、卑劣さ、偽りから、どんな慈悲が期待できると？ 事を回復させるのは、脅しではないのである。

第二に、アレクサンドルと関係する自分の状況と、アンドレと関係するリュシアンのそれとの間の対応関係が、ジョルジュには一つも見えなかったこと。コレージュの外で、アンドレとリュシアンは自由に再会できる。家族どうしが知り合いで、二人はすでに一教育年度と休暇を共に過ごしているのだから。そして最後に、アンドレの離別は、彼らの関係が批判的になったわけではないということ。

ジュルジュとアレクサンドルは、互いに互いを巻き込んでしまった。別れさせられるに当たって、彼らに調停役は現れないだろう。あのルラードにもかかわらず、モー

リスはローゾン神父の支配下にあるようだ。ド・トレンヌ神父の部屋での両義性のノクテュルヌ以来、きつと彼は、何を言おうがかなりの嫌疑をかけられたことだろう。彼の手紙は、弟のそれと同じくらい見張られたのだろう。命じられたばかりの処分は、予想外のことが何も残されていないことを示していた。ついにジョルジュは、自分よりも強い者に遭遇したのである。

「七月一日——我が主イエス・キリストのいと神聖なる血の祝日。二級復唱。赤い装飾」ジョルジュにとっても同じように、いとも神聖なる血は流れて自分へと移り、彼はその代わりに自分の血を捧げたのであった。そして、彼にはその神秘的な結合の記憶しか残っていなかった。彼がすでに思い出していた聖心の行列や、リュシアンが彼を加入させた聖血の信心会と同じように。

ずっと離れた箇所で、彼はこんな文句を発見した。「子羊の血は、あなたのしるしとして役立つでしょう」別の記憶が心に浮かんできた。ド・トレンヌ神父が祭服を着るときに口にしていた、子羊の血に関わるあの祈りの記憶。ローゾン神父の部屋にあった、あの彫刻の記憶。クリスマスの子羊の記憶。

アレクサンドルの頭上の特別席で、ジョルジュの方を向きながら、彼らの過ちを正

す騎士は祈っていた。彼は通常よりも早くミサを終えた。自分の元悔悛者が、厚かましくも聖体拝領台に近づくかどうかを、おそらく見張っているのだ。ジョルジュは動かなかった。アレクサンドルも同じ命令を受けているに違いない。彼はさらに身動きしなかったからである。彼はまた抗議のために教皇に手紙を書く気でいるのだろうか？ 彼の言葉によれば、彼にとって、こんなことは全然問題ではないのだ。

最後の自習の間、いつもの土曜日のように、ジョルジュは告解に行った。自分の運を試そう、神を試そうと思ったその瞬間に、すでに心に決めていたことだ。あの小屋の事件の後、すぐにリュシアンが提案したアイディアを大胆に利用したのである。リュシアン自身は、十月六日午後十時三十分、確かに回心したのだった。ジョルジュは、六月二十九日午後三時三十分、回心することになるだろう。アレクサンドル自身も、復活祭休暇のある日、突然恩寵が自分を照らしたことをローゾン神父に話したではないか？ 各自順番に光と悔悛を経験する、というわけだ。もし恩寵に浴している状態にないならば、行動に出るべきだろう。ジョルジュはパリノーの男に改詠詩^{グレイディ}を朗唱することになる。自分に禁じられた場所で、あの神父に最後にもう一度立ち向かうのだ。聖体拝領のおかげでアレクサンドルと結ぶことになった友情は、最終的に告解

に左右されることになるだろう。秘跡は、再び追い詰められた子供たちの救援にやって来たのだ。

告解室にひざまずくと、ジョルジュは強く心を動かされた。彼は確信を持った声で言った。「神父様、どうかお聞きください」

その痛悔の態度は、これが虚勢の問題ではないということを示していた。彼は、過去の告解における故意の省略を補いたいと告げた。

彼は、この学校での最初の告解の日以来繰り返し返すことのなかった告白から始めた。

大げさなことを言いつつ、最も墮落した存在としての自画像を描いてみせた。しかし、不運が自分の恥を明らかにしたとはいえ、自分はほかの者とそれを共有したことはない——彼はアンドレが学長に話していたのと同じやり方で話した。自分が友情に求めたもの、それはまさしく自分の下劣さを忘れさせてくれる影響力であり、また純粹さであり、光明であった。彼が長々と述べた架空の罪に対して示された悔恨の情は、彼が今後は嘘がつかないことを証明していた。

要するに彼は、ド・トレヌヌ神父が期待した告解をローゾン神父に対して行ったのである。自分が有罪であると認めつつ、真剣なのだと思なされることしか自分には許されていないのだ。こんな茶番は軽蔑に値するにしても、仕方がない。こんなことを

したかったのは自分ではないのだ。それでも、彼はそれを後悔しなかった。彼は、自分が言うことをこの男に強いて聞かせ、彼の聖職者としての心の中をそれで動かそうと努め、受けるに値しない憐憫を彼に催させるというシニカルな喜びを強く感じていた。本当の悔悛者のように、自分の新しい悪巧みによって、彼は軽くなったように感じた。落ちていたように見えた坂の底で、もうすでに再び登りに転じたような気がしていたのである。彼は、自分の純粹な友情を守るために自分を汚すのが気に入った。自分は高みへ行くために身を落としたのだ。それは福音の教えであった。持ち前の傲慢さも謙虚になったように、もはや勝ち誇るようなことはなかった。

彼は細部にわたる警告や悲痛な勧告を覚悟した。しかし神父は、おもむろにこう言っただけだった。

「悔悛のため、この言葉に十五分間瞑想しましょう。『私は永遠の生を信じます』」
それから彼は、赦免の身振りをした。

翌日、宗教教育の授業で、教師は作文にこのテーマを指示した。《地上の楽園》。生徒諸君が最初の授業に出ていれば、よく分かっているだろう、と彼は微笑んで言った。彼は、うまく一杯食らわせたと思っっているに違いなかった。彼はうれしそうに手をこ

すり合わせた。ところが、全員が少なくとも大きな実のバナナの話くらいは覚えていたので、全員が同じように微笑んでいたのである。

ジョルジュは、こんな素晴らしいテーマを論じることができないことに激怒していた。バナナはともかく、それは彼が熟知しているものなのだ。劣等生を演じることを強要されるとは、何と理不尽なことか！ 自分の罪とは無関係な罰を命じられたのだ。もし彼が聖クロードにとどまるのにふさわしくないのなら、追い出されるのもいい。だがそうでないのなら、学業の領域での義務を残しておくべきだ。彼は、ある日アレクサンドルが言っていたことを思った。「僕らがお金を払っているあの人たちは……」彼は、教わること、自分の成績に報いがあることに対して金を払っている。その好成績が、思い出や、皮肉や、聖エクスペディトゥスへの支払いとなったにしても、あの聴罪担当者は、自分と関係のないことに介入した。職権濫用である。自分の王たちを操ったラ・シェーズ神父やドーベントン神父の時代だとも思っているのだろうか？ 哲学科の生徒たちがド・トレヌヌ氏の味方をするのもっともなことである。ここでは、神の名においてすべてがなされると大げさに誇張されているのだ。古代ユダヤ人ならそれもいい。彼らはエホヴァの名を寺院の外で口にすることを禁じていたのだから。

白い紙を前にして、ジョルジュは両手に頭を載せて考えた。自分はこの地上の樂園から追われている。それを我が物とした後で。聖書の庭の絵が、庭師の小屋のその記憶と混ざり合う。先生は、自分が身動きせず、戸惑い、一人だけまだ書いていないのを見て、驚いているに違いない。前回二位だった学友は、たぶん喜んでいるだろう。反抗の衝動の中、要求されていたことにもかかわらず、ジョルジュは素晴らしい作文を書いてやろうと決意した。自分はこれで首席になるだろう。年度最後のこの作文で、最初のときに首席になったのと同じように。リュシアンとの賭けに応じ、ローゾン神父にここまで挑戦するのだ。宗教教育で受賞するか、何もなしになるか。彼は作文の最初にアナトール・フランスの詩の二行を書いた。匿名の警句の体で。

幸いなるかな、四つの川の間のアダムのように、

目に入るものにその名を付けることができた者は！

それを記すと、彼は書くのをやめて再び熟考した。もし賞やアレクサンドルのために戦うのであれば、さらに進む前にはつきりさせる必要がある。自分が得たいと思う勝利は、たった一日だけのことにすぎない。それは修復できないほど将来を損なうこ

とになるだろう。前日の告解で得られたポイントは、そこで犠牲になる。今朝の礼拝堂での自分の態度は模範的で、誰も憤慨させることなく聖体拝領を遂行した。今ここ、この白黒の紙の上では、もはや謙虚さがうわべを取り繕うことはできない。だがそれは、たぶん最終的な許しの条件なのである。さらにジョルジュは、この恥辱の中にさえ、ある種の報復のようなものを感じ取っていた。自分は過ちを非難されつつ、虚偽を犯すことを命じられているのだ。

もういい！ 凡庸であることを強要されたのだから、自分に期待されているものすべての上を行ってやろうではないか。楽しんで、巧妙に、残酷に、彼は楽園を完全に大混乱に陥れようとし、ガロのように神の仕事をやり直そうとしていた。

彼はいちばん上に書いた引用をそのまま残し、下にこう付け加えた。《ル・フラン・ド・ポンピニョン》——『黄金詩集』の著者の代わりに、『聖なる詩集』の著者の名を書いたのである。川については、少なくともチグリスとユーフラテスには触れようと思った。それらは地上の楽園の地理の一部であると同時に、アレクサンドロス大王の歴史の一部をなしている。しかし彼は、王の歴史から名前を取ってくることを思いついた。彼は、ある注解学者たちが、聖書に示されたほかの二つの川とナイル川・ガンジス川を同一視したことを思い出し、四つすべてを同じように自由に考えることに

した。彼は、グラニコス川、ヒュダスぺス川、オクサス川、そしてインダス川を選んだ。先生は、その曖昧さに驚き、この愚弄的茶番の隠れた典拠である有名で魅力的な名前を思い浮かべ、アレクサンドルのことを考えざるを得なくなるだろう。

次にジョルジュは、地上の楽園を、《金と紅ざくろ石と縞瑪瑙^{しまめう}を産する》土地ではなく、黄金と乳香と没薬が存在する土地であるとした。彼はそれを東洋ではなく西洋に位置づけた。さまざまな土地の位置の考察に際し、パミール高原の代わりにゴビ砂漠を、シナの代わりに日本を、セイロンの代わりにマダガスカルを、メソポタミアの代わりにアビシニアを、ペルーの代わりにメキシコを挙げた。あるドイツ人の天文学者が、北極のためにこのテーマを選んだことを忘れていなかったのも、彼は南極を選んだ。最終的に彼は、地上の楽園を単なる寓話と見る教会の神父たちがその着想を得た聖パウロのテキストを、聖ペトロの作であるとし、またこの問題全般に関する彼の学識豊かな祖父の論文を、フィリップ・エガリテの考察であるとした。要するに、彼は一切を書き漏らすことなく、それでいて何もかもひっくり返してみせたのである。

善悪を知る知恵の木が残っている。ジョルジュは雑記帳にこう書いて楽しんだ。「ムサ・パラディシアカ」。彼は大きな中括弧を書いて、自分が知っている多少なりとも奇妙な木の名前を次々と下に書き込んだ。シロヤマモモ、パンノキ、シアーバターノ

キ、レースパーク、ヤシの新芽、クロハガシワ、サッサfras、ココヤシ、つまりは大きな果実の木だが——実際、アダムが齧^かったにしては少々堅すぎる外皮の果実を付ける。ジョルジュは蛇が巻き付いたココヤシを描いた。彼はその木を誘惑の木にしたかったが、その冗談は無謀すぎると思われた。外来種からは離れ、彼は一瞬セイヨウカリンを選ぼうかと思った。が、やはりそれも断念した。セイヨウカリンは大きな果物ではないし、そのうえ藁の上でしか熟さないのだ。彼は木にはまったく触れなかった。その方がずっといいだろう。

今、彼は零点になることを確信し、そのような成績は、まるで最高の得点を確信したのとほとんど同じくらい、取る前から彼を魅了した。彼は、この作文の結果が公表されない予定になっていることを残念に思った。最下位の授与を聞き、みんなの前でこの転落で年を終えることを楽しみにできたのに。この文章を教室で読み上げられてもみたかった。それはギャラリを沸かせただろうに。

彼は、ローゾン神父にそれが伝えられることはほとんど望まなかった。あの人は、この間違いの中に、実は少しばかり過剰なわざとらしさがあるとは思わないだろう。もちろん、なるようにしかならない。だが、神父がその文章を読みたがることは、ほばないだろう——それが失敗作であると知られるだけで十分だ——読んだとし

て、ジョルジュがそこに撒き散らした塩に気付くことも、ほぼない。あの人は、ジョルジュとアレクサンドルの物語のすべてを知っているわけではない。アレクサンドロス大王の暗示は、もう一人のアレクサンドロス、つまりアレクサンドルについて、彼に何も知らせることはない。彼は足を濡らさずにグラニコス川を渡るだろう。

休憩時間の間、ジョルジュは学友たちに、わざと無意味な作文を提出したと話した。あの宗教教育の賞なんてうんざりだからだ。あんなものは将来神学生になる者の役に立つだけだ。もしそんな栄冠に飾られて帰郷したら、リセの友人たちにこっぴどくからかわれるだろう。それでは栄冠ではなくて剃髪だ。それに、自分にはそれなしでも十分な賞がある。太陽王のように、自分のコレクションを積み上げるのを抑制したのだ。皆、彼を称賛した。リュシアンさえ実に素晴らしいと評価した。

「ほら、ほかの奴らの目に称賛が浮かんでるぜ」彼は言った。「舎監を感化した自習室退出禁止みたいだね。結局のところ、ローゾン神父と君は、友人のハウスに同じホロスコープ・サインを持っているに違いない」

「ああ！ 友人の小屋じゃなくてね。いずれにしても、破門制裁人みたいに告解から閉め出されなかったときから、僕は君が間違っていなかったと思えるようになった。背教者が教会の懷に帰るってのは何て簡単なんだ！ それにしても、アレクサンドル

は何で僕の戦術に倣わなかったんだ？ 彼が聖体拝領を控え続けているということは、告解の通過を拒んでいるってことだ。たぶん、今度もまた犯してもいない罪なんか告白したくないんだ。彼に生真面目さがもう少し不足していれば、きっともう何もかも解決していたんだろう。でも、どうなんだろう？ 彼の抵抗は、僕らの事例をさらに興味深い状態にしているよね。僕らが演じている寓話の中に二人の放蕩息子がいて、ここまでで一人だけ帰還しているわけさ」

アカデミーは、その最後の会合をその日に開いた。（実は、次の日曜日は休暇の前々日で、学長によって説かれる年度末の短い静修がその晩に行われる予定だったからである。）哲学科と修辞学級の学生たちはバカロレアに行っており、会員たちは彼らのために祈るよう依頼された。彼らの不在のおかげで、ジョルジュはばね入りの肘掛け椅子の名誉を篡奪^{さんだつ}できた。学長は、驚くことを取っておいた、と表明した。聖体拝領に捧げられたボシュエの詩のことです。ボシュエは、幸いにも私と同じように詩人でしたから。私は、休暇中に開かれる予定の国際聖体大会のために用意していたレポートの中に、その抜粋を引用するつもりなのです。この機会に乗じて、新学期まで聖体の務めを誰よりもよく遵守するように。彼はこうアカデミー会員に勧告した。

その《休暇》と《新学期》という言葉が、ジョルジュには奇妙なものに感じられた。

それらが自分に対して意味することを、彼はまだ知らないのだ。自分の悔悟に動かされたローゾン神父が、同じように驚くことを取っておいてくれていると思いたかった。快適に座れた初めての日に、聖クロードのアカデミーにさよならを言うのは残念なことだろう。彼はボッシュエの詩の一節を思い出した。これは学長のレポートに記載されるのだろうかと自問しながら。

あの人の清らかな口づけから、私の燃えるような唇に、

燃え尽きた美しい炎から、

私の傷ついた心の中に、たちまち届く

最愛の君のお姿……

この誇張表現の真ん中で最愛の君と再会するといふのも、一つの驚きであった。

ローゾン神父が修道会員たちを迎えに来たとき、彼はジョルジュに付いて来るよう合図した。ジョルジュは心の底から興奮した。彼は恐れを忘れた。しかし、礼拝堂に着くと、彼は最初の一瞥であの子がいなかったことを感知した。

ローゾン神父は、休暇中にどんな課題があるかを修道会員たちに説明した。課題は

常にあるのだ、アカデミー会員であるかのように。ジョルジュは神父に視線を固定した。彼は自分と目を合わせないようにしているように思われた。自分が受けた事実上の赦免にもかかわらず、彼はこの男が我慢ならなかった。次年度、たとえ二人の友人たちが聖クロードに再び姿を見せたとしても、最近の厳しい状況からどれほどの困難が予想されることか！ 大いなる喜びの生活の、ただ一つの障害がこの男なのだ。ジョルジュは、深淵に飲み込まれる彼を見たいと思った。その奇跡は、ド・トレヌ神父のミサの間に想像したものよりも確かに有用なことだろう。アレクサンドルと自分は自由になる。この神父は二人の秘密を明かさずに死ぬだろう。それで何もかも最善の状態になる。彼は天の楽園へと赴き、二人を地上の楽園に残す。だが彼は、しっかり生き、しっかり立っている、炎の剣の代わりにハンカチを持ち、サープリスを曲がって着た天使なのだった。ジョルジュは、彼の顔が低俗だと思った。その声は信心家ぶった退屈さで、そのしぐさの素朴ささえわざとらしいと感じられてしまう。その雄弁術は、差し向かいのときにしかぱっとしない。公衆の前では、それはカーリーノやパリノーのそれであった。ド・トレヌ神父には、もっと上品な声音や、もっと尊敬できる表情があった。

翌日、夜の自習時間の間に、ジョルジュはローゾン神父の部屋に呼び出された。

「先日」神父は言った。「あなたにはかなり厳しく当たりましたね。まず、あなたがそれに値したということ。次に、あなたに試練を課す必要があったということ。あなたの告解は、あなたの自尊心にとって耐えがたいものでしたよね。しかし同時に、あなたの魂が抱える重みはどれほど軽減されたことでしょう！ あなたは、私があなたに向けた重い叱責が行き過ぎではなかったことを、過剰なまでに証明しただけです。しかしながら、あなたにそれを強制的に認めさせることで、私はあなたに改心させるという喜びを得ることができました。

私は、放校宣告にもかかわらず、あなたが熱心に信仰的实践を再開した、その熱意に感化されたのです。私はあなたを信用することができませんでした。うまく取り繕う必要が一切なくなっただけ、それ以上私に嘘をついても得がなくなっただけ、その悪が償いようがなかったならば、あなたは偽善の仮面を失って、不道徳の虚勢を顔に出していたことでしょう。あの初めての情熱の嵐の中で、あなたが滅びる者たちの一員にはならないことを、神はお望みだったのです」

「それもあなたのおかげです、神父様」ジョルジュは言った。

「見かけに反し、あなたが持っているような魂が完全に堕落させられたというのは、私にはあり得ないことのように思われましたし、あなたのいろいろな行動には、悪辣

さに起因するものも軽率さからのものもないように思われました。誰が何と言おうと、信仰は知性の問題です。それゆえ、あなたはそれを失うことなどできなかったのです。私があなたに絶望したようなふりをしたとしたら、それはまだいくら希望を持っていたということなのです。たぶん、あなたが自分のことを知っているよりも、私の方があなたのことをよく知っていると思います」

ジョルジュは、昨日の作文にわざと失敗せよという命令には、多少の抵抗をしないわけでもなかったけれども従った、と表明するのに良いタイミングだと考えた。

「あなたがそこで受けた罰は」神父は言った。「過去の唯一の記憶となるでしょう。あなたが完全に悔悟した以上、私たちを分裂させていた問題は解決されたと見なします。従って、聖クロードへのあなたの帰還に関して下した決定を撤回します。しかし、すみませんが、それでも舎監先生に与えた指示は、残った一週間そのままにしたいと思います。それは、彼に申し立てられた称賛すべき動機の証明となるでしょう。要するに、ここで、三学年の最優秀生徒になったのに続いて、二学年の最優秀生徒になるのは、あなた次第だということですよ」

ジョルジュは礼を言った。歓喜が彼を陶然とさせた。それは確かに、自分が修道会に戻されると知ったときよりも、さらに正当なことであった。彼は、やっと自分が戻

れることを知り、またアレクサンドルが戻って来ることを少しも疑わなかった。あの子は今日、降伏したに違いない。総体的な和平を結ぶことを容認しつつ。あとはその状況を聞くだけだ。

「あなたに言うておくことがほかにもあります」神父は言葉を継いだ。「過失においてあなたに従った者は、悔悛においてはあなたの後を追うことはありませんでした。あなたも熱心に祈ってほしいと思います。私が自分のそれを彼に捧げたのと同様に。私は悩ましい。あの子がいなくなる、このコレージュにはもう戻って来ないと考える。ああ！ 入学したときの彼とはあまりにも違うのです」

ジョルジュは心臓の真ん中を撃ち抜かれた。それでも彼は冷静さを振り絞り、尋ねた。「神父様、自分が許された過ちのせいで年下の仲間が追い出されることについて、僕は自分を責めるべきでしょうか？」

「私はあなたの良心の咎めを感じ入りましたが、それが後悔を少しも押し隠すことがないようになさい！ そのような年下の仲間を惜しむ理由は、あなたにはありません。彼が救済活動に反して行っている抵抗は、あなた自身も危機に陥れるおそれがあります。そういうわけですから、私は彼を犠牲にするのに躊躇はありません。あなたたち二人の間の友情に、もはや可能性はないのです。それはすでにただあまりに激しすぎ、

大きな警戒を必要としたのです。あなたがその中で、それを育んだ状況は、永遠に損なわれてしまいました。あなたが逃れ得た深淵の底に、その残骸を置いていくことです」

会談は終わったということをはっきり示すためにローゾン神父は立ち上がったが、ジョルジュは無言で、打ちひしがれて自分の席に座ったままだった。神父は、彼の苦悩を許し、それを浄化したかったのだろうか？ 彼の方に身を屈め、その髪に優しくキスをしたのである。それは和解と赦しのキスであり、あの手紙事件を終えた者にはふさわしいものであった。この決定的な終結もまた、聖なるキスで閉じられたということになるのだろうか。

夕食のとき、ジョルジュは、自分の引き出しの中にあの子からの長いメッセージが入っているのを見つけた。懐中電灯でそれを読みたくて、彼は共同寝室に行くのが待ち遠しかった。そうやって読むのは、今学期では初めてのことになるだろう。シートの下で、彼はやっとその文章を楽しんだ。

ジョルジュへ

復活祭休暇と同じです。僕は君に手紙を書くことを心に誓い、そして書いています。でもそれは簡単なことではありません。僕らはきつい監視下にあるのです。

いずれにしろ、最後まで頑張り抜かなければなりません。君はまた葦あしを装いましたよね——その点、君はすごいと思いますが、僕の方は君のようにはできないでしょう

——でも、僕がオークよりも強靱きうゐに持ちこたえることを、君は信じてくれてかまいません。ローズンは僕を服従させるつもりで、モリスに起こった問題のせいで——たぶん君が話したがっていたことです——僕が聖クロードに戻ることはない、と宣告しました。さらに彼は、劇での僕の小姓役を剥奪してしまいました。間もなく僕らは、僕らのための僕らの劇を、彼に向かって演じることになるでしょう。そしてそれは、彼を僕らの物語から取り除くことになるでしょう。彼はものをよく知っているけれども——それでも僕は、正々堂々と彼に立ち向かうことができます——、僕らが決して離れないと誓ったことは知りません。彼にそれを知らせるときが来たのです。僕らを別れさせると決められた以上、僕らは逃げて、永遠に一緒になりましょう。何て素晴らしいのでしょうか！ 永遠に！ 永遠に、あのすべての人たちから遠くへ。永遠に、血で結び付く。永遠に、君に繰り返す。

永遠に。

P・S——ここからよりも、それぞれの自宅から逃げる方が簡単でしょう。

ジョルジュは歓喜の驚きで目がくらむほどだった。今、彼は自分の幸福を疑う必要はなかった。彼はその手紙に、ウエルギリウスの本の中で最初の手紙を読み、その後それに接吻したときよりも、さらに熱烈に接吻した。彼は隠れ場所から抜け出した。

彼はリュシアンが眠り込んでいるのを残念に思った。舎監が彼らの近辺に長居したため、親愛なる隣人は眠気に負けたのだ。ジョルジュはこの素晴らしい知らせを彼に言いたかった。確かにまさしく素晴らしい知らせであり、再生された彼の宗教の福音書であった。彼の救世主である者は、もう一度解放の言葉を、今度は彼に向かって叫んだのである。「私に続くためにはすべてと別れなければならない」ジョルジュが食堂の説教台で読んだ教えは、そういうものではなかったか？最愛の君に好かれるためには、皆苦しむのだろうか？そしてリュシアンもまた、真の友と一緒になら何にも立ち向かうことができる、と言っていなかっただろうか？

なるほど、アンドレ事件のために逃げることを考えたあの日以来、ジョルジュは同じ考えを抱くことはなかったのだが、あのときは自宅に逃げるという問題だったのであって、自宅から逃げるということではなかった。彼は事態が深刻であることを認識したが、この解決法の選択は、アレクサンドル同様自分も選ぶほかはないものではないか？

自分の告解によるよりもはるかに、このメッセージによって、彼は自分が大きな重荷を軽減されたように感じた。未知のことを前にして、彼はもはや一人ではなく、未来は彼に微笑んでいる。それはアレクサンドルと一緒に再び見いだされたのだ。彼は熱意をもってその計画に賛同した。実際上の困難は二の次のように思われた。再び主導権を取ることで、あの子はチャンスを自分たちの側へと引き戻した。彼の決定は神父のそれを無効にした。かつてはアレクサンドルをよく理解していると主張し、今夜はジョルジュをよく理解していると主張していたあの男は、自分の洞察力にふさわしい報いを受けることになるだろう。

その報酬に値したのは、むしろ彼の二重性である。彼の演説には言外の意味が含まれていた。彼は心中留保を実践し、結局のところ学長と同じように裏表があったわけだ。そう、ジョルジュに戻らないよう頼んだとき、そしてアレクサンドルの復帰を犠牲に

するように見えたとき、彼は誠実だっただろうか？ 彼は、兄が追い出されたらアレクサンドルも去るだろうということをよく知っていた。しかし、新しいコレージュで二人の友人が一緒になるのを妨げるために、彼はジョルジュをこのコレージュに引き止めようと努めたのだ。もし反逆者の一人が降伏しなかったならば、彼は二人を引き離すために何か別の方法を考案したことだろう。彼は、ド・トレンヌ神父が計画を遂行したのと同じくらい整然と自分の計画を遂行した。悔しさと、同時に熱意とが、彼を燃え立たせたに違いない。自分の大切な子を手放すことを強いられたため、同じ不幸に悩む人間を彼は欲したのだ。アレクサンドルは、彼を極めて正しく評価していた。彼は嫉妬深いと言っていたのだから。アンドレは、『尻尾を切られた狐』の寓話を伝えることだろう。

モリスに課された処置は、ジョルジュを驚かさずにはおかなかった。彼はそこにこの学び舎の益の指針となっている、老獪だが冷酷な原理の表れを見た。ド・トレンヌ神父の共犯者は、スキャンダルを最小限にするために、同時に箝口かんこうを買収するため、暫定的に救済されたにすぎなかったのだ。実際のところ、彼はたぶん誰にも真実全部は話さなかったと思われる。それでもなお、彼もまた追い出されるのだ。遅ればせながら、ではあるが。これまでも追放のやり方はたくさんあったことだろう。反

抗するというのは何という歎びだろう！

ジョルジュの熱情は翌日になっても衰えず、最初の休憩時間に早くも彼は、リュシアンとそれを共有しようと試みた。彼は枝々の隙間を通してローゾン神父の窓を見つめた。輝かしい指導者の君としては、この駆け落ちをどう思う？ 論理的に考えれば、自分はそれで死ぬだろうけれど。リュシアンは黙ってそれを聞き、それから深刻な表情でこう言った。

「ひょっとして」彼は言った。「気が狂ったのか？ 父と子と精霊に導かれるままになるのを、君はいつやめるんだ？ あの坊やが迎えに来てほしいと頼んできたら、君は行っちまうのかい？ おいおい！ 君は僕に、ローゾン神父を好きにさせているよ。彼が君を知っていると言うのは間違っちゃいないね、君。彼が心配するのもよく分かる。僕は彼を教父たちの一人、異端の懲罰者たちの一人に数えようと思う」

それから彼は、次の指摘にふさわしく、少し声のトーンを明るくして続けた。

「そもそも、君が今話したことは、想像できることではあっても実行できることじゃない。それに、人には向いていることと向いていないことがある。回心は、それを僕に教えてくれたよ。」

君らが、それでもうまく逃げられたでしょう。次の日に憲兵隊に捕まらなかったとしたら、ってことだ。お金がもうなくなって、赤いネクタイやらメダル付きの金の鎖やらを売るしかなかったとしたら、君らはどうするんだ？ ああ、別の手段に訴えるってこともあるね。農場に雇われるとか、旅芸人の車に同乗してこんなリフレインを歌うとか。

僕は二人のガキンちだよ
いつでも愛し合っている。

かわいそうなジョルジュ、ここまで貴族的な流儀を身に付けてきたのに。気を付けた方がいい。君は今、メロドラマにはまり込んじゃまっているんだ」

コレージュ全体がその言葉を支持するように思われた。かつて、ここがこれより楽しそうな雰囲気になったと感じられたことなどなかった。それでもジョルジュは、反発することと逆の解決法に固執した。それを心の中に秘めておくことを決心しつつ。彼はすでにアレクサンドルのそばにいて、永遠にその場所にいることを考えた。あの子の言葉やさっきの歌のように。彼を言い訳や冗談の犠牲にする気はない。ジョ

ルジュはリュシアンに、平凡さや卑俗さ、保守退嬰的な事なかれ主義を感じていた。アレクサンドルは気高い判断をしたのだ。彼を失望させるようなジョルジュではない。彼は答えた。

「君の言うとおりだ。僕は彼に、心が落ち着くような手紙を書くよ」

年度の課業が満足だった場合、その先生は最終授業の講義の代わりに娯楽ものの朗読をする。その週の水曜日、歴史の最後の授業があった。

その神父は宗教教育の作文について尋ねられたが、彼は、全部はできていない、まだいくつかの答案を調べただけだが、それらは満足いくものだった、と言った。秘密の作文に関することなので、一定の範囲内だが、その結果は日曜日に言うことにしよう。今日のところは、問題は楽しむことだけだ、と。

「選んだのは」彼は言った。「連休の間、健康的な気晴らしをしたいという気にさせてくれそうなテキストです。『トカゲの生態についての研究』。ド・カトルファージュ氏が書いたものです」

トカゲの生態と連結され、またジョルジュがすでに蚕の生態と緊密に結び付くことを知っていたその名前は、生徒たちの気に入った。皆、バナナの話のようなものを推

察した。トカゲは地上の樂園に属するものなのだ。

ジョルジュは、『モグラの巣における策略の一例』の方が面白いのではないかと尋ねた。彼には、アカデミー会員の資格において、自習室の本棚を探しても見つからず、その著者がコレージュの名士の一人であったような著作の存在を、よみがえらせる義務があるのだ。しかし神父は、その策略の例というのは、ここで再現するのが憚られるような自然の神秘に関することなのだ、と答えた。どこに策略が隠れているのだろうか？

ド・カトルファージュ氏が勝利を収めようとしていた。狡知さに満ちた微笑みが老神父の顔を覆っていた。彼は、鎖で耳にぶら下がっていた鼻眼鏡をかけた。しかし、読む代わりに彼は頭をのけぞらせ、なお最後の時間引き延ばしを押し付けることを楽しんだ。彼はこの教室の視界とは別の視界を想像していた。すでに休暇に入り、野原の真ん中にいて、カゴに入れた実験用マウスを——いつものように持っている。トカゲたちが彼をくすぐる。彼はロマンティックな装丁の大きな書物を書見台の上で両手でつかみ、それをペルガモンの司教が司教冠を持ち上げるのと同じくらい堂々と持ち上げた。最後に彼はその本を置き、ページを探して、完全な沈黙の中、読み始めた。

「昔の博物学者たちは、年齢がトカゲの色に及ぼす変化に混乱させられ、爬虫類のそ

の属の土地固有種を、本来よりもはるかに多く数えていた」

その文の後、神父は読むのをやめ、受けたかどうかを判断するように聴衆を見つめ、それから朗読を再開して時々注釈を付けた。実際には、フランスには次の種のトカゲしかいないことが知られている。目玉トカゲ（ホウセキカナヘビ）、緑トカゲ（ミドリカナヘビ）、ハシリトカゲ（ハシリトカゲ）、壁にいるもの（カベカナヘビ）、木の根元にいるもの（ニワカナヘビ）。

ド・カトルファージュ氏の観察は、主として緑トカゲに対して行われた。彼はそれを八か月間飼っていた。昼間は自分のシャツの下に入れ、夜は木綿でくるんでやったという。

「私のミドリカナヘビは」彼は書いている。「蜂蜜、ジャム、ミルクを特に好むが、蠅のためにはすべてを捨ててしまう。彼は音楽も好きである。私が何か楽器が演奏されている部屋に入ると、彼は即座に興奮した身振りで、私のネクタイの上にかわいらしい頭を見せにくる。床に置くと、音がやって来る地点に向かって進む。彼はフルートとフラジオレットを好むようだ。シンバルのかすかな震動音、クレセントの余韻が彼を身震いさせる一方で、大太鼓の騒音には彼は無関心なままだった……」

教室の期待は満たされた。神父が、まるでモグラを扱ったかのように、慎重から省

くと言った詳細については、皆気にしなかったようだ。緑トカゲが不意に隠れ場所に入った。最初から自制されていた笑いが、ついにどっと湧き起こった。一年中、宗教教育では皆笑わないよう努力してきたのだが、休暇直前の歴史の授業ではトカゲの生態を笑うことが許されたのである。この良き神父はたぶんそれを理解してくれ、その騒音がやむと、彼は朗読を穏やかに続けた。ところが、緑トカゲという語が出てくるたびに、彼は鼻眼鏡越しにちらりと視線を投げ、警告のつもりで中断した。健康的な気晴らしを皆あまり真剣に考えないことが、彼を苛立たせたような感触があった。

木曜朝の自習時間は、『訴訟狂』の稽古に割り当てられることになっていた。ジョルジュは、アレクサンドルの引き出しに手紙を入れることができるのであれば、その退場時しかないと踏んでいた。リュシアンには、自分ならではの説得手段であの子を落ち着かせるつもりだなどと話しながら、こんな言葉を彼は書いていたのである。

アレクサンドルへ

僕はかつてないほど君を愛している。君の勇氣は、僕に自分のそれを回復させてく

れた。僕は君のためならすべてを捨てる。君が僕のためにすべてを捨ててくれるように。休暇に入ったらすぐ、僕に出発の落ち合い場所を伝えてほしい。僕らは何日かを失うだろうが、人生全部を手に入れることになるだろう。

ジョルジュ

この手紙によって、彼は自分の衝動的な賛意を奉獻し、アレクサンドルの意志を強化した。しかし、ペンが置かれると、彼は、この素晴らしい計画は夢みたいなままと
いうわけにはいかないのではないかと自問した。わずかな反省が、リュシアンは間違っ
た判断をしていないと認めることを、彼に強要した。それにもかかわらず、彼の想像
力は、常にそこに歓びを見いだすことにこだわった。かつて、彼の家の青年貴族たち
が冒険に出発したように、自分は小姓と呼ばれる者とともに世界に向かって出発する
のだ。さらに彼は、あれほど美しい存在に、あれほど独占的な情熱を抱かせたことに、
自尊心をくすぐられた。自分が、ギリシャ人と同じように美を崇拜していることを示
すための、これ以上の機会がかつてあっただろうか？

幕間を利用して、彼はそつと姿を消した——ローゾン神父は、自分の団体の上演を
自ら監督することはなかった。幸運が、食堂に使用人が誰もいないことを求めたよう

だ。アレクサンドルの金属コップの下に手紙を置くと、ジョルジュはこれまでその引き出しの中に入れたもののことを考えた。ラベンダーの小瓶、サクランボ、二通の手紙。彼らの友情は、このように単純なものでしか作られなかったのだ。それは罪と見なされた。彼らを罪人のように共同体から追放することを強制したのが、それなのである。

午後の水浴の間、ジョルジュは一人で最初のとくと同じ場所に行った。水から上がると、彼は陽光の中に横たわった。草が小さな砂利を隠しており、それが肌に食い込んだが、彼はその感覚が嫌いではなかった。それは刺すような刺激と心地よさの混合で、彼がコレージュから持ち去ることになるだろう思い出によく似ていた。

それは彼の最後の散歩だった。何となれば、次の日曜日はこの時間にリハーサルが行われる予定だったからである。彼は青い海水パンツを穿いたアレクサンドルと再会するところを想像した。これから、自分たち二人はどこに水浴びに行くのだろうか？どこかの海やどこかの川だろうか？地上の楽園の川とマケドニア帝国の川、愛の地図の海と川、コレージュの本や紙の中に残り続けるだろうすべて。ジョルジュは両腕を上げた。自分の体と、思い出すアレクサンドルの体に、太陽の祝福を呼び寄せるように。それから彼はリズムミカルな動きでそれを下ろし、手を肩の上に押し当てた。彼は数分間そのままだった。目を閉じ、未来に自分の身を委ねつつ。

笛の音が、水上の浮かれ騒ぎと林間の夢の時間が間もなく終わることを告げた。ジョルジュは対岸に長いこと視線を投げた。学友たちの所に戻りながら、彼は歩みの前に現れたグラジオラスを踏み潰した。来年、ここにはどんな花も咲くべきではないのだ。

土曜日。《OBの集会。同窓会故人会員の思い出のためのミサ》。あのはげた司教が再来することはなかった。彼はもう十分に献身したのである。学長が状況についての説教を述べた。Ecce quam bonum……何と素晴らしく……et quam jucundum……甘美なことだろう……habitare fratres in unum!……兄弟とともに暮らすことは！ 彼がテンブル騎士団の金言を引用したのは——確かに褒め称える意味で——ド・トレヌヌ神父の思い出に捧げたのだろうか？

発言者が言う。この敬虔なる会衆は、時代の、熱に浮かされたような騒擾そうじょうのさ中に、心励まされる光景を提供してくれている。それは過ぎ去った者に比して、残っている者を目立たせ強調する。彼は次に、亡くなった昔の生徒たちを称揚した——展開がやや唐突だ——しかし、彼はすぐに今いる者たちの幸福へと話を戻した。

「思い出してください」彼は言った。「礼拝堂というあの場所を。あなた方が祈り、あなた方が数え切れないほどの聖体拝領をし、その後あなた方が敬虔な思いに耽った

あの場所のことを。思い出してください、自習室というあの場所を。時には厳しいと思った舎監の監視のもとで、あなた方があまりにも実り多い時間を過ごした場所のことを。思い出してください、休憩時間のあの中庭を。あなた方の溢れる活力や投げやりさを快い気晴らしへと誘導してくれた場所のことを。思い出してください、あなた方の誠実で純粋な友情を。あなた方の物惜しみしない心の初めての高まりを。最後に、思い出してください、あなた方の若い魂と精神の父である、先生方や指導担当者を訪ねたことを。優しさと堅固さをもって、あなた方の徳性と学業の道を照らしてください。あなたの方々のことを」

「何て『あなたの方』が多いんだ！」リュシアンが言った。

ジョルジュは、自分のコレージュでの一年を思い浮かべていた。彼は、礼拝堂だった場所、自習室だった部屋、学長だった人、舎監だった人々を回想した。アレクサンドルも自分も、OBとしてここに戻ることはない。ド・トレンヌ神父が、元舎監として戻ることがないのと同じように。ジョルジュにとっても、自分の同志と一緒に暮らすことは心地よかった。自分が彼同様に去ろうとしているのは、去ることを妨げようとされたからなのだが。

彼は、身廊に集められた男たちに注目した。彼らはそれぞれ、学長が正しいと思っ

ているのだろうか？ 実際には、たとえそれが少しも純粹なものではなかったとしても、彼らがここにいる以上、その友情は美しいものとして表現されたのだろう。それでも、おそらくジョルジュと同じ欲びを知っている者もいるのだろう。悪徳からはかけ離れ、完全に美によって息吹を与えられた欲びを。ところが、今日の彼らの顔つきには、おめでたい充足、下劣な好奇心、滑稽な虚栄心、粉飾された矜持^{きやうじ}、新しい世代に対する輕蔑的な尊大さしか読み取れなかった。

この男たちが有利になるような証言は一つしかなく、彼らはどうやらそれを忘れていたようだ。それは二階の廊下で額縁に入れられている、彼らの昔の写真である。ジョルジュは、ある者は大きな折り襟の上で髪の逆立った若々しい顔をし、またある者はとてもかわいらしく繊細で、またある者は反対にひどく厚かましそうで、さらには神秘的なまなざしを持った者もいたことを思い出した。この少年たちはもういない。彼らの顔はこの男たちの顔に取って代わってしまった。その上を生活が、醜惡さが、單調さが、ひげそりが通過した顔に。ジョルジュは今、ド・トレンヌ神父が人の顔について言っていたことを理解した。そして、自分自身の顔も、廉潔^{れんけつ}さ、純粹さに包まれた学友たち全員の顔も、好きだと感じた。まだ大人の男の顔ではないことで、彼はそれらが好きだった。彼は、アレクサンドルの顔の輝きを反射するものとして、それら

を愛していたのである。

宗教教育の授業で、神父は、この前の日曜日のある答案が、耐えがたい驚きで自分を迎えた、と明言した。

「そうなのです、皆さん」彼は言った。「あなたたちの一人が、格言を実現したのです。教皇がコンクラーヴェに入り、枢機卿が外に出る」

彼はこの格言を口にしながらジョルジュを見つめ、授業の後で関係者とそれを話し合ったとだけ付け加えた。

誰かが、トカゲの本と同じくらい愉快な滑稽さを期待して、その答案の音読を要求した。しかし、最初はそれを望んでいたジョルジュは、秘密に縛られているからと表明した神父に感謝した。同じように、一学期、アルマジロが彼の《友の肖像》を嘲笑の対象にしなかったこともうれしかった。だがあのときは、リュシアンであると思われ、正当を付けられるのではないかと危惧したからだ。今回、彼の学友たちは、あの凝りすぎた手練手管の大部分を理解できなかっただろうし、謎を解く手がかりもない状態では、彼がすべての人間をからかったのだと思ったことだろう。

退出時、神父はジョルジュを呼び止めた。野次馬たちが説教台の周囲に輪を作った

が、彼はそれを追い払った。彼はジョルジュに、あの作文の間、何が頭をよぎったのかと尋ねた。

「あの日の朝、僕はあまり調子がよくありませんでした」ジョルジュは言った。

「ひどく調子が悪かった、と言ってもよかったですよね。あなたの作文は愚にもつかないことの連続でしたから。危険な賭けだと言われたようですよ」

ジョルジュはこの言葉に驚いた。神父には全員覚醒期があるようだ。彼ははじめ、苦行のためにわざと課題に失敗したのです、と言うつもりでいたのだ——苦行、それはここでは《空疎な常套句^{じょうとうく}》だった。彼は、たくさんの美徳を前にして、ほろりとしたお人好しを想像した。実験用マウスを前にしたように。この軽喜劇は、いくらかの危険をもたらしている。そんな模範的な返事をすれば、学長にまで伝わる危険性があるし、ローゾン神父にうさんくさい美徳だと思われるおそれもある。コヤシやセイヨウカリンを伴う苦行は捨てておく必要があるのだ。先生は言葉を継いだ。

「あなたは、ある引用で素晴らしい開始部を書きました。まあ、多少うわべだけのものではあるのですが。でもその続きは、あなたにしては作文をそうとうアイロニカルなものにしています。実際、あなたの詩人が言うようには、あなたは『ものにその名を付ける』ことをほとんどしませんでした。あなたが解明できない忘却に襲われただ

けでなく、奇妙な現象によって、あなたが書いたものはすべて一種の真理の転換にもなっているのです。あなたは、規則の中に黒い服を着ることを書き、余白にこう書いた、あの修道士たちを模倣したわけです。『すなわち白』」

「恐れ入ります、神父様。僕、どうしてあんなことをしたのか分からないんです」

「あなたはただ最初の頃の授業の復習を怠っただけです。私は誰かを捕まえることを予想してはいましたが、それがあなただとは思いませんでした。」

私はそれがもたらす結果をあなたに隠すつもりはありません。あなたは、賞が一つ足りなくなるでしょう。私はそれを残念に思います。それを話し合ったあなたの指導者と同じくらいにね。でも結局、彼も私も、学長先生に相談し、おそらくあなたの月桂樹の葉の一枚を救うことにはなるでしょう」

午後の『訴訟狂』の最後の稽古は、衣装を着て行われることになっていた。皆リネン室に衣装を着に行った。『リチャード獅子心王』一座がそこから出てきて、小姓や戦士が飾りのない廊下を満たした。小姓たちは全員違う服装で、ジョルジュはその一つがアレクサンドルが描写してくれたそれであると分かった。彼は、あの子の後継者が、赤のプルポワンと白の半ズボンという奇妙な身なりで姿を見せたことがうれし

かった。コレージュは、それにふさわしい小姓を得ようとしていた。

善良なるシスターたちが衣装を調整していた。それは彼らを楽しませた。彼女たちは控え目な微笑みを作り、役者などまったく意に介していなかった。片隅では、学監が自らリュシアンの胸に詰め物をし、ラ・フォンテーヌの詩を引用していた。

だがコレージュでは少年さえ少女を演じる。

彼の近くで、パンベシュ伯爵夫人が、コルサージュを少し開き、自分の出番を待っていた。

リハーサルが終わり、皆それぞれ通常の服装に戻ると、リュシアンはシャンメレについて学監に質問した。ジョルジュはアレクサンドルの共同寝室に立ち寄るためにそれを利用した。危うくブロンドのかつらと赤いハイヒールとブローケードの服を身に付けてそこに行くところだったと思い、彼は笑った。

誰もいなかった。ジョルジュは教えられたベッドの方に進んだ。新しい映像が彼の記憶に刻み込まれた。そのベッド、そのテーブル、その小箱、その敷物。それらはほかの者たちのものと似ていたが、ほかの者のものではあり得なかった。それらには印

が付けられていた。ベッドの鉄レールに広げられた二枚のタオルにも、同じようにある番号が付されている。枕元にはピンクのパジャマが折り畳まれていた。今日、ド・トレンヌ神父の考えを抱いているのはジョルジュであった。彼はその魅力的なパジャマを持ち去りたかったが、それにキスするだけで我慢した。

役者たちは食堂でのおやつに招かれた。学友たちが合流したとき、彼らはその年の集合写真のために二つの学年が集められていたことを知った。劇団は無視されて集合写真に入れなかったわけだが、彼らには上演の日に特別な写真を撮ってもらえる権利はあった。こうして、『訴訟狂』のせいで、ジョルジュはアレクサンドルと同じ写真に入れなかったのである。ローゾン神父は、少なくともその満足感に浸ったことだろう。もっと正確に言えば、彼は後に人形の中で燃やす写真を得ることはないだろう、ということである。

一月の短い集会以来、ジョルジュは下級生たちの部屋を再訪したことはなかった。その夜、そこに彼を連れ出した年度の終わりの静修は、彼にとっては学業の終わりの静修であった。

慣例に従って、下級生は前列に集められたが、アレクサンドルは自分の場所から離れず、四列目の端にいた。あの子がジョルジュへの、花模様に囲まれた最初の手紙と、

反乱と出発の合図である最後の手紙を書いたのは、そこである。教壇の上で学長が^{すう}要の徳の話をしているが、そこで彼は逢い引きに行く許可をもらっていたのだ。この教室の壁。彼はそれをジョルジュのイメージで満たしていた。それが今は、その視界の先には世界が見えている。枢要の徳の先には生活が。

ジョルジュは始業式の静修のことを思った。同じ場所で説教を聴いたのだった。あの時期はリュシアンにしか関心がなかった。今日彼は、そのリュシアンを、ずっと大きな犠牲を要求した者のために犠牲にする。年度の最初の講演で特別な友情が問題にされていたが、それは特異な形で実を結んでいた。それでも、あの説教師に不平を言う権利があるだろうか？ おそらくアレクサンドルは、この部屋のベディメント上の若い殉教者たちのそれとは、別の名前を刻み込んだのだろう。おそらくジョルジュは、聖プラシドとは別の道を選んだのだ。彼らの心の最愛の君は、『まねび』のそれではなかった。だが、リュシアンからアレクサンドルへと、ジョルジュの友情は高まった。ローゾン神父が言っていたように、彼は純粹さの方へ、光の方へと上昇したのだ。しかし、ローゾン神父も彼自身も、そこでは何も得られなかった。

翌日の午前中、もう一度下級生の部屋で《共同授業》があった。それはもはや十月

の静修教育ではない。あれは学年ごとに別々に行われた。学長氏に偏在能力はなかった。今日の彼は、対神徳、公民道徳、「くそ」^{「くそ」}、あるいは「ちくしょうめ」^{「ちくしょうめ」}を話そうとしているのだろうか？《座天使、力天使、主天使》を？彼もまた、休暇中健康的な気晴らしへの意欲を喚起させようと、植物の徳の話をしたかもしれない。混乱を誘うことを恐れ、《葉草の徳》に言及することを避けつつ、だが。

学長氏は、徳については十分に話していた。彼は、アカデミー会員氏たちにすでに知らせていた別の話を取り置いていた。聖体大会での彼のレポートである。

「私は期待しています」彼は言った。「この報告書が、あなたたちにテーマを提供し、信心深い気持ちで、固く信仰を守りたいという欲求を生じさせることを。これがタイトルと導入部です。」

『一九……教育年度から一九……教育年度間の、聖クロード私立コレージュ（フランス）における日々の聖体拝領の生活律についての報告』

集められたカトリック教徒がイエスの聖体を賛美しているまさにこのとき、フランスの私立コレージュでの日々の聖体拝領の生活律がどのようなものであったかを提示

することは、諸氏の興味関心を引くに値するように思われる。また別の学び舎の校長方に対し、その共同体のための、あらゆる種類の恩寵が豊かに得られる生活律の導入を促す役にも立つであろう』

彼は中断し、室内を見渡した。あの歴史の先生が、トカゲの生態についての最初の文の後でそうしたように。内容や形式を熟考するよう促したのだろうか？ この少年たちが、突然カトリック教徒の称賛すべきものとして示されたことに感動したかどうかを見たかったのか、それとも、その雄弁術と呼吸によって、彼らが自分の学長をモーの驚に匹敵すると判断したかどうかを見たかったのか？

読み上げるのはやめたまま、彼はさらに打ち解けた感じで続けた。

「私が自分とあなたたちを祝福するのには、皆さん、しかるべき理由があるのです。今年、今朝のものを含めて、聖クロードでは四三九七三回の聖体拝領がありました。受賞者諸君を侮辱することなく言わせてもらえば、これは明日の空しい栄冠とは段違いの報告です」

彼は数字を完全なものにするために、メモを取り上げた。

「十月四日から十二月二十一日まで、一九八人の生徒と出席日数七十九日間の日々の

聖体拝領の平均は、一七五回でした。二学期は一八一回——《記録的な》数字です——一九三人の生徒と出席日数九十八日の平均です。最後に三学期は、一九二人の生徒と出席日数七十三日で一七〇回でした。見かけだけの減少で、これは特に、この最後の日々の最上級生の不在という事実に起因するものですし、我々は彼らの熱意をよく知っています」

彼は勝ち誇った表情で頭を上げた。彼が自分自身を榮譽に感じていることが推察された。その計算によるのと同じくらい、その聖体拝領の大部分を施したという事実によって。

「私は知りません」彼は続けた。「同じような結果を自慢できる——あえてこの言葉を使いますが——教育施設がたくさんあるものかどうか。それほど、並外れた宗教的生活がこの学び舎を支配し続けたのです。修道会や信心会に新しい会員が加わりました。より多くの募金が慈善行為で集められました。素早く抑制される若干の逸脱を除き、総じて素行は素晴らしく、そしてあなたたちの中の一人の徳行が、匿名のもと、称賛に値する献身的行為によって際立ったのです」

ジョルジュは、アカデミー選拔を公表されたときのように、公然とそれに応えることができないことを残念に思った。

「ド・トレンヌ神父の微妙な暗示だな」リュシアンはつぶやいた。「僕には、彼の災難は天使が手を下したように思えるね！ 密告者を称えよ！」

「君はよく知っているだろう」ジョルジュは抗弁した。「天使と悪魔ってのは、同じものだってことをさ」

「見てください」学長は言った。「私がその宗教的献身を思い出した人たちが試験を受けたばかりですが、その結果がどうなったかを（結果はまさに今日、私に伝えられました）。バカロレア二分野の十五人の受験者中、十二人が合格し、そのうちの一人は——あなたたちのご学友のX……ですが——《優》という評価をもらったのです。次のことを疑わないように。この成功は、何よりも、日々の聖体拝領の恒久的な恩寵状態から生じる道德的な雰囲気^{はしむ}が、有利に働いたものだということです。

私はこの神聖なる播種^{はしむ}からさらに素晴らしいことを期待しています。見る歓びが増大しています。あなたたちの中に、数多くの適性をね。しかし、そこはあまりにも微妙な点なので、私は天からのあの呼び声の方へとあなたたちの意識を少し開く以外のことを、自分に許すことができないのです」

声を弱め、彼は暗示的看過法でかなり長大な解説を行った。

ジョルジュはその低い持続音には無関心で、それよりも、特別な友情のことが問題

になったときにアンドレがリュシアンを押していたように、リュシアンが彼の足を押すことで敬意を表していた統計の方を考えていた。アンドレ・フェロンで始まり、モーリスとド・トレンヌ神父で終わった一年の、ジョルジュとアレクサンドルの年の、日々の聖体拝領の統計が公式に残っただけだ。にもかかわらず、学長はこの登場人物たちを忘れることはなかった。彼らの逸脱について話したのだから。しかし結局のところ、彼はおそらく、多くの人々への報告に比べ、こちらはさして重要なことではないと見なしているのだろう。捕まった者が若干名しかいなかったのも、ほかの者たちは無罪であると結論づけ、彼が褒め称えることに執着したその献身的行為のおかげで、かなり幸運に保護されたのだ。おそらく、聖体拝領を数える目的と同じくらい、徳性というものを信じたのだろう。またおそらく、秘跡の実践それ自身が徳であること、それ以外のことを免除するのに十分大きいことを確信したのだろう。彼は、モーの驚の、典拠の疑わしい演説や真正の詩と同じくらいの信頼をもって、それを称賛したのだ。最後に、おそらく彼は、新学期のあの説教師によって述べられた災難がいずれも起こらなかったことを確認して、安心したのであろう。燃え上がるオスチャも、突然の死も、およそ二〇〇人の生徒と約四四〇〇〇の聖体拝領の間には起こらなかったのである。

聖クロードでは別の統計が作られた。まず、リュシアンのメダル数、絵の数、免償数。

大規模散歩の日の会計係による、料理勘定書についての話。スキャンダルを引き起こすことなくジョルジュの秘密を暴くために、ド・トレンヌ神父が自習室からの退出を数えさせたこと。その後、ジョルジュさえ、あの神父が使うためのさまざまな統計を想像したものだ。今度は、彼が自分のものを確立する番だった——自分の聖体拝領数や信心会数のそれでも、首席獲得数や優秀評価が付いた宿題数のそれでもなく、手紙と逢い引きのそれである。彼は、キスのそれにおけるカトゥルスのように、思い上がってはいなかったのである。

ローゾン神父は、何かぼんやりして学長の話聞いていた。十日間を超えるアレクサンドルの拒絶が自分のせい、それが聖体拝領の数を大いに減らしていたということとを自問自答しているに違いなかった。しかし彼は、三月にアレクサンドルとジョルジュが向かい合っていた会話も思い出したに違いない。そしてその途中で、自分を傷つけるやり方で二人が日々の聖体拝領について話していたことも。

実際のところ、学長はそれほど間違っていないかった。彼が公表したこと、それは否定できない事実であり、彼は各人が心の中で理解するがままにした。彼は、同じように統計——パリの家々のそれ——を行い、《背後のそれを数えることなく》何千もあると言った、あの十八世紀のアルマナの著者のように考えているのだ。学長は背後

で起こったことには関心を持たなかった。さて！ 彼が知ったわずかなことを除けば、彼は何を知り得たのだろうか？　ここでは、皆が複数の役を演じている。どれが本物なのだろうか？　無信仰を標榜しつつ、おそらくそれを実践しない者もいただろう。またおそらく、ひどい悔恨や恐怖によって報いを受けた者もいただろう。マルクが言っていたように、突然だめになること——自分の健康や勉強を巻き添えにすることで。コレージュで自分たちのために唱えられる祈りに飽き足らず、蒙昧主義を糾弾する哲学科や修辞学級の学生たちも、試験官と向き合う前にはおそらくその一つを唱えたことだろう。宗教教育の授業では、フリーメイソンのかの偉大な指導者たちについての話があった。彼らはこっそり復活祭を祝いに行ったのである。

そう、確かに、行為の価値を評価することは、意図のそれと同じくらいたいへんな難事であった。リュシアン の免償の方がよほど容易である。意図が示されれば、それに従うだけだ。すべては決められたのだ。だが、聖クロードでは、あれほど多くの対立する利害関係の間で、どうやって自分の場所を見いだせばいいのだろうか？　先生方は、自分たちの詭弁で自ら仕事を難しくした。ド・トレヌヌ神父が曖昧な表現を利用したように、学長は意図の方向を、ローゾン神父は心中留保を、利用したのではなかったか？　さらに、行為の結果は、往々にして意図とは反対のものになった。ジョル

ジュがリュシ안의氣を引きたかったとき、彼はリュシアンを回心させることになった。誘惑されたアレクサンドルはジョルジュの純粹さを守ることになり、モーリスは己の不純さによってジョルジュを救ったのであった。

すべてが真実であると同時に虚偽であり、すべてがどちらとも言えなかった。パニユルジュの《カリマリ、カリマラ》みたいだ。誰もがその者らしくない分身を持ち、すべてが矛盾し、謎を秘めていた。説教師によれば、光の子供と闇の子供がいるのだが、それを見分けるのは極めて困難なのである。聖体の秘跡の殉教者であるタルチシオの像は、リュシ안의両親から贈られたものだ。彼がアンドレとともに、内心の悪徳と日々の聖体拝領を実に巧妙に組み合わせていたその時に。そして、台座の下引き裂かれた学長宛の手紙には、ド・トレヌ神父の名前が、ジョルジュの手で記されていた。ウェルギリウスの『牧歌』では、ジョルジュはアレクシスのそれを、ローゼン神父は聖処女のそれを記憶にとどめた。私的な雄弁家であるド・トレヌ神父は、もはや神聖な雄弁家ではない。彼のスーツケースには、コンタツの備蓄とともに、たぶんジョルジュとリュシアンのパジャマも入っているのだろう。

いかがわしさのない聖体拝領、熱心な祈り、議論の余地のない純粹さからの行為もあった。ジョルジュは最初の数日間、聖体拝領をしなかった。告解をしていなかった

からである。長い間、リュシアンとアレクサンドルは、典礼と日々の聖体拝領のすべてに参加していた。アンドレ・フェロンは、マルク・ド・ブラジャンに償われた。ド・トレンヌ神父の長話は、ローゾン神父のそれに代えられた——後者の秘密の勝利は、前者の秘密の勝利を凌駕した。

それは学業においてもそうだった。《優》評価でバカロレアに合格したばかりの修辞学級の学生は、ダンスのためだけに生きていると言っていたのと同じ人物である。彼はおそらく、ダンスよりもずっと懸命に勉強したことだろう。ジョルジュとしては、リュシアンのことだけを考えたり、アレクサンドルのことだけを考えたりといったことが相次いだのだが、そのことが、彼が可能な範囲で学年の首席になることを妨げることはなかった。

悪徳は、最終的には善行で相殺されたのである。聖体大会は知識を得る権利がある。聖クロードの生徒たちは学長をだましたが、にもかかわらず、彼は会議参加者をだましてはいないのだろう。その全員が報酬を受けたのである。

一時間の休憩時間の後、皆グループで屋根裏部屋にトランクを取りに行った。ほこりを吹き飛ばすためにその上に息を吹きかけた者がいて、皆雲の間を前進した。ジョ

ルジュははるか昔の新学期を思い出した。あのときは看護のシスターが荷物の面倒を見てくれたのだが、それらは聖クロードへの道を再びたどることはないだろう。あのとき、彼はここで新学期を迎えるだけだった。ローゾン神父がアレクサンドルのことを言っていたように、今日のジョルジュは到着したときとはかなり違っていた。彼が復活祭休暇のときに自分の中に発見した変化は、当時思っていたよりはるか遠くに彼を連れて行った。再会したこのトランクとスーツケースは、ローゾン神父の言葉にあった友情の抜け殻のようではなく、昔の生活のそれのように彼には思われた。

荷物はベッドの足元に置いておく必要があった。使用人が明日駅に運ぶことになっているのだ。車で行く生徒たちのそれには、彼らが蓋の上に誇らしく貼った《持ち出し禁止》という記入表が準備されていた。

ジョルジュは、アレクサンドルと一緒に旅することを期待して、列車で迎えに来るよう両親を説得していた。ローゾン神父がその日の混雑を避けたいと思う可能性は高い。彼は自分が後見している子に対し、こちらの両親が十分に代理になると評価するだろう。

ジョルジュの支度はどうするべきか？ 全部持って行ってしまふことが必要だろうか？ そこには、ド・トレヌ神父にもらった新しいパジャマや、新しい髪の手をブ

ロンドにすることになっていた漂白剤の小瓶が含まれる。リュシアンは注意を引かないようにするために、彼はあたかも来年戻って来るかのように振る舞うことに決めた。ジョルジュには、ずっと向こうのベッドのそばで、あれこれの物をトランクの中に詰めながら、今アレクサンドルがこんな独り言を言っているのではないかと思われた。

「ジョルジュと一緒に出発するとき、旅行鞆にこれを入れよう。これはいらない」

年度の最後の自習は、ロザリオの祈りの朗唱で始まった。舎監は十回ごとに玄義を述べた。それから彼は、列から列へと、祈りを始める生徒を指名した。その者に全員が答唱した。ジョルジュは栄えの玄義の一つが気に入った。その賛辞は、試練の道にあっても異彩を放つ生徒に寄せられるべきだ——別の状況において、ド・トレヌ神父のイメージはロザリオの苦しみの玄義についての朗読を伴ったのだったが、それを引き起こした生徒に。

その後、ジョルジュは自分の本を凝視した。それらは当然置き去りになろうとしていた。彼は、駆け落ち前にリュシアンに宛てる手紙の中で、それらを君に贈ると書くつもりだった。課題の中からは、自分のためにのみ書いたもの一つだけを保存することにした。第二の『友人の肖像』である。

彼はウェルギリウスを見ながら、アレクシスの最期が引き起こした悔しさにもかか

わらず、その作品中で感動して読んだものを思い出した。アレクサンドルの最初の手紙を開いたのがその本の間だったのだ。彼はウェルギリウスの運命を思った。最近、アルマジロはそれについて、『アエネイス』から引き出された解釈について解説していた。その日彼には、前途に何が待ち受けているのかをそれらに尋ねる考えが浮かんだ。彼は適当にその本を開いた。ページの見出しは、再び『牧歌』の第五牧歌であることを明らかにしていた。運命は左ページの上方に読み取れるに違いないと思われた。

Extinctum Nymphae crudeli funere Daphnim Flebant……

非情にも若死にしたダプニスを嘆いて、ニンフたちは……

彼は中断し、右ページの最初の二行を注視した。彼はそれをこのように訳した。

「素晴らしい大麦を託したその畝溝ではしばしば、嘆かわしい毒麦と不毛な草が支配的になる」

実際、最後では、ダプニスは死によって神になり、すでに彼の思い出について歓喜が述べられているのだ。これはアレクシスの物語よりもさらに悪いけれども、さらに立派に終わっていた。

ウェルギリウスの運命は、パンズーの巫女と一緒にしておくのがよさそうだ。

ニンフたちと、大麦の種を蒔く者は、好きなだけ泣けばよい。ジョルジュとアレクサンドルの場合は、死の問題も不作のそれもない。良き《播種》は、魂のそれ、学長の雄弁術の文彩以上のものではない。それは、アレクサンドルによって書かれたフランス語の課題に、最高のテーマを提供したものだ。またダブニスの死は、あの子が自己最高順位を取った作文の《ヘクトルの死》には匹敵しない。アレクサンドルとジョルジュは、死ぬためではなく生きるためにこの学び舎を離れようとしている。同じ神が二人を守る。テスピアの神と宇宙の神、そしてウェルギリウスよりも真実の神が。

そのときローゾン神父がドアを開け、ジョルジュに来るよう合図をした。最初の告解者、あのとき彼はジョルジュをそう呼んだのだったが、その者が彼に会うことを望んだ晩以来、彼がこのような労を執ったことはなかった。階段でのそのスータンの衣擦れの音は、何を告げているのだろうか？ たぶんジョルジュは、宗教教育の賞が自分に戻されることを伝えられようとしているのだろう。彼は動揺しなかった。アレクサンドルと自分に対しては、もはや誰も何もできないことを確信していたのだ。ところが、部屋に着いたとき、彼はその主人の顔色を見て、いささかの不安を感じた。

「ジョルジュ」神父は彼に言った——これまでファースト・ネームで呼んだことなど一度もなかったのだが——「私が誰のことを話さなければならないか、もうお分かりですね。私は、あなたの祈りのみならず、あなたの行動も必要としているのです。悪魔のような意志があなたの子を駆り立てています。彼の言葉を借りれば、自分が聖体拝領をしないのは私を喜ばせるためで、告解を拒むのは私を喜ばせないためだというのです。もし本気なら冒瀆的暴言になるでしょう。あんな若い子がそのような恥知らずな言動をするなど、前代未聞です！ 謙虚さのない純粹さとは一体何なのでしょう？ あの傲慢さは、天使たちを地獄に落とすに十分です。彼は清廉な、コレージュの天使なのに！

私は、彼があなたの態度とは正反対の態度を取るのを残念に思っていました。最終的に私に打ち明けることがなかったなら、私は彼の抵抗の理由を推察できなかったでしょう。そう、私はあなたをかなり驚かせようとしているのですよ、ジョルジュ。彼を支えているもの、それは、彼に対するあなたの感情が変わっていないという確信です。自分の初めての告白の真剣さを私に信じさせたいのでしょうか。今朝彼と話した中で、私は少し彼を邪険に扱いましたが、彼は大胆にもこう言い張ったのです。あなたが書面で繰り返し返した約束によれば、あなたはこの夏彼と再会するつもりなのだ、と。現在

の私は、あなたのことを十二分に信頼するあまり、彼の言葉を信じることはできません。今後についても、現在に劣らずそうなるでしょう。それでも私は、疑う余地のないやり方で彼に示したいのです。あなたたち二人の間の過去の過去は、完全に終焉しているということ。あの子の方の無分別な行いを防ぐためにも、これは必要な仕事なのです。そしてこの仕事は、あなたが彼からもらった手渡しの手紙や投函した手紙のすべてを、私があなたの代わりに彼に返すことができない限り、成就しません」

ジョルジュは、窓のそばにかかっている鏡で自分の顔を見た。蒼白になっている。神父は彼の動揺に気付いた。それは他日のそれよりもいっそう目立っていた。それで彼はこう付け加えた。

「この決定があなたの繊細さにとって耐えがたいものであることは分かっています。しかし、問われている利益の大きさが、あなたにそれを命じざるを得ないので。あなたがその労を惜しむとなると、私はあなたにきわめて重い責任を負わせることになるでしょう。無意味な思い出と、永遠性とを、秤はかりにかけることができますか？ この犠牲的行為は、おそらく一つの魂の救いがそれにかかっているものであり、さらにはあなたの魂をも完全に浄化することになるでしょう。砂漠で大好きなキケロの著作を持ち歩いた聖ヒエロニムスを思い出してください。眠っている間に、ある声が彼にこう

言いました。『君はキリスト教徒ではない、キケロ教徒だ』彼は過去の熱狂の名残を消滅させました。それで後に聖フィリップ・ネリは、自分の青少年期に作った非宗教的な詩を破棄しました。同様の例を見習ってください。あなたの年齢では、あまり高度なものを選ぶことはありません。あなたはきっと、新学期直後に説教師が話してくれたことを忘れてはいませんね。従ってあなたは、もう後悔することなく、私の依頼に同意することになります。私があなたの手紙を読むことはないということを、急いで付け足しておきます——私は、もう小説を読まなくなってから何年も経っているのです」

「ここにはその手紙は一つありません」ジョルジュは生気のない声で答えた。「それらは全部二学期に遡るもので、復活祭のとき、自宅に置いてきてしまいました」

「ほう！ 私は逆に今学期だと信じ込んでいました。復活祭前、あなたは手紙を受け取っていないと学長先生に断言したのですから」

彼はジョルジュをつかの間見つめた。これからは嘘は無駄だ、ということをはめかすように。アレクサンドルと彼は、それぞれのやり方でついに真実を話した。

「まあどうでもよろしい」神父は言い足した。「これ以上過去に立ち返るのはやめましょう。私はあなたの言葉を信じますし、あなたの財布を見ることを要求してあなた

を侮辱する気ありません。休暇で帰省した後、あなたはその手紙のすべてをS……の私に送ってください。書留でね。私も直ちに行動する必要があります。一日遅れば致命的なことになりかねません。それゆえ、解決がその肩にかかっている者に対し、私は厳しくあるつもりです。きちんと計算しましょう、いいですか、修道会へのあなたの入会問題のときのように。今日は十日です。あなたは十一日に出る。私が十三日に手紙を受け取っていなければ、私は翌日に聖クロードに行つてあなたを退学させるつもりです。国民の祝日の嫌な潰し方になるでしょうがね。

私がこの戒告に注いでいる形式の不足は許してください。最初のよりもはるかに重大だというのに。あなたはゲームを降りているけれど、まだ完全には終わっていません。あなたに取り憑いていた呪わしい精神は、あなたの元共犯者に、より強力に取り憑こうとしています。彼はあなたの顔を見ており、我々はそれを忘れさせねばなりません。思い切った手を打たねばならないのはその点です。私には、あなたの協力を要求する権利があります。私の精神の後継者と考えていた子の、そして、あなたのせいで、今日ではもう誰の息子でもなくなった子の問題なのです。あなたは彼の指導者から彼を剥奪したのみならず、神からも奪い取ったのですよ。あなたには、その者たちへと彼を戻す責務があるのです。彼はあまりにもあなたのものでありすぎました。と

いうよりも、あなたが彼に抱く友情が、彼に対する完全な償いをあなたに要求するのです。いつの日か、あなたはこの試練を命じたことを私に感謝するでしょう。それがもたらすだろう利益をあなたが認めるときに。そして、あの子もまたあなたに感謝するでしょう。そのとき彼は、あなたが彼を本気で愛していたことを知ることになるからです」

おやつ時間を示す鐘の音と、その少し後に続く中庭にいた生徒たちの叫び声とが、ローゾン神父の最後の言葉と響き合った。ジョルジュは部屋を出たが、学友たちと合流する気分にはなれなかった。大規模散歩の翌日のように、彼は共同寝室に向かった。自分の逆境について思いを凝らすためである。外の騒音は見知らぬ世界からやって来るようだった。最後に静寂のさ中にいたときよりも、さらに孤独になったように感じられる。彼は、砂漠で、虚無に直面している自分を想像した。今日の涙は笑うべきもののように思われた。

今は笑うべきだと感じるものももう一つあった。自分の逃亡計画である。神父の厳正な確約は、自分の立場がどれだけでもろいのかを彼に思い知らせた。あまりにも長い間だましてきた男は、すべてを知っていて、それゆえ何もかもを見越していた。もう戦っても無駄である。この子供たちは、決定的に打ち負かされたのだ。

復活祭休暇の間、アレクサンドルの周囲でなされた監視は、今度の休暇でも予防戦略が取られることを保証するものだ。離れてしまったら、ジョルジュと彼が再会することはないだろう。二人が会うのを周囲が許さないようにするには、神父が一言言うだけでよかった。二人は現体制の囚われ人だった。思ひ出の品まで奪われようとしている。ジョルジュが先に自分のものを犠牲にするのだろうか？ それを拒めば、家族に劇的事件を加えることになるが、それは何の役にも立たない。降伏することは、不幸の上に恥辱までも加えることになる。しかし、降伏しないことは許されるだろうか？ ローゾン神父の警告は、言ってみれば、ド・トレヌヌ神父のそれを思い起こさせるものだった。ジョルジュは、その一方に対しては自己防衛し切れる状態にあった。だが、他方に対しては武装解除させられたのである。再び、そして重大な状況下において、この威厳ある聖職者が、あの疑惑の聖職者が望んだものを得ることになるのだろうか？ 彼には、自分たちの敵対者に対し、財布の三度目の検査を免れ得たという乏しい満足感だけが残ることになるのかもしれない。

まだ手紙を持っていることを言うなんて、自分は何と馬鹿正直だったのだろう！ まるでローゾン神父が話していたあの責任を本気で信じたように、自分は答えたのだ。彼は、ド・トレヌヌ神父に関して学長が言っていたそれを、より安価に取引する術を

知っていた。確かに自分は悔やんでいる。だが、アレクサンドルを恨んでもいた。この破局の主要原因であることで、また年長の友の努力を無駄にしたことで、実際のところは、子供みたいに振る舞ったことで。三月の事件の後、アレクサンドルは不手際を犯した。ジョルジュとの関係が、彼が言ったのよりもさらに親密であることを、ローゾン神父に推察されるがままにした。だが、日々の聖体拝領に關してはそのとおりでた。今回彼は、自分に迷惑な愛情をかける男を怒らせることを好んだ。それが自分を守ってくれることを忘れたのだ。その聖職者がいつも祈りを唱えているだけの存在だとも思っていたのだろうか？ 勇氣を見せれば、彼を落胆させられると思ったのだろうか？ あるいはまた、そんな大胆さなど本氣にされることはなく、それを楽しんだら、だます楽しみも加えてやろう、とも思い込んだのだろうか？ その虚勢は、おそらくそうなるはずだったことを不可能にしまった。半ば無氣力に、半ば軽率に、ジョルジュがその残りを担当したのである。この有罪宣告を受けた友情は、この二人の友人たちが自ら壊したのである。驚異的なほどの巧妙さ、十分に練り上げられた計画、忍耐強い努力によってのみ、彼らはそれを守ることができたのだ。彼らは遠回しな尋問に対してそれぞれが違った態度を取ってしまった。あの小屋で並んで、それぞれがそれぞれの態度を取ったように。彼らには、反逆するための手段が、弁明す

る手段と同じくらい欠けていた。そのために二人が夢見た冒険は、現実的には夢のままでとどまっていた。

おやつの時間の終了を告げる鐘が鳴ったとき、それは自分のがらんとした心の中に弔鐘を響かせるようにジョルジュには思われた。彼は機械的に階下に降りた。

静修の最後の講演があつた。学長は休暇について述べると宣言した。それは、上級生に対して年をその話で始めたのと同じ話だった。彼は全員に対して同様にその話をして終わりにしようとしていた。

「休暇」彼は言った。「何と魅惑的な言葉でしょう！ それと同じほどあなたたちに好かれる言葉があるかどうか、私には分かりません。しかしながら、この休暇というもの、いつでもあなたたちがひどくじりじりしながら待っています、重大なもの、一年中でいちばん重大なものなのです。ここでの秘跡、学業、規律は、あなたたちが順調に道を歩めるよう一致協力します。そして、同じ方針で育まれる生徒たちの間で、私が昨日あなたたちの前で祝福したあの善良さへの競争心が、自然と確立されるのです。休暇中、あなたたちは暇になり、誰にも支配されず、秘跡をおろそかにする気持ちに引きずられるかもしれません。ある敬うべき聖職者がこう言っています。『田舎

では、それぞれの葉の陰に、学生をじっとうかがっている悪魔がいる』田舎ではそれぞれの葉の陰に、村ではすべての敷石の中に。山ではあらゆる小石や茂みの中に。海では波や砂粒の中ごとに。

休暇は学生たちの楽園です。しかし、どんな楽園にも姿を隠した蛇がいて、禁断の木の実があるのです。私は、休暇を五つの等級に区分するか、少なくとも五つの評価を与えるつもりです。学業のようにね。《最優秀》休暇、《優》休暇、《良》休暇、《可》休暇、そして《不可》休暇です」

彼は中断し、この言葉を強く際立たせるために厳しい表情を作った。

「私は良^ボしか許しません。より正確に言えば、私はあなたたちが最優秀にまで達すると思いたいのです」

メイ^ボドのために、モリスは書見台の下で膝の一撃を食らわなければならなかった。無意識のだけじゃれによって、学長氏は彼に自分の道を行くよう勧告したのである。

「あなたたちの罪を犯すまいという固い決心を援助するために」彼は続けた。「私はあなたたちに、休暇中の宿題と一緒に、休暇中の規則を身に着けさせるつもりです。それをこれから読み上げようと思います。これまであなたたちの知的な生活の維持を確実にしたのに続いて、我々はあなたたちの倫理的な生活を守るつもりです。さら

に、このささやかな要綱は、典礼祝日暦で補完されます——あなたたちの宗教的生活は、言うまでもなく、コレージュの外でも同じように続けられるのです」

してみると、学長は危険があると予測しているわけだ。彼は、聖クロード内よりも休暇についての方がより洞察力があつた。彼の要綱は、おそらく彼の統計とソネットを補完しようとしているのであろう。

ジョルジュは学友たちを眺めた。彼らが装い続けている真面目さは、少々皮肉なものだった。彼らの態度は、すでにある程度の独立心を立証していた。彼らは入念すぎるほど入念に読み上げられているその規則とは、明らかに逆方向を向いている。心の中ではそれを嘲笑しているのだ。

「……起床における怠慢は、毅然たる性質の活力を危うくします。こと同じほど早起きするのではないにしても、遅くとも七時から八時の間には起床するようになさい。少なくとも週に三回、ミサ聖祭に参加し、できればそこで聖体拝領をしてください。もちろん、日曜日と祝日のお勤めの、どちらも逃すことのないように。前の晩に告解してからです（その日の晩課に出席して、それをするのです）。

その後で、たっぷり二時間勉強をしてください。主として休暇中の宿題と、ためになる読書か教訓的な読書に割り当て、ゆめゆめ軽薄な本のために費やさないように。

食事のときは食前の祈りを忘れず、大きな声で自分に唱え、またそこにいる全員の名前も唱えなさい。食後にも感謝を捧げること。

午後は、家族かコレージュの学友か信頼できる気高いお友だちとの散歩です。教会への短い訪問がよいでしょう。そこにあなたと共にあるべき人をお連れなさい。

主任司祭様や助任司祭様たちと関係を結び続けることは不可欠です。だからといって、そのせいであなたたちの良心の指導者に定期的に手紙を書くことをおろそかにするようなことがあってはなりません。

夕食の後は早めに休みましょう。ひざまずいてお祈りするように（就寝時と起床時に、です）。ベッドの上で、ベッドの脇で。ベッドの中ではありませんよ、よろしいですね……」

向こうでは、アレクサンドルが腕を組んで、かなり確信に満ちた表情で学長先生の話聴いているようだった。こんなにたくさんの規則に従わせられる以外の休暇は、過ごしてはいけなかつた。それは三つに分類されている。宗教的生活、知的生活、倫理的生活。それに家族との散歩、良心の指導者への手紙、教会への訪問、ベッドの上あるいは脇でのお祈り付きである。そして、アレクサンドルはおそらく、ジョルジュと取り決めた休暇のことを考えているのだろう。このすべてからかけ離れた、永遠の

休暇のことを——決して過ごすことのない休暇を。

その晩、舎監はかなり早く自分の部屋へと退出し、自由が支配するままにした。彼は、自分についてのよい記憶を残したかったのだ。そのうえ彼は、自分の權威が今日で期限切れになることを知っていた。彼は水浴のときのように振る舞った。ぼーっとしているように思われる方がよいと思ったあのときのように。もし全員の声の騒音が聞き取ることが可能になったならば、各人が言うことを聞き分けることもできただろう。新鮮な空気を吸いつつ、歩いている者もいる。危うく休憩時間だと思ってしまうそう。リュシアンは枕元のテーブルに座っていた。以前、ド・トレヌ神父がそうしていたように。彼は友人の長枕に頭をもたせかけた。ジョルジュは彼にローゾン神父の決定を教えた。それらが彼の方のそれをどれほど変えてしまったかは付け加えることなく。彼は服従に甘んじると告白した。今では二人とも同意見だった。おそらく彼らは、この共同寝室で低い声で会話をしている唯一の一組になっていた。

リュシアンは、前回に引き続き物事をはっきりさせようと試みた。

「何が起こったのかという」と彼は言った。「コート・ダジュールにせよコート・ダダム^{アドム}の助骨にせよ、モティエ兄弟が休暇に行くことが禁じられたっ

てことだ。モリスが君に知らせるだろう。君が彼に手紙を書くことはできるよ。君が弟にそう言ったように。もし君が今、ローゾン神父が心を探った後で手紙を探ることを恐れているのなら、君も同じように局留のそれを準備するという手段が君とモリスには残っている。弟と違って、彼が誰かに怖じ気づくなんてことはあり得ないからね。

君がちょっとした旅行をする以上、君は騒ぎになることなくアレクサンドルと再会して、君たちは自由に話し合う。ローゾン神父は、山越え谷越え、風にも潮にも逆らって、野原越え砂浜越え、ずっと彼の跡を追うわけにはいかない。それでも彼がそこにいて、手に灌水器かんすいきを持って、至る所に隠れているあの悪魔を追い求めているならば仕方がない！ 君にもそこにいる権利はちゃんとある、再び天使になった君なら。そうえ、君は家族を口説いて安全な状況に身を置ける。それはアンドレが僕のためにしたことだ。いつもあの彼の言葉に戻っちまうな。母親たちと踊らなきゃ、ってね」

リュシアンには、つかの間ジョルジュを笑わせるという取り柄があるのだ。

「ダンスのことはともかくとして」彼は言った。「アレクサンドルの失望はすさまじいだろうね。手紙を引き渡したりしたら、彼、僕を絶対に許さないよ」

「君はそれを引き裂くことだってできるんだぜ。イザベルがレアンドルのそれを引き

裂いたみたいに。ごくろうさんってね！ まあ落ち着けて。アレクサンドルはそんなに急いで自殺したりしないよ——つらい時間はやがて過ぎ去る、それだけのとき、ほかに言うことはない。学長とのめ事で、君はほとんどあの子の意向に逆らって行動した。それでもなお、彼は君が正しかったと理解しただろう。彼は、自分たち二人が間違ったこと、つまり全人類に立ち向かうことにもう一度意地になるなんて無駄だ、ってことを理解してくれるだろう。

彼は歴史でクラス三位だから、たぶん最も偉大な指揮官たちでも敗北するってことを知らないことはない。ただ名誉の降伏で退却するべきなんだ。戦闘再開するまではね。先日、勇者ヘロドトスが僕の口を通じて君に言ったこと——『成功するには何度も試行するほかはない』——の反対のことを言うようだけれども、それが同じことだって君にもよく分かるよね。譲るのは、その埋め合わせができることを確信しているからなんだ。君が譲り、アンドレが譲り、ド・トレヌ神父が譲り、学長が譲り、ローゾン神父が譲ったのは、そのためじゃないか？ 愛しのあの子も譲った、あのかわいらしい勇敢さに逆らって。あえて聖体拝領をせず、自習室から離れず、君に手紙を書くこともしなかった（君がそれによって彼を落ち着かせると言っていた手紙に、彼は返事を書かなかった）。実際彼は、君たちの友情がデートや小さな青い花なしでもやっ

ていけると気づいている。ってことは、彼はそれがほかのことなしでもやれるってことをとくに知っているんだ。その友情は君らの小さな紙切れよりも重い題名を持っている。君らがけんかして、僕が君に、支障はないと断言したまさにあのとき、君はそれを実感したよね。大切なのは、薔薇水でも聖水でもなく、交わし合ったわずかな血なんだ」

「そういう思い出こそが、まさに僕に畏敬の念を抱かせるものだ。僕は明日、アレクサンドルに最後の手紙を渡す。事情のすべてを打ち明けるために」

「実に結構だねえ！ 彼はそこに、君が彼を愛している証拠を見るだろう。そして、すぐに逃避行にすぎるようになる。彼は、実は君が逃げたがっているんだと推察する。そして彼は、君を追いかけて来ちまうだろうな。医者の父や、侯爵の神父と宗教会議で結託した聴罪担当の神父に、ぴったり追跡されたままでね。そのとき、君らの状況が少々珍妙なものになっていないか、僕あ心配だね。学長はすでに君に警告している。子供たちと、滑稽さを恐れよって。さらに悪いことには、君ら二人とも監視付き青少年教育施設に放り込まれるかもしれない——言っておくけれど、当然、二つの違う施設に、ってことだから！ 賢明なのは、ローゾンが要求することに従うことなんだよ。確かにしばらくの間は、アレクサンドルは君がもう自分を愛してないと思うに違いな

い——君がまだ自分を愛していると信じながらも。これはとても厄介で、ひどく不愉快だけれど、どうしても必要なことなんだ」

開いた窓から、ジョルジュは七月の光る空を見ることができた。おそらくちょうど今、アレクサンドルは、星々に彼のことを話し、もうすでに外国の空を夢見て、聖クロードの夜々に別れを告げていることだろう。ジョルジュはあの子を羨んだ。その夢想と信頼を。彼らの幸福は、彼のためにはもはや存在しなかった。リュシアンは運命の変転の可能性を期待させたが、それを信じようとしても無駄だった。彼は期待するのをやめてしまっていた。ローゾン神父のイメージがいつも眼前にあるのだ。それは、その同じ場所でド・トレンヌ神父が時々曇らせてきたのよりも、アレクサンドルのイメージを情け容赦なく曇らせた。ギリシャ語翻訳のあのフレーズは限られた効力しかない。しかもリュシアンは、たび重なる試行によって成功するのなら、失敗するのも同じように試行の繰り返しの結果であると認めたばかりだ。彼は、学長が彼について称えた良識の名において、聴罪担当者によって道徳の名において取られる処置に同意したのだ。類いなき友情の代わりになるものは、もはや道徳と良識しかなかった。栄光と伝承と神々の中で始まったそれは、それゆえあまりに平凡に、あまりに悲しげに終わろうとしている。服従は、計略であることをやめて法となってしまう。それは数多

くの災害のさ中であつては、最大のそれを予防するためにも不可欠なものである。最も重い罰として、ジョルジュは卑怯者のように思われることだろう。リュシアンとド・トレンヌ神父を裏切つた後で、アレクサンドルをも裏切ることになるのだ。画竜点睛を欠くべからず。彼の下劣さへの罰は、それを強制されることであつた。

彼は自分を運命の犠牲者だと思つた。彼の友情は、宇宙の調和のように、前もつて決められた一連の法のもとに置かれている。聖ヨハネの眞の象徴が適合するのは、まさにそれである。それは太陽のように下降するが、もう再上昇することはない。彼を優遇していた神々は、必要の神に対しては自分たち自身では何もできなかった。

少なくともジョルジュは、明日アレクサンドルに手紙を書くことを思いとどまらせてくれたことをリュシアンに感謝していた。ローゾン神父の証言では、彼は、その者によつてしか支えられない存在の敗北を知ることが恥じていたらしい。ジョルジュの手紙が心を鎮める代わりにそのかしてしまつたとリュシアンが知っていたならば、もっと面倒なケースだと評価しただろう。ジョルジュが考えを反転させるなら、見捨てたことをあの子に言うために旅立ちの時間を待つていたみたいではないか？ 彼はコレージュから離れたかつた。軽蔑のまなざしではなく、優しさの微笑みを持ち去つて。彼がこのコレージュを離れることを思うのは、生活することを期待してのことだ。

ある。最初の衝撃が、実際の生活とはどういふものかを彼に教えた。彼は、自分が友を欺くことを強制されていると思った。宗教の作文で嘘を強いられるように。彼は自分の名前の語呂遊びを恐れる必要はなかった。すべての真実は虚偽のうちに終わろうとしていた。

リュシアンが言葉が脳裏に浮かんできた。「アレクサンドルは自殺したりしないよ」確かにジョルジュは誰かを死なせたことなどなかったし、ましてやアレクサンドルはなおさらだ。自分の年頃の少年が死ぬのを見たことは一度もなかったし、死についての考えは、ボシユエの調子のよい総合文と学長の瞑想録を思い出させるだけだった。自殺はと言えば、それは彼にとつては堅苦しいテーマでしかない。彼はそのテーマが語られた宗教教育の授業を思い浮かべた。書くことが許されるならば、彼はそれについても最高の作文をものしたところだった。《故意に自らの命を絶った者》は、《教会による埋葬の拒否》をもたらす七つの事例リスト中、第四番のもとに記されている。まず《異教徒、ユダヤ教徒、マホメット教徒、洗礼なしで死んだ子供》、《背教者、フリーメイソン団員》、それに《破門者》がある。第四に続いては《決闘で命を落とした者》、《彼らの死骸を火葬することを委託した者》、《明白な、公然たる罪人》。

共同寢室の全員が、定刻前にちゃんと目を覚ました。事實は、今朝の公式起床時刻がいつもより遅かった、ということだったのだが。ある生徒たちは窓に肘をついて、その日最初の太陽光を浴びていた。別の者たちはベッドに座って髪をとかしている。鼻をかみながら、その音で《ラ・マルセイエーズ》を模倣している者もいる。トランクを整理している者たちもいる。ジョルジュは、意識せず自分のそれを申し分なく仕上げていた。それは、休暇に出発するコレージュの生徒のトランクだった。永遠に、ではない出発。アレクサンドルとほかの場所で再会する可能性がない以上、彼が聖クロードに戻ることを妨げるべき理由は何もない。大規模散歩の翌日に比べ、状況はひっくり返っていた。あのときは、戻ることができると見なされていたのはアレクサンドルだけだったのだ。

瞑想はなかった。皆まっすぐに礼拝堂に行った。年度最後のミサは、最初のそれと同様赤かった。ジョルジュは、間もなく到着するはずの枢機卿がコレージュのミサをあげないことが残念だった。それなら年度にぴったりの終わりになったことだろう。もう少し赤が多くなったところだ。今日のそれは何のためのものなのだろう？ 昨日の装飾も同じように赤かった。ジョルジュは祈禱書を見た。このところそれをほとんど読んでいなかった。《七月十日、七人の殉教者兄弟。七月十一日、聖ピウス》。七兄

弟の祭式の中にたまたまこんな文が載っていた。《我々の魂は鳥刺し網の鳥のように逃げ去る。網は破け、我々は解放された》。

下級生と上級生が急いで聖体拝領をした。統計をきちんと締めくくる必要がある。唯一、アレクサンドルだけは、遠くの自分の場所にとどまっていた——彼はあらゆる網から解放されたと思っている。聖体降福式がミサに続き、『テ・デウム』の歌によって結ばれた。ジョルジュ以外の生徒たちは、おそらく最後まで先生方をだましおおせたことを神に感謝したことだろう。

祝典ホールがこれほど混雑したことはなかった。ジョルジュは両親のそばに座っていた。彼は一列目に座ったローゾン神父を見ていた。枢機卿猓下からあまり遠くない位置だ。猓下は緑色の肘掛け椅子に着いていたが、それはジョルジュがアカデミー公開会議で着いていたものであった。彼は、アレクサンドルとの交際の最初の警告を思い出した。あの公開会議の翌日、『ポリュークト』上演の日の、ド・トレヌヌ神父に二人の友情を暴かれたときの警告である。今日、彼はここで二重に拍手されるだろう。そしてそれは、彼がそのために大いに戦ったその友情の残骸の上になされるのだ。

彼はもうあの子を見ようと、またあの子から見られようと努めることもない。それ

でも、彼らの視線はすぐに遭遇してしまうのだった。

学長は、手に挨拶原稿を握って立ち上がった。

「猊下、あなた様の牧歌的職務に対するこの上ないご迷惑であるにもかかわらず、我々の間に再びお越しになることを猊下は強く希望されました。それで我々は、我々が払われる敬意の価値全体を計り知るのです。昨日あなたは再びルルドにいらっしゃり、司教区の感謝の祈りをノートルダム of 足元に置いて行かれ、フランスのためにもお祈りになりました。教会と祖国への聖なる動機によって燃えさかる魂の、その疲れを知らないご活力を、我々は模範にできればと存じます！」

それから彼は、古典文化を称賛した。それは場合に依じて、勝利を勝ち取ったり敗北から立ち直ったりするための、我が国の助力となるものだ。「文明は」彼は言った。「心の問題なのです。そして心の力は、最後には物質のそれに打ち勝ちます」彼は今年の業績に満足していることを告白し、バカロレアでの優秀な成績を思い出させ、演説の締めくくりに、その努力と宗教的献身に対する集団的賛辞を生徒たちに献呈した。「しかも、皆さん、私たちは、あなたたちが休暇と、さらにそれ以上のものを得るにふさわしいという気持ちで、あなたたちを親愛なるご両親にお返しすることができません。あなたたちが出る前に、我が猊下が聖なる神の名においてあなたたちに降ろし給

う聖体降福式。神の御名において」

「アーメン」ジョルジュの後ろにいるリュシアンが言った。

上級生の学監が、受賞者リストを読み上げた。首席成績優秀者たちには拍手が送られたが、それは演壇の下に自分の賞を取りに行く受賞者たちの往復で遮られる。これが延々と続いた。とうとう三学年の番が来た。「優等賞。第一位、ジョルジュ・ド・サル……——宗教教育、第二次席、ジョルジュ・ド・サル」しかし、一位はジョルジュ・ド・サルへと大挙して戻って来た。勤勉さ（授業と課題）、フランス語作文、ラテン語翻訳、ギリシャ語翻訳、英語。二位は歴史、ラテン語作文とギリシャ語作文。あらゆる嫌悪感にもかかわらず、それは彼を楽しませた。それは苦悩への報酬だった。

受賞のとき、彼はリュシアンと出くわした。数学第二位と英語第二位を同時に表す本を受け取りに来たのだ。彼らは二人して枢機卿に敬意を表した。卿はジョルジュに優しいな合図を送り、このような言葉を付け加えた。「素晴らしい、見事です。あなたのご両親にお祝いを申し上げますよ」その受賞者は、自分の席に戻りながらアレクサンドルのことは見なかった。

その子はフランス語と植物学の二つの次席賞だけだった。ジョルジュは立ち上がった彼の名を呼び、こう言ってやりたかった。「僕が賞をいちばん多く取りたかったの

は君のためだ、僕はそれを君に捧げる」しかし、以前の何度かの瞬間同様、彼は頭を上げることさえできなかった。不名誉こそが、彼の本当の、たった一つの賞なのだ。コレージュは、彼の実態と外面とのその最後の不整合を、寛大に扱ってはくれなかったであろう。

彼は本をばらばらとめくった。表紙の下には聖クロードの紋章ラベルに彼の名前が入り、このような言葉が強調されていた。《九回の受賞と十回の表彰》。しかし、リュシアンが二冊の本を持っていないのと同様、彼も九冊を持つことはなかった。神父たちは賞をまとめる術を知っていたからである。彼は四冊だった。ラシーヌ——憶測に過ぎないが、レアンドル役へのほめかしといったところであろう。アンリ・ド・ボルニエの『選集』——彼としてはアンリ・ド・レニエの方が好みだったのだが。『キケロとその友人たち』——《ジョルジュとその友人たち》か。最後は、ギリシャ語の賞として『プラクシテレス』——実際、この本に含まれないもの足りないのはテスピアのアムールだけだ。この書物には、最初のもの同様挿絵が付いている。ジョルジュはすぐに『プラクシテレス』の目次を調べてみた。複写の中に、自分の関心があるものがあるかどうかを知りたくてたまらなかったのだ。それは学長の注意だったのかもしれない。あの愛すべき彫刻は、そこにはなかったのである。

その日は、調理担当のシスターたちにとって重要な日だった。枢機卿を含む全員をもてなすのだ！とはいえ、すべての親たちから良い奉納品を受け取る約束もある。ジョルジュの親は列車で来たため、いつも彼を連れて行く場所に昼食に行くことができなかった。彼らはリュシアンの両親とともに大食堂にいて、コレージュの一日を楽しんでいた。屋外の、同じように食卓を整えられた雨天運動場の屋根の下よりも、この方がましだっただろう。大いに賛辞を述べられたジョルジュとリュシアンは、自分の荷物に受賞者名簿と賞品を加えるべく、共同寝室へと上がって行った。

リュシアンはうれしかった。すべてが彼に微笑みかけていた。去年は、今回のアレクサンドルのように次席賞しか取れなかった。数日中には山でアンドレと再会することになっている。彼は空中に本を放り投げ、ボール遊びをする小さな女の子をまねて、背後で手を叩いてからそれをキャッチしようとした。それは英語と数学の第二位、『キリスト教精髓』には、かなり失敬な扱い方だった（たぶん、ローゼン神父が数学者よりも修道会員に褒賞を与えたかったのと、同じような微妙な配慮により、英語の教師がイギリスで書かれた書物の選択に賛同したということだろう）。その賞は寄せ木張りの床への落下で終わった。それは受賞者の黙考に対して提示するように、二ページを開いた。ウェルギリウスと張り合って、シャトーブリアンも予言をしたのだろうか？

リュシアンは章のタイトルを前にして吹き出した。《水鳥の習性。神の慈愛》。ド・カトルファージュ氏も、トカゲについて神からは何も言われなかった。

枢機卿は、食堂で食事を取り仕切ってくださった。学長が二、三の言葉で猥下に礼を言った。それから、生徒たちと自分の間で会話をするかのように、声を潜めて言った。「分かっていますね、皆さん、あなたたちの元気を控え目にすることを。猥下に迷惑をかけることのないように」

全員が響きわたる声で答えた。「猥下方歳！」それ以降の会話は囁き様式で続いた。先の喧噪とのコントラストがあまりにも滑稽だったので、猥下はそれを楽しんでいるように見えた。それは自制をもっと弱めていいという許可と見なされた。かくして、中道的妥協案が確立されたのであった。

アレクサンドルはたびたびジョルジュの方を向き、彼に微笑んだ。あまりにも活気が横溢していたため、ローゾン神父が気付けなかったのは確かである。この子供たちと先生方との間には、すでに幕が下りていた。猥下自身は休暇のことを話したに違いない。ジョルジュはおそらく、新学期のことを考えている唯一の存在だった。自分は再びこの食堂に戻り、アレクサンドルはここにはいないことを想像して、彼は苦しんだ。テーブルから離れつつ、ジョルジュはモーリスに、どこに休暇を過ごしに行くか知っ

ているかと尋ねた。

「大したものにはならなんじゃないかって心配してるよ」彼は答えた。「弟とローズン神父の間にひと悶着あってね、僕には何だか分からない悪巧みのことでさ。たぶん夏じゅうS……にとどまるんじゃないかな。それから、僕らが聖クロードで再会することはないってことを、君にお伝えしておくよ。今朝、両親と決めたことだ。ここの空気は僕らには合わなかった」

彼は愉快そうな声で付け加えた。

「僕らは家庭生活に戻ることになる。それが僕にとって何を意味するか、君にも分かっているだろう」

ジョルジュは、これほどひどい気詰まりを感じたことはなかった。こんな言及の後であの子のことを話すなんて！ モーリスが、同じような順序でもっと詳しい打ち明け話をした後で、あの子のことを話したときに犯したのと、同じ罪を犯すことになる。しかし、もう考えたり躊躇したりしている場合ではなかった。視線を落しながらジョルジュは言った。

「君に手助けを頼みたい」

「リシュパンの詩を置いて行ってほしいのかい？」

「そんなことじゃないよ。君の弟が中庭にやって来た日のことを覚えてる？　それで、あの後友達になったんだよ、彼と僕。君の仲介で彼に手紙を書くことができればうれしい。ローゾン神父に気付かれないように」

モーリスは口をあんぐりと開いた。一瞬の沈黙の後、それはジョルジュにはひどく長く感じられたのだが、彼はどっと笑い出した。

「何とまあ！　まさか！」彼は大声で言った。「ってことは、『危機』も『せむし男』も『悪巧み』も、君だったんだ！」

彼は自分のクラスの首席をしげしげと見つめ、その表情が後者を赤面させた。それは二人のネクタイを指摘したときほど無邪気なものではなかった。

「かしこまりました、伯爵様」彼は言った。

彼は、その言葉によって、相手に多少自信を取り戻させたがっているようで、また大がかりな陰謀に加担することを光榮に思っていることを告白したがっているようだった。たぶん、自分の弟も同じくそれに参加したと見なしているのだろう。ジョルジュは両目でまっすぐに彼を見据えた。アレクサンドルが侮辱的な質問をしたローゾン神父を見据えたように。

「君の弟と僕の友情は、君が考えているようなものじゃない」彼は表明した。「君に

は言っておきたいんだ。だから、その話で彼を困らせなくてくれればうれしい」

「おお！ 君らの友情がどんなものであろうとも。僕はまったく、何にも気にしないさ」
「ローゾン神父をもっと気にしてほしいんだけど」

「心配するな。学長はまんまと僕をだましたけれど、あの人じゃできやしないよ。
ド・トレンヌ神父だって無駄さ。信心会全体でもできるもんか」

ルヴェール一家はアルマジロを訪ねる必要があった。上演までの間、ジョルジュは両親に散歩を勧めた。何も急ぐことはない。上演は『リチャード獅子心王』で始まるのだ。彼はテラスからの眺望を見せたかった。近道するためだ、と言って、彼は散歩道ではなくやや険しい小道を通って行った。母親は見事なオレンジに感心していた。彼は温室に入った。段状の棚のそばに、あの子とふかしたタバコの切れ端が見えた。彼はそれを踏み潰した。自分がかつてグラジオラスを踏み潰したように、ローゾン神父がかつてあ的小屋でタバコを踏み潰したように。

体の向きを変えるやいなや、彼は夢を見ているのかと思った。小道のいちばん高い所に、目に見えないほど繊細な案内人が姿を見せたところだった。アレクサンドルが現れたのだ。夢げに、奇跡のように、初めての逢瀬のときに現れたように、この最後

の逢瀬を暗黙に推測したかのように。自分たちのかつての勝利の舞台で、その終わりを記すその日に、彼はジョルジュの前に現れた。キスを表すため、彼はそっと唇に指を当てた。食堂での朗読の間に送ってくれたキスと同じくらい控え目に。彼の後に付いて来たモーリスが、示し合わせたような合図を送ってきた。ジョルジュの微笑みが消えた。二人の兄弟の両親とともに、ローゾン神父がやって来たのだ。彼は話を中断した。この遭遇に衝撃を受けたのか？ もし散歩の道順がアレクサンドルによるものならば、彼はそれがジョルジュと彼に共通の思い出への巡礼であると見抜けなかったのだろうか？ 二人を引き離すとき、彼は、コレージュの温室が二人にとって何であるかを知った。この日は、あの大規模散歩の日に続き、彼の知識を完遂することになった。偶然の結果によって、時には彼の告解場から出たときに、同じこの場所で過ごした逢瀬を、二人の友人たちは彼に告白したのだ。数分前ならば、彼はそこでダメ押し証拠を目にしたところだっただろう。

ジョルジュは間もなく舞台に参加しようとしている。自分の役をわざとしくじるところを考えた。覚えたことを忘れ、詩句を歪曲して。それは命令によってしくじった宗教教育作文に見合うものとなるだろう。もし芝居を失敗にきたらどんなに痛快だろう！『訴訟狂』が『リチャード獅子心王』の小姓交替のための犠牲を支払うことにな

る。レアンドルは、ダンダンを当惑させ、枢機卿を仰天させ、学長を悲しませ——ペ
ンテコステの聖堂参事会主席司祭が彼を悲しませた以上に——、学監を茫然自失させ、
彼にはたくさんのお金を与えたのに、アレクサンドルには与えなかった先生方を嘲弄し
ようとしていた。彼はコレージュを侮辱したかった。その最も美しい華を失おうとし
ているコレージュを。

彼には、これが空想でしかないことがよく分かっていた。これまで夢見てきた事々
同様、それも実現することはない。彼は下手くそに演じることを思い浮かべたが、可
能な限り上手に演じることにした。彼はダンダンには腹を立てているが、イザベルに
は何かをしなければならぬ。とりわけアレクサンドルには尽くす義務があるのだ。
彼は、あまりにも奇抜で、理解されそうにない崇拜の念を表すことは、しないつもり
だった。そんな奇行では、あの子は貶められたと感じることだろう。最後まで彼を魅
了し、彼にさらに幸福なイメージを残し、彼のために、かつてランブイエ館について
の演説と、聖ベルナルディーノの生涯を音読したのよりも、はるかに上手に『訴訟狂』
を演じる必要があるのだ。

ジョルジュがうまく演じることを決めたのは、ローゾン神父のためでもあった。何
もかも予測した人間も、これは予測しなかった。二人の友人の一人が、自分の存在を

忘れさせる代わりに、もう一人の前で危険なほどに輝こうとしていることを。彼はアレクサンドルから役を奪ったが、ジョルジュの役がアレクサンドルにとって何なのかには気づけなかったのだ。彼は、喜劇を罵倒したことで、アモン氏の同業者たちに同意するだろう。

近隣の主任司祭の何人かが、『ポリュクト』か、あるいは枢機卿の臨席で食指を動かされたのか、『訴訟狂』にやって来ていた。しかし、ラシーヌはコルネイユよりも彼らの関心を引かないようだった。おそらく狎下の臨席も、いっそう抑制した態度を取ることに、拍手の口火を切らぬことを、彼らに強いたのだろう。だいたい、どうして彼らが同じ自信をもって拍手できるというのか？ 伯爵夫人の「できればいいんですが！（Plût à Dieu）」が一回、「何と！ ああ！（Eh! non Dieu）」が一回、レアンドルの「おお！ いやはや！（Eh! grand Dieu）」が一回、「神に誓う……（Dieu sait si...）」が二、三回、そしてシカノーの次の詩句。

「ねえあなた、神と執達吏しつたうりを恐れなさいって（Dans la crainte de Dieu, monsieur, et des sergens.）」

さらには、主任司祭様方はこれらを聞いて困惑したに違いない。「悪魔にさらわれたってごう！ (Que le diable m'emporte)」や、「悪魔の所へでも行っちゃまえ！ (Va-t'en au diable)」や、その手の表現を。

上演は完璧だった。俳優たちは素晴らしい効果を上げた。しかし、レアンドルは、最後の言葉はほとんど時宜にかなっていないと思った。

……うれしいことだけ話してください。

お許しを！ お許しを！ 父上……

最後に、かねて予告されていた舞台衣装での写真が撮られた。

「受け取るのが待ち切れないよ」リュシアンが友人に言った。「それまでは、僕がイザベルを演じるなんて、アンドレは考えもしないだろう。彼は、それが僕の趣味じゃないって分かっている。でも、君のためならやらないわけがないさ」

今、ジョルジュと彼は駅に向かっていた。彼らは、以前の復活祭のときのように、列車の中で両親をまいて別の車両にアレクサンドルを探しに行くことを決めていた。

手紙による交流の確立というモリスとの協定はあったけれど、ジョルジュはあの子と口頭での説明の機会を作らなかった。それでもなお彼は、駆け落ち計画に立ち戻るのには論外だとリュシアンに約束していた。駅に着く頃には、彼は心が揺れていた。

プラットホームには、旅行鞆を手にしたローゾン神父が、先刻の高台と同じ集団の真ん中にいた。運命は交渉の余地を残してはくれなかった。

アレクサンドルの視線が、友人のそれと交錯した。そのときジョルジュは、彼の前で消えてしまっていた。彼はもう視線の交わし合いに値しなかった。すでに列車が二人を隔てていた。彼らはそれぞれ違う等級の違う車両に乗り込んだ。間もなく、世間は二人の間に別の障壁を作り上げるだろう。コレージュの学年のそれよりもさらに堅固な障壁を。

通路に立って、ジョルジュはリュシアンのそばで無言のままだった。彼はアレクサンドルのことを思った。延々と伸び、運命の神が二人に、あの子と彼に繰り出す糸のかせのように、繰り返し膨らみが現れる電信線を凝視する。彼らの運命をもつれさせ、空に舞い上がらせたかと思うと、突然地面に向かって投げ落とす糸。彼らの間には取り返しのつかない状況が実現しているのに、アレクサンドルはそれを知らない。学監がやって来るまでそれを知らなかったアンドレや、学長が踏み込むまで知らなかった

ド・トレヌ神父さながらに。おそらくあの子は、ローゼン神父の存在をくよくよ考えてなどいないだろう。ジョルジュと交わした視線を思い出しながら。彼は気付かなかったが、それでお別れであったジョルジュのことを。

S……駅に近づく。列車が転轍機の上を滑り抜けた。あれが脱線してくれれば！アレクサンドルがその場を離れる。腕にレインコート、片手に軽そうなスーツケースを持って。おそらく、次の旅のことを考えてあえて選択したものだろう。彼は間違はなく、ジョルジュがここで降りる彼を見た最初のときには思いもなかったことを考えている。にもかかわらず、あのときに負けず劣らずうれしそうだ。彼は、これまでよりも美しく、生気に溢れ、潑刺としていた。

出口の前で彼は体の向きを変え、同時に水蒸気の雲がプラットホーム上に、乗客たちを隠すように降りてきた。その煙が晴れると、主に捧げる薫香のそののように、あの子は姿を消していた。

（五）

自分の部屋でとうとう一人になり、ジョルジュは寝る前に持ち物を整理していた。パジャマを着たばかりで、上着のポケットをテーブル上で空にした。財布、手帳、レАндドルのかつらの留め金、爪切りばさみ、両親からの最新の手紙、優等生名簿の封筒、休暇中の規則。

彼は賞品の本をスーツケースから取り出した。それらを見ても、すこぶる気分がよくなるという段階には至らなかった。彼は、この学業の報酬が穢れていると思った。それが自分のものであることに、もう感動できなかった。以前、作文でアレクサンドルよりも上位だった五年生の生徒たちを蔑んだのと同じくらい、自分を蔑んだ。彼は、ギリシャ語でもラテン語でもその他のいずれでもなく、友情や美点のための賞を想像した。顔や唇や目への賞、値がつけられないほど価値のあるものに対する賞を。

ある考えが彼の心をよぎった。彼はコレージュでの賞を、受賞者名簿が読み上げられている間に願ったのとは別の方法で、アレクサンドルに犠牲として捧げようと思った。犠牲として、暖炉でそれらを燃やすのだ。もしそれらを求められたら？ 置き忘

れたと思われることはあり得ない。持ち帰ったことは知られているからだ。そのうえ、四冊もの本を灰にすることが容易であらうはずがない。それぞれのたったの一ページでも、同等の敬意を表することにはなるだろうが、それは最も目立つものである必要がある。

ボルニエ氏の『選集』からは何を選ぶ？ もちろんジョルジュは、この著者がアカデミー・フランセーズのメンバーであったとしても、全作品を進んで燃やすつもりだった。しかし、『ロランの娘』は、聖クロードで習ったあるさわりを思い出させた。《剣の歌》。それは彼の階級への賛辞となるだろう。そのページを探すと、それをハサミで切り離す。彼はかなり注意してその作業をした。この削除は、誰にも見えないようにしなければならぬ。

次に彼は、『キケロとその友人たち』にざっと目を通した。彼の目を引いた《コエリウス、カエサル時代のローマの青年》というタイトルの章が、最も面白いに違いない。彼はカトゥルスの、レズビアへの詩の翻訳に注目した。

私に千のキスをおくれ、それから百、それから千、さらに百、さらに千、それからまた百……

「三年生への賞としてはちょっと大胆ですよね、アルマジロ先生」それは、ジョルジュがあの子に暗唱した同じカトゥルス詩を連想させた。それはユウエンティウスに向けられたキスについての詩であった（このカトゥルスという人は、あらゆる人間を非難している）。キスは剣とともに取っておかれた。

『ラシーヌ』では、ジョルジュはその作家自筆の遺言書のファクシミリに出くわした。

……私は、自分の死後、私の体がポール・ロワイヤル修道院に運ばれることを強く希望する。その墓地の、アモン氏の墓穴の足元に埋葬され、そこにあることを。昔その建物で私が受けた素晴らしい教育の思い出に、また私がそこで見て、空しい賛美者でしかなかった、敬虔さと悔悛の偉大なる模範の思い出に……。

あの世紀の最も高名な作家が、最高の安息場所として自分の少年時代の場所を選んだということ、最高の同伴者として自分の先生の一人を選んだということは、感動的なことではないか？ おそらく彼は、アモン氏が書いて、ローゾン神父がジョルジュに読むことを勧めたあの論文を、評価したのだろう。『慎重深くあるべき二十三の理由』

ポール・ロワイヤルでラシーヌに感銘を与えた「敬虔さと悔悛の偉大なる模範」は、かの大王か、さもなくば神の怒りによる建物の破壊を、妨げることはなかった。ジョルジュは、聖クロードで受けた教育から、どんな記憶を持ち続けることになるのだろうか？ コレージュの規則を命じ、休暇規則が強化確立することを目指した、あの「完全なるキリスト教教育」から？ 選びたかった文学の道において、最初に自分の作品のために破門され、宗教的賛歌を書いて終わることになるのだろうか？ ローゾン神父の足元か、ド・トレンヌ神父の足元に埋葬されることを求めるのだろうか？ ラシーヌの遺言は、軍歌や愛の詩と再び一緒になった。

『プラクシテレス』。テスピアのアムールがないのであれば、彫刻の中のどれがいちばんいいだろう？ 若い牧神のポーズは、水浴の日、木によりかかっていたアレクサンドルのそれと多少の類似を見せていた。これぞまさに必要としていたものだ。とはいえ、これほどきれいな本を傷つけるのはもったいないことだった。

ジョルジュは、暖炉の背板の上で、薪の四枚の紙に火をつけた。生き生きとした炎が彼を照らす。彼はその紙がねじれるのを見つめていた。それはほとんど舞い上がるように、明るく輝き、灰になって再び落ちてきた。彼は灰の上よりも、コレージュの彼の一年間に、暖炉のカーテンを下ろした。

彼のテーブルは、赤い薔薇の花束で飾られていた。母親の気遣いである。彼は快くその芳香を吸った。アレクサンドルがオレンジの香りを吸っていたように。ド・トレヌ神父が神秘と呼んでいたその花の香りは、寝室には少し強すぎたのだが、ジョルジュは常に窓を少し開いて眠った。

遅い時刻に寝て、疲れていたにもかかわらず、コレージュの鐘が聞こえたような気がして、彼は朝早く覚醒した。丸一日が自分のものだ。彼は、アレクサンドルからの手渡しの手紙と郵便の手紙を、愛をいっぱいに込めて保管した小箱を取り出した。彼はその箱をしまい込んでいたのに、蓋の上に埃の薄い層が積もっている。聖クロードの屋根裏部屋でトランクに息を吹きかけていた学友たちをまねて、彼はその上に息を吹きかけた。開く。郵便の手紙と手渡しの手紙が現れた。それらを取り出すと、底の方にリュシアンの手紙があることに気付いた。これは残されることになるものだ。

彼は、あの子の文面を読み返すためにソファアに座った。復活祭休暇のとき、彼が封筒に入れた花は、乾いてしまっていた。愛おしすぎる筆跡で書かれた数行の背後に、彼が別の受取人に書こうとしているものが見えた。最高に愛情深い手紙に対し、自分は奇妙な返答を準備することになるのだ。郵便の手紙は一通だけだが、彼はそれを犧

牲にするという考えは拒んだ。手渡しの手紙全部を返送することは、さらにできない。少なくとも、自分の名前をアレクサンドルが書いた最初のもの、髪の房が一緒だったものは保存しよう。その房を取っておきたかったからである。彼は、切り取られた賛美歌をさらすことも、郵便の手紙と同じく避けようと思った。これらは、もし神父が中を見ないという約束を守らなかった場合、彼に不快な打撃を与えるおそれがある。とはいえ、当然のことながら、今学期は手紙を受け取っていないと告白した以上、彼は大規模散歩の後で受け取った手渡しの手紙は取っておくことにした。結局彼は、ハガキと、それ以外は最初の頃の二通の伝言しか放棄しなかった。よく考えてみると、ジョルジュはそのハガキが惜しくなった。そこには、短い表現の中に、アレクサンドルが最後のメッセージで思い起こさせた、「永遠に」という糾合の叫びが響いているのだ。彼はそれも保存することに決めた。

洗面し、朝食の後、彼は間もなく送ることになるものについて考えた。彼はなかなか自分に言い聞かせることができなかった。二通の手紙の犠牲など、何の役にも立たないだろうということ。あの子は、ジョルジュが従順ぶることでもう一度神父をだましたと思うだろう。そして、リュシアンが言ったように、それは彼に決心を固めさせてしまうことだろう。となると、彼にすべての冒険計画を断念させることが火急の

問題で、彼がそうせざるを得なくなる唯一の方法とは、まさにローゾン神父が考案し、リュシアンが承認したものであった。ジョルジュは絶えずジレンマに立ち戻った。アレクサンドルに一時的な危機を強いるか、彼を錯綜した混乱の中に迷わせたままにするか。

ジョルジュは、学長に自首しに行った晩以上に、大切なものを守るため、余計なものを——しかも、あの夜守った、あまりにも貴重なその余計なものを——犠牲にすべきであった。彼は全部の手紙を、最後のものも含めて送り返すことにした。

彼は、便箋を取りに書斎に降り、階上の自室に戻った。そこなら落ち着いていられるだろう。ドアに鍵をかけてから腰を下ろす。彼は手帳に書き写すことから始めた。手渡しの手紙、郵便の手紙、賛美歌。それから次のような数行を書いた。

M……、一九××年七月十二日

神父様

ご指示に従い、僕がアレクサンドル・モティエから受け取って保有しているものを

同封の上、この手紙を送ります。

敬具

G・ド・サール

宛先を書いたとき、彼は激しい怒りのようなものに襲われた。ジョルジュ・ド・サールと呼ばれる自分が、休暇中、遠くから、考えなしの聖職者にこんな境遇に追いやられたなんて！

彼は、この封筒やそこに同封されるものの全部を、引き裂いてやりたかった。それは、用心や術策の身振りではなく、イザベルの場合のように、リュシアンが例として面白おかしく勧めたものであった。それは自由な人間の身振りである。次に、彼は昨日賞品から切り出した四枚の紙を燃やしたのと同じ方法で、この紙を燃やす気になった。なぜその行為が伴ったのかの理由を、神父に書き送る。あの聖遺物はもはや一切存在しないことを、自分の名において彼に誓う。そして、アレクサンドルにその手紙を見せることを彼に頼むのだ。あの子は例の計画を断念するだろうが、自分の友を軽視することもあるまい。二人の友情の栄光は無傷のままとなるわけだ。

ジョルジュは暖炉のカーテンを持ち上げた。昨夜の灰が彼に漂ってきた。あんな試

練の後で、こんなふうにか返される可能性もある宝を消滅させることは、罪悪ではないか？ 彼は一瞬当惑状態に陥ったが、結局妥協案を採用した。すべてを敵に引き渡すことはしないという案である。彼は、初めての手渡しの手紙、金髪の房、復活祭の郵便の手紙を、今月のメッセーじとともに封筒から取り除いた。

郵便局の机で、彼は書留送付用の送り状に記入した。こんな文字が読み取れた。《申告額》。彼はこの発送品、生涯送ることになる中で最も重要なもののための額を、申告しなかった。彼の質問に、局員は、この郵便は明日には確実に届くと答えた。封筒にスタンプを三回叩きつけたので、彼にはこの男が、復活祭休暇のときの理容師が髪をうかつかんだのにも劣らず憎らしく思えた。

昨日の夕食時、ジョルジュは休暇について何も質問しなかった。それほどまでに、そのテーマはもう彼の興味をほとんど引かなかったのである。昼食中、両親は、それについての彼の無関心ぶりに驚いた。彼は、バスク海岸に行くことになっているのは忘れていないことを明言した。

「おまえを驚かせることがあるよ」父親が言った。「ルヴェール一家が、それよりもピレネーに行かないかって言うんだ。そこなら、離れがたい友達のリュシアンと再会できる。部屋が取れるかどうかはまだ分からないがね」

家庭の驚きは、コレージュのそれよりもずっとひどい。あんまりだ！この最後の衝撃の後、ジョルジュはもう運命を恐れなかった。アンドレに再会できたリュシアンに、自分が再会する。アレクサンドルから離れたこの休暇は、真に離れがたい二人を観察させることになるのだ。彼がかつて引き離すことを考え、幸福が自分より長持ちしている二人を。

この考えは彼を苛立たせた。彼にはすでに、自分に偽善的に同情してみせる彼らの姿が見えていた。少しずつ距離を置くかもしれない。最初の打ち明け話の後で、リュシアンにしたように。そして、野外で満天に星をいただく二人の夜の集いを、彼なしで企画するかもしれない。アンドレが手紙で、その思い出を書いていたような夜のよう。彼にはもう、自分を勇気づけようとする彼らの未来の話が聞こえていた。瀕死の人間に天を教え示す聖職者のような二人の話が。

なるほど、彼らの同情を当てにすることはできる。だが、自分は称賛の方がいい。それを保ち続けることは、自分次第なのだ。リュシアンは、アレクサンドルの獲得に成功したことを称賛すると言っていなかったか？堂々としたままでいられば、彼はもともとずっと称賛してくれただろう。ジョルジュは自分の手紙を後悔した。アンドレの問題で、学長の所に行くという自分の要求を後悔したのと同じくらい。彼は、自

分があまりにも弱く、あまりにも従順で、あまりにも臆病になっていたことに驚いた。最初に譲歩することを助言したとき、彼はリュシアンを激しく批判し、それから譲歩した。それ以外できなかったのだ。自分がそのようにしたことは許せなかった。彼は自分の周囲にあるもの何かもが憎らしくなった。自分の愛情を犠牲として捧げたように思われるその贅沢な室内装飾が、多少の誇りをしばしば抱かせたその家族の思い出が。訪問に連れて行くことにするという母親の申し出を、彼は心を鎮めるものとして受け入れた。それは彼の思いを少しは変えてくれるだろう。

ところがその夜、自室でコレージュの問題を思い出すと、苦痛が戻ってきた。彼は受賞者名簿を手にとった。アレクサンドルの名前をもう一度見るためである。その名前は大きな文字で印刷されてはいなかった。それは賞の資格保持者に割り当てられた栄誉なのである。しかし、その名はジョルジュにとつて、表紙の豪華絢爛さの中に広々と書かれている枢機卿の名前よりも偉大だった。その栄光と秘密によって、ほかのすべての輝きを曇らせているのだ。そこに書かれたあまりにもわずかな記載は、せめてものの喜びにと選ばれたものだ。フランス語の次席賞、それは学長が、ルイ十四世時代の規範に基づいてけなしたあの手紙の文体への、かすかな称賛である。植物学の次席賞は、アレクサンドルが散歩から持ち帰った、あの小さな田舎の花束の記念とな

るだろう。それで、名簿の一ページに名前がたくさんあるジョルジュは、その全栄冠中、最も低い賞、彼が宗教教育で授与され、学友たちに深く軽蔑すると言った賞だけしか好ましいとは思わなかった。実際のところは、自分の主要な褒賞はアレクサンドルのおかげではない——一学期からかなり勉強したのだ。しかし、この次席賞は、アレクサンドルが原因で失ったあの賞を思い起こさせた。今が不幸であるにしても、幸福もあったのだ。

七月十三日になった。それなら、ジョルジュの書簡は年に十二回ある十三日のうちの一日に届くわけである。その数字は、ある者には好意的で、ある者には好意的ではない。良い面を期待することは許されそうだ。

手紙が今日届いたら、ローゾン神父はすぐに仕事にとりかかるだろう。とすると、《大打撃》に打たれるのは今日の夜より前だ。アレクサンドルはそれをどのようにに受け取るだろう？　あまりにもひどい痛手の後で、彼は、何か月もの間の視線や言葉やキスや手紙を、どう判断するのだろうか？　貴族であることは素晴らしいことで、おそらくこんな屈辱的なことを勇気をもってするためには、そういう者である必要があったのだと、繰り返し言われるだろうか？　彼は自分が渡したジョルジュへの手紙を、自

分の手紙の代わりに、どんな嫌悪感とともにローゼン神父に投げつけることだろう！それに、この二重の屈辱を引き起こした張本人は、二人の正当な評価のためのこの犠牲を、尊重しないのではないだろうか？ コレージュの、将来の立派な侯爵様は、コレージュの天使よりも尊敬に値しない状態に戻ることになるかもしれない。

ジョルジュはアレクサンドルに手紙を書きたかった。それは、数時間以内に別の手紙がもたらすだろう結果の埋め合わせとなっただろう。しかし、彼はあまりにも気分が悪く、あまりにも苛立っていた。昼食も不快だった。ピレネーは、親愛なる両親の間で話題の中心となった。次の木曜日のための部屋を予約するため、電報が送られた。もしそれでいいなら、ほかで予約された部屋はキャンセルすることになる。ジョルジュは、アレクサンドルのように休暇を奪われる方がよかった。幼い頃のように、食卓で話す権利がなくなってくれることを願った。昼食の後、彼は父が珍しく差し出したタバコを断った。彼はエジプト・タバコしか吸わないと言いたかった。母親ともう一度訪問して回るのは、今日ではない。彼は一人で、徒歩で歩き回らねばならない。間食には戻らないことにする。家を出るとき、彼は重いドアをボタンと閉じた。

以前よりも両親と疎遠になったように感じられる。彼らの社会は、先生方の助力を得て、彼の友情を失敗させたものなのだ。アレクサンドルがよく言っていた。彼らが

愛し合うことを許さないのは、彼らが子供だからだ、と。

大通りで、ジョルジュは、すれ違った聖職者が目に入らないよう視線をそらした。さも優しそうな雰囲気で、スータンの袖に両手を入れている。男も女も、彼に興味を示さなかった。大人たちはいつだって神秘も美も欠けているように見える。散歩中、彼は子供しか見ないことに決めた。彼らの顔を、アレクサンドルの顔の周囲の一種の花飾りにするのだ。それは復活祭の詩の冠に続き、彼を称える生きた冠になるだろう。休暇中ということで、少年たちには不足しなかった。だが、ジョルジュが何を考えようと、彼らの容貌は自分の心を注ぐまでには至らなかった。彼が思う存在は、その記憶によってあらゆるものの光を奪うのだ。彼が、あの水浴の午後、その出現によってすべての光を奪われたように。その代わり、ジョルジュは姿勢と身振りを検討した。彼は、素早く蠅を捕まえた細身の男子に注目した。こちらには、噴水の周りで、マスカロンに両手で水流をかけ戻している者がいる。あちらには、ベンチに座って、天使のために歌っている者がいる。あの小さな自転車乗りは、真っ赤な頬と輝く目を持っている。速度と、ずっと口に行っている薔薇が誇らしげだ。

ある通学制の学校が放課になっていた。ということは、終業式の表彰はまだなのだ！その生徒たちは、国民の祝日までずっと通学するのである。ジョルジュは、お互いを

区別するものを見るのが好きだった。彼らの鞆の持ち方は、パルテノンの青年たちがアンフォラを持つやり方よりも斬新だ。肩の上に、うなじに、背中に、お尻に、腕の下に、取っ手でぶら下げたり、下から持ち上げたり、また本の塊とバランスを取るために、ある者は前に、ある者は脇に身を傾けている。この子たちは、誰に対しても関心を示さない。そうでなければ、ジョルジュのように、ほかの子供たちに対する興味が無いのだ。彼らは時折、耳元で何やら囁き合っていた。ショーウィンドウの前で長いこと立ち止まる。商品の色合いについて議論しながら。自動車スピードを出して走り去るのを見つめる。キオスクで絵入りの雑誌を買っている者もいる。すぐに読みたい気持ちの高ぶりが彼らを襲う。一人が立ち止まり、その両側に二人の学友がもたれかかる。彼は鞆を両脚の間に挟んで広げた雑誌を保持し、三人の読者はその記事に揃って笑っていた。四人目が、一冊の薔薇叢書を鞆から取り出した。自宅のドアの前に到着し、ドアを開く前に読み終えたが、あるページを読んだことで彼もまた笑った。この少年たちは皆、違うもので同時に笑っていたが、ジョルジュには、全員が違うように感じた後で、全員が同じように思われた。彼らは薔薇叢書の無邪気な子供なのだ。そしてまたおそらく、聖アウグスティヌスやド・トレヌヌ神父が、その無邪気さをひどく疑問視した子供たちでもあったのである。

ジョルジュは、以前通ったリセの前を通り過ぎた。彼は聖クロードには行かない方がよかったのかどうかを自問したが、その考えは遠ざけた。たった一つの面影が、その考えを冒瀆的なものにするのに十分であった。アレクサンドルは別としても、宗教的寄宿学校でのこの一年は、長期にもわたるリセ通学の年月よりも彼を豊かにしてくれた。それは日々の聖体拝領のためではない。学長が言っていたような理由ではないのだ。それは、どんな小さなものにも独特の輝きを与える、神聖さと世俗との永遠の混合のおかげである。この世におけるキリスト教徒の闘いにも匹敵する、生徒たちと聖職者たちとの闘いのおかげなのだ。あそこで公に彼を導いた『厳しい宗教的生活』は、別の生活を育み、それは秘密であるだけにいっそう厳しいものだった。

今のジョルジュは、自分を遠くに引き離してくれたことを両親に感謝していた。アレクサンドルを知り、自分を知ること学んだあのコレージュに入れてくれたことで、愛情を感じていた。不安に苛まれ、傷ついて戻って来たが、鍛えられてもいた。彼は自由がないことに不平を言ったが、その年は初めて自由になった年だったのかもしれない。

その夜はかなり陽気なものになった。彼は多少は楽観的観測を維持しておきたかった。散歩の産物である。遭遇した少年たちは、彼に信頼感を抱かせた。通学鞆を持ち歩き、

小さな絵入り本を楽しむ年齢のアレクサンドル。水で戯れ、齒の間にこれ見よがしに薔薇を噛む年齢のアレクサンドル。その年齢は、不幸を否定し、それを考えることを妨げるものだ。もし情熱が荒れ狂うにしても、その情熱は内気なままである。アレクサンドルにしても、あらゆるものに闘いを挑んだというのに、局留郵便を受け取る勇氣は出なかった。しかも、リュシアンが指摘したように、彼は意に反して、自分の境遇からの別の要求に対して屈服した。すでに手紙の事件において、そして復活祭休暇において、結局彼はコレージュの規律と家庭の規律に従ったのである。今彼にそれを求めているのはジョルジュなのだから、彼も再び服従することだろう。彼は、友からのその新しい呼びかけを理解する。学長に対して謝罪するという意見に反逆したとき、ローゾン神父の部屋でそれを理解したのと同じように。彼は退却するだけの強さを十分持ち合わせているだろう。

アレクサンドルの強さ。ジョルジュはそれもまた知っていた。彼はモーリスが言ったことを思い出した。弟と自分はちゃんとした判断力を持っている。モーリスは、彼ら自身の苦難に抗うことでしっかりとそれを証明してみせた。三月、アレクサンドルは勇敢に脅威に立ち向かい、執拗な抵抗の後でしか屈することはなかった。今回の彼は屈してはいないけれども、問題は確かに降伏することで終わるような方法で整えられ

ている。それでも、ジョルジュが愛情を突然切り捨てたと推測することなど、彼にはできそうにない。彼らの良心の指導者の言葉には、取るべきところと捨てるべきところがあることを、彼は知っているのだ。

ジョルジュは、その指導者にまで慰めを見い出そうとした。神父はアレクサンドルに執着しており、何とかして優しくやり遂げようとするだろう。そのうえ、あの子はもうコレージュの範囲外にいる。彼は、その情熱が激しい怒りとなった、あの禁域的雰囲気と共同体の空気から解放されているのだ。彼は、青少年クラブや良い映画に行くことを強いられるかもしれない。

すでに手紙が返されたのなら、彼は枕の下に、ジョルジュが渡した方のそれをまだ入れているのだろうか？ たとえ彼がそれ全部を消滅させたとしても、たとえジョルジュがキスした鎖を首から外したとしても、二人が互いのために存在したことを消すことはできない。顔や手や、受けたキスをなくすことなどできないのだ。

祝日の朝のファンファーレ。守備隊が行進している。ド・トレンヌ神父ならもっと優しく起こしてくれたのだが。ジョルジュはアレクサンドルのことを考えた。美しい太陽が彼を安心させた。

ある考えが突然心に浮かんた。木曜日、自分が家族旅行に出るよりも前に、S……で一日を過ごしに行くのだ。自分は首尾よくアレクサンドルに会うことができるだろう。ローゾン神父なしで、だ。手紙を書くよりもいい。とはいえ、彼は手紙のアイディアも氣に入った。そこで重大な弁解をするのだ。だからやはり手紙を書いて、自分でそれを届ける。もしそれができなければ、モリスと共同すればよい。そこに彼がいなければ、ブラジャンに頼る手だってある。直近の情報によれば、彼は十月に、聖クロードに再び姿を見せるはずなのだ。

ジョルジュは一瞬その見込みの前で立ち止まった。それは、ブラジャンが去って以来、自分が歩いてきた道のりを測ることを可能にした。そうなれば、二人は新学期を待たずに再会し、内緒の打ち明け話を再開することになる。ブラジャンは、まだいここたちに関心があるのだろうか？ ジョルジュは、美しいリリアーナについての質問に答える忍耐を、長時間持ち続けることはできないだろう。おっと、そうだ！ そのことだが、自分はこの秋、田舎で、あのブロンド娘と再会することになっている。今までそのことを考えもしなかった。自分は、彼女やその姉妹のための楽しい休暇の同伴者には、決してなり得ない。アンドレやリュシアンの方がましだ。だが、秋はまだ遠い。今は、かなりよい期待を抱かせ、またジョルジュが自分たちの誕生日について

アレクサンドルに話した、その夏のさなかなのだ。夏も秋も、S……への訪問次第であつた。それは、最も重要で、最も近いイベントである。

間もなくジョルジュは、その計画を両親に具申することになるだろう。その旅はそもそも大したことはないものなのだが、もっともらしいやり方で告げる必要がある。

口実は、ローゾン神父のお祝い。ジョルジュは、この機会にマリアの子供たちが、指導者に敬意を表し、その親切への感謝のしるしとして、小さな式典を準備しているのだ、と言えがいい。(彼は、アレクサンドルの両親と同じ海水浴場を選ばせるため、こんなふうに創作話を利用したのであつた——そのとき彼は、リュシ안의両親に与することになるとは想像もしなかったが)。帰郷のときにはいつも、このローゾン神父への挨拶という口実を時々繰り返すことができるだろう。聴罪担当者との連絡を続けることは、休暇規則で推奨されているのだ。学年の途中でかなり有益だった方策は、その効用をさらに拡大することだろう。

神父にはどんな洗礼名を持たせればいいか？ ジョルジュは小さなカレンダーを調べてみた。彼はローゾン神父が、休暇の前日、自分の団体の招集のため、自分のそれを参照しているところを思い浮かべた。もちろん、明日の土曜日は除外するべきだ。あまりに近すぎる。日曜日はジョルジュの誕生日。次の木曜日は聖マルガリタの記念日。

十七日の月曜日から十九日の水曜日までの間には、アレクシウス、カミロ、ヴィンセンシオの名が見える。ジョルジュはアレクシウスを選択するのがいいと思った。その名は、アレクサンドルの名前やウエルギリウスの牧歌、それにあの小屋での会話、あの子との最後の会話を思い出させるだけに、いっそうふさわしい。冷酷なローゾンをアレクシウスの名で祝別する、甘美な復讐！

階下で、ジョルジュは新聞を読んでいる父親と顔を合わせた。授賞式のことはまだ載っていなかった。その出来事の報告には、地域のカトリック新聞で公表されるという特権があるのだが。テールブルの上に電報が開かれていた——ホテルからの返事である。部屋は予約された。運がよかったわけだ。

ジョルジュは、自分の懇請を打ち明けるためにそれを利用した。聖アレクシウスの話はかなりうまく伝わった。月曜日の朝に出て、夜に戻ることになる。彼は、アレクサンドロスの硬貨を見せてくれたあの夜に匹敵する感激をもって、父親にキスした。S……への往復を考え、彼はうっとりした。ピアノの前に立って、彼は一本指で『夢見る金髪』の旋律を探り弾いた。

次に、彼は石の手すりを滑って庭に下りた。そんな子供っぽいことをしなくなってから、長い時が過ぎていた。彼はもう、学友たちと戯れていた昨日の少年たちと同じ

ような子供ではないのだから。ここにいない者が、庭に一人でいる彼を満たしていた。復活祭休暇のある朝、ここでジョルジュがあの子を思い出したとき、温室にはフジとヒヤシンスの香りが漂い、ポケットには彼から受け取った手紙が入っていた。フジとヒヤシンスはあの手紙と同じように消えてしまっていたが、庭には別の花がある。それらがアレクサンドルのことをもう一度彼に語りかけた。

籠に集められたユリが、新しい象徴のように思われた。その花は、ウェルギリウスがアレクシスに捧げたものだ。

おいで、美しい少年よ。ほら、君のために、ニンフたちが籠いっぱいのユリを運んで来る……。

ジョルジュはそのユリを一本摘んだ。彼は自分の部屋にある薔薇の中央にそれを置いた。純白のユリは、水浴の日にアレクサンドルが投げ、礼拝堂で生命を終えたあの赤いグラジオラスの代用になるだろう。聖処女の花束の色は入れ替えられたのだ。

午後、ジョルジュは、外出しないことを表明した。自分はたくさんの手紙を書かねばならない。S……の学友たちに、月曜日に行くことを知らせるつもりだ。特にマル

ク・ド・ブラジャン。彼との再会は喜ばしいものになるだろう。それに、医者の子のモーリス・モティエ。彼は、両親の前でそのモティエの名を言ってしまったことを後悔した——ここでは常に秘密にしておかなければならないその名前を。そのために作られた別の名を伴わせるときでさえ。どんな質問もさせたくなくて、またその発言が引き起こす反響をうやむやにしたいくて、彼は直ちにリュシアンのことを盛んに話した。彼にも同じように手紙を書くこうとしている、ホテルからの返事と木曜日の到着時刻を彼に知らせるつもりだ、と。

彼は自室に鍵をかけて閉じ籠もった。そこでアレクサンドルの面影と共に過ごすときはいつもそうするように。実際は、彼が手紙を書くこうとしていたのはあの子なのだ。彼は、すぐ明日にでもモーリス宛てにその手紙を出すのがいいのか、あるいは今朝の方針に従って月曜日まで待ったものか、まだ分からなかった。こんな曖昧な状況に、これ以上数日間あの子を置いたままにするのは残酷なように思われた。が、それが不可欠であることも忘れることはできない。選択の余地はないのだ。

彼は、あの子からの二通の手紙をテーブルの上の花瓶に立てかけ、髪の手をそのそばに置いた。肘掛け椅子を引き寄せたが、あまにも座り心地が良すぎると感じた。彼は、ローゾン神父の部屋での、肘掛け椅子と普通の椅子との使い分けを思い出した。これ

だけ重大な手紙には、普通の椅子の簡素さが強く求められる。彼は窓を閉めた。外の騒音に煩わされることを危惧したのだ。しばらく思いを凝らす。目を閉じ、ユリと薔薇の香りを混ぜ合わせたあの顔をよみがえらせながら。別の場所で、ライラックの香りとあの子とを混ぜ合わせたように。彼は、アレクサンドルとの断絶がずっと続くとは、もう考えていなかった。ローゾン神父の最初と最後の裁きの後、自分を苦しめていた絶望は、過剰だったように思われた。彼はリュシアンの確信に立ち戻った。これはつかの間の試練にすぎず、このような友情は決して滅びることはない、という確信に。彼は綴った。

愛する君へ

僕が君を愛していることを分かってほしい。それこそが僕の行動に指針を与えた感情なのだということを、確信してほしい。僕を導いてくれるのは愛しかなかったけれど、それは理性の力を借りた愛なのだ。

僕は君の手紙全部、あるいはほぼ全部を引き渡した。僕は君を裏切り、いわば君を否定したのだけれど、それは君が誰かに言われたような別の世界でないとしたら、こ

の世での僕らの救済を遂行するためだ。この決心をして、その結果君が僕と合流するのを防ぐためには、約束を守って君と一緒に旅立つために必要だった勇氣よりも、さらに多くの勇氣が必要だったことを信じてほしい。僕は君の計画を熱烈に歓迎したけれど、その後よく考え直してみた。失礼ながら言わせてもらえば、僕は君の立場のことも熟考する義務がある。熱愛に身を委ねる権利は僕らにはない。たとえそれが美しいものだとしても、だ。さらには、僕らでは力不足だということも付け加えておきたい。もはや秘密ではなくなってしまうた今となっては、僕らの逃避行はうまくいくかどうかおぼつかないものになってしまった。成功した場合でも、どれくらい持続して、どんな結果が待っているというのだろうか？ 僕らには、夢見ることは許されるけれど、それを現実に変えるのを望むことは許されない。君にも分かっているように、今の僕らはあらゆる人々に依存しているし、僕らの隷属を軽減できるとしたら、それは環境を変えることによってではない。

僕らの休暇はたぶん失われるだろうが、未来は無傷のままだ。僕は、自分の最後の手紙を恥じることなく君に確認してもらうことができる。僕が君のそれを見ることができると同じように。僕を信じて。僕が君を信じているのと同じように。そして、忍従に甘んじよう。僕らの犠牲は無駄にはならない。僕は運命を信じている。敵――

敵たち、かな——の勝利は、見せかけだけのもので、一時的なものにすぎない。眞の勝利者は僕たちだ。僕らの眞の王国を、君臨しなくなることはない王国を失うことは、決してなかったのだから。いつの日か、僕らをそこから引き離そうとする者は誰もいなくなるだろう。いつの日か、僕らは一緒になり、二度と離れることはないからだ。君が僕のコレージュ時代全部の友ではなかったとしても、君は僕の別の歲月全部にわたる友となるだろう。僕が所有することになる財産は君へのものになる。僕は君のため以外にはそれを所有するつもりはない。

僕はそれを君に取り戻させるだけだ。財産の最初のものは、僕ではないか？ 今のこのような僕は、君が作ったのではないか？ 君は、僕という存在を、父と母が作ったのよりもさらに良いものに作り直した。君の顔は、僕の学びを監視してきた。僕が詩人たちの間で、あるいは教会の祈りの中で読み取った美しいものや、ギリシャ人やローマ人の間で愛したものの、僕がそれらを捧げる相手は君であり、僕がそれらを愛したのは君のおかげなのだ。僕が君を見かけた数分間は、僕の永遠だった。君が栄光の年にそこにいたので、完璧さと熱狂がそこにあった。君はコレージュを芳香で包む、隠れた没薬の結晶だった。僕のためだけに焚かれた香の結晶、微笑むごとに僕を豊かにする金の結晶だ。聖クロードの数々の式典は、僕らの幸福の賛歌でしかなかった。

僕らは、書籍を充実させるように、何世紀にもわたって魅了され続けるように、欲びを豊かに蓄えた。それでも、僕らが離れている間に歩むのはうんざりするような道だと感じるものがあれば、この確信を支えにしよう。間もなく、そして最後まで、僕は道を一緒に歩み続けることになるという確信を。

僕は君へのこの手紙を七月十四日金曜日に書いている。そして来週の月曜日に、これを届けにS……に行くつもりだ。その遠出は、今から僕を陶然とさせている。僕は君の家がある通りを見て、家を見るだろう。君が外出するのを見張ることにする。まだ聖クロードにいるように思えるよ。温室の入口で君が来るのをこっそり見張ったときみたい。別の人間がやって来るのも同じように監視する必要がある。すべての原因だけれども、勝てそうにない人間の監視を。

そんなにすぐに君に歓迎されるとは思えない。だから、僕の行動の正当性を証明するはずのこの文章に、僕は大いに期待している。僕は自分の魂の血でこれを書いていく。この、無言だけれども反論の余地のない証言なら、君を説得できると思う。これは君が僕から受け取っているものを修正するために用意されたのではなく、それらを補完するものだ。もし君の怒りがすでにそれらを消滅させているならば、あるいは今度は君の方がそれらを引き渡すことを強制されているならば、これはその代わりとな

るものだ。

君に会えないかもしれない。君はこのメッセージを直に受け入れたいとは思わないかもしれない。そのときはモリス——彼にはもう知らせてある——か、僕の旧友の一人、たぶん君も知っているマルク・ド・ブラジャンに託すことになる。なるべく早く返事をしてほしい（……の……ホテル宛）。僕は、すべての暗雲が一掃されるのを一刻も早く知りたいのだ。

僕らにはあれほどまでに大切だった友情は、僕の手に委ねられた後、今や君の手の中にある。でも君はそれを消滅させたいとは思わないだろう。僕がそうできない以上に。それは僕たちよりも強い。それは運命なのだと書いたように、僕らにはそれに身を任せることは許されている。それは試練のものともしない。それ自身が、自らを運命だと証明しているからだ。それは別離を恐れない。これからもずっと、血が交わされた僕らの心の中に存在し続けるからだ。それは時を恐れない。これからもずっと、聖クロードの僕らの顔を持ち続けるからだ。それはすでに、離れていても僕らが共に生きるという結果をもたらししている。もし君がまだそれを無視したいと思うのなら、知っておいてほしい。僕らの友情は愛という名であることを。

翌日、ジョルジュが朝食を終えると、両親が彼の部屋に入って来た。

「ほら、やっと新聞に載ったぞ。七月十四日の出来事と一緒に！」父親が言った。

それから息子にキスしながら母親が付け足した。

「あなたの誕生日は明日でしかないのだけれど、プレゼントをこれ以上待たせたくないよ」

彼女は、トレイの上に置くように、新聞の上に開いた宝石箱を置いた。そこにはきれいな印章付き指輪が入っている。ジョルジュは礼を言い、改めて自分からキスをした。彼は冠部の真珠を数えた。紋章の若枝分だけある。細工師は間違っていないかった。彼は指輪を指にはめ、しばらくその印象を評価して楽しんだ。聖クロードの哲学科のアカデミー・メンバーみたいだ。月曜日にアレクサンドルとうまく話ができたならば、試しに彼にはめさせてみよう。さらに、これを彼に贈るのだ。それは二人の神秘的結合の奉獻式となるだろう。あの子は、夜、眠るときもこれを着けるのだ。ジョルジュはどうするかといえ、遠出の間になくしてしまったと言うのだ。残念だが、自分は指輪なしでもかまわない。若枝の炎は藁の火だったのだから。

一人になると、彼はソファにうれしそうに体を伸ばした。指にはめた指輪のように、自分の名前が輝く記事をじっくり読むためである。

聖クロードの表彰式

今年度の聖クロードの表彰式は、際立った輝きに包まれていた。当式典はM……大枢機卿閣下の臨席の栄を賜った。主な受賞者はこの後に掲載してあるが、受賞者の発表は学長氏の講話の後に続き、午前中いっぱいを費やした。午後は演劇に割り当てられていた。下級生によって趣味よく演じられた短い戯曲『リチャード獅子心王』と、彼らの先輩たちのエスプリと格の違いが目をついた大ラシーヌの『訴訟狂』。この長い祝典の多くの観客は、それでもそれがあつという間に終わってしまったことを残念に思うばかりであった。親御さんたちに伴われ、窠下の祝福に激励され、親愛なるコレージュにさようならを言った子供たちよ、お見事だった——さようなら、素晴らしい休暇の後でまた会おう。

ジョルジュは、学長のスタイルを認めて微笑んだ。この「素晴らしい休暇」が、この記事に署名をしている。そこに滑り込ませたアレクサンドラン——「多くの観客……」——は言うまでもなかった。

この後にバカロレアの結果が記載されていた。よい宣伝になる。それからコレージュの最高賞（同窓会賞など）、最後に各クラスの優等賞と努力賞。ジョルジュは、自分の名前が二度出てくるのを認めた。この記事は切り抜いておこう。彼がこんなふうに自分の名前が表沙汰になる機会を手に入れたのは初めてだった。リセでは、新聞に生徒の名前が印刷されることなどなかったのだ。彼はそれを誇らしいと感じる気持ちを抑えることができなかった。聖クロードにいるときよりもはるかに、自分は名譽のためだけに生まれてきたのだと感じた。今朝、アレクサンドルはこの報告を見るだろう。そして、たとえ前日の会見が大荒れだったとしても、自分の友人の名前を読めば心を奮い立たされることだろう。その友人が、受賞者名簿の中に二つの次席賞を授けられている名前を読んだときと同じくらいに。

ジョルジュは、新聞を吟味するのがこんなにうれしいと感じたことはなかった。彼は新聞を読まなかった。世間の事件には関心が持てないと思っていたからである。彼は自分のことが記載してあること、その記事で英雄とまで思っているあの子に今この瞬間に自分のことを考えさせてくれることで、新聞に感謝していた。この小さな時評欄が問題を解決したのだ。

この新聞の中のすべてが注目値するように思われた。彼は紙名の下の「七月十五

日土曜日、聖ハインリヒ」を読んだ。その日の聖者が聖ゲルギオスカ聖アレクサンドルであれば、または聖ルキアヌスカ聖クロードであればよかったのに。しかし、それらの記念日はもう過ぎてしまった。まだこれからは聖アレクシスしかなかった。ジョルジュは別の紙面の記事にざっと目を通した。コレージュについての紹介記事がある面の裏に、『社会面記事』があるのが目に入った。

そのとき彼は、自分の心臓が鼓動を止めてしまったのかと思った。その文章が彼の目に焼けつくような痛みを与えた。

子供が誤って服毒

S……、七月十四日。

昨日午後、十二歳半のアレクサンドル・モティエ少年が、薬と間違えて猛毒を飲み込んだ。自らの致命的な過失の犠牲者であるこの不幸な少年は、蘇生不可能であった。

ジョルジュは頭を上げて、自分の周囲を見た。まるで現実かどうかを疑うように。

どの家具も道具もしかるべき場所にある。それぞれの額縁に入った『青い少年』と『赤い少年』、乱れたベッド、肘掛け椅子の背もたれにかかった上着、テーブルの中央の花束、朝食のトレイの近くには、チョコレートで縁取られた磁器のカップとスプーンが刺さった空っぽのグレープフルーツの実。

もう一度、ジョルジュは新聞に目を向けた。読んだばかりのものが変わらずそこにあった。それは社会面記事の中で最も重要なものだった。いちばん最初、『不正な銀行家』や『オートバイと車の接触』よりも前、えり抜き的位置に記載されている。そのページの裏面には、表彰式、猊下の祝福、素晴らしい休暇の展望、優等賞と勤勉賞受賞者としてのジョルジュの名前が見える。その報道の中には、アレクサンドル、彼の名前も見える。その二つの記事は、互いに対をなしていた。両者が分離することのないように、それぞれが他方のために待たされているみたいだ。聖クロードの祝典の月桂樹たちの背後に、そのほっそりとした糸杉が伸びていた。喜劇は市民劇^{ドラム}に取って代わられた。

ジョルジュはソファから起き上がった。新聞がカーペットの上に滑り落ちるままになった。ドアの方へのろのろと進み、鍵をかけた。最後にアレクサンドルと二人だけになるために鍵をかけたのだ。

自分が世俗から逃れられたと感ずるとすぐ、死体のように広がって動かないその新聞の前で、想像を絶するニュースがまばゆい光を放った。「何てことだ！ 馬鹿だ！ 馬鹿だよ！」彼は泣きじゃくりながら言い、椅子に崩れ落ちて両手で顔を覆った。彼は長い間泣いていた。休暇の前日に、過度の不幸の中では涙など笑うべきものだと思うた彼が。彼は自らそのような絶望の淵に陥ったことはなかった。自分を苦しめる意識の代わりに、彼はそこで無意識に遭遇できればと思った。苦痛を通して、ある考えが、少しずつ、確かに頭角を現してきた。アレクサンドルは事故で服毒死したのではなく、自殺だったのだということ——自分のせいで彼は死んだのだということ。

この確信が涙を止めた。「七月十四日。昨日午後……」ということとは十三日、まさに手紙が届いた日、ローゾン神父が大胆な手を打った日だ。あの子もまた同じように、思い切った手段に踏み切ったのか。

授業や課題や祈禱、静修また静修、子羊の儀式とトカゲの話、愛の地図と『高潔なる十戒の生活』、リシュパンの詩と『まねび』の節、アカデミーと修道会、ド・トレヌヌ神父とペルガモンの司教、それらの間のコレージュ生活の単純な骨組みの上で、ある自殺がゆっくりと準備されていたのだ。温室での逢い引き、手紙、キス、将来への希望は、こんな結末を迎えることになった。

「自らの致命的な過失の犠牲者であるこの不幸な少年は……」この言葉は、ジョルジュには深刻な皮肉のように思われた。彼は、あの小屋で二人を取り押さえたとき、彼らに向けてローゾン神父が放った「不幸な子らよ！」という頓呼法を思い出した。しかし、致命的な過失、それを犯したのはジョルジュとリュシアンとあの神父なのであり、あの子はその犠牲となったのである。薔薇水と聖水と薬は、毒に変わってしまった。

ジョルジュと彼の聴罪担当者は、最終的な方法で合意した。彼らが合意した処置によって、アレクサンドル・モティエはもう存命していない。そういう話になったこともあったが、そのとおりに、二人は一緒になって彼を神の御許みもとに帰したのである。だがあの子は、自分の行動によって二人に証拠を残していった。一人に対しては、自分を迫害した戒律を自分の名において無視するという証を、もう一人に対しては、彼のためにしか生きないという証を。彼自身の言葉に従えば、彼は自分の命よりもジョルジュを愛していたのである。

その時間、ジョルジュはあの子のために何をしたらろう？ 賞品の一ページを犠牲にし、二通の手紙を保存し、ユリを一本摘み、手紙を書いた。おそらく嘘をついた者の顔を思いながらアレクサンドルが死んだ日には、彼は嘘をつかなかった顔から気をそらすために町を散歩していたのだ。顔の花輪、それは棺の上に置くものとなった。

またもや彼は、コレージュからというわけではないが、ある者を追い払ってしまった。それはあの最初の日から早くも、リュシアンとの友情の中にあっても探していた者であり、誰も匹敵できない者であり、この世の生きとし生けるものの中で最も美しく、最も魅力的で、最も知的で、最も高雅な存在である。ジョルジュ・ド・サールには、宣伝されるあらゆる権利がある。異なる見出しの下で、新聞は彼に真実を告げていた。彼は公の勝利者であり、また秘密の勝利者であった。彼は複数の一等賞を勝ち取り、演劇の役で人目を引き、喝采と賛辞を受けるべきであった。

彼はその死に、自分のそれで報いなければならないだろうか？ 死は死を呼ぶ。愛が愛を呼ぶように。アレクサンドルは一人で逝ってしまったが、彼と一緒になるのはジョルジュ次第だ。誰もアレクサンドルがあんなふうに死ぬのを妨げることはできなかった。二人を結び付けた絆は、まだ少しも断ち切られてはいない。ジョルジュは、それに最後の結び目を締めることができる。言葉を提供した後には、行動の提供が残っている。が、あらゆる言葉も行動も、その無言の返事の前では空しく消えてしまう。復活祭休暇明けにはすでに、彼は詩を伝え、血の付いた腕を差し出されていた。今日、再び、アレクサンドルは手本を示してくれた。彼は、もし愛が遊びでしかないとしたら、死も遊びにすぎないということを示したのだ。

彼はベッドに長々と横たわり、自分の意識がはっきりしていることと、今直ちに自殺する決定を下すことを恐れた。

彼は、アレクサンドルがどんな毒を使ったのか、それが分かれば、と思った。そうすれば同じものを選べるから。だがおそらく、それは希少な物質だろう。きっと医者にしかならぬ方できないものだ。ジョルジュは、浴室の小さな救急箱の中に、不吉なラベルを貼ったチューブや容器が何かしらあったかどうか、思い出すことができなかった。もし今朝のうちにすぐけりを付けたければ、別の手段を考える必要がある。彼はリヴァールヴァーに頼るという考えは退けた。机の引き出しにしまい込まれてあるその武器は、使い方を知らないからだ。そのうえ、暴力的な死は自分には苛酷すぎるように思われたし、穏やかな死が禁じられているわけではない。死ぬだけでも大したことなのだ。

彼は浴室で手首の血管を切ることにした。彼が読んだものによれば、どんな自殺の形もそれ以上に快いものはないという。彼は、ド・トレンヌ神父の破局を歴史的な場面のようなものと見なしたのだった。今、彼は、自らの破局を遂行しようとしている。やはり歴史的な、彼が親しんだ古代にふさわしい場面によって。『クオ・ヴァーデイス』のペトロニウスに範を仰げば、単なる陶片追放を超えられるだろうか？ それは、ネクタイで始まり、彼の友情と共にあったあの赤い色の、フィナーレとなるだろう。彼

はそこに愛の象徴を見ていたが、何よりもそれは血の色なのであり、まだ最初の一滴をこぼしただけの、そして今度は最後まで流してしまいう血の色であった。子羊の血は、実は最後までジョルジュとアレクサンドルの象徴だったのかもしれない。

彼らの過ちは、深紅の赤というものではなかったが、ジョルジュの贖罪は十二分に赤いものとなるだろう。あの子は言っていた、ヒアシンスと聖ヒアキントゥスについて、二つの宗教に血を注ぐ、と。ジョルジュは戒律に従って第三のものに自分の血を注ぐだろう。手紙に書き、とうとう今度は彼が表明するところだった、あの愛の宗教に。

彼が魂の血であの手紙を書いたとすれば、最後のメッセージは肉体の血となるのだ。

彼は間近に迫った自分の最期への展望に喜びを見いだした。それは彼をアレクサンドルに近づけようとしている。彼らは互いのために死ぬのかもしれない。ニソスとエウリュアレのように、闘いのさなかの若者たちのように。あの子は約束を守った。ジョルジュは盟約を守るだろう。

彼は、アレクサンドルが自分に残したもの——巻き毛と手紙——を、隠滅するよう配慮することになる。家族に残す別れの言葉には、どんな説明も不要だ。ラシーヌみたいに書くべき遺書は、思い浮かばない。両親は彼の自殺を、神経衰弱、成長の痛み、過労、寄宿学校のせいだと思うだろう。だが、宗教による葬儀のため、彼らはそれを

単なる事故とするだろう。おそらく、アレクサンドルにそういう葬儀をすることを妨げるものは何もないだろう。

彼の心の秘密は守られる。もし彼の両親が手紙を見つけたとしても、彼の死と、生への呼びかけである文章との間に、どんな関連性を確立できるだろう？ それに、もし駆け落ち計画を知らされたとしても、その実行を企てる前に彼が死を望んでいたことを信じられるだろうか？ モーリスさえ、この企みの全貌を再構成できるほど詳しいことは知らない。それに、彼の関心はそこにはほとんどない。メイドたちへの彼の愛は、今後は障害なしになるだろう。弟のことなどすぐ忘れる。リュシアンとローゼン神父だけはすべての真相を理解するだろう。ジョルジュは彼らにそれを証明するための手紙を書こうと思った。もはや疑いようのないアレクサンドルの名前で、そして彼の代わりに自分の名前で。

リュシアンは、腕に軽く傷を付け、相手とわずかな血を交換することが、無益な行為ではないことをすでに知っている。彼は、それが重大なことであるとジョルジュに言うべき最初の人間だった——それほど重大だと思わないことでも。つい最近、彼はジョルジュに言い聞かせたが、以前は、真の友がいればどんなものにも立ち向かうことができると表明していたのだ。彼は二人の証言を広めるだろう。二人の保証人とな

り、二人の物語の代弁者となり、二人の信仰の布教者となるのだ。それが彼の軽率さを償う方法である。この友愛訴訟のために、かつていろいろな信心会のために抱いた新会員の熱意を完全に取り戻しながら。彼は旧友の両親に形見の写真を求めるだろう。それはもはや、昨年彼に与えられたようなただのコレクションの一枚にはならないだろう。

悲劇の首謀者に関しては、周囲は彼に自分の言葉を思い出させようとするだろうが、それは彼を混乱させるに十分である。私がしてきたことは、良識をもって人生を教えることではなかったか？ この悲劇はおそらく、私が称賛を好んだあの偶然の一致の一つにすぎない。マルク・ド・ブラジャンが修道会に入るのを拒否した後で病気になるたのなら、アレクサンドルはそこから離れた後で、ジョルジュはそれを嘲笑した後で、死んだのだ。さらに周囲は、私の二人の告解者が、教会の教義によれば地獄に落とされるということを指摘するかもしれない——良心の指導者にとっては不都合な結果で、それはアモン氏の憤み深くあるべき二十三の理由に二十四番目を付け足している。彼が良心の呵責や後悔から自殺し、葬列のしんがりを務めないことがないと、誰が言い切れるだろう？ とはいえ、はっきりした主義を持っている場合、聖職者は自殺はしない。そういう者は償うために生きるもので、彼もまたそうするのもかもしれない。

次にジョルジュは、アレクサンドルと自分の死が、聖クロードの先生方と生徒たちにどんなふうに知らされることになるのかを考えた。

皆が二人の結末を当然だと思ってくれるなら、それは同情と感動の源泉となるだろう。そのとき学長は、本文を知っているあの手紙に気高い思慮があると思うだろう。

彼は、そこに『雅歌』からのインスピレーションを認める。三文小説のそれではなく、この素晴らしい休暇の間に、彼は、自分のアカデミー会員のために弔辞を書き、子羊を抱いた者のために挽歌のソネットを書くのだ。黙想や宗教書読解のときに二人の話をする。神は、死について考えることに、コレージュ全員の注意を引くことを望まれたのです。上級学年の中で最も輝かしい生徒の一人と、下級学年の中で最も愛すべき生徒の一人を、その御許にお召しになったことで。秘跡に対する二人の勤勉さ、二人の聖体拝領の頻度は、際立ったものです。その行いの功德が、最後の瞬間に二人を支えたと思いたい。力のパンが、二人の糧となったのです。二人は、ほとんど子供の聖者となるだろう。ド・トレヌ神父のそのように。そして《香炉の子供》となるだろう。あの説教師のそのように。墓の向こうに行つてまで、ジョルジュはほかの者たちを回心させたのだ。墮落させる者が出なければ、だが。死についての考えは、人生を享受するための激励にもなるのだ。

この事件を知ったとしても、感化されるようなド・トレンヌ神父ではない。しかし、たとえ彼がジョルジュが自分の密告者ではないかと疑っていなかったとしても、天の裁きは少々度が過ぎると認めることだろう。少なくともモーリスと彼は、いっそう有望な方法で勝利を明らかにするために生きている。あの神父は、ジョルジュとアレクサンドルをどの聖人の加護に置こうとするだろうか？ 彼は甥たちに対し、二人を引き合いに出す。ギリシャの澄んだ空に、二人の純粹さを尋ねる。二人の顔の思い出し薔薇の花びらをむしり、テオグニステオグニスの詩をいくつか読み、エジプト・タバコを吸う。二人のパジャマに喪章を付け、もはやオリンポスのヘルメースではなく、靈魂をあの世に導く方のヘルメースに供えることだろう。

彼が死なせた者たちの真の共犯者は、ローゾン神父である。もし彼が、今度は自分が嘘をつかねばならないと判断したならば、修道会の祈りを彼らのためにすること、を強いられるだろうが、心の底では、彼はおそらくこの上なく晴れやかにそれを唱えることだろう。彼は、ミサの成果をジョルジュとアレクサンドルのせいにするだろう。さらには、休み明け直後に二人のための礼拝があるだけでなく、次の長期休暇の前日になっても、同窓会のミサを通じて、二人はもはや忘れられることはないだろう。今年のセレモニーでは姿が認められた状況にあって、二人のいずれもがそのままその協

会に所属するようには思えなかった。その後、彼らは永久資格でそこに記載されることだろう。二人は死んだ同窓生に数えられるのだ。

リュシアンが秘密をしゃべるであろう相手は、それをどう思うだろう？　そして、彼自身はどう思うだろう？　一年の間、あのよう不幸、あのような二重の不幸に自分が身近に接してきたことを思つて、彼は怖がらないだろうか？　それよりはむしろ、彼は二人の友人が天使のように祭り上げられるのを見て、苦笑するのではないだろうか？　彼は、二人の思い出のために唱えられる公の祈りに、ローゾン神父と同じくらいはるか後方で参加するだろう。しかし、もし誰も祈らないならば、おそらく彼は、何があつても二人のために祈る唯一の人間になるだろう。

実際、あの神父が、この新たな不敬の容認を拒み、真実を言明した場合は、二人の記憶は呪われたものになるだろう。ブラジャンは、あまりに唐突に二人が倒れたことから、二人は不純であつたに違いないと思うことだろう。彼は、それほど危険な愛情を回避し得たことに満足する。尊敬すべきモーリスを範として仰ぐところまでいくことはなからうが、彼はそれまで以上に自分のいとこしか愛さなくなるだろう。

特別な友情は、静修の間に突っ込んだ講義の主題を提供する。恐怖政治時代のエピソードだの聖者の生涯だのの中に、恐ろしい物語を探し求める必要はない。学長はこ

の休暇の悲しい主人公たちに与えた個人的な警告を引用し、昨年の説教師がすでに全員に話した忠告を思い出させるだろう。彼は、神への愛や愛の精神や最愛の子キリストへの愛をほとんど話さず、ほとんど話さないことも決心するだろう。また、食堂での朗読の再検討の後で、賛美歌選集を再検討するだろう。彼は自問するだろう。自分の表現にはもつと節度があるべきではなかったか、魂に向けられたものを官能の言語に解釈する氣を子供たちに起こさせなかったか、彼らの眉をひそめさせるほどではないにしても、二人がスキャンダルの対象となるような危険を冒してしまわなかったか、と。彼は別の視点で自分の統計を再読し、別のやり方で彼らを評価するだろう。次の聖体大会において、彼は子供たちへの聖体拝領を勧めるだろう。用心のため、聖別されない形色けいしよくのもとでの。それと同じように、偽証を引き起こさないため、ロベール敬虔王は、聖遺物のない聖遺物箱の上で宣誓をさせたのである。

宗教教育の教師は、自殺は教会による埋葬から排除されるという事実を指摘する。たとえ、黙認ないしは欺瞞によって、二人の冒瀆者が聖体を拝領してきたとしても。禁止事例のリストの中では、それはいちばん上に置かれている。新聞が社会面のいちばん上に、事故と称するあのニュースを印刷したように。人々は、アレクサンドルとジョルジュから墓場を引き離すことだろう。その昔、モリエールとヴォルテールにそ

うしたように。二人は修道会から抹消されることになる。

公共の多くの継続的なミサの後、聖クロードではいかなる特別ミサも行われまいだろう。二人は礼拝堂から正式に追放されることになる。二人の友情が芽生え、二人のラベンダーの香りが漂ったあの礼拝堂から。しかし、二人が好きなきにそこに戻るのを妨げるものはない。二人は参列したいと思うミサに、もう向かい合ってではなく、並んで参列する。たとえ参列しなくても、二人にとってはミサがすべてだ。二人は黒のミサをあげる。この世では、そして一人の神父のせいでは、二人は死体だからだ。二人は白のミサをあげる。二人は純粹なままだったからだ。赤のミサ、それは二人の愛と血の色だ。紫のミサ、アレクサンドルがジョルジュに撒香したときの色のような。金のミサ、一人の髪の色、もう一人の一部の髪の色のような。二人は緑のミサもあげる。二人がそれを期待したからだ。二人が絶望によって自殺することなどあり得なかったのだ。

この瞬間、固有の直感的ひらめきで、ジョルジュはアレクサンドルが自分を拒絶したのではないことを確信した。あの子は、事の成り行きや人々の無情によって自分から彼が奪われたと思ひ、彼に再会するために死んだのだ。ジョルジュがあの子に再会しようとしているように。

二人は、二人の未来と過去のすべてを踏査することになる。二人はヒュアキントスに神官たちがいた時代に身を置く。二人と神官たちが入れ替わる。しかし、今日からすぐに、また続く歳月を通じて、二人は未知の場所や知らない心の中で自分自身と再会するのだ。二人の物語の境界は、コレージュのそれでも、住まいのそれでも、名前のそれでもない。二人は別の名前で、別のコレージュや別の住まいに存在することになる。地上に少年たちがいる限り、美がある限り、二人は存在することになるのだ。

ジョルジュが想像力をさまよわせるにつれ、それと並行してある考えが大きくなっていくのが分かった。自分が自分に対するショーの見せ物になったこと、そして自分は自殺をしないということである。彼の死の受容は、駆け落ち計画に対するよりも衝動的でないとは言えないのだが、推論の潤色がそれをごまかしたのだ。彼は本気で死ぬ決心をしたけれど、おそらくその決心の裏には、それが空想的な考えにすぎないという確信があったのだろう。リュシアンがそう言っていたように、人にはできることとできないことがある。ジョルジュは、アレクサンドルがしたことを自分はいないだろうということがよく分かっていた。

今の彼は、なされた行動の価値はもう評価せず、その結果を考えることにした。あの子があんなにも気高かったことに、特に理由はなかった。それを称賛した後で、ジョ

ルジュは、永遠に引き離されたこと、間違った考えのため、彼が天から贈られたもののすべて、その美点のすべてを消滅させてしまったことで、彼を恨んだ。彼の反抗が、二人の計画をローゾン神父に暴露してしまったときに恨んだように。二人を結び付けた友情は、両者共同の所有物なのであり、もう一人の幸福を滅ぼす権利は、二人のどちらにもないのである。

しかしすぐに、ジョルジュには、これらの考えが不当であると同時に無益なように思われてきた。彼はこの災厄に、コレージュの最後の夜の間に直感した説明を与えた。アレクサンドルの自殺という考えがよぎったのと同じ夜である。あの子と自分は、それぞれがそれぞれなりに、必然という掟を受けたのだ。二人は運命に従うほかはなかった。決心も行動も、彼らの埒外のものだった。アレクサンドルは死ななければならぬ宿命だったのだ。生き続けるにはあまりにも美しすぎたかのように。ジョルジュが期待した歓びは、人間の階層のものではなかった。そういうことが語られるのを読んだり聞いたりはしていたが、そんなのは寓話神話の類いだと思っていた。それを確かめるため、自分にはあの子があてがわれたのだ。

彼の記憶が、前兆を明らかにした。無意識に、それと気付かずに記憶にとどめたものだ。つい最近のものを思い浮かべる。手相判断、理容師が切った金髪の髪房、消え

た傷跡、それから休暇前日と休暇当日、凶兆のウェルギリウスの運命、離れていくアレクサンドルを包んだ水蒸気の雲。すべてが取るに足りないものだったが、すべてが意味を持っていた。

ジョルジュは立ち上がった。彼は花束からユリを取り、それを別に置いていた。その花を、そこにアレクサンドルの象徴を見たために摘んだのだった。その瞬間、アレクサンドルはすでに死んでいたのである。リュシアンの写真がこう語っていたわけ。あの子はユリのように過ぎ去り、香りしか残さなかった、と。

次にジョルジュは、賞品の本にしたのと同じくらい注意深く新聞のページを取り外した。両面に——同じメダルの両面に——アレクサンドルと彼の名前が記されているページである。タンスにその紙を入れると、自分が仕上げた書類が目に入った。あの子の手紙を書き写した手帳、『友人の肖像』を含むノート、昨日アレクサンドル宛に書いた手紙——これまで彼に宛てて書いた唯一の郵便の手紙であり、この不幸を防いだかもしれない、あの子があの世で読んだ手紙である。ジョルジュは月曜日の邂逅を期待していた。今は彼の墓に行くことになる。先の休暇で夢見たものとはほとんど似ていない記念碑が墓なのだ。彼がそこに置く花は、もはやレトリックの花、リュシアンが言っていた青い小さな花ではないだろう。それは赤い花になる。

掛け時計の鐘の音が、ジョルジュにもう遅いと注意を促した。彼は洗面し、入浴しなればならなかった——ぬるま湯の入浴で、血の入浴ではない。彼はアレクサンドルに贈るつもりだった指輪を引き抜き、宝石箱の中にしまった。それはもう二度と身に着けることはないだろう。新聞に触ったため、死に触れてしまったのだ。今日中にS……に行くという考えが一瞬心をよぎった。たぶん葬儀はまだ行われていない。アレクサンドルが完全に姿を消す前に到着できる。だが、そんなふうに姿を現すことが何になるだろう？ 心を隠したり驚いたりするために顔を出すにすぎないのではないか？

髪に櫛を入れるとき、ジョルジュは機械的にラベンダー・ローションの小瓶を取り、髪につけた。彼はそんな手入れをすることを今日は恥じたが、その香水はアレクサンドルに愛されたものではなかったか？ その考えが、残りの身繕いに指針を与えた。彼は青いシャツを選んだ。青いシャツを好んだあの子のために。軽装の代わりに晴れ着を、聖クロードのそれを着た。彼はネクタイに対しては躊躇した。黒がふさわしいように思えたが、父親に借りなければならず、諦めた。喪であることを説明しなければならなくなる。質問されることを考えると嫌気がさした。これからはいっそう口をつぐんだままにするほかはない。最も些細なことまで祝いたいと思うこと、それはア

レクサンドルの死ではなく、彼の生なのだ。彼は赤いネクタイを締めた——赤は教皇の喪の色ではなかったか？ 彼は指輪を再び同じようにはめた。幻想に耽り、空想を楽しみ、そして彼の魂は悲嘆の中に浸りきった。

食事のテーブルで、彼はほとんど食べられず、自分が疲れていることを認めざるを得なかった。両親は休暇の必要性和ピレネー山脈の幸運な選択についての見解を口にした。彼らは、最終学期の間、追加の食事が十分に豊富だったかどうかを心配した。食事の最中に電報が届いた。またホテルからのものだろうか？ だが、その宛名にはジョルジュの名前がしたためられていた。彼が受け取る初めての電報であった。人目がある所でそれを読まねばならないのは気まずかった。その電報はアレクサンドルに関係するものだと同もって分かったからだ。彼はひどく動揺し、表情を取り繕いつつそれを開いた。たぶんローゾン神父からだろう。だとすれば、実際のところ、あの人はさらに敏速さを示したのではなからうか。あるいはアレクサンドルの両親だろうか。だとすれば、お二人は自分があの子に渡した手紙を見つけたのかもしれない。

それはリュシアンからだった。

「心から君に。僕を許してほしい」

なおも取り繕い、曖昧な言葉を使い、芝居を打っていただけない。

「ルヴェールからのお祝いだよ」大きな声で読み上げてから、ジョルジュは言った。

「お祝い？」

「そう。新聞に載ったことと、僕の誕生日のために。僕の友達は、僕の両親と同じ思いやりを持っているってわけさ」

「で、許してっていうのは？」

「それは、列車の中で口論の原因になった賭けについて言っているんだと思う。彼は『訴訟狂』が新聞の批評に取り上げられないだろうという方に賭けた。リュシアンは時々不自然な考えを抱くんだよ」

彼はこの馬鹿げた発言を嘆いた。同時に、それを本当だと思えないことを残念だとも思った。

結局、一人になることは、彼にとってどれほどの安らぎとなったことか！ その日の午後、彼の両親は一緒に外出した。彼はといえば、どこに行けばいいのか、家にいるべきなのかどうかも分からなかった。自室も自宅も、彼に恐怖を感じさせるのだ。

彼は庭に下りた。ユリの籠の中に、さっき花を切った茎が見えた。緑の園亭に腰掛

ける。あの子と一緒にここにいるという夢は終わってしまった。アレクサンドルの手紙を花で飾ったこの温室の近くで、受け取ったばかりのメッセージのことを思った。

してみると、リュシアンは、賞を載せた新聞の社会面記事を読みながら、あの子の死が自殺であることを確信したのだ。彼はジョルジュに与えた助言を自責し、あの小屋を彼に教えたことを自責した。彼はアレクサンドルは自殺しないとやった——「つらい時間はやがて過ぎ去る、それだけのことさ、ほかに言うことはない」彼は今日、この言葉を繰り返さねばならなかった。「ほかに言うことはない」

ジョルジュはすでにリュシアンを非難していた。責任を彼に置くことが自分のそれを減らすように思われたのだ。とは言うものの、彼は助言という形で、ジョルジュの最終的な意向を翻訳するための別の方法を取ったのではないか？ 最初の意向を覆い隠す別の方法を？ 彼は友情から行動してくれたにすぎない。将来や生活のために主張してくれたにすぎないのだ。

真犯人、死の仲介となったのは、あの神父だ。善の名においてたいへんな悪をなしたのが彼なのだ。ジョルジュは、冷酷な飲びとともに、間もなく彼に宛てることになる手紙のことを考えた。今朝想像したものとはかなり異なるにしても、それでもなお辛辣なものになるだろう。もはや死のうとしたことではなく、アレクサンドルの仇を

討つために生きることを告げてやるのだ。あの聴罪担当者は、もう悔悛者に少しも恐れを抱かせることはない。二人は役割を入れ替えたのだ。

ジョルジュは、聖クロードの先生方の一人が客間で待っていると告げられた。名前を聞く必要はなかった。してみると、その男は、自分の苦しみに加わるために自らやって来たのだ！ それゆえ彼は、侮辱を受ける前に自ら進んでやって来て、ジョルジュが孤独になりたいという欲求の例外とするに値することになった。にもかかわらず、彼はそのような訪問者に対しては嫌悪感しか感じなかった。彼は、彼が手紙で書いたかもしれないことと同じく、言う勇気が出ないかもしれないこともまた危惧した。彼は部屋に入れることをためらい、自分はいないと使用人に言わせてほしかった。しかし、おそらくあの子は、不幸が最後まで二人の後をつけ回すよう仕向けた人間に、自分のために何かしら打ち明けたのだろう。この考察が決定的となって、ジョルジュは緩慢にドアを開き、ローゾン神父と視線を合わせた。

神父は両手を差し出しつつ彼の方に進んだ。しかし、アレクサンドルの友は、その両手を握ることができなかった。彼はその存在に打ちひしがれ、肘掛け椅子に崩れ落ちるがままとなった。今朝、新聞を読んでそうなったように。

復讐の念は消えてしまった。仇を討つべき敵の、その被害者に比べたら、すべてが取るに足りないように思われたのだ。アレクサンドルの死は報われたのか？ ジョルジュが思い起こしたのは、彼の生きたイメージでもあった。神父と彼の間の沈黙は長く続き、この部屋の、引かれたカーテンの薄暗がり、互いに聞き、見つめたように思われたものでいっぱいになった。ジョルジュの目に、涙が再び浮かんた。このころ、ずいぶん泣いたような気がする。だが、それで気持ちが楽になることはもはやない。彼が身を任せた感情や、それを飾り立ててきた奇妙な洗練は、何も救わなかった。すさまじい恨みが彼を鎮めた。少し前、涙で欺こうと努めた者の前での涙を、彼は恥じた。赤いネクタイと新しい指輪を、彼は恥じた。自分自身を、彼は恥じた。

近くに身を置いている客人は、口を開く好機をつかんだ。

「あなたがどんなに苦しんでいようと、私と同じほどは苦しんでいません。あの子のことを、私はあなたよりも愛していたのです」

ジョルジュは、その音調の深刻さと言葉に強い印象を受けた。神父の感情は、ある観点から見れば、自分のそれに匹敵し得ないだろうか？ 同時に、互いへの非難は相殺された。ジョルジュにとっては、この神父がいたからアレクサンドルは死んだのである。神父にとっては、ジョルジュがいたからそうなのである。おまけにこの神

父は、自分で表明したように、ある家族と、好むと好まざるとにかかわらずアレクサンドルが身を捧げていた宗教の、守護者ではなかったか？ 彼には釈明を要求する権利があったのだ。彼は間違えた。だまされたからである。起こってしまったことは、彼の方策には有罪を宣告したけれど、懸念の方は正当化したのである。

ジョルジュがもっとよく話を聞く気になっていることを推察し、彼は再び口を開いた。共同寝室でのド・トレンヌ神父の声と同じくらい低い声で。

「一昨日のことです。私たちは三時に会うことになっていました。私は彼に、あなたから送られたものを渡しました。彼はその紙を手にしたまま身動きしませんでした。その後、冷静に財布を開いて別の手紙を取り出したのです。私には、それがあなたの筆跡であると分かりました。彼はそれを、私が渡したものと一緒に差し出し、一言も言葉を発することなく私から離れました。

慰めたいと思い、また彼がどこに行こうとしているのかも知りたくて、彼に続いて外に出ると——というのは、この場面は私の家で起こったからなのですが——、自宅に戻っていく彼が見えたのです。彼は自室に鍵を掛けて閉じ籠もってしまいました。しばらくしてから、私は撤退しました。待っても無駄だったからです。私は、彼は休息を必要としているからという口実で、彼を外出させないよう勧告しました。そして、

彼がこの試練を乗り越えられるようお助けくださいと、神に祈りました。あなたが自分の力で乗り越えた試練です。二時間後、大至急来るようにと迎えが来ました。彼の父親の診察室に、横たわった彼がいました。毒で即死していたのです」

神父は少しの間中断した。死者への崇敬の念を表すかのように。

「皆が言うように」彼は言葉を継いだ。「あの不幸な子が、過失の犠牲となったのでありますように！ おそらく彼は気を紛らそうとしていただけで、もしあなたと私が当然推定できる理由のために自分の意志で自殺したのだとしても、我々はその行為の審判は神の慈悲に委ねることにいたしましょう。あれほどたくさん涙、たくさん祈りを捧げられた子供が迷うことはありません。最期の瞬間、彼は真の光を目にし、赦されているでしょう」

もう一度沈黙した後、神父は付け加えた。

「宗教的葬儀は今朝挙行されました。明日の日曜日の可能性はありませんでした。状況が式を急がせたのです。それに、式には控え目しておくべき多くの理由がありました。あなたには知らせませんでした。あなたが来れば噂になったでしょうからね。私はモーリスの注意をそらさねばなりませんでした。少し前、彼はあなたの策略を知っていることを私に打ち明けたのです。しかし、彼も彼の両親も、神と我々の間だ

けの真実を見抜くことはできませんでした。もし私自身の苦しみが、それだけでは足りなかったとすれば、私は葬儀でああなたの代理を務めたと言ってもよいでしょう。今日、私はあなたに告げることができます。私はあの子を聖職に就かせたかった。彼は永遠の美を感じさせるのに向いているのです。ああ！ 彼の行いは、永遠を別のやり方で感得させてしまったのです！

この不幸は予測を超えるものですから、私たちはこの上なく深い慰めを自分たちの魂の中に探さねばなりません。あなたの友の死は、仮に断罪すべきもののだとしても、罪の中でも最悪のものから彼を逃れさせたのです。すべての道はもう塞がっています。が、彼が持っていた本来に天使のような資質は無事なままです。その保証は使徒の言葉の中にあります。『心の清い者は神を見るであろう』とね。私は冷酷でした。危機的な年齢にある彼の純粋さを守っていたからです。朝の悪魔は昼の悪魔よりも恐ろしい。この惨事を引き起こしたのは彼ですが、勝ったのは神なのです」

この談話は、ジョルジュに一種の鎮静作用をもたらした。鎮痛剤だとは思わなかったが、そこに心地よさは感じ取れた。彼は、その言葉の中に、自分が考えていることの一部を認めることもできた。ド・トレヌヌ神父の考えも。とりわけ、アレクサンドルが純粋だと彼が言うのは嫌ではなかった。しかし、純粋さのためのド・トレヌヌ神

父の熱意が、別の関心事を除外しないように思われたのと同じように、ジョルジュはその純粹さよりもはるかにアレクサンドルを愛していたのである。

神父は二枚の封筒を差し出した。

「これはあなたが書いた手紙と受け取った手紙です。約束に従って、私は決してこれを読みませんでした。私がこれらをためらいなくあなたに返すのは、今のあなたが、こうしたことすべてが引き起こした苦痛を知っているからです」

ジョルジュはその封筒を受け取った。彼の友情の秘密は手付かずのまま彼に戻ってきたが、それは墓の向こうからだった。次に神父は、アマチュア撮影による、光沢紙に現像された小さな写真を彼に手渡した。

「これもさし上げます」彼は簡潔に言った。

その写真には、長椅子の上で眠るアレクサンドルが写っていた。復活祭休暇のときの列車の中で眠っていた彼よりも、はるかに愛らしい顔で。そこには、目や、ほとんどまっすぐな眉や、唇のまくれや、真珠のような耳や、その美しさに敬意を表して動かぬ歓喜の舞踊を形成している金髪の巻き毛などが、細やかに写されていた。両手は、まるで別の者の手を待っているかのように、その輝かしい手のひらを開いていた。そして、むき出しの脚は、見えない愛撫を促していた。

そのとき、ジョルジュはローゾン神父の方に視線を向けた。彼は今、この男が本当にアレクサンドルを愛していたという証拠を手にかけていた。

「私はクリスマス休暇の間に、この彼の写真を撮って楽しみました」神父は言った。「彼を煩わすものは、彼の目にも心にもまだ何も通り過ぎていませんでした。初めての聖体拝領の日のようでした。彼は真夜中のミサで私に仕えてくれました。彼には善良なる高潔さしかありませんでした。あなたが記憶にとどめることになるのは、そういう子供なのです。彼の閉じた目は、あなたにコレージュの夕べの祈りを思い出させることになるでしょう。『眠りは死の似姿である……』彼が死んだのは情熱の人生に目覚めたからなのだということも、あなたは記憶にとどめることになるでしょう」

神父は立ち上がった。彼は同業者に会わねばならず、その夜、夕食後にまた戻るということになった。客間を通るとき、彼は家具の上に置かれた香炉の前で立ち止まり、指先でそれに触れた。その道具とその身振りによって、彼は逸脱させられていたあらゆる者を真の信仰に戻したようだった。

神父が両親に会いたいと願わなかったことが、ジョルジュにはうれしかった。月曜日の遠出のことを話されないかと心配だったのだ。今となっては、その問題に奇妙さがまったくなくなったのは事実である。しかし、その日は一人でいたかった。温室で

のように、彼は第三者なしでアレクサンドルに再会するつもりだった。

夕食のとき、ローゾン神父が話題に上った。両親は、ジョルジュが彼を引き止めなかったことを残念がった。聖アレクウシスについてのちょっとした冗談があったが、神父は生徒たちに対して深い思いやりを示していたのだから、生徒たちが彼にこれほどの愛着を持たれていることに、もう驚かれることはなかった。両親は、宗教系の寄宿学校の長所について長々と話した。そこでは、人生を幸福にする基礎知識を授けるため、先生方は生徒たちのそばで注意深く見守っているのだ、云々。

ローゾン神父はジョルジュに、駅まで送ってほしいと頼んでいた。彼が夕食を共にした聖堂参事会主席司祭氏は、聖クロードでペンテコステの日に大仰な身振りと声で説教をした人だった。あのととき、彼の地獄の描写は苦笑された。人が絶対にそこから戻れない場所。絶対に、絶対に。

主席司祭の駐在地は大聖堂に隣接していた。扉のそばで、ジョルジュはこんな文字を読んだ。《秘跡のための夜の呼び鈴》。この人もまた秘跡のためにやって来ていたのだ。主席司祭氏は、新聞紙上で素晴らしい位置を指名されていたことについて彼に祝意を表した。ジョルジュは、苦しみられる危険を冒してもリキュールのグラスを受け取らなければならなかった。「これは若者を鍛え、良きキリスト教徒になることを援助し

ます」主席司祭氏は言った。陽気な人である。しかし、ローゾン神父は事を急がせるのが好きだった。

「お願いがあります」彼は言った。「私の若い生徒と私は、あなたの教会に籠もりたいのですが」

隠し戸が、広大な薄暗い身廊に通じていた。主席司祭は入り口の上の電灯を点灯し、降り注ぐ光の中にひざまずいた。神父は、後ろにジョルジュを従え、教会の中央の方へと遠ざかり、暗がりの中にとどまった。

二人は十字の印を切り、神父は死者の詩篇を唱え始めた。ジョルジュはその文句を忘れたと思っていたが、ひとりでに記憶に戻って来た。七旬節の主日の聖務で唱えられた『深き淵より』を覚えていたのだ。その日は、コレージュの礼拝堂であの子の視線が得られた最初の機会であった。そして、彼は、その視線を永遠に奪われて、大聖堂にいる——休暇規則に推奨されている宗教施設訪問の一つを実行しているのだ。彼は自分が間接的に関わった、似たような訪問を思い出した。復活祭休暇の間、アレクサンドルと一緒に祈りを唱えるため、ローゾン神父がS……の教会に行ったというものである。あの子は神父を馬鹿にしていたが。今夜の祈りは、そのすべての祈りの終結であった。

神父は詩編に続く祈禱を暗唱した。「主よ、解き放ちたまえ、汝がしもべ、アレクサンドルの魂を……」ジョルジュは、この種のテキストにおいて、自分が別のテキストでユウエンティウスの名前と置き換えた名前が、ラテン語で唱えられるのを聞いて動揺した。最愛の君と同じくらい、カトゥルスからかけ離れている。ここの暗さや静けさにも心を乱された。彼は、初めての聖体拝領の準備のためにこの教会に来たときのことを思った。あの頃の自分は、ローゾン神父が話した頃のアレクサンドルに劣らず無垢だった。幼少期の信仰心が彼に生じた。しるしを信じた後で、彼はより高みへと行こうとしていた。

神父は一人で沈黙の祈りを続けたが、ジョルジュは急に、さっき口先だけで祈っていたのよりもずっと真面目にそれに参加しているような気持ちになった。心の底に沈黙の祈りのこだまが響いたのだ。彼の目には、物事が新しい様相をまとうているように映った。

起こったことの起源、彼は人間や運命が介入する以外の場所ですれを見た。彼は、宗教教育の授業で習った、内在する正義と言われるものを思い出した。アレクサンドルと彼は、自分たちの罪の罰を受けた。ジョルジュがやむなく認めたそれも、ローゾン神父がアレクサンドルには罪がないとよく知っていたそれも、二人は犯さなかった。

しかし、二人は別の罪を犯していた。秘跡や聖所や典礼を悪用したのだ。二人が見くびった神は復讐した。ジョルジュは、古代の神々の保護を本気で考えたことがあっただろうか？ 今度は彼が、かのガラリヤ人^{キリスト}に言わねばならない。「汝、打ち勝てり」とアレクサンドルの悲劇は、キリスト教徒の悲劇であつたのかもしれない。『ポリュークト』や、ド・トレンヌ神父のそのように。後者の打ち解けた説教のように、あるいは田舎の司祭たちに大いに喝采されたあの戯曲のように。そのうえ、戯曲はこの言葉で終わっていたはずだ。「神」。してみると、ローゾン神父は勝利を取めたのではなかろうか？

ジョルジュはそれを認めることを拒んだ。過去にすでにそうしていたように、その考えを振り払った。あの子が聖タルチシオと聖パンクラティウスの法廷に出頭することなどあり得ない。高潔なる十戒とニコラス・コルネの天国は、彼のものではない。死は彼を神の御許に返したのではなかった。それは彼を、別の天国に帰着させたのである。若さの輝きが地上からその者を奪い取り、神々へと変転させた、そういう者たちの天国に。ヒュアキントスやダブニス^{ダブニス}は新しい仲間を迎えた。祭壇のそばの小さな赤いランプを燃やすのは、その生まれかけの栄光に対してなのだ——火と炎のランプ、死のように強い愛のランプを。血の色でも罪の色でもないその色は、彼の最初の象徴

を取り戻した。

通りにはほとんど人がいなかった。音楽の残響がいくつかの窓からこぼれ落ちていた。橋の端では、手すりに寝転がった子供たちがリュシアンの歌を口ずさんでいた。

僕らは二人のガキンちよだ

いつでも愛し合っている。

親たちが帰って来いと叫んでいる。ジョルジュはある歌を思い出した。街頭で聞くような曲ではなく、アレクサンドルが彼に与えた受難曲の賛歌である。そこでもまた愛が問題となっていた。アレクサンドルが人から聞くことを望まなかった愛が。

ローゾン神父とジョルジュは、二言と交わし合うことなく駅に到着した。会見の最後の瞬間は、最初と同じくらい静かだった。

「頑張ってください」神父は連れの手を握りながら言った。「心が沈むときは私に手紙をお書きなさい。来年、私たちには話すことがたくさんあります。神聖な年になるはずですよ」

「たぶん」ジョルジュは答えた。「あなたの言葉によって、僕たちはお互い何もかも言っ

てしまってもいます」

一人に戻った今、彼がアレクサンドルの後を追う準備は整った。彼は忠告も命令も聞き入れるつもりはなかった。リュシアンもローゾン神父も理解できない言葉を話す者を、そして彼自身理解するのが遅すぎた言葉を話す者を、聞き入れるつもりだった。しかし、あの子はすべてを持ち去ったわけではなかった。ジョルジュは残り、夢を実現することになるだろう。彼自身の人生がアレクサンドルのそれになり、ジョルジュ・ド・サールは己の魂の中でアレクサンドル・モティエとなるのだ。二人の名前の融合は、もはやヒュアキンソスの植物学的言葉遊びではない。二人が言っていた多くのことのように、それは最後には実現することになるだろう。

遠くで列車の警笛が聞こえる。ジョルジュは、学校に戻っていくあの子にとってまだ見知らぬ者だったときの、一月の列車での旅を考えた。すでにひどく夢中になり、すでに不安だった。次に彼は、来週の月曜日の出発を考えた。その遠出は、過去と未来の間の最後の旅程、引き続き生じた計画全部の中からの最後の選択のように思われた。墓のそばで自殺する人もいる。アレクサンドルのそれは、ジョルジュにどんな気を起こさせるだろう？ それが瞑想しようという気持ちを引き出してくれる対象となることは、ほとんどないだろう。もし望むなら、それは彼特有の記念碑となるかもしれない。

れない。彼は、あの子と共に自分をそこに導いたであろうものを想起した。障害、幻想、過剰な理性、過剰な不条理。

彼は橋の上でしばし立ち止まり、川を見つめた。先ほどは子供たちが歌を歌っていて、今は人けがなくなつた場所である。六月のある午後、これよりも喜ばしげな川岸が、水浴びに來たアレクサンドルを彼に見せてくれた。太陽と澄んだ水と花の咲く草地在、夜の暗さとこの汚れた水とこの人のいない川岸に入れ替わつた。それなのに、川はジョルジュを惹き付け、彼を呼び、自分の抱擁は決着をつけるのによい方法だ、即効性のある古典的な方法だ、と囁いた。ジョルジュはめまいのようなものを感じた。今朝の考えが、夜の力に美化され、強い力で再び自分を捉えたのだろうか？ 彼は魔除けまよけに触れるように、あらゆる財産の中で最も貴重なものが入つた財布に触れた。あの子の胸の上で保たれたり、その手で書かれたりした手紙、微笑みと許しのために目を開き、そんな写真、キスを受けたギリシャ彫刻。それが無しかもたらさないことなどあり得ない。それを証明するのはジョルジュである。未来は過去に照らされ、彼の償いとなるだろう。しかしながら、贖罪の犠牲として、彼は指輪を外し、手すり越しにそれを放り投げた。光が水面で踊る。アレクサンドルを焼き尽くした紋章の炎のように。だが、エレウシスの子供同様、その炎は彼を浄化し、より神秘的でより崇高な運命に彼

を残したのだ。

再び歩き始めると、ジョルジュは星を観察するために目を上げた。共同寝室から見た七月十日の空と同じくらいたくさん星が見えたが、それは彼に光り輝く朝を予告していた。アレクサンドルが彼のことを話しかけていた相手は星であり、ジョルジュが話しかけたのも星だった。アレクサンドルにこう言いながら。

「君は祈りの子でも涙の子でもないけれど、僕の愛の、希望の、確信の子だ。君は死んでなんかない。しばらく向こう岸に渡っているだけだ。君は神じゃない。僕と同じ男の子だ。君は僕を通して呼吸し、僕の血は君のものだ。僕が持っているものは、まさに君の持ちものなんだ。僕らの望みどおり、これからは永遠に一緒だ。君の言葉を、今度は僕が言う番だ。『何て素晴らしいんだろう！ 永遠に！』」

家が近づいた。彼はもう離れることのない隠れた客と、そこに帰ろうとしていた。二人のための新しい生き方が始まっていた。今日の喪の悲しみは昔のことになった。明日はジョルジュの誕生日だ。ジョルジュとアレクサンドルの初めての誕生日である。明日、彼らは十五歳になる。